千雨降り千草萌ゆる

感満

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、千雨が傷ついた幼少期に救いの手が差し伸べられていたら。

もし、それが関西呪術協会の人間だったら。

もし、それで千雨が麻帆良の秘密を知ったら。

世界はどう変わるのでしょう。千雨はどう思い、何を感じ、動くのか。

そんなＩＦの物語。

昔にじふぁんに投稿していたものの再投稿になります。

ネギまの魔法世界編を読了していない関係上誤字脱字以外の修正はしないと思います。ご了承下さいますようお願い申し上げます。

目次

プロローグ 1
1話 7
2話 15
3話 23
4話 30
5話 37
6話 45
7話 53
8話 61
9話 71
10話 78
11話 85
12話 93
13話 100
14話 106
15話 113
16話 119
17話 126
18話 132
19話 139
20話 146
21話 152
22話 159
23話 166

24話 172
25話 179
26話 186
27話 193
28話 200
29話 207
外伝1 詠春 215
外伝2 超 221
外伝3（前編） VS千雨 228
外伝3（後編） エンドレス 236
外伝4 その後 243
外伝5 中心 249
外伝6 清水 255
外伝7 来訪者 261
外伝8 賊・来訪者 268

プロローグ

いつも思っていた。ここは異常だと。だから訴えた。親に、友達に。

けど、それは否定された。私のほうが異常だと。

なぜそんなことを思うんだ。

なぜそんなことを言うんだ。

お前の考えはおかしい。

僕たち、私たちは正しい。

テレビで新発売とか新技術だとか言われている技術を凄いというくせに、それより進んだ科学があるここは普通という。最近二足歩行のロボットがやっと自力で立ち上がったとテレビでやっていた。

だけど、ここでは普通に歩いている。人型でないにしろまるで本物のように歩き出している。きっと人型も大学にはいるんだろう。彼女は幼いながらに考えた。

テレビの日常と麻帆良の日常、それを別物に考える周りと同じように照らし合わせる私。どちらが正しいのか。麻帆良を特別扱いしているわけではない。そんなことはわかっている。だから異常なんだ。

けど、そう思うのは私だけ。

「あ、おかしな千雨だ！」

「変な千雨だ！」

すでに私は変人のように扱われていた。私は、変人なのかな？

私の考えは間違っているのかな？

私は……

自然と俯き、涙を流した。

全てが憎い。すべてを奪った魔法使いが。

両親を連れて行って殺した長が憎い。その原因を作った魔法使い

が憎い。
自然と足はそこへと運ばれた。
麻帆良学園。学園都市という隠れ蓑。自己矛盾を抱えているのを知らない魔法使い。
あいつらを憎いと感じているのは私だけではない。実際に行動に出る者もいる。
すべてはことを成せずに躯となる。
そうだろう、相手のトップと長が繋がっているのだ。
情報は簡単に手に入る。
それに、ここは学園都市だ。攻める場所は決まっている。
一般人に被害を与えることが暗黙の了解で禁止されているのだから一般人のいる場所は駄目や。
だから、待ち伏せされる。
一般人という人質の塀を乗り越えることが許されず、罠の待つ正門をくぐるしかない。まったく、難儀なもんや。
長の娘も魔法協会にとられた。一般人として過ごさせてやりたいとか言うとったけど、継承権の放棄は一切せず、今の第一継承権はあの娘にある。魔法協会のいうことを聞く長と魔法協会の洗脳下にある娘。呪術協会の先はあらへんな。
しかしこの結界は見事や。ウチも先に符を張っとかなあかんかったやろうな。どんなもんか知らんけど、札が反応しとる。結界だけじゃ反応せんはずや。さっき見た不良の喧嘩と指導員の暴力での解決、そして即座にそれを受け入れているのを見ていると享受か思考の単純化といったところか。
「チッ……胸糞悪いわ」
認識阻害は洗脳と、知らずのうちに頭の中をいじくられているのと同義だと女性は考えていた。しかも、違和感を持っていても人の脳はいつの間にか近くにあるものになれてしまう。非常識がいつの間にか常識になるのだ。
女性は麻帆良を一周して近くのベンチに腰を下ろした。
呪術協会の長である近衛詠春からは東との和解と融和をというこ

とが挙げられていた。
女性はそれを利用して麻帆良学園、関東魔法協会の本拠地に来ていた。周りから感じる視線は監視だろう。こっちから知らせているのだからついているのは当然だ。だからそれはいい。
許せないのは内部の状況と魔法使い共の思考だった。何日か暮らしているが、魔法の秘匿をする気があるのかというようなところ、本来は魔法使いや呪術師が手を出すべきところではないところに手を出している。
正義感の塊のような奴らだった。
しかし、その正義感が助けている者は彼らが生み出した悪だった。
とある格闘サークルどうしの争いがあった。
けど、そのサークルは本当に喧嘩をしなければいけなかったのか？
京都なら、他の地域なら数人がいさかいを起こして警察沙汰になるだとかはあるがサークルが喧嘩をするなんてほとんどない。しかもそれを暴力で止めている教師にそれを笑いながら感謝する警官。
図書館島というアトラクションのような図書館にいって迷子になったり危険な目に遭っているのを助けていた。しかし、本当に図書館にそんなものが必要なのだろうか？
魔術書の盗難防止なら地下の所定の場所から構造を変えればいい。わざわざ学生がとおるところに図書館以外の機能をつける必要はないはずだ。
感性がすべて麻帆良のものなのだ。魔法使いが助けたいところに危険を作って、自分たちの都合のいいように生徒を教育して認識阻害で疑問に思わせずに自分の自己満足を高めている。彼らに悪意はないのだろう。それが当然だと思っているのだから。
思えば両親の時もそうだったと女性は思い返す。
呪術協会の人間は魔法使いの一派だと勝手にまとめられ、勝手にかつては呪術協会との関係のない協会の長の娘の婿というだけで呪術協会の人間を引っ張って徴兵し、殺して返さずに長に居座った。
もちろん魔法協会からも魔法世界からも謝罪や感謝もなかった。助けるのが当然だったのだ。あっちにとっては。それが属国として

なのか魔法使いの責務なのかは知らないが女性は怒りと呆れと恨みを内包した。
「あいつらは無意識のうちに他の人を道具か奴隷やとおもっとんのやろな」
自販機で買ってきた缶コーヒーを開けて一気に飲み干した。冬の寒空で歩いていた女性の体に熱が一気に浸透していく。
「はぁ……」
落ち着いた息と同時にため息を吐く。
見れば見るほどなんで長が魔法協会と和解をしたいというのかがわからない。
公然と噂されている関東魔法協会の近衛近衛門が日本を支配するための吸収合併というのが一番説得力がある。
そもそも、関東魔法協会の歴史をたどろうとしたが、たどれなかった。
よくよく考えれば関西呪術協会のように山奥に本拠地を置かずに学園都市の様相を呈しているのに秘匿をこちらに促していることや、関東にあったはずの呪術師の協会がいつ無くなったのか、魔法協会の図書館島の外観やこの都市のつくりからして明治前後だろう。
なぜ歴史ある関西呪術協会が後から出てきた奴らの言うことを聞かなければならないのか。
呪術協会が魔法協会と争い負けたという歴史はない。いつの間にか属国のような位置づけにされていたのだ。
「そもそもなんで近衛がトップなんや。女系の家系やのに婿が上にくるのもおかしいんや。青山との関係なんて現場じゃボロボロやし」
身内を無理やり連れてって殺した青山と皆は思っている。
さらに、近年は青山当主たちの神秘の秘匿意欲の低さと性格の異常性が話題となっていた。
今まで表に出ていなかったのはそれでもまわっていただけの話であった。
坊主憎けりゃ袈裟まで憎いといった感じの呪術協会の人間にとっては黙認していたものでさえ許されないものになっている。いや、許

してはいけなかったものが表面化してきたのか。
「周りの人間は狂気にとらわれ、恨む相手は自分の行動に疑問をもっとらん。ガキ同士の喧嘩やけど避けて通れんもんやな。ウチもその一人やけど」
飲み終わった空き缶を捨てるためにゴミ箱を探す。あいにく近くには無いようで、せっかく暖めた体がまた冷えてきてしまいそうだった。
「ん？　あれは何や？」
ふと前を向くと女の子を中心に何人かの男の子が声をかけている。一緒に遊んでいたのだろうか？　女の子は動かなかったが、その周りに男の子がせわしなく動いていた。
「元気やな、こんなとこはどこでも変わらんか」
知らないうちにどうされていたとしても、気が付かない間は幸せなのだろうと結論付ける。周りからのどう言われてようと幸せな奴には邪魔なだけやろからな。
元気に遊んでいる少年少女たちの脇をすり抜けるように通り抜ける。
「――おかしな千雨だ！」
「変な千雨だ！」
いや、通り抜けようとした。しかし聞こえた言葉にふと足を止める。
横を覗き見ると女の子がうつむいて涙を流していた。楽しく遊んでいたと思っていたのが、実はいじめの現場だったのになんともやるせない気持ちになった。男の子達は年齢ゆえに自分がしていることに気が付いていないのだろう。
「……おかしくないもん。おかしいのは皆だもん」
「おかしいのは千雨だよ！」
「テレビテレビってアニメの見すぎだ！」
ちょっと痛い子みたいだった。子供のころに読んだ漫画や見たアニメと現実を同じだと思っている子。
大体小学生の低学年か中学年くらいか。このくらいなら男の子も

ウルトラマンとか言い出さなくなって分別が付くころや。
幼馴染の中で一人だけ遅れたということなのか？
「違うもん！　おかしいのは麻帆良だもん！」
この言葉に女性は違和感を感じた。
皆、麻帆良が間違っていると。
テレビで見ているものと違うと。これが本当にアニメによるものなのか。
他の魔法使いなら、呪術師ならそのまま見ていただけだろうが、今日麻帆良学園に来て結界の効果を確認した女性にとって、その言葉は今おかれている状況とともにとても気になる言葉であった。
女性はポケットの中にしまっていた符を発動させる。
認識阻害符。人の思考を操るという面では結界と一緒だが、人払い用の符ということで、思考誘導は範囲外に出ようとするというものだった。
男の子たちは捨て台詞とともに足早にその場から去って行った。対して女の子はその場にうずくまって泣き始めた。
その場を去らずに、女性の符に抵抗してその効果を打ち消していた。
まさか、
「嬢ちゃん、ちょっと話聞かせてくれへんか？」
女性は泣いている女の子、千雨に声をかけた。女の子は泣きじゃくりながら顔をあげて女性を見上げる。
「おねえちゃんは？」
「千草、天ヶ崎千草や」

1話

「今日もちうは元気だぴょーん！」

ちうこと長谷川千雨は麻帆良学園に通う中学2年生だ。

彼女は今、パソコンの前で頭を全開に働かせていた。

寮内の自室とはいえ、他の人にはあまり見られたくない格好をしている。

いわゆるコスプレというやつだ。

「あー、やっぱこっちのほうが落ち着くな。常識があって」

他の人が聞いたなら千雨の常識を疑うだろう発言をつぶやく千雨。

常識というが、決して一般的ではない。アングラな趣味の中でのことであるが、それでも千雨にとっては安心できる常識的な行為の範疇と言えた。

オタクといわれる文化の服に身を包み、ネットで自分が作ったブログとHPの更新作業をしていた。その内容は近況報告や日記、そしてコスプレ写真の投稿だ。

そして、そういったコミュニティのなかで千雨のHPは常にランキング一位を取っている。

千雨自身の更新の細かさや、兼ね備えている美貌といった要素もあるだろうが、他にも要因はあった。

「新しく出てきたこいつは……大丈夫、すぐに飽きるな。こっちは――団体はちと厳しいか。牽制しておこう」

その一つはこうして他のブログなどにも顔を出して傾向を探ったり、自作自演とは言わないまでもネットの情報操作をすることによって常に話題の中心を自分に向けさせることだ。

そしてもう一つは、

「ゲ、更新してねぇじゃねえか」

千雨は携帯電話を取り出すと電話帳に登録されている番号に電話を掛ける。

もう一つの要因が機能していなかったからだ。

なかなかつながらないことにイライラを募らせながらも千雨はH

Pの更新作業を続けていた。
『はい。千雨はん、なんのよ「何の用じゃねえよ姉さん。更新忘れてんだろ」……いい加減にしてくれまへんか？
もう前逢った時に撮ったのは前回のでお終いです。手元には何にもあらへん』
「ちゃんと服は送っただろ？　それ着て写真撮ればいいだけだろうが」
『あのな千雨はん。ウチは別に千雨はんと同じ趣味もっとるわけやあらしまへんのやで？
自分の体や顔見せて悦に浸るような趣味あらしまへん』
「だから代わりに札作ってんだろうが。それに、したくもない近況報告までして」
『それは組織として当然のことやろ』
組織。長谷川千雨は組織に所属している。
その名は関西呪術協会。
以前天ヶ崎千草と会ったその日に京都に連れてかれ、当時の現状。そして麻帆良の真実を教えられた。
魔法の存在、麻帆良に張られた結界、自分の魔力や氣に対する耐性を持っていること。
そして、麻帆良には結界が張られていて、その効果のせいで自分が虐げられていたこと。
周りが常識を常識ととらえなくなっている、麻帆良内の決まりを常識ととらえていることによってその結界の効果が効かない千雨が異常者だと思われていたこと。
今２―Ａに在籍していることで千雨は理解できていた。麻帆良が人生を狂わせたと。
自分でも客観的に見れば気が付く、コスプレ趣味というオタクに使った一般とは違った趣味。趣味にとやかく言うということを除いてもそれは逃避に他ならなかった。
小さいころから虐げられて仲間外れにされて生きた長谷川千雨という存在が個を保つために被った殻。

アニメや漫画という非現実とを見て自身を投影する。
さらに千雨には漫画やアニメという非現実と麻帆良を合わせることで自分が間違っている、間違っているといわれていた一般常識を麻帆良の常識に矯正しようと考えてもいたのかなと、今だから思いついていた。
そして周りを見て、麻帆良の外の人と照らし合わせて思ってしまう。
この人たちは人なのか、人形なのかと。
もちろん生物学的には人間で、それ以外の何物でもないのだが、みんながみんな見ていて辛いのだ。
なんでも大げさな個性、無理やりねじれた現実を納得してしまう。
それでいて他の常識には普通に対応できている。
まるで設定されたキャラクターのように思えた。駅の前にたっている人に声をかければ、何度もその駅の名前を言ってくるのではないだろうか。ＲＰＧの村人のように。
異常さはいたるところに現れる。
年末にテレビで格闘技の試合を見て盛り上がるのに目の前には中国拳法を使う同級生が人間を吹き飛ばす。
それを見ていながら格闘技のほうがすごいという。常識が麻帆良の中でずれているのだ。
それに、見ていればわかる。
最近わかったことだが依存度がひどい。凄いでなくひどい。
小さなころからお父さん子な明石優奈は母親の死とともに愛情を父親に傾倒させいまだにお父さんと結婚すると言っている。
いいんちょこと雪広あやかは弟が死産になってから年下の男の子を趣味としている。
小学生からなら同年代くらいがストライクのはずなのだが年下の男の子だ。
１０歳の時には１０歳には見向きもしなかったが今はストライク。年下であること。弟であることに意識が向いている。
そして神楽坂明日菜。

保護者である高畑先生に好意をいつの間にか抱くようになっていた。
普通ならばそのように身近なものに恋愛感情を抱くことはあまりない。
可能性としてなくはないが結界の効果が享受なのだから恋愛関係がずれ込んでもおかしくない。信愛や友愛が恋愛と混ざって愛になっていてもおかしくはない。
それはともかく
「いいから和服でも和ゴスでもいいから写真撮って更新しろよ姉さん。和服なら眼鏡はずして赤色のジャンバー着てくれ」
こっちのほうも享受してほしいものだ。
ちなみにこのＨＰ。
千雨と相手のの連絡も兼ねている。千雨の日記で麻帆良の日常を。
今は新しく来た先生のことばかりを報告している。
さすがに１０歳ということ自体は書いた瞬間に消されたが、なぜか先生が来てから脱げる回数の多い少女。
初日に先生に惚れた男性恐怖症の女の子の話やなぜか飲み物を飲んだら周りの人間が好意的になったことなどを書いていた。
近況報告があるのでこのＨＰは必要不可欠だと知っているくせに千草は必要最低限しか書いていなかった。
千雨の中では自身の趣味と情報のかく乱を合わせて使っているので最低限の情報のみでは足りないのだ。
ちなみにちうのホームページの裏サイトである『千の草々部屋』では和を中心とした写真が多く、アニメキャラなどはそういったものがたまたまない限りはおいていなかった。
そして千草が赤の着物を着ていたら火の、牡丹なら爆符といったように色と模様で符の種類を時間で枚数を決めていた。
着ないということは符が必要ないのだろうが、その時はその時用で千雨が千草に服を渡しているので本来なら更新がされているはずだったのだ。
「いいからちゃんと更新してくれよ。チェックするからな？」

言うだけ言って通話を切る。
麻帆良ではあまり長い間電話できないのだ。電話しているだけで西洋魔術師に睨まれる。
どんな内容でも確認されてしまう。
最初のほうはイライラしていた千雨だが、最近はあきらめ混じりの呆れ混じりだ。
いちいち細かいことでも睨みを利かせることで自分を保つ魔法使いの態度にあきらめを持ち。
おそらくは自分の正義感までも自分たちの結界で助長させてしまっていることに呆れていた。
そして今や同僚になっている少女が持つ信愛が百合百合しい感情になっていることに節操なしのこの結界の中にいることが恐怖になってきていた。
この結界は常に少量の認識阻害。いや、認識変換の魔法がかかっている。
感受性が豊かになったり、本質的な悪人にはならなかったり、非常識を常識と捉えたりなど……常に1だけ魔法をかけ続けられる。
しかしその1になれたらさらに1、合計2となり次は3となる。それが麻帆良になれるということなのだ。
千雨は常に1以上のレジストがかかる体質のため合計しても0なのだが、いつそれが引き上げられるのかと思うと気が気でない。
なので一応寝る前には符で確認を取っている。
今のところ、麻帆良祭以外は引き上げは確認されていないが、麻帆良祭初日にそれを確認した千雨は、その年の麻帆良祭は寮を出て二日目三日目を休んだ。
そして最近。感覚の問題でだが、気持ち強化されたように見える。
そしてその1か月後に2—Aの担任が変わった。
「クソッ……あの餓鬼のせいで」
ネギ・スプリングフィールドという少年に。
そのことを呪術協会に知らせた千雨は、さすがに今回こそ対応がされるものだと思っていた。

なんせ初日に魔法障壁を張ったまま入室。
一時間目に武装解除をくしゃみで起こし（被害者がジャージだったため2回目だと思われる）、二日目に惚れ薬という違法薬。
その後も平然と杖で飛び、しかも住居は呪術協会の長の子である近衛木乃香と同室。
さらには関東魔法協会の長である学園長が近衛木乃香を含めた数名を図書館島に閉じ込めて理由が魔法の書。
さらにはゴーレムで追いかけまわしたのだという。
本来ならば、本来ならば一般人でいさせてやりたいという方針の近衛詠春としても、関西呪術協会の長としても抗議すべきものであるが、そんな様子は一切ない。
そのせいでさらに関西呪術協会に亀裂が走っていた。
さらに今回修学旅行の目的地調査で2―A、その時はすでに3―Aになるが、千雨たちのクラスは目的地が京都になった。
自らの両親を巻き添えにされた者も多い関西呪術協会のテリトリーに、大戦の英雄の息子であるネギ・スプリングフィールドが来る。
そんなことがあったら恨みを持った者たちはどう行動するか。自分を律せないものもいるだろう。
その行為自体が関西呪術協会に対しての挑発行為ととっても過言ではない。
その上修学旅行当日に前線の人間のみならず、ほとんどの人間が、裏方の人間さえ京都から出張した任務を仰せつかっていた。
挑発行為を上が容認していると取る者も多い。そしてその分、亀裂が深まっていく。
千雨にとっては派閥争いはどうでもいいことだ。
自分の住処が守れれば。
自分のテリトリーが侵されなければ。
しかし今、それがすべて侵されようとしている。英雄という名の傀儡と本人たちに都合のいい戯曲によって。
「さっさと転校してえな。できねえかな？　できねえよな」
千雨の両親はもちろん一般人であり、転校したい理由など言えな

い。
泣いて帰ってきても笑いながら流していた両親だ。
あのときは両親を恨んだりもしたが、無意識のうちに麻帆良以上にいいところはないと考えてしまうのだからしょうがない。
両親も昔から、２０年以上麻帆良にいるので完全に意識が一般人と離れている。それを修正するにはどれだけの年月がかかるのか。
そして、今の千雨の立場でどれだけの対処が取れるのか。千雨は現状を打破する術を持っていないのだ。
《ピンポーン》
先ほどから何回もなるインターホン。
ドアの前にいるのは件の担任ネギスプリングフィールドだ。今日は腹痛を理由に早退した。
時々我慢できなくなるのだ。
胃が痛くなるのだ。
明らかな理不尽を認められなくなり、それを行っているクラスメイトが人形のように見えてしまう。
そして、最近必要以上に担任に好意的な皆を見るのがひどく辛く限界に達したのだ。
玄関先ではドアをたたく音さえ聞こえ始めた。
いい加減にしろと言いたい。ドアノブをひねる音もガチャガチャと聞こえる。
せめて教師をするなら常識を身につけろ。空気を読め。というか２２歳になってから来い。
ヘッドフォンをかけて外の音を遮断してパソコンのキーを叩く。千雨のＨＰは常に監視されているのだから
ハロハロ～♪　みんな元気―!?　私は超ブルー
今淫行教師の担任が寮の部屋の前にいてドアを叩いてるんだ。
無理やり私を連れ去ろうとしてるの（＞＜）ｉ
周りの子たちは助けてくれないし他の教師も見て見ぬふり。
みんなタスケテ～～

ＨＰを更新してから１０分後くらいにうるさかった玄関前が一瞬静かになって少ししてから学校側から電話があった。
今すぐ記事を削除してほしいと。もちろん電話の相手は魔法関係者だ。
しかしすでに５０近くのコメントが付いており、削除するとそれはそれで問題になる。
電話をかけてきた二集院先生も悩んだ後にそれでもと記事削除を指定してきた。
ネットでどんな話題になろうとも麻帆良は情報操作をするから問題ないということか。千雨にとってはあまり関係なかったが。
とりあえず学校からの指摘で記事削除をした旨を書いていいことを確認して先生に担任のことを注意する。
先生は「自分たちは自分から魔法先生と言えないから何もできない」といって電話を切った。
つまりは魔法を使っている限り自由に行動できる状況で何も変わらないということだ。
千雨はため息をついた後、ＨＰの記事修正に取り掛かるのだった。

2話

千雨は何十枚もの符を机に置いて墨を擦っていた。
認識阻害符、結界符、転移符、治癒符。この4種類だけは自室での製造が許可されていた。
火符などの攻撃性の高い符は麻帆良内では製造を禁止されている。
その時千雨は「お前らは戦闘魔法しか使えないだろうに」と心中でつぶやいたのは記憶に新しい。
その証拠に治癒符などは時折貰いに来たり買いに来る生徒や先生がいる。認識阻害は効果を知っているものしか使えずに、なんとなくで作っているだけとか。
まぁ、人によってはそういったもの専門の後方支援部隊もいるのだが、そういう人はこちらを敵視していない人ばかりなのでそこについてはあまりイラついていない。
むしろ魔法教本をもらったりしているので感謝しているくらいだ。
お礼に自作してみた認識阻害阻害符なるものを渡してみたら自身に使うより反応が強く確認された。
しかし、残念ながらその人の考え方は変わらなかった。麻帆良の常識に捉えられたままであったのだ。
「君は……実は君の常識は違うと修正されて、君の生きた十数年の知識をその場で捨てることはできるかい？」
と言われたのを千雨は一生忘れないだろう。
今その場で効果を消しても蓄積された人生は、その歴史は変わらない。
中世の魔女狩り等を見てもらえればわかるとおり、簡単に人民統制で思想を統一できるのだ。記憶や経験というものはたやすく変わることではない。
君のいう手遅れだね、と笑いながらも麻帆良で生きることを選んだ彼は今は千雨を否定している立場へと変わってしまった。
千雨は擦った墨汁を筆につけ、大きく深呼吸をした。符のつくり方には何種類かある。

千雨が使うのは書いている間に魔力を込めるタイプと書いた後に魔力を込めておくタイプだ。ほかには使用時に魔力や氣を込めるタイプなどもある。

ゆっくりと丁寧に呪を書き込み魔力を込めていく。

千雨は今後の生き方を模索するうえで符という手段を選んだ。

裏を知る人間としての義務などを教えられた。千雨は自分では前に出なくとも貢献できる符を売ることで義務を果たそうとする。

ついでにそのまま符を作ることを仕事にしてしまえば後楽だとも考えている。ちなみに転移符だけで一枚３０万で買う顧客がいるので３枚ほど買ってもらえればその年は普通に暮らせる。大人になっても月に１枚売れれば細々とは暮らせるだろう。

しかし機能としてはそのくらいの価値があるのだが、どこに皆そんな金を持っているのかが不思議だ。

ＮＧＯや人助けで金は入らないのに生活していけているのは不思議で仕方がない。そのための麻帆良なのかもしれないが。

呪術協会は昔からの歴史で政府から金が支払われているらしい。関東もそうなのだろうか？

まぁ、大学部の技術力だけで麻帆良の魔法使い全員が食べていけそうなものなのだけれど。それをしていたら魔法使いが技術力の独占と操作をしていることになる。

書いた符を一枚一枚並べ、魔力の流れに異常はないか、正常に作動するか調べてそれぞれを専用の入れ物に入れる。

この符のほとんどは麻帆良で使われることになる。刀子さんや刹那、龍宮がよく使う。といっても侵入者なんてまず来ないために治安や世界樹の魔力に誘われたぽっと出の妖怪、練習用の場所の区切りなどにだが。

一息ついていると電話がかかってきた。相手は桜咲刹那、一応は関西呪術院に所属する同僚だ。

「どうした？」

「すまないが至急結界符と認識阻害符をくれないか？」

電話の向こうでは微かに爆発音などが聞こえている。何かあった

のだろうか？
「用途を説明しろ。作り終わっているのもあるがそれによって調整してやる」
　刹那から発された言葉にまた千雨はため息をついた。
　第一声でネギ先生という名前が聞こえたからだ。図書館島以降も、彼はこのかがお見合いから逃げているときに杖で飛んできたところを、刹那がとっさに認識阻害をつかってネギの飛んでいたのはＣＧだという言い訳を信じさせたのだ。
　そのときの報告では関東魔法協会の長が無理やり関西呪術協会の次代長の第一継承権のあるこのかに息のかかったものとお見合いさせているという件も合わせて報告したが、何の進展もなかった。
「特に今回必要なわけではないです。すでに手持ちを使って認識阻害はしたので……」
「じゃあ補充用ってことか？」
「はい、すみません。いつもより余分にいただけませんか？」
　刹那の使う認識阻害符は２年の３学期ころから約３倍に膨れ上がっている。それに足る量を供給しているのに足りなくなるというのは相当なのだろう。
「わかった。それで後ろのＢＧＭは非常に斬新だがどうしたんだ？今日はそんな当番でもないだろうに」
「今エヴァンジェリンさんとネギ先生が戦っているんだ」
「あぁ」
　そういやわざわざ言われたっけなと千雨はその時のことを思い出した。
　普通にかかわる気もないのにネギが教師となってから何度も念を押すようにかかわるなと言ってくるのだ。
「わたしは芸人じゃないっての」
　毎回そのあとに肌に張っていた使用済みの防御符をはがすのだが、回を追うごとに威力が強くなっている。
　何をさせたいのか、千雨はわかっていたがわからない振りをしていた。以前にエヴァンジェリンとの争いに関与するなと言われたのを

思い出す。
「また巻き込まれたのか？」
「いえ、宮崎さんが巻き込まれたのをネギ先生が阻止したそうで、それを神楽坂さんとお嬢様が見つけました」
　それが巻き込まれたと言うんだ。その言葉を千雨は必死になって飲み込んだ。価値観の相違というものは同僚の桜咲にも根深く息づいていた。
「んで二人はどうしたよ」
「神楽坂さんはネギ先生を追っていきました。お嬢様は裸の宮崎さんを寮に送っているところです」
　どうやら、こういう時に限って正義の味方は現れないらしい。
　裸の女性を抱えているという格好のエサが夜の街に徘徊することになるのだ。
　麻帆良のことだからすぐに人がたかってすぐにやられてすぐに改心してすぐに忘れるのだろうが。
「じゃあお前は電話なんてしてる暇ないんじゃないのか？　手伝ってやれよ」
「いや、今私が行くのは不自然だろう」
「なら先の道か何かで飲み物買ってるとかしてたまたまあったようにしろ」
「しかし、お嬢様と接触するのは……」
　そのあともごにょごにょ言っているのにイラついた千雨は瀧宮にでも手伝わせろと言って電話を切った。
　そしてあらかじめ用意していた符の中から一セット取り出して転送符で刹那の部屋に転移させる。本来ならばポストにでも入れるのだが、自分の部屋、テリトリーから動く気が起きなかった。
　その後も千雨は何もする気は起きずに出していた道具も片付けないでベッドに横になり眠りについた。
　そして次の日
「なんだよ、ありゃあ」
　目の前の光景を見て愕然とする。

神楽坂明日菜に担がれて登校する担任。
いつもは胸中でつぶやいていたものが言葉として紡がれてしまうほどのインパクトがあった。
ネギが教員の会議に出ていなかったり行事のプリントを配ったことが一切なかったり連絡網が回っていないのはいつものことだが、さすがに担がれての登校はありえなかった。
ついでにエヴァンジェリンを恐れているようで、茶々丸にあっただけでおびえている。
最悪だ。
その時、千雨ははっきりとそう思った。
そしてそれが間違いだと気が付いたのはそれから何日もたたないうちだった。
「１０歳の僕のパートナーなんて嫌ですよね？」
授業をせずに、暗い顔をしてパートナーなんて言い出している。
こんな発言許されるはずがない。態度もそうだが、パートナーという言葉を一般人の前でしかも勧誘している。
一歩間違えれば死ぬ世界にだ。
確かに、周りで死傷者なんてほとんど出ない。けれどネギは知っているはずだ。大戦という名の殺し合いを。
そして殺すことが名誉と富を得ることであり、大量殺戮者が英雄であるということを。
いままでは呆れだったが今では怒りに変わっている。
すぐにネギは立ち去ったが、感情というものはすぐに収まるものではない。周りの人間は騒いでいるし、他の魔法関係者の反応もそこまで否定的ではない。
「ふざけんな」
千雨はホームルームも無視して教室を出た。余談だが、その後結局ホームルームは開かれなかったらしいので、行動が問題視されることがなかったのは幸いだった。
そして、それから千雨の行動は早かった。
すぐに麻帆良から出る手続きを取る。

文句を言ってくる奴らがいたが現状のネギの行動と自分の胃の調子を教え、秋葉原に繰り出すんだと叫んだら、許可が下りた。相手はＨＰを確認している魔法使いだったので逆に同情されてさらにいたたまれなくなった。

もちろん行く先は秋葉原、なわけだが目的は公衆電話を利用した電話だ。千草のもとに電話をかけて情報と愚痴をぶちまける。

「って感じだったんだよ。千草姉さん」

『なんやもうダメやなあそこは、もとからそうやけど。結局自分たちのことしか考えてへん。ご立派な魔法使いたちの集まりや』

千草のため息が公衆電話の先から漏れ聞こえる。それを聞いた千雨は自分でも同じようなため息を吐いた。

「ついでに修学旅行先の京都っていうので魔法先生はうちの担任だけっていってたろ」

その後、いたたまれない静寂が二人の時を支配したが、埒があかないと千雨がさらに話を切り出す。

『あぁ、そやな』

「護衛の桜咲はいいとして、うちには魔法生徒が一人、関係者で傭兵が一人。一般人だが人をたやすく吹っ飛ばすのが一人に忍者が一人いるぜ？」

『先生やなければいいって話やないんやけどな』

「ついでに魔法先生が他についてきたら笑えるよな」

『さすがにそんなバカしませんやろ。これ以上東西の仲こじらせるような』

「この前先生が修学旅行中に西に親書渡すから陰ながら支援しろって桜咲と一緒に呼ばれて言われたぜ」

『なんやて!?　こっちが恨んどる英雄の息子に学校の修学旅行ついでに親書もたせるんか!?』

「ついでに言えば見習いの、しかも関東に所属してないお子様にな」

ネギ・スプリングフィールドはあくまでイギリスのウェールズから修行に来ているにすぎず、関東魔法協会の人間ではない。

今回東の長である近衛近衛門は大戦時にできた亀裂を埋めるため

に親書を出すことにした。
それを受け取るのは婿養子の詠春だからどんなことでも許されるのだろう。
たとえば見習いに持たせても。
恨みの原因の関係者に持たせても。
自分たちが大戦に巻き込んだにもかかわらずに謝りもせずとも。
修学旅行のついでであろうとも、生徒を盾に一般人を巻き込むなという無言の脅しで脅迫しながらの行軍でも。
「まぁ、私は最終的に関西のが残って札卸せればそれでいいけどな。どちらにせよ麻帆良から出るのが第一だけど」
『あんさんには派閥やらは関係あらへんからな』
本で習える初級程度の魔法なら使える千雨にとっては西も東も関係なかった。麻帆良の人間が何しようと関係ない。千雨の行動範囲外であるならば。
しかし逆に、今の状況は千雨のテリトリーを荒らしているために西寄りな行動になっているのだ。
「千草さんは今鹿児島だっけ？」
『そうや、もう終わったけどな。あんさんに作らせとった符がなかったらあと2週間は帰れなかったわ』
今の長が率いる派閥以外の権力、武力のある人間は本拠地にいない。いるのはごく少量の魔力しかない巫女か使用人だけだ。
古くからの組織のため、一回決まってしまったものには従うしかないことを利用して強権を発動させたのだ。
それに対し、千草は千雨が作った符を使って強行軍によって時間を短縮させたのだ。他にも数名仕事を終えて戻ってくるものがいるが、いつになるかまではわからない。
過激派になればなるほど遠くの地に飛ばされている。
「じゃあ間に合うんだな」
何にとは言わない。千雨も千草も考えてることは一緒だった。
昔からそうだった。そして、それは許されてはならないことだった。

二人にとって、それは許容できないことだった。
だから抗う。一人だろうが、二人だろうが。
自分の居場所を見つけるために。
奪われた場所を取り戻すために。

『そうや、下克上や』
千雨は電話越しに千草の熱のこもった声を聞いた。

3話

大戦の英雄、戦火の少女。
命の重さは皆同じなはず。
しかし、命とは何を指すのか。
生物学的な論点からいえば意識がなくとも生きていれば命というものはある。しかしそれは生きているとは言えないだろう。
では動いていればいいのか。
それも違う。奴隷のように働かされている人間に命の重みを感じる人は少ない。憐れみを持ったとしても命を尊ぼうと思うものは同じ立場の人間くらいだ。
では楽しく過ごせていればいいのか。
傀儡としても。
利用されても。
自分たちが盾にされてようとも。
「これはないよな、瀬流彦先生？」
「何が言いたいのかな？　長谷川さん」
修学旅行当日、長谷川千雨はいるはずのない人物に声をかけていた。魔法先生は一人と麻帆良学園は通達していた。それは嘘偽りないことだ。そうでなくてはならない。
「言わなきゃわかんないのか？　魔法使い」
「ここでその言葉は言わないでくれないかな？」
「そう思うんだったら、ネギ先生からこれ見よがしに担いでいる杖を没収して障壁解除させたうえに身体能力向上の魔法使わせないでくれ。それと労働基準に合った年齢まで教師にさせずに義務教育受けさせろよ。ここはすでに麻帆良じゃねえんだぞ」
さらに心の中で麻帆良であっても当然のことだと付け加える。
千雨に認識阻害は聞かない。
しかし慣習というものは人としてあるので逐一異常なことに関しては心の中で常識と照らし合わせるようにしている。

「しょうがないじゃないか、ネギ君は子供なんだから」
「問題をすり替えるなよ先生。ネギ先生が子供なのは本人の問題で生徒がいる時点で言い訳なんてできない。それに今の問題はアンタがここにいることさ」
「急遽決まったんだよ。引率の先生が足りないとかで」
「じゃあ既に連絡は取ったんだよな？　お決まりの認識阻害で別の先生にもできただろう。それすらしないでこっちに報告をしてないなんてことないよな」
　瀬流彦はあからさまに言葉を濁した。連絡をしてないのだろう。
　もちろん、するつもりがあったができなかったというわけでもない。
「魔法先生が一人だって？　龍宮や春日に長瀬にも、ネギ先生はもうばれてんだったか？　神楽坂はパートナーだしな。先生じゃないって言い訳でもきついってのに、親書をだす相手に報告する誠意も見せないで形だけの親書を渡すのか。ご立派だな」
「きみだって仲が良くなるほうがいいだろう？　なんでそんな否定的なことばかり言うんだい？」
　確かに千雨の生活では東西が仲良くなったほうが過ごしやすくなる。
　麻帆良にいる必要性もなくなるので高校にでもなるときに京都に行けば今の心配もほとんど消える。
　符も売りやすくなり理想の生活にまで戻れるのだ。
「対等な関係で仲が良くなるとかだったら何人かは肯定派もいただろうけどな。
　誰もそっちの属国になる気はねぇよ。誠意なんてどこにもないでガキに親書持たせてる組織と付き合いましょうなんて考えられないね。亀裂を作っているのはこっちだが、原因はアンタらなんだ。被害者面してんじゃねえよ」
　しかし、自分が自分であるための境界線をすら突き破っているのが今の状況だった。
　仲が良くなる人間に嘘をついて子供にお使いにしかならない手紙

を出してくる相手。
ごめんなさいも言わずにいい加減機嫌なおせやと言うのはないのではないのかと。
しかもネギ自身にはその意味も意図も伝えていないのだ。あなたのお父さんが英雄になった戦争にあなたのお父さんの仲間に上がたまたまいたから……いや、上になる予定の人間がいたから関係のない呪術協会の、日本を守る人間たちが違う世界に連れてこられて戦火に巻き込まれました。
それに対し何もしないで呪術協会を下に見てくる魔法世界側に怒っています。そんなことをネギに言えない魔法使いたちは隠した上で喧嘩を売るような親書を託している。ネギにとってお父さんという存在は理想の英雄でなければならないから。
自分の都合のいいことしか伝えていないため、関西といがみ合ってるから仲よくするために渡すとしか伝わっていない。
はたしてネギは魔法協会と西の長が行った行動を知っていたらどう思うだろうか。亀裂はあった。それを決定的にしたのは前大戦の徴兵なのだ。
「ガキって、彼はサウザントマスターの息子で――」
「こっちにとってその名前はな、死神で大量殺人鬼なんだよ。無理やり連れてかれた戦争で死んだ奴の中にはな、後ろから撃たれた奴もいるんだ。極太い雷が都合よく味方を避けるとでも思ってんのか？」
生きて帰った術者から聞いた話だ。彼は結界を作ったり転移をさせたりといったことをしていた。だから前線には出なかった。それでもすぐ横を魔力弾が通っていったりもしたらしい。そして忌々しげに話した内容があった。
「あいつらは周りのことを何にも考えない。自分たちの攻撃で誰が死ぬかなんて考えないんだ」
あいつらとはもちろん大戦の英雄のことである。
無理やり連れて行かれた魔法世界の大戦で死んだ理由が連れかれた奴らに殺されたとあっては怒りや恨みを覚えないほうがおかしい。
しかもその息子だからどんなことをしていても許される？　そん

なことがあるはずはない。
他では許されていたのだろう。魔法使いにとってはまさに英雄なのだろうから。
千雨は軽く瀬流彦を睨みつけた。
「忘れんなよ、お前等と私たちは考えが違うんだ。自分たちがそうだからって価値観押し付けてんじゃねえよ」
「――」
瀬流彦が口を開こうとするが、それを聞かずにその場を立ち去る。
そして駅にあるロッカーから荷物を取り出した。そこにはプリペイド式の携帯電話があった。盗聴されないように用意したものだ。そこからメールだけ打って魔法先生が他にもいることを伝える。
そしてクラスメイトの集まっている場所へと集まっていった。
千雨は春日美空と同じ班になっていた。
春日は泣きながらシスターシャークティーに命令されたと言っていたが、春日なら構わないと千雨は思っていた。
特に耐性があるわけではないが、比較的に染まっていないのだ。以前千雨が疑問に思って聞いてみたら自分は自分の生きたいように生きてるから思想とかには興味ないと返してきた。
異常に関してはそれはそれで楽しいから関係ないと。むしろどんと来いと。
それを常識にしているのではなく純粋に楽しんでいる彼女は少し感性が感化されたくらいでは人が変わらず、むしろ羽目を外していたずらをするようになっていた。
そのため、申告してきた彼女に千雨は頑張れよと肩を叩いて慰めた。
他には那波、雪広、村上との5人班だ。3人は同室のルームメイトだから二人はそこに入った形になる。
そのような図式になると、自動的に話し相手というのは春日になる。
しかし、自由行動の比較的許されている情況の千雨はヘッドフォンをして話しかけられないようにしているため、春日は他のクラスメイ

トのところに行っていた。
新幹線はまだ発車しない。
今回のように学校の修学旅行などでは基本的に問題児の多いクラスが先に点呼されて電車の中に入れられるから３―Ａは真っ先に入れられた。
だからあと２０分は発車しないだろう。
後ろの席を確かめて、席を回転させ、千雨の席を背にした状態で対面にして話しているのを確認した千雨はチェアの背もたれを後ろに倒して寝れる体制を作った。
「あら、千雨さん。昨日は眠れなかったんですの？」
那波とはなしていた雪広が千雨に声をかける。
「いや、ただ単に朝が弱いだけですよ。皆のように元気が有り余っているわけではないので京都に着くまでは休んでいようかと」
「そうですか。明日菜さんのように元気すぎるのもあれですけど、でしたら外の景色を見てるだけでも楽しいものですよ？　場所が変われば見えてくるものも変わりますから」
さっき先生をグリーン車に連れて行こうとした行動は元気だったよなと雪広の奇怪な行動を思い出す。
「じゃあ関西に入ったら起こしてください。それまでは少し休みますので」
「わかりましたわ。けれど発車したら連絡事項があると思いますのでその時に一旦おこしますわ」
「じゃあそれで……」
千雨は音楽の海に沈む。
皆の前で聞くものは基本的にオリコンに出ているものだ。自分がオタクだと知られたくないというのもあるし、付き合いをするのが嫌だということでもある。
特に、オタクだとばれる対象がハルナだった場合にどのように巻き込まれるかわかったものではない。
その対策として、特に好きではない最近のものと好きなＪ―ＰＯＰを混ぜて流している。

気持ちのいい振動でより深く眠ろうとした千雨だが、雪広に起こされたためネギ先生の挨拶を聞く。
「お弁と――あ、すいません」
「おいおい」
後ろから来た販売車に轢かれるネギ。
それを見て呆れ、大笑いしているクラスメイトを見て呆れ、販売車の販売員を見て呆れた。
販売員が自分の知る人物。関西呪術協会の天ヶ崎千草だったからだ。
おそらくネギを轢いたのはわざとだろうとあたりをつける。
自動ドアを開けてから人を轢くまでに気が付かないわけがない。轢かれるまでに気が付けるか。気が付いたとしてどんな反応をするのかを試したのだろう。
まぁ、どうでもいいか。
そう判断をつけてもう一回寝たふりをする。
『キャー！　カエルー！』
次はなんだと目を開けると、そこには無数のカエルがいた。
すべて式のようで、千雨にはそれが千草の仕業だと分かった。ネギは慌てふためきながらカエルを回収している。
その様子を眺めていたが、不意に敵意のある視線を感じたのでそこに目を向ける。そこには同僚の桜咲刹那がいた。
刹那は竹刀袋を担ぎ、あたりに気をくばっている。そのうえで千雨を警戒しているのだ。千雨は両手を軽く上にあげて降参の姿勢を取る。自分のせいじゃないとジェスチャーで示したのだ。
そのうえでネギに目をやった。あっちを注意したほうがいいんじゃないかと。
ちょうどそのときネギは親書を探しているところだった。
少し千雨を睨みつけたが、刹那は小さくうなずくとネギの近くによっていった。
カエルを全て回収したネギ、慌ててスーツの内ポケットにあった親書を取り出して安堵する。

するとその横から式紙のツバメがとびかかって親書を奪い去った。
ネギは一瞬間を起き、杖を構えてその先を追いかけるが、またもややってきた千草に撥ねられた。
今のは……すでに姉さんは親書を取ったな。
そのまま後を追っていくネギ。それを見ながら千雨は刹那に一枚の符を渡す。刹那はそれを受け取り、転移して先回りをした。
それを確認した千雨はそのまま後ろの車両との間に移動した。
そこには予想通り千草が待っていた。
「どうだったんだ？」
「ちょろいもんやあのガキ。普通なら気が付くもんやけどな」
そういって親書を取り出して見せる千草。
「破り捨てたろう思うとったけど、おもしろいもんがあったんや」
そう言って親書の中身を見せてくる。
そこには『下もおさえられんとは何事じゃ　しっかりせい婿殿』と書かれた一枚が。ご丁寧に絵まで描かれてぷんすかという擬音までつけている。
「なめてんな。こんなの親書でもなんでもねえじゃねえか。どこの学生の文通だよ」
「これはコピーして皆に送っといたわ、あんさんも写メでもとっとき。あとでこれは護衛の嬢ちゃんに渡したれ」
そう言って親書を渡してきた。写メを取ったのを確認すると符で封された状態に戻した。
「これできまりや。西と東は相いれん。今回の和議は近衛一門のためのものであり、組織間でしたらあかんことや。近衛の歴史はこれで終いや。一般人を盾にしよって、警告はしたで。明日からは覚悟するんやな魔法使いどもめが」
そう言って千草はその場を去って行った。

4話

「おい刹那」
京都に到着し、バスに乗ってやってきた清水寺。
クラスメイトが清水の舞台に向かっているところを千雨は刹那を呼ぶ。
クラスメイトが先に行く中、二人は端に寄り体を隠すように話し始めた。
「なんだ？」
「これ、ネギ先生に返しといてくれよ」
そう言って取り出したのは先ほど千草が奪った親書だった。
刹那のポケットに、押し付けるようにねじ込んだ。
それを見た刹那は驚愕に目を見開いた。
「なっ!? なんでそれを!?」
「さっきお前が奪い返したのは偽物だ。本物の親書はこっち。これが写メな」
千雨は携帯を取り出して中身を見せる。
数枚入っていた親書の中身は形式的なものもあるが――特に1枚、あってはならないことが書いてあるものがあった。
「この親書の内容は関西呪術協会の所属員全員に送られた。もちろん長に知らせるようなやつを除いてだけどな。京都にこの親書が届けられても一切効力はない。むしろ長を引き摺り下ろすための材料になる」
「ならなぜすぐに連絡しない！」
「そんなこと決まってんだろ。私も引き摺り下ろす側の人間だからだ。正確に言うなら引き摺り下ろす側の人間の側にいる人間だがな」
刹那は一度自分のポケットに入った親書を見る。それを取り出し、制服の内ポケットにしまった後に竹刀袋に手をかけた。
「貴様……恩を仇で返すのか？」
睨みをきかせ、怒気を顕にする刹那。
しかし、千雨はそれに対するでもなく、ただ刹那を見るだけだった。

何を言っているのかわからない。そんな表情を刹那に向ける。
「恩を感じているのは長じゃなくて千草姉さんだ。むしろ麻帆良にとどまり続けさせる長には恨みしか感じないね。お前も恨みくらいあるんじゃないのか」
「私は長に助けられ、使命を頂いた。それにお嬢様を守るためには貴様をそのままにはしておけん」
その言葉を聞いた千雨は細目で刹那を見た後に口を開く。
「助けられたから自分を盾にするような仕事をするのか。それは支離滅裂なことだと思うがな。それに、お嬢様を守るなんてそんな見え透いた嘘をつくな」
「なんだと?」
「守るってのは危険に合わせないようにすることだ。それならばまずこの旅行に連れてくるべきじゃない。それに、麻帆良でもかなり護衛が必要な場面があったと思うぜ? その時お前は何をしていたよ」
「私はいつでも出れるように陰からお守りしていた!」
刹那の目には何の狂いもない。自分は間違っていないと自信を持っていた。
「お見合いをするということは魔法協会の息がかかる。
連れ戻すか殺される危険性が高くなるぞ。その時お前は何をしていた。
ネギ先生と同室になった時も同じだ。復讐対象と一緒にいる裏切り者という図は憎しみを持つ者にどう映る。
しかも仮契約の方法を危険性も説明せずにほのめかして失敗とはいえカードの出現までさせてしまっている。護衛としてお前は何を考えている?」
「私が考えているのはお嬢様の幸せだけだ」
「お前は近衛の後ろについて回っているだけで幸せなんて作ってもいないし守ってもいないと思うがな」
このかの幸せは平穏な暮らしだろう。ぽやぽやした性格の彼女はいくら芯があったとしても血なまぐさい世界には似合わない。
いくら魔法使いの怪我が、魔法によりかなりの重症を負ったとして

も治癒可能だったとしても、それを見ること自体、知ること自体すべきことではないのだ。
このかのことを考える行動なのか。誰のための行動なのか。
このかの現状の幸せを維持するならば、まず知られることを避けるために麻帆良に行かせるべきではない。
その時点で対応が間違っている。穏健派のリタイア組の住まう地の中から選んで、そこに預けたまま普通の学校に通わせればいい。それこそ全寮制の学校など探せばいくらでもある。
魔法使いの街に送っているのが間違いなのだ。少なからず彼女は手遅れの状態に精神が成長してしまっている。麻帆良の常識に彩られてしまっている。
「守るときに有効なのは知られないことだ。それが無理ならそのものの価値を見せないこと。価値を消すこと。
近衛に普通の生活を送らせたいなら魔力を封印するなりすりゃいいんだ。それをしないのは何のためだと思う？　長は心の奥では捨てきれないんだよ、呪術師近衛木乃香を」
「そんなことはない！」
「ならなぜ近衛はまだ呪術協会に所属しているんだ？」
必死に否定する刹那を千雨はあざ笑うように告げる。
近衛木乃香の継承権は破棄されていない。破棄されていれば次期当主になれないからだ。魔力を封印することをしないのは近衛詠春の親心ではないかと千雨は考えている。もし知ってしまったときにあるべき場所を作って選択肢を増やさせるために。
その親としての選択は部下にしてみれば許せるものではない。
そもそも近衛の血を持たない人間が当主になり、その者の本分は呪術ではなく剣術。その上当主の功績は味方殺しの大戦の英雄だ。
近衛詠春が長になることじたいが魔法世界に下っているという証拠に他ならなくなる。
魔法使いは魔法世界と魔法使いのために活動している。
呪術師は日本の守護のために活動している。
目的が違う上に、目指すものも違う。そんな組織が足並みをそろえ

ろというのも無理な話だ。
そもそもおかしくなったのは近衛近衛門の関東魔法協会の会長就任だ。
西と東の関係を、義親子の上下関係をそのまま組織にまで影響させている。
その状況を、西の人間たちが許せるはずはない。しかもその上下関係が下の人間にまで浸透させているのが問題だ。
魔法世界の人間は魔法世界の基準で行動する。それは当然のことだろう。
しかしそれを他の人間にまで当然のように押し付けるのが間違いなのだ。
今回も清水寺には結界が張られている。麻帆良学園と同じ効果のものが。
他の参拝者にも嫌な思いをせずに過ごしてもらうためのものなのだが、それは同時に、そんなものを使わなければ一般人に影響のある行動や騒がしさになるということになる。
そして、それを京都の人間と関西呪術協会の人間に強いている。
よくよく見れば一つのところで騒ぎ散らす集団がすべて麻帆良の学生たちだ。他の学校の生徒も幾人かいるが、隣の人と私語をする人たちはいても騒ぎ散らして喚いて走り回る人なんて小学生ですら見られない。せいぜいが土産屋の木刀を見て笑っている程度だ。
つまり、異常の地に追いやっていたのに戻ってくる彼女は危険性が高くなる。壊れた常識の中で生まれた人間の采配なんて、誰が期待できようか。それを阻止するために強行手段に出るものは、現状より多くなるだろう。
けれど、このかの周りはそんな状況はもちろん望んでいないはずだ。ならばどうすればいいのか。まともな判断をつけさせるか。しかし、上の人間が既に機能していない以上そんなことはできない。
ならば、関西呪術協会に所属させていること自体が間違いなのだ。もしくは魔力のタンク、魔力許容量をなくしてしまえばいい。才能がないものに人は近寄らない。

できるかどうかは別として、手段としては試みてみるべきことだろう。もしくは近衛自体が関西呪術協会を離れて魔法協会に行ってしまえばいい。
関西呪術協会にいることは権力を利用する以外に近衛にとってむしろ邪魔になっているのだ。
結局は西も東も支配しようと考えている近衛の考えが見え透いているだけなのだ。
「この状況を作ったのはお前等だ。近衛がどうなるかは知らないが、旗本にはならないししないだろう。あって人質くらいだから死にはしないよ」
「……今回の件を企てたのは誰だ？」
「言うわけないだろ？　あえて言うなら全員だ。そして、それをさせたのは長だ。
わたしは成功しようとしまいと関係ないんだ。お前たちに卸してるだけで一般人の生活できる水準の賃金は手に入るからな。
私を疑って突っかかるくらいならお嬢様のところにいったらどうだ？　呼び止めた私が言うのもなんだけどな」
千雨の方針を知ってはいる刹那は、もう一度千雨を睨むと千雨の言葉に従って近衛木乃香のいる方向へと走って行った。
千雨は龍宮に電話をかけて護衛の代行の礼をいって離れていいことを伝えた。
そしてクラスの集団に戻った千雨が見たものは酔いつぶれたクラスメイト達だった。
「何やってんだよこいつらは」
とりあえず報酬の餡蜜の代金を払うために茶店へ。そこには5杯ほど餡蜜のあったであろう器が置かれていた。
「よう、お疲れさん」
「や、そちらもお疲れ。遠慮なくいただいているよ」
そういいながらも餡蜜をもう一つ頼む龍宮。それに合わせて千雨は白玉ぜんざいを頼んだ。
「んで、どうしてああなったんだ？　うちのクラスは」

「清水の恋愛成就の水に酒が混じっていたのさ。かなりいいものだったよ」
「飲んだのかよお前……」
恋愛成就の水を飲む龍宮を想像できなかった千雨が、呻くようにして言葉をこぼした。
「君、いささか失礼じゃないのかい？」
「すまん。本当に想像できない。むしろその水掬って売りさばくくらいしそうだ」
「私だって１４だ。少しくらい乙女心を持っていたっていいじゃないか」
「ならその隠したバッグの中身見せてみろよ」
僅かに隠されているバッグを指して言う。龍宮もなんも悪びれもせずにバッグを渡してきた。そして水筒を手に取った千雨を見たら微かに両手を挙げた。
「わかったわかった。どうせ私に乙女は似合わないよ」
「そうは言わねぇがそういうことを言うこと自体が間違いだろうよ」
千雨は瀧宮にバッグを返して自分の白玉を一つ餡蜜の受け皿に渡した。
「で、刹那との話はどうだった？」
「事実確認だけだよ、進展も何もない」
「そうか……」
龍宮は餡蜜を黙々と食べる。千雨も同様に一言も発しなかった。
龍宮との仲は良好とはいえないものの、悪いというほどでもなかった。海外で活動していた龍宮は、その分考えが染まっていない。そしてなぜか、魔法側の人間にしては現実的に物事を考えていた。そのため、千雨は他の人間と比べ、龍宮とは接しやすかった。
それは、二人が食べ終えるまで続いた。二人が食べ終えるころには酔っぱらった生徒たちはバスに送り終えたようで、残りは数名となっていた。
「んじゃあっちも済んだみたいだし行くか」
「ああ、会計は任せたよ」

そういって立ち上がる龍宮。千雨は会計を済ませるとその後を追った。

そして旅館内にて、ほとんどの人間が眠りにつく中に事件は起こった。

事の発端は千草の行動だ。このかをさらおうと式をつかったところに刹那が乱入して阻止したのだ。

そして猿の式をみて誰がやったかを特定し、千雨のところへとやってきていた。

「先ほどお嬢様が連れ去られそうになった」

「そうらしいな。それでなんだ？　結界符でもほしいのか？」

「人払いの結界が欲しいが、確認したいものがある」

そう言って見せてきた符は千草のために千雨が作った符だった。

「これはお前が作ったものだろう？　犯人とは仲が良かったはずだ」

「そうだな。私はあの人に救われたから一番卸してるな」

「お前は本当に何もしないんだな。手引きもしていないのだな？」

千草と千雨の関係を知っている刹那の目は厳しい。

「私はむしろ何もするなって言われている。むしろお前との連絡のほうが仕事かな。ちなみにさっきのは警告らしいぞ。お前等魔法と氣を旅館内で使ったろ。

関西は呪術協会の領分なのに修学旅行でどこに魔法を使う要素があるんだよ。

次はないらしいからな。逆に人払いをすることによって挑発しないようにな。警告はしたぞ」

千雨はそのまま刹那に符を渡す。さらに問い詰めようとした刹那だが、そこに違う声がかかった。

「刹那さん、長谷川さん。お話があるのですが」

二人が振り返ると、そこには3―Aの担任がいた。

5話

「どうかしましたか？　ネギ先生」
　千雨が振り返るとネギがいた。隣には明日菜もいる。
「少しお話があるのですがいいでしょうか？」
「どんなお話ですか？」
　もちろん先ほどからの襲撃のことだろう。しかし、千雨の突き放すような発言を聞いて次の言葉を言いよどむネギ。
「うぅっ……」
「何やってるのよネギ、千雨ちゃんと刹那さんに聞くんでしょ？　ねぇ、二人とも魔法関係者なんでしょ？」
「そうでぃ！　ネタはあがってるんだ！」
　明日菜とネギの肩に乗っているオコジョがネギの代わりに問い詰めてきた刹那はそれに対してうなずき、千雨は嫌そうな顔をして目をそむけた。
　その反応に一人と一匹は反応する。
「刹那の姉さん、この人も関西の人間だって言ってましたね。本当に敵じゃねえんですかい？」
「えっ……敵ではありません。それは今確認しました」
「味方でもねぇから手伝いもしないけどな」
　相手の反応を見て釘をさす千雨。
　千雨にとっては厄介ごとが舞い降りてきたことに他ならないのだ。
「ちょっとなんでよ！　このかなんて攫われそうになったのよ!?」
「それに関してはお前等には関係ねぇよ。それに関係あったとしても非があるのはそっちだ」
「どういうことよ」
　詰め寄らんとする明日菜。
　千雨はそれを見て手で制した。
　そしてその手をそのまま後ろにやってロビーを指す。
「あんまり話したかないが話してやるよ。一旦座って落ち着けや」

千雨は明日菜を座らせてなだめながら他の人を含めリクエストを聞く。そして近くに合った自販機へと買いに向かった。
その作った時間の中で考える。
どこまで話すか。
どこまで話すのが最善か。
次々に落ちてくる缶を拾いながら考える。
相手の立場、考え。相手が自分の言葉をどれだけ受け入れるのか、どれだけ信じるのか。そして、それを受けてどう行動するのか。
戻るころには幾分かの整理もついた。ロビーに戻ると明日菜は人差し指でテーブルを叩きながらもう片方の腕で肘をついて千雨を見ていた。それを気にしながらも千雨は全員に飲み物を渡した。
「で、アンタたちは何を話したいんだ？」
「あ、あの！　妨害をやめてほしいんです！」
缶ジュースを両手で持ったネギが詰め寄るように言葉を発する。
「なんで？」
「なんでって、あんなことしておいて！」
落ち着かせるために席に着かせたのに、明日菜は勢いよく立ち上がる。
「落ち着け神楽坂、今はネギ先生と話してんだ。先生、妨害をやめたらどうしますか？」
「やめたら？　やめたら何もしませんけど……」
「親書を渡すことも？」
ネギは勢いよく首を横に振る。ネギとしては任された仕事だ。やらないわけにはいかないだろう。
「親書を渡したいから妨害をやめろということですね。では先生、親書を先生が渡したらどのようなことになるかわかりますか？」
「えっと……関東と関西が仲良くなるんですよね」
迷いもなくそう答えるネギ。千雨は思った通りの答えにため息が出そうになった。
ネギがいっている仲良くなるということは友好関係を持つということだ。上の采配で、下の気持ちも考えずに。

「ではなんで関西の人間が妨害をしようとしてると思いますか？」
「えっ……？」
ネギは考えてもみなかった言葉に驚きの声と表情をした。ネギにとっては親書とは仲良くなるための手段というところで話が止まっていたのだ。自分がやっているのはいいことであり、正しいことだと思っている。
「例えばですね、ネギ先生」
千雨は立ち上がり明日菜の前に立って――勢いよく殴り飛ばした。
明日菜はその拳を受け、飛ばされ勢いよく壁へとぶつかる。
ネギは立ち上がって呆然と千雨を見る。千雨はそのまま明日菜のほうへ向かってこういった。
「仲良くしてやるよ。これでおしまいな」
痛みでうなだれていた明日菜はそれを聞いて眼孔が開いた。
間をおかずに立ち上がり千雨を標的にとらえて殴り返す。それを千雨は護符で受け、受けようとしてとっさによけた。
「ッ何すんのよいきなり！」
「お前らがやろうとしてることを行動で示しただけだ。まぁ、神楽坂を殴る意味はないと言えばなかったんだが」
千雨は治癒符を取り出して明日菜の頬へと当てる。明日菜はイラつきながらもそれを受け入れた。
「で、どうだった？　あんなことをして仲良くなりたいか？」
「なれるわけないじゃないそんなの！」
「じゃあそれを今から押し付けに行くお前等はなんなんだ？」
何を言っているのかわからないといった二人にさらに細かく説明する。
西の人間は東の人間を快く思っていない。その原因は東にある。
西が溝を深めているのは東が西を下に見ているからだ。その立場は西の長と東の長の血縁関係のものになり、組織としてのものではない。
今回の修学旅行のついでに親書を渡すという情報は、さらに西の人間の怒りを強めた。

修学旅行のついでという手段をつかって一般人を盾にした卑怯者の文書を長は無条件で受け入れる姿勢を持っている。その理由が

「西の人間の敵であるサウザントマスターの息子が持ってくるからだってんだからよ。その時点でおかしいんだ。日本の組織に魔法世界のネームバリューなんて関係ねぇんだからよ。それが通用すると思ってる時点で長が魔法よりってことだな」

「どういうことですか！　お父さんが敵って！」

サウザントマスターという単語に反応したネギが声を荒げる。自分の父であり英雄である男が敵呼ばわりされるのはネギにとって許しがたかったのだ。

「ネギのお父さんって大戦の英雄とかじゃなかったの？　なんで恨まれてるのよ」

「殺された人間の親類がいるからだよ」

「お父さんはそんなことしません！」

ネギが千雨を睨みつける。自分の父親に絶対の信頼を持っているのだろう。

「戦争だったんだ。人を殺さなきゃ勝てないし英雄にすらなれない。それがいいとかわるいとかの問題じゃない。それに関西の人間を意図的に殺したのは帝国の人間であってサウザントマスターはそうじゃなかった」

「どういうことよ」

「たとえば……旅館内には既に２０人の術者が入っている」

それを聞いた3人が立ち上がり、周囲を警戒する。

「まぁこれは嘘だが、そうなった場合にサウザントマスターがとる行動は旅館ごとぶっとい魔法で丸呑みにするってことだ。そうなると今ここにいる私たちはどうなる？　もちろん死ぬよな。神楽坂もそのくらいのことが魔法にできるってことは知ってるだろう？」

明日菜はその言葉を聞いて青ざめた。思い出しているのだろう。ネギとエヴァンジェリンの戦いを。

「そもそも大戦は魔法世界のことだ。

それになぜ関西呪術協会がかかわらなければいけない？

その理由は今の長にある。今の長のは紅き翼のメンバーだった。つまりネギ先生の親父さんの仲間だ。そいつらが戦争に加担するから関係ないけどこっちに来て戦争しろよって命令された上に後ろから殺されてんだ。たまったもんじゃないだろうぜ。

お前等学園長にちょっと中東で戦争して人殺して来いって言われて納得できるか？

神楽坂、今の西の連中はその殺された連中の親族と目の前で理不尽で不必要な死を見せつけられた仲間なんだ。お前は行く必要もないのに高畑先生が戦争に駆り出された挙句に後ろから殺されたら納得できるか？」

「できるわけないでしょそんなもん！」

「んじゃその戦争に駆り出した相手を許せるか？」

「許せないわ！」

「じゃあ、そいつがすべて水に流してやるって言って手紙をよこして、しかもネギ先生のように関係ない人がもってきたらどうするよ。しかもこんな内容で」

そう言って写メを見せる。そこには近衛近衛門が書いた親書の中身があった。襲撃を予想するような文面を。

「自分たちは悪くないよ。過去どんなことしても、挑発しても今襲ってきたのはそっちだからね。全く婿どのは何をしているのか、手間をかけさせるんじゃない。そういってんのさ学園長は」

「ちょっと待って！　学園長はこのことを知っていたの!?」

「だからこの文面になるんだろう？」

軽く肩をすくめて刹那を見る。刹那は何も答えない。

証拠としてそれが奪われ、見せられている以上、もう隠せないし言い訳もできない。

「殺された奴は何も言えない。上は何も言わない。むしろ相手を手伝っている。さて、下はどうすればいい。阻止するしかないだろうが」

そうしなければ締結されてしまって完全に名実ともに下にされてしまうのだから。

「でも、それでも僕は……」
「任務を果たすってのか？　ご立派だな。自分が立派な魔法使いになりたいからか？　他の人を不幸にして」
「話し合えば何とかなるはずです！」
　ネギは確信していた。どうにかなると。
「根拠は？」
「ありませんけど……こんなの間違ってます！」
「何がだ？」
「同じ組織なんだから仲良くすべきです！　親書がダメだっていうのなら渡しません。なので話し合いましょう！」
　曇りも陰りもない瞳が千雨を捉える。そして動かない。これ以上は何もいっても引かないと千雨は感じた。
「それで、どうやって話し合う？　私に話しても無駄だぜ」
「なんでよ。千雨ちゃんってそっちの人じゃないの？」
「言っただろ？　私は今の現状を話しただけだ。敵でも味方でもないんだよ。けど話さなけりゃお前等は納得して離れていかなかっただろう？」
　二人は頷かない。自分の性格を自覚していないのか。
「私は自分の面倒になることは排除する。ここで立場と状況を話さなかったら巻き込まれるからここで話したまでだ。この後はどっちにもつかないし手伝いもしない」
「どういうこと？」
「私はな、麻帆良にかけられている都合のいい認識阻害をレジスト、跳ね返しちまうんだ。その能力のせいで麻帆良で生きられなくてたまたま来た関西の人に助けられたんだ。私がするのは自衛だ。争いを避けることだ。ここで話さなかったらお前等は私を疑うだろう？　刹那を疑ったみたいにな」
　二人はバツの悪そうな顔をした。
「そんでもって西の状況を話さなかったらうまくいったとしてもその後の私の生活がダメになる。麻帆良で生活壊されてたんだから当然だわな」

「ちょっと待って。麻帆良で何があったの？　そこがわかんないわ」
「ああ、すまねぇな。麻帆良に結界が張ってあるのは知ってるな？」
「うん。エヴァちゃんが言っていたような気がする」
　明日菜が頭をうならせながら必死に思い出していた。
「それにはな、麻帆良で都合がいいようになるような認識阻害がかかっているんだ。たとえば神楽坂は国公立の図書館には……いったことがないよな」
「悪かったわね」
「いや、とにかく国立国会図書館は国営の図書館で一番たくさん本があるところなんだが、倉庫があってそこから指定された本を取り出すようになっているんだ。図書館島みたいにアトラクションのようになってない」
「それがなんなのよ」
「盗掘防止目的であんなにする必要がないってことさ。さらに茶々丸なんてありえない。今は受け答えできるＡＩもしっかりと二足歩行できるロボットも麻帆良以外はいない」
「だからそれがなんなのよ！」
「麻帆良は治外法権なんだよ。
　魔法使いによって作られた魔法使いの街。異常を異常と感じないで外とは隔離された魔法使いが満足するために作られた場所。
　ＴＶで見るものを普通にとらえてもその中で異常と感じる者を麻帆良では常識と感じる。要するに頭いじくられてんだ。
　そこのネギ先生が失敗して魔法漏らしてもばれないようにな」
「えぅっ!?」
「そんなものをレジスト出来て、外の一般常識を吸収した私は小学校のころにいじめにあったわけだ。
　非常識が一般常識に変えられてんだ。変な子ってのはいじめの対象だ。本当はいじめをなくすようにもなっているんだが、子供ってのは純粋だからな。悪意をレジストするものに純粋な子供のぶつける言葉は反応しなかった。
　それを助けてくれたのがたまたま来ていた関西の術者さ。だから

関西がなくなったり傘下になると不都合が出てくる」
「何よ、それって結局千雨ちゃんが自分の都合がいいようにしたいだけじゃない」
千雨は明日菜の言葉を聞いて席を立つ。
「お前らがそう思うならそうなんだろうさ。
結局は皆自分のいいようにしたいのさ。ただ、これ以上私にかかわらせるなよ。
私の領域を侵すなよ。
結局はそれだけが言いたかったんだ。なら、この話はこれで終わりだな。この件をこれからどう解決しようが私には関係ない」
そういって自分の部屋へと戻っていく。
それを追おうとする影もなく、千雨は夢へと旅立つのだった。

6話

修学旅行二日目。気持ちのいい青空、騒がしい室内、睨みつけてくるクラスメイト。

「ちょっと、どういうことよ！」

朝食に行こうとしたら神楽坂明日菜に止められる。後ろで班のメンバーが何事かと覗きに来る。

「どうしたんですの明日菜さん、長谷川さんが何かしましたか？」

「何かじゃないわよっ！」

春日がこちらのほうを見てくるので頷いておく。

嫌な顔をしてそそくさと立ち去ろうとするので十字を切っておいた。すると顔を青ざめて立ち止まる。シスターシャークティーのことを思い出したのだろう。

今ここで立ち止まらなかったら帰った後に千雨は絶対にシスターシャークティーにばらしていた。今ここで春日が何もしなければ魔法の守秘義務に引っかかるのだから止めるのは義務なはずだからだ。

「ほら明日菜、少し落ち着きなよ。なにがあったの？」

いやいや明日菜を宥める春日。

明日菜は内容を口にしようとして、躊躇した。

そうだろう、魔法使いの関係のことを大声で話すわけにはいかないとやっと気が付いたのだ。明日菜は何も言えずに言いよどむ。

「なんでも……ないわよ」

「なんでもないなら長谷川さんに突っかからないでくださいな。まったく、だから明日菜さんはお猿なのですわ。せっかくの修学旅行を台無しにしないでください。せっかくネギ先生との記念すべき旅行ですのに」

そう言いながらあやかは食堂へと歩き出す。千雨もそれに習おうとしたが、それは明日菜によって止められた。

嫌な予感がしたのでもう片方の手で春日の手をつかんで止める。

「なんすか？」

それはものすごい嫌そうな目をして春日が呟いた。目が語ってい

る。面倒事に巻き込むなと。
「神楽坂の世話する気はねぇぞ私は。一般人引き込んでんのはそっちの責任だろうが」
「そんなの上に言ってくださいよ。知らんっスそんなこと」
春日が千雨を振り払おうとするが、千雨はそれを話さない。
「そりゃあねえだろ。わざわざ京都くんだりまで連れて来てんのは麻帆良だろ」
「麻帆良の学園長であって魔法使いの私のせいじゃないっす！」
「美空ちゃんも魔法使いなの!?」
明日菜が驚き声を上げる。それに対し千雨はにやりと唇の端を吊り上げ、春日はげんなりとした。
「違います。人違いです」
「ちょっと待ちなさいよ！　人違いなわけないでしょうが！」
「知らないっす！　そんな面倒なことは瀬流彦先生にでも言ってよ！」
どんどんとばれていく魔法先生と魔法生徒。
正直千雨にとってはどうでもよかった。
そして心底朝倉と春日の班構成を変更したのに感謝していた。矛先がそっちに向いているのをいいことに、そちらへと興味を向けさせる。
「とりあえず話すんなら瀬流彦先生連れてこい一般人。部外者が喚いてもどうにもならないことがあるんだよ」
「このかが攫われそうになったのよ!?」
「知るかそんなもん。むしろ関西にいるべき立場の人間が独断で魔法使いの傘下にいるのが間違いなんだ。関西の言い分は取り返しに来たってことになるんだよ」
今までの穏健派はこのかを関東に送っているのに賛成だった。
余計な問題をこれ以上引き起こさないからだ。
しかし、千雨が送ってきている情報――魔法使いとの同居や関東魔法協会の会長がお見合いを強要しているなど――によって今はこのかが関東にいることを認めていない。

先日も長以外の満場一致で関西に戻るべきという結論が出ていた。
それ以前に警告書を送るべきという意見も持たれたが、長のこれまでの魔法使いの対応を指摘されると、それを成しても効果はないと言われたのだ。そもそもなんで長が今の立場にいるのかという疑問まで上がってきた。
青山時代は関西に何も貢献していない。
魔法世界にいたのだから当然だ。嫁の木乃葉が血縁者なのだから木乃葉が長になるはず。
そもそもなんで術者でなく剣士の、しかも青山の人間がどのような理由で長になるのか。
その経緯がはっきりとしなかったからだ。
一応、両面宿儺乃神を退治したという功績があるにはあるが、それは剣士としての功績である。
それにその後、結局それはなぜ起きたのかも調査されていない。
関西の過激派が行った可能性ももちろんあるが、たまたま漏れた結界のほころびによってなのかもしれない。
魔法使いが何かしたのかもしれない。
むしろ戦いたいからという理由かもしれなければ魔力の高いものが多く集まったせいなのかもしれない。その、長自体を疑問視するということが一点。
そして、そもそも関東の最近の行動は一般人として過ごしていかせたいという理由で送った長の気持ちを踏みにじる行為であり、お見合いをさせるという行為は己の陣営へと引き込もうとする行為に他ならない。
敵対組織の長がそういった行動をとっているのだから戦争になってもおかしくはないのだ。
さらには見習いの魔法をばらすような魔法使いに対して「ナギの息子だから大丈夫でしょう」という言葉を発する詠春は長であることを忘れているか、自覚していないのだと判断された。
そもそも、ネギとこのかを会わせること自体が関西所属の人間にとっては許せない行為なのだから。

さらには先日の仮契約未遂。
ネギ、魔法使いが知識がないのをいいことに既成事実を作ろうとしているのを許せるはずがなかった。
父親としての近衛詠春が組織人としての近衛詠春より強くなり、しかも混ざっている。
そしてその混ざった結果が公私混同している上に紅き翼としての青山詠春の判断しかしていないのだから、今まで付き従っていた人間も疑問視をしていた。
そして次に出てくるのが近衛木乃香のことだ。
彼女は実は関西呪術協会に所属している。いや、生まれた時からそういう運命になっている。
近衛の血を引いている時点で次代を担うためにもこれは必須なのだ。
詠春が後任を決めるなどすればまだ可能性もあったのだが、なぜか彼はそれをしない。
彼がしたことと言えば日々の業務のほかには関東との仲を取り持とうとすること。
下の人間に何もせずに。
そもそも話し合いなどをしていれば千草が恨みを持ったりなどはしない。
したとしても軽減くらいはできているはずだ。
天ヶ崎千草の名は長の耳に入るくらいには有名な名前なのだ。
そのくらいになれば危険因子にならないためにも少しは話をするべきである。
けれど彼は魔法使いのことを考えて行動していた。それはあってはならないことだということを彼は理解していないのだ。
魔法世界に武者修行に出て紅き翼と一緒にいた人間はむしろ日本よりそちら側になってしまっていた。
形式上の抗議すらできないくらいまで魔法使い陣営寄りになってしまった長に部下は言葉も出なくなっていた。
そして今回、下された関西の決定は近衛木乃香の奪還だった。

青山の血だけならば話は早い。
麻帆良に送ってしまえばいいのだ。青山はあくまで神鳴流の血統だ。それはそちらで決めればいい。
けれど代々続いてきた近衛の血は違うのだ。
さらに近衛性の人間が関東のＴＯＰになっているのも問題ではあるのだが、近衛門が関東に行ったときにはまだ関東との融和という選択肢もあったのだ。
お互いを尊重できるようなものならば。
しかし結果としてはそのようなものにはならずに、近衛門は独断専行を始めた。
結果として呪術協会の情報が魔法使いに与えられただけになったのだ。その時点で亀裂が入り、しまいには大戦での青山の徴兵である。
近衛との婚約関係にあったとはいえ青山の人間が命令を出して呪術協会が聞くということは、立場を壊すこととなる。
過去の決まりを壊すと言えば聞こえはいいが、結果はすべての組織との間に亀裂が入ったにとどまる。
さらに最近言われ始めたのが青山の秘匿性の薄さであった。
青山の一門が秘匿を無視しているために神鳴流の秘匿性が薄まり、一般人でもしっている者が出てきた。
しかしそのことに対しても青山詠春は口を出さない。出せない。
そして子飼いの桜咲刹那しか麻帆良に送っていない。これは組織としての失敗ではないが、組織の亀裂を大きくした。
昔から重用されている大家に見向きもしないのだ。
組織の人間を考えていなかった。
そしてその彼女もしっかりとした護衛をしているわけではない。
そして結果、関西の決定は長を通さずに下に出されることになる。長以外の満場一致で。
組織として問題ある行動だろうが、クーデターとは得てしてこういうものである。
非は組織にあるのだろう。しかし組織にそこまでやらせたのは誰

なのか。
結局一番不幸なのは親に振り回された近衛木乃香なのかもしれない。
「お前が口出せないところで動いてるもんもあるんだよ」
せめて今の時点で攫うことができたなら、魔力を封印して一般人にすることができる。
それが失敗し駄目になった場合、近衛木乃香が魔法というものを知った場合、それは近衛木乃香に義務が生まれるということになる。生まれる家が近衛だったがために関西に所属している近衛木乃香には、魔法を知るということは、それが関西の人間の手でなされるときは長の追訴と同じタイミングになるだろう。そうなってしまえば彼女を組織がやめさせることはない。許さない。ある意味ここで攫われたほうが一番だったかもしれない。
それを知っている千雨は自然と明日菜に向かって言っていた。
これ以上のことを言えば彼女の口から関東に情報が移るだろう。
それは千雨が裏切ることに他ならないため、関東と心中する気のない千雨はこれ以上の口を利かない。
「刹那に事情は聞いたんだろ？　あいつはなんて言っていた？」
「刹那さんはこのかが関西なんちゃらのお嬢様で自分は裏切り者だって」
「そうだな、あいつはあれでも一応関西の所属なんだ。そんなやつが裏切り者って言っている理由はわかるか？　あいつ、長直々の命令で麻帆良に行ってんだぜ」
「わかんないわよ。そこまで聞いてないし……」
明日菜はイラつきながらも知らないと答える。
千雨はその答えをすぐに言うか迷った。すこしでも考えることで立場というものを理解するのではないかと。
「あいつが裏切り者って言ったのは組織の立場じゃないんだ。ここまでは理解したか？」
「う、うん。けど、じゃあなんで裏切り者なんて自分のことを言うのよ」

「関西の人のほとんどが近衛木乃香を麻帆良に置きたくないからさ。
関西と関東の仲が悪いのに仲が悪い相手に預けたくはないだろ？
たとえばうちのクラスメイトをウルスラのドッヂ部の奴らのクラスに置きたいか？」
「ううん、いやよあんな人たちのところに」
明日菜は首を振って否定する。春日もうんうん頷いた。
「そういうことをしてるってことさ。それに神楽坂、お前は大切なものを預けるときに誰に預ける？」
「このかかいいんちょかな」
「春日は？」
「私？　私はココネ……一緒の見習いシスターにだね」
「二人ともその理由は？」
「あの二人なら絶対なくさないし壊さないし」
「信頼してるからねー、ココネのこと」
二人はそれぞれ答える。それに対して千雨は口を開いた。
「そう、信頼している奴。安心している奴に預けるよな。
それが関西の長、近衛の父親にとっては学園長だったんだ。
敵対している組織の長に預けるのが一番安全だと思っている人間と信頼関係が取れない。そのほかにお前等にも原因があるんだぜ？
神楽坂」
明日菜は何を言っているのかわからないような顔をする。
「ネギ先生といろいろやらかしているそうじゃねえか。
近衛が一番最初に被害にあったのは惚れ薬か。それにお前はクラスで何度も脱いでるし、この前なんてあのガキは杖で飛んでるところ見られてんだぜ？
魔法から遠ざけるための麻帆良なのに近くでそんなことが起きてるんだ。取り返したくもなる。」
「ちょ……それは私のせいじゃなくてネギの――」
「かわんねぇよパートナーさん。そういえばパクティオーもしようとしてたな。
それに一緒にいるオコジョ、犯罪者じゃねえか。そんなやつらの近

くにいるのも、いさせているのも不信感を感じさせる原因なんだ。
しまいには学園長自身が図書館島に追いやって近衛を利用しているからな。はっきり言うと、近衛がここにいるのも、近衛が連れ去られそうになるまで危険な状態になっているのも、全部ネギ先生が来てからだな」
「アスナさ……え？」

7話

アスナの後ろに迫っていたネギに向かって若干の侮蔑を込めて言い放った。
となりで春日はギョッとした目で千雨を見る。
「どういう、ことですか？」
「言ったまんまの意味だ。
魔法なんてもんに振り回されるようになったのはネギ先生が来てからだって。
気が付かないとでも思ったのか？　ネギ先生。関係者は全員初日から魔法を乱発していることを知っていたぜ？」
ネギは呆然として立ち尽くす。
それに対しかみつこうとしている明日菜を制して千雨は食堂に行くことを促した。
すでに食事の時間は迫っており、ここで問答をしている時間はなかったのだ。
明日菜は納得がいかない様子で、ネギは何かうわの空でその場から立ち去った。
春日は千雨に視線をよこしている。
「どうした？　まずかったか？」
「いや、意外だなと思ってね。千雨ちゃんのキャラじゃないっしょ説教は」
春日は千雨の顔を覗き見る。千雨はそれを手で振り払いながら食堂へと向かう。
「ガラじゃねえのはわかってるよ。けど、あそこで止めないとお互いにまずいだろ？」
「千雨ちゃんが不利益をこうむるってことっすか？」
「それもあるがな、あいつは理解してないんだよ。自分がどんなにおかしな状況下におかれてて、どんなにおかしなことをしてるのか。それを理解しないうちは何をやっても駄目だ。あいつと一緒にいるのが嫌ならやれることはいくつかしかない。自分が麻帆良からいなく

なるか、ネギ先生を追い出すか、自分が変わるか相手を変えるかだ。どちらかがいなくなることは無理。だったら変えるしかないだろ」
「そこで自分を変えないのが千雨ちゃんらしいっすよね」
「まあな。けど、性格や理念はどうであれ、行動はあっちが間違えまくってんだからまず私が気に入らないところを突き付けないとな。いい機会だ、この修学旅行は」
千雨はそこで言葉を止めた。
そして、食後に逃げるなよと言いながら二つ空いた席に腰を下ろす。
春日はそっぽを向いてがっつくように食事を始めた。
このあとのことを考えて、それを拒否するようにやけ食いをしているのだろう。
「遅かったですわね」
「すみませんね」
「いえ、どうせまたお猿さんがうるさかったんでしょう。けど、明日菜さんがあそこまで怒るのは珍しいんですのよ。本当に心当たりはありませんの？」
「あっても私のせいじゃないからしょうがないんですよ」
明日菜のことを深く知っているからこその委員長の言葉。それを千雨は拒絶するように、そして他人事のように処理をする。
そうも言っている間にも教員の挨拶で食事が始まる。その間に今日の注意事項などが言い渡されていた。
食事中に刹那はこのかから逃げ回っていたり、このかはこのかで今までの避けていたような雰囲気は微塵も感じさせていなかった。
「お気楽だなぁ」
「あんな遊んでんだったらアスナをどうにかして欲しいっすよほんと。千雨ちゃんも千雨ちゃんで勝手に人のことバラすし」
「そこらへんはそっちの事情だろうが。私だって、そっち側が修学旅行に変なおまけをつけたから厄介ごとに巻き込まれてんだ」
「だからそれは上に言ってください」
「わかってはいるさ。けど壁ってのも必要なんだよ」

「自分生贄!?」
千雨は春日からの抗議をさらりと流しながら食事をとっていた。
いつも一人の食事であるため、基本的に早食いの彼女は、皆が話しながら半分食べ終わる頃には全て食べ終わっていた。
しかし、その前に春日は食べ終えて、千雨の制止も聞かずに席を立った。明らかな逃げだった。それを見送る千雨は春日にイラつきながらも、あいつらしいと思っていた。
そして、とことん嫌なことから逃げる春日を心の片隅で評価していた。
あくまで自己を見失わないで、自分らしく生きる生き方。何も気にせずに自分を貫くその姿勢は、千雨にとって何よりも大事なことで、何よりも欲しいものであったから。
先を思いながらも千雨は席を立つ。壁がいなければ話も成り立たない。
春日に同席を強制したのは第三者であり魔法関係者である人間が必要だったからだ。なので今ネギ達と話しても意味はなかった。どうせ昨日の二の舞になるだけだ。
そう結論付けると、千雨はそのまま瀬流彦のところへと向かった。
「瀬流彦先生」
「なんだい？　千雨さん」
瀬流彦は多少身構えた様子で千雨のほうを振り向いた。千雨は必要な時以外は誰にも声をかけない。声をかけたということは、しかも対象が瀬流彦であるということは魔法関係であるということは想像に安かった。
「少々よろしいでしょうか」
「ここだと話し辛いことなのかな？」
「ええ」
瀬流彦は新田に一声かけて席を立つ。一般人がいるのに声をかけてきている時点でことを重く見たらしい。
二人は席を離れ人目のつかない場所へと移動した。

「それで、どういう用だい？」
「昨日ネギ先生と神楽坂が接触してきてな。私は無関係だと言ったはずなんだが今日になってまた突っかかってきたんだよ。私の立場が理解できていないらしいからいい加減どうにかしたいんだよ」
　瀬流彦は頭に手をやって顔を上へと向けた。
「それはすまなかったね」
「まったくだ。そもそも現時点でアンタは知ってるべきことなんだけどな。何をしてたんだ？」
「僕は他の生徒たちを見てたんだよ」
「いいご身分だな、ほんとにさ。あんたが監督責任持たなくてどうするんだよ。だからあんなのがつけあがるんだ。龍宮から聞いたけど、清水で水に酒が混じっているのを確認するために屋根に飛び乗ったらしいぜ？　他の人の目も気にせずにな」
「それは君たちが「なあ先生？」」
　瀬流彦が抗議の声を上げるが、千雨はそれを遮った。
「それ以上はアンタは言えないはずだぜ？　そもそも修学旅行を隠れ蓑に、生徒達一般人を盾にしての行軍だ。まさか盾にしてる一般人に被害が出ているのを関西のせいにはしないよな？　アンタがここにいる時点で情報の改組であり、侵略行為ととられても何の文句は言えないんだぜ？」
「それでも、やり方はあったはずだ」
「そうだな、やり方はあった。修学旅行前に持ってくるとかな」
　二人は会話をしているようで会話をしていなかった。お互いの言い分にお互いが納得していないのだから。
「ああそうそう、神楽坂と話していた時にたまたまネギ先生に聞かれちったんだよな『ネギ先生が来てからおかしくなった』って言ったのを。まあ事実だからしょうがねえけど」
「ッ！　君は！」
「一般人への魔法ばれ、惚れ薬を作った上に、日常的に杖をもって飛んでもいる。
　犯罪者をかばってペットにしながら届出を出してない。犯罪者と

いうことも理解してない、見習い魔法使いに受けた被害を訴えたかったんだが、本人に聞かれちまってな。
本当は神楽坂にネギ先生が言ってないこちらの危険性を踏まえて伝えるはずだったんだがな。そちらが怠った義務ってやつを」
瀬流彦はその言葉に唖然としている。
「ついでにオコジョと話しすぎだ。あいつらの会話を一般人の前で何回聞いたことか。秘匿する気本当にあるのか？　そういうのを止めるのがアンタらの仕事だろうが」
「けど、僕たちはネギ君に自分が魔法使いであることを教えたらだめなんだ」
「ハッ、そんな魔法使いの都合しらねぇよ。私は一般人への被害が出てるのを、これからも出るのをどうするんだって言ってんだ。魔法使い側の事情なんて知らないね」
瀬流彦も千雨の言っていることがわかるのか言い返すことはできない。
そもそも千雨がこういう行動をとるようになること自体が魔法使いが行った結果の産物なのだから。今現在のこの行動も、このような行動をとるようになってしまった千雨を作り上げたのも、麻帆良の魔法使いが作り上げた街だからこそだった。
「お前等が言わないんなら私が言うからな。
お前らが魔法使いだからで済んでいることも、一般人をごまかしていることを忘れるな。
そういった、やってはいけないことを知らせないで見習いの、魔法使いの村出身の奴を世に出すな。まあ、瀬流彦先生は末端の人間だからそんなこと言ってもしょうがないんだろうけどな。
八つ当たりでもないからなこれは。本当は私が言うより前にやっておくべきことなんだから。魔法使いとしてではなく大人として注意できることもあっただろう」
「それは……ネギ君には自分の判断をしてほしかったんだ」
「間違った判断は正せよ。わがままが許される立場じゃねえだろ。お前等は教育の意味間違ってるんじゃないか？　本当に教師か？」

瀬流彦は何も返さない。返せない。魔法使いとしての瀬流彦に反論はあるが、教員としての瀬流彦が言葉を返せなかった。
「私だって言いたかねえんだよ。けど、このままじゃ昔みたいに私の住んでる場所が、生活が壊されるんだ。
わかるか、お前等が勝手をやってるせいで壊されていく日常を見なければいけないのがどれだけ辛いのか」
千雨は、何も語らない瀬流彦に背を向ける。言いたいことは全部言ったという風に。
そして言葉を返してこないのはそれを正すことをしないという表れだから。
「正直ずっとネギ先生がうざかったけどな。今回のことではっきりしたよ。
あいつも被害者だ。神楽坂も、近衛も全員お前等魔法使いの被害者だ。
なりたくもない立場にされてやりたくもないことをやらされる。それに気が付いてないんだ」
瀬流彦に聞こえる声で。しかし、自分に言い聞かせるように千雨は言葉を吐いていく。
「だから嫌なんだ。そんなもんに振り回されることが。あんたらが作ったものを壊されたくなければこれ以上私に近づけるな」
じゃなきゃ、今度は全部私が壊すぜ。お前らが私の全てを壊していったようにな。
そういって千雨は瀬流彦の前から消えていった。

ネギは千雨を探していた。先ほど言われたことを確かめるためだ。
自分が魔法を使っているせいで皆が巻き込まれていると。ネギは自分が一生懸命良かれと思うことをやっていた。
宮崎のどかを助けるために、惚れ薬も明日菜のために、図書館島では自分は魔法を封印していたから魔法のことは何にも関係ないはずだった。

それに最近のエヴァンジェリンの吸血鬼騒動も自分の手で解決した。何の問題もないはずだった。
「ネギ君、今日うちの班と見学しよー！」
ネギに横から衝撃が襲ってきた。その発生源はクラスの生徒である佐々木まき絵。
班の自由行動への誘いだった。
それを皮切りに委員長こと雪広あやかや双子の姉鳴滝風香も参戦する。
ネギを巡り軽い騒ぎになっていた。
「あ、あの……ネギ先生！」
一瞬周りの動きが止まる。この声の主が叫ぶという行動をとったのが珍しかったのだろうか。
「よ、よろしければ今日の自由行動……私たちと一緒に回りませんかー！」
叫んだ先を探すと宮崎のどかが必死にすがるように、それでいて決意を秘めた目でネギを見ていた。
そんなのどかの発言に対してネギが出した結論は『5班』と同行することだった。了承の旨を伝えてネギは職員用の部屋に戻る。その間結局千雨とは会えずじまいだった。
「ネギ君、今日はどうするんだい？」
「5班の皆さんと一緒に回ろうと思います」
部屋に戻ったネギを迎えたのは瀬流彦だった。何気なくかけた一言に答えた言葉に瀬流彦は少し戸惑った。
「一つの班と一緒に回るのかい？」
「えっ……ダメですか？」
基本的に一つの班と回るということは建設的ではない。それは他の班のことをないがしろにしていることになるからだ。午前中はここに人が多いからそこにいる班と同行する、ということならば理解できるのだが、そういうことではないのをネギとの会話で分かった瀬流彦は言葉に詰まった。そして先ほどの千雨の言葉を思い出す。
小さなことではあるが、こういったことは本来ならば許されない。

そういったことの積み重ねが千雨の信頼を欠くことなるのだ。
「ネギ君は他の班はどうするの？」
「えっ!? 他の班ですか？」
ネギは顎に手を当てて考える。ネギは完全に他の班の人のことを忘れていたようだ。
そして、さらに考えて結論が出たのか顔を瀬流彦のほうに向ける。
「瀬流彦先生、あなたは魔法先生だって聞きました」
その言葉を聞いて瀬流彦は驚いた。まさか自分のことが伝わっているとは思わなかったのだ。
「このかさんが昨夜狙われたんです。木乃香さんの護衛という意味でも僕は5班についていきます！」
どうですか？ とも繋がらなければ疑問形でもない。確定の言葉。
これは関東の魔法協会としては正しい行動なのかもしれない。関西の長にゆだねられた彼女を守ること。魔法協会の長の孫を守ること。一般人として狙われている人を守ること。立派な行動だ。
しかし、これはあくまで魔法使いの行動であって教師として聞いた質問の答えではなかった。教師としての質問である『他の人の対応』に対する答えは返ってこない上に確定した事実として返してきた。
しかし瀬流彦は魔法使いとしてその答えを否定することはできなかった。
瀬流彦と別れ5班についていこうとしているネギを見ながら、瀬流彦は他の教員とのすり合わせと千雨への弁解を考えるのだった。

8話

ネギは5班と一緒に去って行った。
それを恨みがましく見送るあやか。それを冷ややかに見る千雨。
さきほどまであやかは5班の後をついていこうとまで言っていた。
「委員長、予定変えるのか？」
少々の侮蔑を込めた、冷ややかな視線を足しながら放った千雨の言葉によってそれは現実とならなかった。
しかし、それでも悔やみきれずにネギが去るまで見送っていたのだ。ネギはぎりぎりまで玄関で千雨を待っていたらしく、千雨にとってあやかの行動は不幸中の幸いだった。
その時間を利用して千雨は千草に電話をかけていた。
「よお、姉さん」
『なんや、修学旅行中なんやないんか？』
「その修学旅行に水を差した人がいるらしいんで電話かけてみてるんだけどな」
千草とは新幹線の車内であっているので、妨害をしているのは彼女だということを千雨は知っていた。
そして、彼女の性格を最も知っているのも千雨だった。
「お冠だったぜ。姉さんはどんな手を使ったんだ？」
昨夜のことを聞いてみる。
帰ってきた答えは札を使って攫ったということだった。事細かにその時の状況を聞く。今回は小太郎は一緒に行かなかったらしい。
月詠という剣士を雇っているとか。
神鳴流らしく、やはり精神構造がおかしいらしい。刹那を標的として恍惚とした表情を浮かべていたと電話の奥の方でため息が聞こえた。
『せやな、油断せんかったらうまくいっとったんやけどな』
その言葉は、千雨にとって想像に安いものだった。
しかし思ったことはすぐには言わずに詳細をさらに聞いている。
少しずつ額に青筋が浮かんでいるが。

そしてすべてを聞き終わったとき、ちょうど堪忍袋の緒が切れた。
「ふざけんな！　このド三流がッ！」
ネギの逐一の行動より千草の昨日の行動のほうが千雨には腹立たしかった。
千草がこのかを操り人形にして使うと言ったことに対しての怒りが今日の朝に繋がったのだ。
「今日あいつらが私のところに来た理由がわかったぜ。なんでそんなふざけなこと言ったんだよ」
『えらくガキだったから、あんなんに人生狂わされそうやったと思うと腹立って言うたんや。言う分にはただやからな』
「ただじゃねえ！　攫っている奴がそんなこと言ったら警戒するにきまってんだろ！　昨日わざわざ私が話したのが全部無駄じゃねえか……そんなんだから術者としては腕が立つのにド三流のオチ担当なんだよ」
『なんやて!?』
「あんたと小太郎がなんて言われてるか知ってるか？　お惚けコンビだよ。両方とも腕がないわけじゃない。むしろ上のほうなのに絶対に詰めを誤って仕事が完遂できないおバカコンビだ。私と一緒じゃないときは毎回後ろの部隊に迷惑掛けやがって」
さらに小太郎は若い術者に、格下にしか機能しない様子からベジータ（笑）とか言われていたりする。
この二人は実力で言うと確実に上の方だ。しかし、なぜか相手の土俵に立ち相手をなぶりながら戦う上に、負けてしまうのだ。
最初から全力でやればすぐに終わるにもかかわらずにだ。昨日のだって、話を聞いていれば値段を度外視していれば長距離転移符を使えばいいし、５００ｍくらいでも転移符で移動すればどこにいるかわからなかった。
電車の中で使えば相手は勝手に遠ざかってそれで終わりだった。それなのに遊んだ結果がこれなのだ。
結局、明日菜が千雨に出していた敵意は無意味なものだった。千草の悪い癖が出ただけなのだから。

しかし関西側からの発言のため、関東に対しての発言でしてはいけない類のことを千草はしてしまったことになる。冗談で済まない部類のものだ。

傀儡にする手段はあると言えばあるが、そのすべてが禁呪になっている。そして千草の腕でそれが実行できるという点も問題に拍車をかけていた。

「もう姉さんはしゃべんな。どこの悪役幹部だあんたは……ったく、めんどくせぇ。あとで刹那に事情は話すし、明日菜たちに電話で謝らせるからな。絶対謝るだけで余計なこと言うんじゃねえぞ」

『待ちぃ、なんでウチがそんなこと』

「そうしないとこっちに非が出るんだこのボケ！　カス！　じゃあな、少しは反省しろクズ！」

千雨は電話を切り、頭の中でやるべきことをまとめていた。

千草の余計な言動で関東の人間に反撃するチャンスを与えてしまったのだ。さらったときにちゃんとメリットデメリット話して、これが関西の意志だということを突き付けていれば問題にはならなかった。そもそも攫う以外の手段では木乃香が魔法の存在を知ってしまうのだから。木乃香が一般人の場合それでも非は関西にもできてしまうが、今回は違ったのだ。

一般人でなくすにしても、魔法使いがその事実を突き付けるのは筋違いなので、それでも関西に行かなければならない。最悪魔法ばれをしてこのかを巻き込むことになる。関西のほとんどの人間がそれでもいいと言っているが、穏健派のクーデター参加の条件としてこのかをできるだけ巻き込まないことが挙げられた。そのなかには善意と、次代の利権が渦巻いているのだろうが、千雨には関係ないことだった。

このかの周りとこのか自身にある、ありえない立場の関係が出来上がってる中で動かねばならないのに余計なことをしてくれたのだ。

どうすれば任務が完遂できるのか。どれが一番の答えになるのか。

千雨は思考の海におぼれながら二日目の修学旅行へと向かった。

千雨は呆然として空を見上げた。
莫大な魔力が温泉付近で発生したのでとっさに外に出た。それまでは良かった。
そして、そこで見つけたものが問題だった。
「何やってんだあのバカは」
朝倉と一緒に空を飛んだネギの姿を発見したからだ。よりにもよって朝倉と。
なぜかネギが魔法をばらすと関東の誰も動かないので朝倉の記憶処置はそのままになるだろう。刹那に連絡をいれて絶対に自分の名前を出さないように釘をさす千雨。
その後に瀬流彦に連絡を入れるが瀬流彦自身が『干渉不要』と通達をされているのでどうとすることもできないでいると謝ってきた。
ネギがいかなる行動をとろうと瀬流彦に止める権限もなく、場合によっては処罰もあり得るということだ。
いままでこういったことを言ってこなかったが、今回のことは目の前で起こされた挙句に、事情が事情なためごまかすことすらできずに内情を吐露したのだろう。
そして、これから必ず起きるであろう騒動に対して予防線を張るために携帯電話を手に取った。

そのころ、旅館内で暗躍する影があった。
３―Ａの面々の写真を撮りながら独り言をつぶやく少女の姿。いや、そう見えるだけで彼女には話している相手がいた。
「なるほど、わかったぜブンヤの姉さん。ぜひ俺っちの作戦Ｘに協力してくれ」
「うふふ、じゃあ契約成立だね。報酬の方は弾んでもらうよ」
「ＯＫＯＫ、俺たちへの取材は今後姉さんに独占させるべ」
一人と、そのそばにいる一匹が奇妙な笑い声を出す。それは旅館内にこだましていた。

修学旅行の醍醐味の一つは、もちろん夜の旅館内での行動もあげられるだろう。
怪談話に恋バナ、まくら投げに、最近はＰＳ２などを持ち込んでみんなで遊んだりもしている。
ようは旅行中に皆で夜更かしして騒ぐことが楽しいのだ。騒ぐと言っても、見回りの教師がいるわけで、本来ならば隠れてこそこそとうまくやるのが通例だ。よほど厳しい学校でない限り、そこらへんは身体に悪影響がない限り黙認の形で許されるだろう。
しかし、常識というものがずれればそういった配慮も欠ける。３―Ａの面々は旅館に響き渡るまでの嬌声をあげて遊び続けた。さすがに貸切の旅館といえど、夜中にそこまで騒げば注意するものも動き出す。
「コラァ！　３―Ａ！　いい加減にしなさい！」
引率教員３人が３―Ａを集めて正座をさせて注意する。複数クラス合同の修学旅行なのに担任以外の教員３人が一つのクラスに集まっていると言えばどれくらい異常なことかわかるだろう。
そこに担任の姿がないことも異常と言えば異常だが。
しかし、そこにいる面々にも異常があった。刹那と明日菜の姿が見られなかった。そこで問題にならないのは不思議だったが、問題はそこではない。
「くっくっく、怒られちゃんの……♪」
もう一人、その場にいなかった生徒である朝倉である。
そして朝倉は自分だけ逃れたことに関する非難をのらりくらりとかわしながら、一つの提案を口にした。
「名付けて『くちびる争奪!!　修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦♡』!!」
このイベントは、ショタコンである委員長の公認という一言によって、開催されることが許可された。各班があつまりメンバーを決めていく。
「あ、委員長」

「なんですか？　朝倉さん」
「班で必ず二人出してね。そっちの班はあまり参加する人いなさそうだし千雨ちゃんでも出しちゃえば？　結構一人で行動してるしこういうイベントに参加させるのもありっしょ」
この一言が、３―Ａの人生を変えることになった。
旅館の異常に千雨は気付いていた。そして朝倉が言ったイベントの内容、自分の知識からそれが何を意味するのかが分かっていた。
異常はおそらく仮契約の魔法陣。そして対象は旅館内全員。先ほどの会話の後にひょっこりとオコジョが朝倉の胸下から出てきたことを考えると、その可能性が高い。
それはつまり、一般人を巻き込むということだ。それは魔法の秘匿の無視どころの話ではなかった。早速千雨はその異常を呪術協会と瀬流彦に連絡。
瀬流彦は驚きはしたものの、自分の手では何もできないということで、学園長へ連絡をとっても笑って流されたらしい。
おそらくこれは予測されたものなのだろう。
千雨はすでに３―Ａの異常性に気が付いていた。各々のスペシャリストが集まるこのクラス、そして無条件でのネギへの好意。
異常を異常と感じないようにされて魔法を知らされた結果どうなるのか。興味心をかきたてられ、反射的に突っ込むようになった人間が、危険性も知らない魔法使い見習いによってファンタジーな世界を知ったらどうなるか。
このクラスはネギの実験場なのだ。そしてネギが気に入った人間を巻き込んでいく。ネギに好意的な人間が巻き込まれていく。
「やってくれたなこの野郎」
千雨は符を手に取ると、不可視の術式を載せてノートパソコンを起動させた。ハッキングをして朝倉が持っている監視カメラの録画を自分のパソコンへと転送する。そしてそれを関西と、とある場所へと流し始めた。
千雨は電子妖精を購入しており、デスクトップにはネギを振り回したり、砲撃が飛んできそうな杖を振りかざしたりして相手の回線に侵

入している妖精たちが映し出されている。
「千雨さん、いきますわよ！」
「ちょ、ちょっと待ていいんちょ！」
雪広は千雨の腕をむんずと掴んで廊下へと連れ出した。千雨はため息をつきながらもそれに従う。
「コラァ！　長谷川！　何やっとる！」
もっとも、すぐに正座することにはなるのだが。
「あれぇ？　千雨ちゃんも捕まっちゃったの？」
「もともとこんなの参加したくなかったのにな」
新田先生に見つかった明石裕奈と合流し、ともに正座して事態の収拾を待つ千雨。彼女が待つロビーにイベントの終着を待たずにまた新たな問題が起きた。
「わわっ!?　ネギ先生がいっぱい!?」
千雨の隣で明石が声を上げる。目の前には４人のネギが集まっている。それに合わせて他の参加者も集まってきた。
「何やってんだあのバカは」
千雨は事態の収拾の後のけじめをつけるのはオコジョの予定だった。
保護責任でネギにも累が及ぶが、そんなに重くならずに関東とオコジョに責が及ぶものだった。
しかし４人のネギは本人が作ったものにほかならない。そして自分が渡した記憶はないので長の直々の部下である刹那の手によるものだろう。
なのでまたそちらにも責任は出る。
そして周りの人間にところ構わずキスをしてスカカードを作る身代わり達。４人すべての身代わりは爆発して消えた。
そして、今目の前にいるのは宮崎とネギだ。すでに千雨は連絡をとっている人物の合図を待つだけだ。
おそらくアクションがあるとすればこれが終わり。これでこの事件がひと段落する。止めるという手段はない。これは関東の領域の問題だからだ。

「お友達から始めませんか？」
精一杯のネギの返事。
これで済むはずだった初々しい二人。
しかし綾瀬のいらぬ気遣いがさらに被害を拡大させる。綾瀬が足をかけて宮崎をネギのほうに転ばせた。ネギはそれに対応出来ずに唇と唇を合わせる。魔法陣の中で。
「終わったな……」
千雨はつぶやきながら立ち上がる。
「皆ここで止まれ！」
千雨は全体に聞こえるように声を張り上げた。そこに刹那と明日菜も入ってくる。
「ネギ・スプリングフィールド！　旅館に仮契約魔法陣を敷き、無関係の一般人を巻き込むとは何事か！」
瀬流彦があわてて入ってくる。それを見てまた声を上げる。
「この行為を止めなかったということは、この行為は関東の意思表示ということでよろしいか！」
事前に通達しているのに何の干渉もしなかった瀬流彦は反論できない。瀬流彦自身が何もできないと千雨に謝っているからだ。
「どういうことよ、千雨ちゃん！」
「ネギ先生が仮契約の魔法陣の効果を旅館内に発生させてクラスメイトを巻き込もうとしたんだ。魔法陣はすでに確認済みで書いたオコジョと協力者は」
奥から声が聞こえてくる。
「こういうことや」
奥から現れたのは千草だった。左手にカモをつかみ、右手に縄で縛られた朝倉を担いでいる。朝倉を投げ落とすと懐から仮契約のカードを出した。
「契約主、ネギ・スプリングフィールド。間違いあらへん」
ネギの顔が青ざめていく。
「これはうちらの術者全員、見とったで。録画もこっちの嬢ちゃんがバッチリや」

手にあるメモリーカードには映像が残っていることが容易に想像できた。
他の生徒たちも術者と見られる者の手によって集められる。もちろん木乃香の姿もそこにはあった。
「関東が起こした騒ぎだが、場所は関西。しかも本山付近にある旅館。この行為は関西に対する挑発行為か？　答えろネギ・スプリングフィールド」
「え？　僕知らな……」
ネギは本当になにも知らなかった。しかし、知らないで済まされることでもなかった。
本来ならば親書を渡した時点の反応で長にその時の行動を理由に退いてもらうことになっていたが、関東にここまでコケにされるような行動を何もせずに静観することはできるはずがなかった。自身のおひざ元で好き勝手されているのだ。止めないほうが問題だった。
「知らないわけがないだろう先生？　今までのように魔力の暴走じゃなくって魔法陣が描かれてるんだぜ？」
その目的が仮契約であることは対外的に明白だった。しかも『くちびる争奪!!　修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦♡』とネギの関係者が銘打って行っているイベントがあるのだから言い逃れはできない。どんどんと事態は悪化している。
いくら知らないと言っても証拠が出てしまっているのだから。
何も知らないクラスメイトは周りの人間と、千雨の変貌におびえている。魔法的処置を行い、記憶を消せば問題ないのかもしれないが、この事態を起こしたのはあくまで関東の人間なので処置ができない。処遇が決まっていない、実際に誰をどのように処理すればいいのかがわからない。そしてむやみに関東の、魔法使いの本拠地の人間の処理をすることは、あちらに非があるとしてもつつかれる要因になるからだ。
「これからここにいる人間は拘留し、処置を待つことになる」
泣き叫ぶ生徒を眠らせていく術者。それに杖を構えて迎撃しようとするネギ。しかしそれは瀬流彦の手によって止められた。瀬流彦

は、ネギや自分がここで何をしようと意味がないことを理解していた。
攻撃をすることは逆に事態を悪化させることに気が付いているのだから当然の行動だった。
刹那も目を背けながらも連行されていく生徒を見送った。そんな中、陰に隠れて千雨は電話を掛けた。
「見てましたか？」
「ええ」
「それで？」
「謝罪させていただきます。しかし、こちらに……ウェールズの魔法協会にそちらへの侵攻の意図はなく、私たちの教育の不徳の致すところでご迷惑をおかけして申し訳ありません。処遇に関しましては寛容にしていただきたいのですが」
「処遇に関しては思っててもいいけねぇよ。それで、ここに来るんでしょう？」
「ええ。もう空港ですので明日の昼には」
「待ってるぜ、ネカネさん」
そう言って、千雨は電話を切った。

9話

戻ってみると、関西の呪術者たちがワタワタしていた。
「どうしました？」
「抵抗する人間がいて、今そいつらを包囲しているんだ」
抵抗している人間というのは長瀬、古、明日菜だった。
刹那は木乃香の身柄がすでに移送されていることから身を引いた。
龍宮は元々敵対する必要もない。
「お前等何やってんだ？」
「千雨ちゃん!? 千雨ちゃんが皆をあんなにするなんて思わなかったわよ！」
そう言ってハリセンを突き付けてくる明日菜。そして構える古と長瀬。
「私たちは魔法ばれした人間に対してのマニュアル的な措置をしただけで、誰も怪我はしねぇよ。
実際はネギ先生のこともあるから通常より詳しく説明しなければいけないんだけどな。眠らせたのは今のままだと何人かの頭がパンクしてどうしようもならなくなるからだ、長瀬や古はなんでこんなことしてんだ？」
「ネギ坊主のことは信用しているでござるが、千雨殿の仲間は信用できなかったでござる。それに、明日菜殿が話しているのを聞くと、木乃香殿も攫おうとしたそうではござらんか」
「木乃香は一般人じゃなくてこっちの人間だ。上と下の闘争から遠ざける必要があったんだよ。それに今の木乃香の立場は微妙でな。
そっちでいうなれば今の組織は伊賀の頭領が元甲賀忍で、甲賀の頭領がその義理の息子って状態なんだ。しかも甲賀の頭領ってのが伊賀の頭領の話は聞くが、甲賀の人間の心情を完全無視で伊賀の下につけようとしていてな」
「して、木乃香殿の立場は？」
「甲賀の頭領の娘。ちなみに伊賀の頭領は学園長だ。そしてネギは甲賀を伊賀の下にする為の親書を持っていて、今現在甲賀の直轄地で伊

賀忍法を一般人に使った状態だ」
「ムムム……」
楓は苦無を下ろして臨戦態勢を解く。
しかし警戒は解かなかった。その話が本当ならば、処罰されるべきはネギだということを知っているからだ。ただ、楓はその情報の真偽はわかりかねたので、完全に力を抜くことはしなかった。
「とりあえずお前にはこっちで説明した方がいいな、そこのテーブルに座ってろ。古はなんで敵対した？」
「アスナがネギ坊主がやばいって言ってたある！　助けるのは当然アル！」
古は何も考えてなかった。ただ、仲間の危機に対して拳を振るおうとしていた。
その行動は、美徳と考えられなくもないが
「ネギ先生がどんな悪いことしていてもか？」
「ネギ坊主は知らないって言っていたアル！」
時によっては悪手にもなりうる。
千雨は思いっきり投げ出したくなった。面倒くさくなったので胸元にあるネックレスを握る。
『眠りの霧』
充満していく霧。
それを避けることはできなかった。いくら逃げても部屋では逃げ切れずに周りは敵。霧は拳で払うことすらできない。古はそのまま体制を崩し、深い眠りに入った。
「クーちゃん!?」
「眠らせただけだ。ネギ先生だって使っていただろう？」
千雨は明日菜の方に歩いて行った。無防備に、何の構えもせず。
「神楽坂、お前は今何をしているのか分かっているのか？」
「千雨ちゃんこそ！　こんなことして！」
「あんただって毎回毎回注意していただろ。
最初は教室で脱いではネギ先生を睨みつけてさ。それがいつの間にかネギ先生のすることをこうやって無条件で相手が悪いみたいに」

「完全にアンタが悪いじゃない！　修学旅行を妨害したり！」
「じゃあなんで妨害されるか分かっているのか？　知っているはずだろ、西と東の仲が悪いのに、なんで歓迎されると思うんだ？
　知っているはずだろう？　裏の世界の暗黙のルールは『表に迷惑をかけない』『表に知られない』、そのためにネギ先生も最初は記憶を消そうとしたんじゃないのか？　なのになんでお前等は修学旅行を利用して、クラスメイトを盾にして平気な顔してるんだ？」
「私たちは皆を盾になんてしていない！」
　明日菜は今にでも襲いかかってきそうだ。しかし千雨は歩みを止めず、明日菜が構えるハリセンの目の前で立ち止まった。
「それは自覚がないだけだ。
　知識も覚悟も足りないで、頼まれたからやるってだけでいったい何人不幸にした。
　今日だって朝倉がバカなことしなければこんなことにはならなかった。それなのに、お前等は自分たちに害がないというだけで見逃した。
　自分だけが良ければいいのか？　仮契約をした宮崎がエヴァンジェリンとの戦闘を行ったら、絡繰と戦ったら、怪我をしないでいると思っているのか？」
　僅かに揺れる明日菜のハリセン。しかし千雨に向けられたそれは下ろされることはない。
「自分たちが手を汚さないのなら何をしてもいいのか？
　違うな。お前たちは暴力的なことは何もしていないが、今までやっている行動は確実にクラスメイトを不幸にさせている。手が汚れていないように見えているだけ、汚れた手を見ないようにしているだけで、お前は既に戻れないところまでやってしまった。その尻拭いを今私たちがしているんだ」
「なら、なんでその前に何とかしなかったのよ！　千雨ちゃんだってその場にいたでしょう!?　私たちにだけ責任押し付けてんじゃないわよ！」
「それはお前に言われる筋合いはねぇな。私は注意をしたし、止めよ

うとした。それをしなかったのは東、麻帆良学園側であって私たちはやる前に止めてたらそれはそれで問題だったんだ」
千雨は明日菜を気にしながらも周りに目線を移動させた。
既に生徒は楓以外誰もいない。楓とて何をするでもなくあたりに気を配っているだけだ。あと残っているのは新田のみだ。
関西陣営はもちろん他のクラスにも人をやっている。関東陣営の情報では他に魔法先生、魔法生徒はいないが油断はできないのだ。
実際に今回くる魔法先生は一人と報告を受けて、それに対して実際の人数は違ったのだから。
新田はおそらく説明を受けているだろう。しきりに何かを確認するような動きをしながら、明日菜の行動を見ている。
「なんでよ、千雨ちゃんが止めてくれれば何の問題もなかったじゃない」
「朝のあんなに怒ってたお前が私の言うことを聞くのか？　聞かないだろう。それに、麻帆良側はここで止めたくなかったんだ」
「だから、それがなんでって聞いてるのよ！」
その問いをした明日菜に対し、千雨は明日菜の目を見つめる。明日菜はそれに気づき、千雨を睨みつけ、目と目を合わせた。
しかし、それは長くは続かない。千雨の眼孔に、千雨が明日菜の先に見る者に対する敵意の視線に負け、僅かに身じろいで視線を逸らした。
そこに千雨が突き付けた言葉がさらに明日菜の動きを止めることになった。
「うちのクラスがネギ先生のために作られたクラスだからだよ」
寸前に逸らしていた視線を千雨に向ける明日菜。手が、足が、体が硬直していた。長瀬も足を一歩前にだし、注意を完全に千雨に向けた。
「な、なによそれ……」
「態と未熟な魔法使いに魔法を使わせてたんだよ。神楽坂、お前は本当にくしゃみで服を脱がすやつが問題ないと思うのか？
今日のように自分の都合が悪くなると魔力を暴走させる奴を野放

しにして本当に大丈夫だと思うのか？　お前だって危なっかしい奴だとよく言っているじゃないか」
「だって、それじゃ……」
「もちろん高畑先生は初日に気が付いてたぜ。だけどそれを流したんだ」
「ち、違――」
「違わない。私は笑ったもんだぜ。自分の頭に何の断りもなく触れて心を読んでいるのを見てる高畑先生にはよ。まさか高畑先生は一般人だとは思ってねぇよな？」
　硬直していた神楽坂の体は次第に震え、今は目に見えるほど動揺していた。
　しかし、その神楽坂の様子を見ても千雨は言葉を止めなかった。
「高畑先生はな、知っていながらお前を殺し合いの場所に送ったんだよ。いや、喜んで送りだしたんだ」
「嘘……」
　神楽坂は完全に膝が笑ってしまったようで、崩れるようにしてその場に座り込んだ。楓は直ぐに明日菜に近づき、千雨はそれを無言で許した。
「長瀬、すこししたら連れて行ってやれ」
「長谷川殿、これはいささかやりすぎではござらんか？」
「ちょっと言っただけで聞くならこんなことになってねぇよ。お前も知ってるだろう？　こいつの頑固さは」
「しかし……」
「今辛かったとしても、現実を知ったほうがいいのさ。こういう奴は。何もしないで操られている奴を見て笑っている方がよっぽど残酷さ」
　千雨はそれだけ言うと、明日菜を楓に任せて千草の側へと向かった。
「お疲れさんや、千雨はん」
「まったくだ。給金は弾んでもらわねえとな」
「今回のはうまくいったら桁が一つ二つ変わると思うから安心しいや」

「そうだな。そうだったらうれしいな」
千雨は僅かに体を千草の方へと倒した。千草もそれを受け入れる。
「まったく、あんさんは前線なんてほとんど出ぇひんのに無理しよって」
「仕方ねえだろ。これは私がしなくちゃいけなかったんだ」
「麻帆良への、決別ってことやな」
「ああ、やっとだ。気が付いたら周りがおかしかった。親も魔法使いにやられて私だけが一人ぼっちだった」
「あんときは小学生やったから独り立ちも出来ひんしな」
千雨の体は既に限界へと達していた。
裏の世界にいると言っても、荒事へはあまり向かう事のなかった千雨にとっては、楓や古と対峙することはかなり体力を使うことだった。
その前にも明日菜やネギ、それに刹那と敵対する立場にあり、そんな彼女の立場ではまともに眠ることすらできていなかった。そもそも万全ではなかった体調。
そして敷かれた魔法陣に対しての効果の確認と人の手配をやれたのはその場にいた千雨一人。
最初から事が起きるまでのすべてを千雨がやっていたのだ。もう千雨には立っていられる体力はなくなっていたのだ。
「今も中学生だから対して変わんないけどな」
「それでも、両親と自分が暮らせるくらいには貯めれたんやろ？」
「あぁ。これでやっとだ」
両親が麻帆良にいる千雨は、事実を伝えてすぐに京都に移動するということはできなかった。今までの経験というものは自然と出てしまう。
麻帆良に住んでいる者は他の地に順応するためにもそれまでの生活資金が必要になる。
そうでなければ麻帆良にいた記憶を消したり、魔法的に一般常識を植え付けるしかないのだ。しかし、そうしてしまったらその人はその人ではなくなってしまう。

千雨は自分のために両親にそれを強いることは、両親を殺すことはできなかった。
符を作って売ることで金を貯めて、少しずつ麻帆良から離れる準備をしていたのだ。
「これで、やっと……」
千雨はゆっくりと瞼を閉じる。そして静かに寝息を立て始めた。
千草は千雨を抱えながら壁により、自分の膝に千雨の頭を乗せた。
「ゆっくり休みや。あとは、ウチらがなんとかしたるからな」
千雨の髪を梳きながら千草が一人、つぶやいた。

１０話

目が覚めると、懐かしい天井が映しだされた。泣き疲れて眠った後に見る天井だ。つまり、ここは本山の離れかと千雨は結論付けた。身に着けていた腕時計で時間を確認すると、５時を回ったところだった。

「あー、長瀬ほったらかしだ」

皺くちゃになった制服を脱いで、そばに置いてあった和服を着る。薄紫の紫陽花を基調にしたものだった。微妙に薄い色彩に目を細めたが、それしか近くにないのだから仕方がない。手を制服の内ポケットに入れてあった櫛で梳いて眼鏡をかける。

障子に手を伸ばし、そっと開ける。夜空に月が浮かび、微かに雲がそれを隠していた。

あたりに人影はなく、遮音の結界が張られているため、外部から漏れ着超える音もなかった。

連絡のために携帯電話を取り出したが、少し考えてやめた。

歩いて距離のある場所でもないため、余計な手間を増やすのもどうかと考えたのだ。

ゆっくりと歩いて、呪術協会の皆がいるであろう場所へと向かう。

「あ、起きたのかい？」

「フェイトか。お前がここにいるってことは、まだ鬼神の封印は解いてないんだな？」

「先に西のごたごたをどうにかしないとね。僕としては早くしてほしいんだけど」

「木乃香の魔力を使うんだからある程度纏めないとまずいからなぁ」

目の前にいるフェイトの目的を、千雨は知っていた。

先の大戦の黒幕組織だということも。

しかし、それを知ったからと言って何もしようとは考えなかった。せいぜいが西に迷惑をかけるなと言うに留まった。

その時のフェイトは多少驚いた表情を浮かべ、千雨に聞いた。「なぜ世界の敵だと言われている自分に対してそんな対応ができるのか」

と。
千雨が体質によって、フェイトの認識阻害を見破った際、フェイトは千草もろとも千雨を始末しようとしていた。
千草は壁に吹き飛ばされ、千雨は押さえつけられていた。
そんな状況の中で紡がれた言葉に、フェイトは掴んでいた手を離していたのだ。
「残念だったね。君の体質がなかったら、もう少しうまく生きて行けたのに」
「まったくだ。最初から最後まで魔法使いに遊ばれただけの人生だったぜ」
千雨の言葉に反応したフェイトは、千雨に聞いた。千雨のこれまでの境遇を。
孤児を連れているフェイトは、自分の手で千雨を処分することはできなかった。メガロセンブリアに滅ぼされた一族の子と、麻帆良で一人ぼっちだった千雨を重ね合わせた。
そして、フェイトは自分たちとともに来るかと尋ねた。千草と千雨に一人ぼっちになってしまった者たちに手を伸ばした。
それに対して、千雨はめんどくさそうに頭を掻いて答えた。その時の言葉は、フェイトにとっても、もしかしたらほかの魔法使い全員にとっても信じられないことだった。
「これ以上私たちを巻き込むな。魔法使いの事情をこっちに持ってきてんじゃねぇよ。勝手に滅んで消えてくれ」
千雨にとって大事なのは自分と自分の周りなのだ。フェイトがどこで何をしようが関係がなかった。ただそれだけのこと。
知らないところで違う世界を滅ぼす悪の秘密結社より、近くで周りを操っている正義の味方のほうが千雨にとって有害な存在だったのだ。
だからと言って自ら鉄槌を下そうとは考えなかった。魔法世界の人間は両極端だ。
正義を信じて邁進するか、恨みに囚われて身を滅ぼすか。少なくとも、フェイトの周りにはそういった環境しか生まれていなかった。

その言葉を聞いて驚いた時点で、フェイトも魔法使いに毒されていたのだ。
しかし、千雨が断った理由はそれだけではないだろう。それは千草も同じだ。なぜなら、彼女らはもう一人ぼっちじゃなかったのだから。
そして、その後に話を聞く限り、西としてはフェイト達を支援した方がいいのではないのかという話が上がってきた。
フェイトから状況を聞くに、このまま行っても魔法世界の崩壊は目に見えており、対応できる場所も人員もない上に、このままフェイトが何もしなかった場合、５０００万人近い人間が、しかも、多数の仲間や友人を見捨ててきた人間が移民してくるのだ。
信用ができる人間がどれくらいいるのか。そして、問題はやはり常識になるだろう。
いまどき奴隷制度を使っている人間がどんな行動をとるのか。しかも魔法という手段で、手に銃を持つのと変わらない武器を持っているのだ。そうでなくても相手はこちらを旧世界と呼んでいるのだ。
その呼び名で友好的とは言えないだろう。そんな人間が５０００万人、いきなり世界に現れる。
そんなことが起きたらどうなるか。千草は信用できる上層部の人間にわたりをつけてその話を流した。
実際に魔法世界が滅んだら、まるで麻帆良が広がるように、いや、さらに酷いのだろう。非常識で育った人間が押し寄せてくる。そんな社会の人間をどこが受け入れるのか。そう問われ、真っ先に思い浮かぶのはやはり麻帆良だろう。そこまで話がいった時、ぼそりと誰かが呟いた。
そのために、そのための麻帆良なのではないか。
魔法世界の人間が住む町作りのために麻帆良があるのではないかと。そのための犠牲者たちが麻帆良の人たちなのではと。今は試験段階で、その時が来ればあの町は魔法使いの国になるのではと。
日本に、魔法使いの世界ができる。その脅威を感じた瞬間だった。魔法使いの作った魔法使いのための魔法使いの街。どんなに外から

の侵入を阻害しても、世界樹から繋がる魔法世界へのゲートを開かれてしまってはどうしようもない。
そして簡単に人を殺せる手段と軍隊を持っている。
先の戦争が無意味なものでなく、無駄死にではなく、自身が守ろうとした物を壊していたということを、改めて術者たちは知ったのだ。
「千雨？」
「ん？　なんだ？」
「少し呆けていたようだけれど？」
気が付いたらフェイトが千雨の目の前まで来ていた。
「いや、本当に踊らされてたんだなって思ってよ」
「そうだね。でも、今度はあっちが勝手に踊ってくれるよ」
「ん？　どういうことだ？」
フェイトからの情報によると、既にメガロセンブリアはネギが拘束されたのを知ったらしい。
関東からの連絡というよりか、ウェールズ繋がりだろう。そして呪術協会に向けて『ネギ・スプリングフィールドを解放しろ』という通達書を送ったというのだ。
いままでの関西の様子を見る限り、それは受理されて実行されるだろう。
しかし、今回は違う。違うからこそネギが捕らえられる結果になったのだ。
それを理解していない元老院は格下に命令するかのように使者を出したのだという。
「馬鹿だな、そいつら」
「自分が一番上だと思っている人は、何でもうまくいってるかのように錯覚するのさ。だからナギ・スプリングフィールドも今は表舞台にいない」
「まぁ、明日は我が身だからこれ以上は言わねえが、欲張りすぎはいけねえな」
二人で大広間へと足を進める。その先に呪術協会の構成員が集められるだけ集められているはずなのだ。

「おぉ、千雨嬢ちゃんか」
「球磨川の爺さんか、中はどうなった？」
「お前さんが何時間寝てたと思うとる、既に終わったわ。関東との融和なんぞ認めんわ」
　千雨の目の前にいる老人は、関西でも上の方の人間であり、同時に大戦に連れ出されて骸となった者の親でもあった。
「長は結局どうなったんだ？」
「最後までネギとかいう小僧をかばっとったわ。こっちが笑ってしまうくらいの」
　カッカと口を大にして笑い出す球磨川老。ひとしきり笑い終えると、底冷えのするような目を千雨に見せた。その奥にはひどい憎悪の感情が見て取れた。
「あやつは最後まで自分と周りのことしか考えんかった。儂達がなぜ西洋魔術師を嫌い、憎んでいるかも理解しようとせずにの……自分の罪を理解させてやれんかったのが唯一口惜しいわい」
「……悪かったな、一応私も西洋魔術を使えるから魔法使いに入ってんだけどよ」
　静まる空気の中、勤めて明るそうに、しかし皮肉のこもった声で千雨が声をかけた。隣ではフェイトも微妙に笑っている。
「嬢ちゃん、分かってて言うもんではないぞ。お主は儂達が憎んでいる者も理由もわかっとるんじゃから。
　それに、お主が魔法を使おうと呪術を使おうと恨む者もおらん。派閥争いも巻き込まれんように中立になっているままならの。自分の益になっても害にはならん者に儂等は危害を加えんよ。お主が元からの術者の家系ならまた違ったがのぅ」
　そう言って球磨川老は歩き去って行った。関西の人間の言う魔法使いとは連合の人間と関東の魔法使い。つまりは戦争に巻き込んだ人間たちだ。
　去っていく姿を見送りながら隣を見る。フェイトの表情がわずかながら暗くなっていた。
「別にお前のことを責めてたわけじゃないだろ？」

「しかし、僕たちが戦争を起こしているのは事実だ。それを受け入れなければならない。それは、慣れていいものじゃないよ。やめるつもりも毛頭ないけど」
フェイトは千雨に表情を見せないように前に進んでいった。
千雨やフェイトの従者など、親しいものは、ゲームで言うワンフレームの動きを察知してフェイトの心情を読み取ってしまうため、フェイトは千雨に対し、あまり表情を見せないようにしていた。
千雨は黙ってそれを追う。一応、魔法世界に対しては悪の秘密結社扱いのため、公式に助力はできないが、それでも今回のことで少しは楽になってくれればと考えた。
この後行う鬼神の復活、そして木乃香の魔力での制御。鬼神の能力と性質を見ることを目的としていたフェイトには、これからが一番の気合のいれどころだろう。もう一つの目的である関西呪術協会の弱体化は、私たちが関東と関わらない体制づくりをしたために既に達しているのだから。
大広間の前についた。入口の前には１０名ほどの術者が周囲を警戒しており、私たちに気が付くと、そのうちの４名が近寄ってきた。
「今入れるか？」
「現在、これからの指針や方向性を決めているところです。入れると言えば入れますが……」
術者は千雨とフェイトを交互に見る。今ここに入るということは、関西に根深く居座るということにもなるということだろう。それを二人はどうするのかと言いたいのだ。
「そうか、じゃあ私が必要になったら呼んでくれ。必要だろう？　あいつらの処遇決める時に」
「はい。それと、千草様から言伝がございます」
「姉さんから？　言ってくれ」
「はい。『忍者の嬢ちゃんにはすべて話して、離れで何人かと一緒にいさせてるから安心しい。後、麻帆良の生徒への説明の時には同室を許すが、それ以外での接触は禁止らしいから近づかんとき』だそうです」
一字一句間違えずに伝えるようにとでも言われたのだろう。千草

の言葉を真似るように千雨に向かって伝言を伝える。
「ありがとう、それじゃあ私は離れに戻るわ」
「わかりました。処遇を決めるのは明日の会合以降となる予定です。麻帆良の人間に対する言伝や手紙は、内容を改めさせていただければ渡せますので、御用がありましたらお声掛けください」
千雨は踵を返して、元来た道を戻っていく。もう一緒にいても進展はないと悟ったのか、そこには既にフェイトの姿はなかった。
千雨は戻りながら考える。明日のことを。
明日はネカネ・スプリングフィールドがくる。フェイトの話ではもう一人、メガロセンブリアの人間も来るだろう。そしてもう一人……
千雨の手には手紙があり、明日の来訪を伝えた手紙がある。
大戦に参加し、それでいて中立の人間。
そして、フェイト達から知った情報をカードに交渉できる相手。
紅き翼のネームバリューに左右されずに真実を受け入れる可能性のある相手。
それでいて、連合に見捨てられることが決まっている相手。
「しかし、まさか総長（グランドマスター）自らが来るとはなぁ」
千雨はアリアドネーから来た手紙をしまうと、そっとため息をついた。

11話

千雨は今、空港にいた。
これからやってくる人を迎えるためだ。
とは言っても、関西で地位の低い千雨はあくまでおまけであった。
事情によって上にのし上げられた千草が交渉役として抜擢され、迎え役も同時に任命されていた。厄介なことを押し付けられたとも言えよう。
時間は朝の10時。千雨と千草は8時から空港に待機していた。
1本前の便で来られて、勝手に行動されるのを嫌ったためその時間に合わせてこなければならなかったのだ。
そのあいだに彼女たちは空港の朝食に舌鼓を打ち、空港内限定のコスメなどを購入したりしていたのだから、苦という感じではなかった。
一通り観光を楽しんだ後はカフェで最終の打ち合わせをしていた。
「しかしよく西の人間が納得したな」
「無駄に争いを起こしてもしょうがあらへんからな。先のない道なら玉砕覚悟もあるけれど、未来が見えてるのに戦争起こすバカはおらへん」
元老院も、自分の土地がなくなるなんて言うことがなければふんぞり返っているだけで、何もしなかっただろう。少数の犠牲者は無くならなかっただろうが。
「まぁ、納得してくれなければアリアドネーとの会合も意味がなくなるけどな」
「ナギ・スプリングフィールドに殺されたのがわかっとる人もおったから、どうなるもんかと思ったけど、意外とすんなりといきましたな」
「あの人は息子を殺されたんだっけ？　そりゃネギ先生を殺せとかは言わねえよ。自分の息子がいなくなる悲しみってもんを知ってるからな。姉さんはこれでよかったのか？」
千草も大戦で両親を殺されている。何も思わないなんてことはないはずだ。千草と千雨の出会いも、千草が両親を大戦でなくしていた

ために、魔法使いを憎んでいたために生まれた出会いだった。
「今のこれが復讐や。あっちがやらかしたことの罪の重さをあっちに知らしめてわからせるんや」
確かに、今の状況も復讐にはなっているだろう。
死地に追いやった本人は排他され既に関西呪術協会から消え、関東はきっとてんやわんやだ。これからの日本の情勢を考えると、確実に一矢報いている。
千雨は千草の気持ちを確認しながら、自分の近しい人が消えることはないことに安堵した。
「しかし、この時間やともしかしたら一緒に来るかもしれんな」
「ネカネさんか？　あんまり一緒に来てほしくないな。空気読んでほしいのだが」
招待した相手を出迎えるという行為と、罪人の引き渡しに応じる相手を迎える行為というのを同時に行うことは、二人としてはあまりしたくなかった。
しかしこの後、彼女たちはさらに頭を抱えたくなるような事態に巻き込まれることになった。
イギリスからの第2便。降りてきたのは深々と帽子をかぶって角を隠しているアリアドネーの総長。そして嫌な予感が的中したようで、ネカネ・スプリングフィールドが隣にいた。
そして、その隣にドネット・マクギネス。たしかウェールズの魔法学校兼魔法協会長の秘書をやっている人間だ。メガロメセンブリアをはじめとした魔法世界とのつながりは基本彼女が仲介しているので、彼女がメガロメセンブリアの特使の代わりなのだろう。要員を割く必要性も感じないということか。
更に隣に、いてはいけない人物がいた。千雨はその人物の前に歩み寄る。
「どういうつもりですか？　高畑先生」
「関東魔法教会の特使としてきた。ネギ君と麻帆良学園の人間の身柄を渡してくれないかい？」
ネギを個人で指名し、先に名を出していることからも高畑の思惑は

簡単に見て取れた。
「それがなぜ国際便から来るのですか？　本来なら新幹線か国内便から来るはずでしょう」
「出張で海外にいてね。急いできたから国際便からになったんだ」
　千雨は高畑の一切迷いない答えと、何も悪びれもしない様子にいらだちを感じた。
「それで、関東魔法教会は書状も謝罪状も何も持たずに来たわけだ。特使としてきた人間が最初に話した言葉が謝罪じゃなくて返還要求ってのはいいご身分じゃねえか？　おい」
　その言葉を聞いた高畑は、初めて気が付いたような顔をした。
　千草は千雨の後ろであきれかえっている。
　セラス総長はそれを見て唖然としている。それがどちらに対してなのかによって、関西の対応も変わるだろう。
「あぁ、そうだったね。今回はネギ君が迷惑をかけてごめんよ。それでネギ君たちのことなんだが――」
「やめなさい、高畑君」
　千雨がさらに言葉を紡ごうとしたが、その前にセラス総長が止めに入る。
「あなたが今行っているのはかなりの悪手よ。
　あなたは自分で関東魔法教会の人間として来たと言ったの。つまり代表者なのよ。
　この子が生徒であるにせよそのような態度をとることは許されないわ。あなたがこれ以上馬鹿な真似をすると、戻ってくるものも戻ってこなくなるわよ」
「ま、私に言ったことは全て余さずに伝えるけどな」
　そう言って千雨はポケットから録音機を取り出した。
「関東魔法教会に反省の色なし。そう伝えればいいんだろう？」
「ちょっと待ってくれ！　なんで」
「高畑君、あなたはもう帰りなさい。あなたは事態を好転させることはできないわ。邪魔よ」
　セラス総長による宣告に対し、高畑は言葉を詰まらせる。

「あなたができることは麻帆良に帰って事態の終着を待つだけ。他にはないわ。さぁ……」
セラスに促され、下がる高畑。
千雨は連絡を取り、高畑の魔法を一日限定の簡易封印をした後で自動車に乗せた。詠唱のできない高畑にとっては無意味なものだが、立場を分からせるのには十分なものだと判断したのだ。
後はそのまま順当に麻帆良に戻ることを祈るのみだ。高畑が脱走したり、運転手を麻帆良が拘束したら戦争が起きかねないのだから。
「お手を煩わせてしまって申し訳ありません、セラス総長」
千草が千雨の一歩前に立ち、頭を下げる。
それに対して気にしないでと答えたセラス総長はこれからの予定を早速聞いてきた。彼女もやはりネギの処遇が気になるらしい。
大戦期に前線で隊長として活動していた彼女も、やはり英雄寄りの人間であることに変わりはないのだ。
「私としては直ぐに本題に入りたいのだけれど。観光とかはその後がいいわ」
「でしたらそのように手配します。申し遅れました、私は交渉役を務めさせていただきます。千草・天ヶ崎と申します」
「こちらは性が先に来るんでしたっけ？」
「はい。日本での呼び方でしたら天ヶ崎千草。天ヶ崎が名字で千草が名前になります」
「ではよろしくお願いします。天ヶ崎さん。それで、こちらの子は？」
「今回の交渉補佐として共にさせていただきました千雨・長谷川です」
「よろしくお願いします」
千雨は自分の名が呼ばれると、頭を下げておじぎをした。セラス総長の興味は千草より千雨に向いているようだった。
「私はドネット・マクギネスです。よろしくお願いします」
「ネカネ・スプリングフィールドです」
千草と千雨は名乗りを上げた二人に対して、同じように名乗り、握手をして答えた。
「では、行きましょうか」

セラスを誘導し、千草はセラスと一緒の車に乗った。
千雨はドネッドとネカネと一緒の車に乗って本山へと向かった。先の高畑の行動もあり、その間の余計な会話は一切なかった。そうでなかったら、ネカネが同じような行動をしていたのかもしれない。
基本和室の多い本山だが、外来用の洋室も数室はある。それに和室の座椅子も座高の少し高いものを用意しており、今回セラスが選んだのはそちらの方だった。和室に移動して認識阻害と遮音の符を使う。
「今回のことは全て録音させていただきます」
先ほどとは違い、了解を得てからスイッチを押す。
相手もそれを予想していたのか、特に反論はなかった。
「さて、本来ならばアリアドネーと関西呪術協会の仲を良くしようと思い、場を設けた会合でしたが、今回最初の議題はそうならなくなってしまいました」
千草から提供された話題の内容を、その場にいる全員が把握していた。
「その話題を話す前に、ドネッドさん。あなたの立場を明確にしていただけますか？」
「私は今回、ウェールズ魔法教会の代表の一人としてこの場にいさせていただきたいと考えております。それと、これを……」
一枚の封筒が千草に手渡された。
「本国のメガロメセンブリアからの書状です。お納めください」
「ウェールズの魔法協会はメガロメセンブリアの支部的なものなのですか？」
千雨が確認の意を込めてドネットに質問する。
「そうとらえてもらって構いません。私たちの上には連合、メガロメセンブリアの意志決定のもとに自治区ごとに協会が置かれています。日本でいうなれば国家と県。アメリカの連邦政府と州と考えてください」
その確認を取った後、千草に封書を開けさせる。最初に確認した理由は、これを開けた後に質問すると、言い訳を与えるチャンスを与えるからだ。

フェイトの情報によって知っているその内容を確認した千草は、ドネットとネカネに向き直る。
「あなた方はこの内容については知っていますか？」
「いいえ、封をされていたので見ておりません」
「これが、その内容どす」
千草が皆に見えるように、中に入っていた紙を机の上に広げた。
そこには「ネギ・スプリングフィールドを即刻解放せよ」と辞令が書かれていた。ネカネの顔が真っ青に染まっていく。
「これがそちらの答えということでよろしいおすか？」
「ま、待ってください！　これは……」
ドネットは立ち上がり、声を荒げるも、次の句を言えなかった。
先ほどウェールズはメガロメセンブリアの支部的な存在であると言ってしまったために、分けて考えるということはできなかったのだ。
本部の言葉がここで明文化されているために、ここでドネットが何を言おうと変わるものではない。
「これで、ネギ・スプリングフィールドを返せるとお思いでっか？　私たちはあんたらの部下でも手下でも奴隷でもあらへん」
「申し訳、ございませんッ！」
畳に着くぐらいに頭を下げるドネット。
千草も千雨もそんなものに興味はなかったため、セラス総長に視線を向けた。
「どうしたらいいと思われますか？」
「これは……」
千雨がセラス総長に聞くが、セラス総長には答えられない。これまでの行為をみて、それでもなおネギを返せと言えるはずがなかった。
言葉に詰まる彼女を見ながら千雨は書類を3人に渡す。
「これは？」
「これまでに麻帆良でネギ先生が行った行為と、修学旅行内で行った行為。それと、本来どれくらいの罪になるかを計算した結果ですね」
それは優に人の一生を超えていた。

「それは魔法世界や魔法使いの法の場合ですからね？　こっちだと正直極刑になります」
　敵対行為や挑発行為をしてきたのだから当然と言えば当然だった。
「それと、これは記憶を見て知ったウェールズ時代のものです」
　禁書庫に無断で立ち入ったりなどの悪行から、生活の様子まで事細かく書かれていた。
　ネカネとドネットの顔色は既に土気色になっている。
「これは、ひどいわね」
「でしょう？」
　千雨がセラス総長を見る。セラス総長が千雨を見る。お互いの視線がぶつかって、場が静まり返った。
　それが何分続いただろうか。セラス総長がゆっくりと口を開いた。
「魔法使いとしても、そうでなくてもこの行為はあまりあります。これは、卒業試験は終わりですね。ネギ君の返還も無理でしょう」
「そんなっ!?」
　ネカネが悲鳴をあげた。
「まぁ当たり前ですけどね」
「けれど、」
　セラス総長に相槌を入れる千雨。セラス総長は言葉をつづけた。
「この調査書を見るに、ネギ君の今までの行為の元凶は他にあると見ています」
「というと？」
「ウェールズに麻帆良、双方の魔法使いたちのネギ君への教育がネギ君をここまでにしたのでしょう。
　私たちのところではこんなことはありえない。騎士団の規律と精神の育成は行ってはいけないことくらいの分別は完全につけさせております。我儘を許して特別扱いをすることが生徒のためにならないことを知っていますので」
　セラスは千草へ視線を移すが、千草は視線をそらす。
　千雨は移った視線を受け入れた。
「ご立派ですね。それで？　結局あなたは何が言いたいのですか？」

「ネギ君は私たちが、アリアドネーがあずかるというのはいかがでしょうか？」

12話

「セラス総長、それはどういうことやろか」
　千草が確認を取る。セラス総長はメガロメセンブリアにではなく、アリアドネーにネギの身柄を移せと言いたいのだろう。
「この調書を見る限り、ネギ君は自分がしていることに対し、何がいけなかったのかを理解していない。理解できていないように感じます」
　そして彼女は気づいていなかった。千草達にとって、アリアドネーであっても連合であっても代わりはないということを。魔法世界に在るということだけでそれを認めることができない理由のあることを。
「それで？」
「アリアドネーの魔法学園でもう一度、何がやっていいことで、何がしてはいけないことかを教えることができれば、このような事態は起きないのではないでしょうか」
「そうなんか？　死んだおとんやおかん達が必死に戦って死んでいった中、英雄様にサインもらっとったって聞いたけど、どうなんどす？」
　今会合している相手の名前を聞いた中に、驚きの声を上げる人がいた。あんなのが責任者になれるはずがないと。
　無理やり駆り出された大戦の最終決戦。自分たちが死地に向かおうとしているときにサインを持って遊んでいる騎士がいたのだ。
　ふざけるなと叫びたくなった。
　戦闘も裏方もやらされて死人が出ている他国の戦争。無理やりそれに付き合わされた人間にとってそれは許されない発言だった。
　セラス総長は顔を赤くして顔を下げる。
「む、昔のことです」
「はずかしがっているとこ悪いけどな、これを目の前にして言ってくれ」
　千雨が年季の入った本を一冊置く。
「大戦時に殺された人間の名前の書かれた本だ。あんたらが最後だけお遊び気分で出てきた戦争の被害者たちだ」

「うちの両親も聞きたいみたいや」
ゆっくりと、大切に位牌を取り出す千草。
「もう一度聞くぜ、アンタのところでなんだって？」
セラスは言葉に詰まる。
自分の行動の、若気の至りに対しての能力を問う、心構えを問うものだと思っていたからだ。
「今、この人たちの目の前で言えたら、今度はクラスの皆の前で言ってもらうぜ。あなた達を食い物にしていたネギ先生を立派に育てて見せますってな」
「その言い方は、無いのではないですか？　私の大戦時の行動は褒められるものではありませんが、アリアドネーの教育はしっかりとしています。それにこんなことがあったのですから次は無いように尽力させていただきます」
セラスの答え。それは千雨も千草も望むものではなかった。
ネカネもドネットも視線を二人に向け、判断を待っている。判断を待っているのだ。なにもわかっていなかった。
千雨は、3人の行動と発言に対し、もうお手上げというようにため息をついた。
「駄目だな」
「なぜです!?　信用がないというのですか！　私たちはネギ君を、ネギ・スプリングフィールドを――」
「そういう問題じゃねえんだよ！」
千雨は声を荒げる。立ち上がりそうになった、実際膝立ちになったセラスも千雨の言葉に固まった。
「違うだろ！　なんでお前等はネギ先生のことしか気にしないんだ！　被害者のことを考えずに、あいつのことだけ話をつけようとする人間を信用できるはずがないだろう！」
大戦のときから変わっていない。一度も心から謝られたことはない。
彼女等の基準は大衆ではなく、英雄を求める。自分たちが守るべきものを見ずに、英雄を一番に考えている。自分の都合を考えて、下の

人間を見ようとしていなかった。
「死んだ人間にも、巻き込まれた人間にも何にも思わない奴をどう信用しろというんどす？　ウチらはネギ・スプリングフィールドを英雄にしたいわけやあらへん。
　この事件の落とし前つけてもらおうかと言ったのに、なんで加害者を渡す渡さないの話が一番最初に来とるんどすか？」
　３人の顔は、こいつらは何を言っているんだという顔をしていた。
「普通なら、被害を確認して、処理を終えてその結果を見て、その中でネギ・スプリングフィールドに対する罪の洗い出しでしょう。
　先ほどの資料はそういった意味も込めて出したのです。なのになぜ、ネギ・スプリングフィールドの今後の話になるのですか？」
「しかし、これは大事なのです。サウザントマスターの息子の不祥事というものは魔法世界に」
「ここは日本です。魔法世界ではおまへん」
　ドネットの発言を、千草が言葉を乗せて否定する。
「魔法世界の英雄とか、その息子とかで日本をないがしろにはさせへんよ。ネギ・スプリングフィールドのクラスの生徒たちは、いろいろとおかしいものが出てきましたからな」
　個性的な者、特殊なスキルを有する者、元から力を持っている者。どれをとっても当たりくじだというように配置された少女。
「ネギ先生に好意的になるように仕向けられてるからな。あの敵意を持たないようにする結界は。んで魔法を暴発させた少年を助けるために足を踏み込むか？　そうだな、まるで自分が足を突っ込んだように見えるな」
　調書をめくってとある一ページを指す。
「初日、魔法が神楽坂明日菜にばれた時、ネギ先生は大量の本を抱えた宮崎を助けるために魔法を使った」
　その時の様子は知っている。符による監視も、記憶による再現でも。
「その時、なぜ宮崎は階段から落ちたのか。横幅１０メートルを超える階段、なぜか周りの皆が用事で、一人で持っていく羽目になった大

量の本。本来なら階段の真ん中を誰しもが通る。怖がりの宮崎なら尚更だ」
そう、その時点でおかしいと千雨は考えた。
簡単なのだ。ちょっと端を通ろうと思わせるくらい。本来腕力のない怖がりの人間が大量の本を持つくらいに。成績優秀な人間が回数を分けたり、台車を使わずに崩れると分かって本を山積みにして外を出歩かせるくらい。
「そしてその場にたまたまいたネギ先生。たまたま見ていた神楽坂。おかしいよな」
更に千雨は神楽坂が高畑によって連れてこられていた点と、木乃香の同室者だという点も指摘する。さらに、その後の歓迎会に欠席者は出ておらず、予定があると言っていた人間は皆その準備をしていたということを自分の目で見ている。
綾瀬などが大量の本を宮崎に持たせていかせるなど決してしないことを。
「そして、すぐにその場に高畑先生が来て、その後の歓迎会でも読心の魔法を使っているのを見ている。神楽坂にその内容を伝えているのを見ているのになにもしない。本来なら、止めるはずだろう？　一般人に魔法がばれたんだから」
お前等は、一般人を巻き添えにして英雄を作るのか？
英雄を作るためなら、他の犠牲は無視するのか？
そう千雨は問うた。
「ネギ・スプリングフィールドの処遇は今ここでは決めない。いいでしょうな」
千草の問いに、3人は頷かざるをえなかった。
それでもなお、彼女達は納得をしていない。彼女達の価値観もまた、既に植えつけられている常識のものなのだから。
そして、別室では違う人物が、大戦のしがらみから逃れられずにいた。
「あなた……誰？」

何もない空間に、二人はいた。まるで姉妹のように似た顔と髪型。
いや、姉妹というよりかは――
「昔の、私？」
神楽坂明日菜の夢の中。
術者によって解かれた封印は夢の中で二人の少女を生み出した。
封印された過去のアスナ、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアと、その後生きた少女、神楽坂明日菜。
「あなたは私？」
「私は神楽坂明日菜。あなたは？」
「私はアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア」
向き合う少女が確認の意を込めて問う。あなたは誰だと。お互い名乗った名は違うが、本質は同じ、同じ人間だと確信していた。
「ここはどこ？　なんであなたがいるの？」
「ここはあなたの頭の中。封印されていた私が起こされた、なぜかはわからないけれど」
両手を広げて明日菜に向けるアスナ。
「あなたは隠した過去を広げて、また争いに巻き込まれるの？」
「またって何よ！」
明日菜は凄い剣幕でアスナに向かう。彼女は確かにいくつかの修羅場をくぐり抜けてきた。少し前まで一般人であった彼女にとってはここ数ヶ月の騒動は刺激的であったし、とんでもないことの連続だった。
しかし、それは過去と呼ばれるものではない。ならば、アスナの指している事はそれらの騒動ではないことになる。
そんな明日菜の様子に、アスナは不思議そうに首をかしげる。
「あなたが私を呼んだのは、私が必要だからでしょう？　ナギはいないの？」
「えっ？」
いきなり聞かれたことに、明日菜は答えることができない。
ネギの父親である彼の名をいきなり呼ばれたからだ。明日菜には少しの関わりのない人物を。

「アルは？　ガトウ……」
アルの名を呼び、ガトウのことを聞こうとして、言葉を詰まらせる。
「どうしたの？」
顔を伏せたアスナを心配し、近寄る明日菜。
「ガトウはいない。私を封印するのように言ったのはガトウだから。けど、それじゃあタカミチはどうしたの？」
「……高畑先生」
聞きたかったようで、聞きたくなかった名前。千雨から聞かされた真実が頭によみがえる。
「私が呼ばれたということは、タカミチは死んだの？　タカミチが私を呼ぶはずないもの、私は呼ばれたらいけないのだから」
「それって、どういう意味よ」
アスナはその問いには答えずに、手を上に掲げる。ちょうど明日菜の胸の前に。
「知りたいのなら、手を合わせて明日菜。けど、思い出したら戻れない。次はきっと、あなたも消える……ううん、あなたはもう消える。生まれるのは私とあなた。二人で一人のアスナ」
「あなたと、私で、一人のアスナ？」
「そう、混ざったら、もう戻れない。決めて明日菜、後戻りは出来ないわ」
目の前で広げられるアスナの手を見つめる明日菜。今までの生活、ネギが来てからの波乱万丈な日々。千雨に言われた真実。
「……わかったわ。私は高畑先生を信じる」
決意を決めた明日菜は、アスナと手を合わせた。二人の間に光が走り、混ざりあう。次の瞬間には、明日菜一人しかいなかった。
何もない空間に、ぽつんと一人。
記憶の処理が終わらないのか、ただ立ち尽くすだけで動かない。
「高畑先せ……タカミチ」
つぶやかれる言葉。彼女の頬には一滴のなにか。
「タカミチは、私をどうしたかったの？　ガトウさんの言葉も、ナギの行動とも違う」

自由に生きれず、平穏からも追い出された明日菜。
ただ、好きに生きることを求められた。ガトウにも、ナギにも言われたことは忘れていない。自由に生きる事。そして、自分の判断で生きる事。誰にも縛られないこと。
「ネギのパートナー？　ネギに何をさせたいの？　わからないよ、タカミチ」
ナギと一緒にいたからわかる。ナギとネギの違い。ナギは我儘による独善。それがたまたま英雄へとなる道になった。
しかし、ネギの今の形は違う。ナギが一番嫌うものだろう。作られた英雄。自由奔放に生きられない、生きた人形。昔の自分と同じ、使われるだけのお人形。
メガロメセンブリアに靡かなかったように、誰にも靡かず、自分を貫く。仲間を作って楽しく過ごす。それがナギだ。そして、ガトウもナギも、自分にも自由に生きろと言ってくれた。
それなのに、近くにいたタカミチはそれを少しも分かろうとしていなかった。
彼もまた、ただただ英雄という名前に惹かれていたのか。
彼の生き方は彼等とは違う。彼等の一部、都合のいい理想の英雄像を具現化しただけのほんのひと握りのところしか見ていない。
本質ではなく、上っ面だけしか見ていない。
「結局、逃げられないのね私は。いくら逃げても捕らえられる」
タカミチも、結局は私を駒としか見ていない。
彼の理想を実現させるための道具でしかいなかった。
「もう信じられない、信じられないよ」
その場で蹲る明日菜。すべてを思い出した少女は、信じていた人に裏切られていた真実に折れ、深い闇へと落ちて行った。

13話

・

長瀬楓、宮崎のどか、朝倉和美。
龍宮マナ、雪広あやか、綾瀬夕映、新田先生。
春日美空、瀬流彦先生。それぞれ、同じ部屋にいながら待遇が違った。
共犯者兼、被害者。被害者及び傍観者。首謀者の補佐、もしくは同類である。
彼らは一部屋に集められていた。
戦力のあるものは武器を取られ、魔法封印をされていた。龍宮は銃をとられるだけだったが、一切抵抗はしなかった。
長瀬楓は、抵抗はしなかったものの、反論をしてきたが、今立場が悪いのは敵対の意志を告げた楓なのだ。
魔法使いは言うに及ばず。
雪広あやかと綾瀬夕映は判断ができそうな一般人代表で、ネギに関わりの深い者。千雨の判断で選ばれていた。
「これは、どういうことですの？」
この場にいるのは千草と千雨。先ほど話し合いをしていた3人はモニターでこれを見る。西側に有利な質問になると言われればそうだが、瀬流彦と春日がいる時点で、余計な者でなく、麻帆良の魔法使いが反論する機会を与えていた。
今雪広がした質問は、この状況のことだろう。
「雪広は、ここに来る前の状況を覚えているか？」
「ええ。朝倉さんの開いたイベントをして、宮崎さんがネギ先生と……ネギ先生!?　ネギ先生は大丈夫ですの!?」
「別室だが、怪我はしてねぇよ」
「案内してください！　あぁ、ネギ先生！」
新田先生の見る目が厳しい。
瀬流彦に対してと、そのような行動をとっている雪広に対してだ。
千雨はモニターで見ている者達に目を向ける。室内からその様子は

うかがえないが、千雨は彼女らに対して訴えていた。
『これも魔法使いのせいだと』。

「長谷川」
「なんでしょうか？　新田先生」
「これもか？」
「逆に問いましょう新田先生。普通、一目惚れだとしても、それから半年たたずにこのような行動をとるまで好きになりますか？　むしろ、好きになったとしてもこのような行動を『普通』は取りますか？」
　昨日起きた出来事によって、旅館とは違う場所に移動させられ、目が覚めたらこの部屋に連行された。
　そのような状況でネギのことを真っ先に気にするほど好きになる。このようなことがあるのだろうか？
　あったとして、このような状況下でクラスメイトのことを気にしないで真っ先にネギ先生のことを優先するような暴走をする判断力の持ち主でしかないのだろうか。

「どういうことですか？　委員長はいつもこのような行動をとってますが……」
「そのいつもが間違ってんだよ、綾瀬。じゃあ聞くが、お前の読んでいる小説に、こんな行動をとる人間はいるか？」
「いえ、漫画やライトノベルはその限りではありませんが、いなかったと思います。しかし、このくらいは麻帆良では日常茶飯事でしょう」
　瀬流彦の顔が歪む。
　お決まりのキーワードになっている『麻帆良では』。では、それ以外ではと聞かれたら、綾瀬もそんな人はいないと答えるだろう。つまり、麻帆良は異常であると認めていることにほかならない。それを綾瀬は気がついていなかった。
「そうだな、ドラマでも、映画でも、ノンフィクションの小説でも、喜劇でない限りこんな行動をとる人間はいない。『麻帆良』以外ではな」
「しかし、麻帆良では普通です」

「じゃあ綾瀬、麻帆良が普通じゃない。とは考えなかったのか？」
新田先生は、麻帆良の現状を知っている。もちろん西が説明したからだ。
新田先生自身は結婚して妻子を持ってから麻帆良に赴任した先生だ。なので、麻帆良の外にいる時間のほうが長い。
つまり、影響を受けていない人生のほうが長いのだ。その為にすんなりと異常を説明されたときに納得した。納得せざるを得ないほどの非日常が麻帆良にはあった。
今まで不自然に思わなかったのが不思議なくらいなのだ。
「麻帆良が普通じゃない、ですの？　そんなことより……」
「ネギ先生のところには後で連れて行ってやるよ。それより、今の状況を教えてやる。宮崎のどかは確実に、そして雪広あやかを含めた偽ネギにキスした人物は棺桶に足を突っ込んだ状態だ」
「遊びすぎたということですか？　他の方は普通に観光をされておりますの？」
「いいや、比喩じゃねえんだ」
千雨はカードを取り出した。仮契約のカードをスカカードも含め並べる。
「昨日のキスはこれを作るためのものだ。これは主人と従者の証。そうだよな、瀬流彦先生？」
「……そうだよ」
関係者以外は何を言っているのかわからないようだ。
そうだろう。こんなカードを見せられて何が変わったと言われても、分かる者はいないだろう。
「そうだ。これはな、無条件で裏の、殺し合いに参加する権利と義務を生み出すものだ。魔法使いという裏のな」
本来ならば衝撃的な言葉だった。新田先生は瀬流彦を睨みつけるように見ている。
しかし、魔法などは所詮本の中の空想だ。そう一蹴しようとする雪広と綾瀬の内情が顔に現れていた。
「見せてやるよ。これが私が片手でできるもんだ」

符を手に取る千雨、風で障子を開けて、符を庭の木に投げつけた。
千雨の投げた符は、途中で半径3メートルほどの炎球となって木を飲み込んで壁を破壊した。
「私は裏方の方が得意だからこういったことをするが、拳で岩を砕く人間もいる。才能が有れば山を飲み込むくらいの大きさのものを作り上げる奴もいる」
一瞬のうちに飲み込まれた木を呆然と見る二人。
雪広と綾瀬はそれを脳内で処理できていないようだ。
「このカードはな、持ってるだけで、存在してるだけでこのような攻撃をされる可能性がありますよってもんだ。実際は政治の話だとかでそんなことはないが、確実に厄介ごとに巻き込まれる」
「そんなことはない。厄介ごとになんてそうは――」
「ネギ先生の村は、先生を含めて3人以外生きていない。それなのに、そうはならないというのか？　あの村に価値のあるものはなかった。サウザントマスターの息子であるネギ先生以外にはな。それに、麻帆良であったばかりだろう、吸血鬼騒ぎの原因はサウザントマスターが残した負の遺産だろ。ネギ先生の生徒だから巻き込まれた奴が最低でも5人はいたはずだ。その中にはさっきの宮崎のどかもいるぞ。裸に剥かれて帰ってきたことがあっただろう？　綾瀬」
魔法使いには有名な話だ。6年前、サウザントマスターの暮らしていた村が大量の悪魔に襲われた。サウザントマスターの息子であるネギは生存していたという報告に、皆が安堵のため息を漏らしたものだと。
そして最近流された噂。闇の福音を英雄の息子が倒したと。
「あれの原因は不明だ。ネギ君に関係があるとは思えない。それにエヴァンジェリンさんのことは学園長がしっかりと管理している。」
「思ってないのはアンタらだけだ。ネギ先生以外に何がある。それに、管理できていたのはネギ先生に対してだけだ。被害者は隠ぺいしただけだろう。」
千雨は、瀬流彦との話を切り上げて朝倉のほうを向いた。
「私の情報が本当かどうかは自分で決めろ。話を先にさせてもらう。

んで、このカードを持つ者はさっきの話はともかく関係者とみられるわけだが、一般人には普通させない」
「それはなんでですの？」
「一般人にこんなファンタジーな世界を巻き込めると思うか？　世界的に認識されているものならともかく、こんなものあってもしょうがない、危険になるだけだろ？　陰陽師とか映画見たことあるか？　あんなのに一般人巻き込めるか。まぁ、巻き込んだのが朝倉なんだけどな」
　朝倉は目じりに涙をためて、顔はぐしゃぐしゃになっていた。正座をして膝の上で拳を強く握っていた。
　朝倉は馬鹿ではない。自分の置かれた状況を理解できるくらいには。自分が何をしたのか。これから自分はどうなるのか。巻き込んだ人がどうなるのか。それを想像するくらいはできる。
「こいつはお遊び気分で死ぬかもしれない裏の領域に足を突っ込ませたんだ。ただ単に面白いという理由だけで」
　朝倉はこの事態の重要性を、まだ完全に理解してはいない。西と東の関係も知らなければ、魔法世界の戦争なんて知らない。一割も理解していない時点で大事であるということを知らしめられていた。
「んで、本当なら記憶封じて終わりとかなんだが、場所が悪かった。こいつら魔法使いは麻帆良を起点としている関東の人間なんだが、ここは京都だ。私たちの領域になる」
「それが何がまずいのですか？」
「うちらはな、マフィアみたいなもんだと思ってもらえればいい。お互い嫌いあってんだよ。一般人への魔法ばれと、魔法を使うという行為はな、マフィアや極道でいうカチコミ行為にあたるんだ。相手の領地で麻薬売って銃を乱射しているって感じだな。そんで今の状況は麻薬を振りまいているところを拘束、その関係者すべてとらえているって感じだ」
「私たちは一般人です。それは先ほどおっしゃっていたではないですか」
「だいたいはな。けど、今回の旅行で魔法先生はひとりだとこちらで

は聞いていた。結果はどうだ。ネギ先生に、ここにいる瀬流彦先生。知っているだけで二人だ。それに、生徒のことは言っていないが、ここにいる龍宮、春日も裏の人間だ。他にいてもおかしくないだろう？

なんせ麻帆良は魔法使いの街なんだから」

続けて千雨は麻帆良の性質を説明した。

麻帆良学園都市は魔法使いの本拠地であり、魔法先生、魔法生徒が多く集まっている。魔法使いの本拠地として機能する側面から結界を張って学園を守っている。

その結界には麻帆良内の人間にも作用する効果があり、魔法を使っても、ある程度は疑問に思わない。麻帆良内の非常識を非常識と思わないようにする。そして、犯罪が起こらないように、犯罪が起きてもすぐに更生できるように性格の成長を促進していること。

「いいことではないですの？　犯罪も起きなければ問題になりませんわ」

「じゃあ、こんなんで外に出たらどうなる？　麻帆良の常識を常識と思っている。まず社会に順応できない。犯罪がおこらない、素直と言えば聞こえはいいが、それははたして自分の成長と言えるのか？　お前のショタコンも、弟を失った悲しみから来たものだろうが、小学校のころから、中学生の今までショタコンってのは本当にお前の思いから来たものなのか？　なんで那波のように保母のようなことをしない？

お前だけならいいけどな、周りにオジコンの神楽坂、ファザコンの明石、木乃香のことを考えすぎている刹那。全員、お前は弟に対してだが、身近に感じる愛情というものは、恋愛感情なのか？　そんな感情を持つ人間が、クラスに何人もいること自体がおかしいことだと思わないのか？　お前の性格を否定しちまってるかもしんないが、考えてみてくれ」

千雨が言ったことに綾瀬は少し考える様子を見せるが、あやかは信じようとしなかった。その性格は自分で一から作ったものだと疑わなかった。

まだ、話は続く。

１４話

「信じられませんわ。そんなこと」
「じゃあ、瀬流彦先生に聞いてみたらどうだ？　麻帆良とはなんなのかってな」
　雪広は名指しをされた瀬流彦に視線を向ける。
「先生、お答えいただけますか？」
　雪広の言葉により、全員の視線がいっそう瀬流彦に集まった。
「麻帆良は、関東魔法教会の本拠地なんだ。世界樹を中心として造られた都市で、多くの魔法使いがいる。日本で魔法使いの最も多い街なんだよ」
「学園都市ではないのですか？　魔法使いの多い街と言いましたが、具体的に何が違うのですか？」
「学園都市にすれば多くの人が集まっていても不思議じゃないし、小さな面積で都市としての機能を併せ持たすことができるんです」
　紡がれた言葉に対しての新田先生の問い。それに答える瀬流彦。
「違いますよ瀬流彦先生、私は学園都市なのか、魔法使いの都市なのかと聞いているんです。学び舎としての都市なのか、魔法使いが住むための街なのか。お答えください」
　新田先生が瀬流彦を見つめる。睨みつけていると言った方が正しいか。その問いに、瀬流彦は直ぐに答えることができなかった。
「……僕自身の見解ですが、両方の意味合いを兼ね備えていると考えています」
　少し時間を空けて、瀬流彦が答える。
　瀬流彦は新田の教師としての熱意を知っている。それを受けて教師として育ってもいる。
　彼は新田の問いに対して裏切るようなことをしたくもなかった。
　また、更なる言葉でごまかしたくもなかった。
「ちなみに、新田先生。ネギ先生はハーバード大学なんて出てないし、魔法使いの学校で学んでただけだぜ。教員免許なんて持ってもいない。それを不思議に思わなかったのは魔法使いが誤魔化していたか

らだ。そして、誤魔化していた理由が『ネギ先生の卒業試験』として使いたかったから」
「それは本当なのですか？　瀬流彦先生」
「……本当です」
　瀬流彦の発言に茶々を入れるように、発言の内容を不利にするように千雨が横やりを入れる。千雨の発言で瀬流彦の『両方の』という言葉の説得力がなくなっていた。
「ネギ先生一人のために！　あなた方は３０人の人生を台無しにしようというのか！」
「ネギ先生はうまくやっています！　それはあなたも認めていることでしょう！」
　新田先生が瀬流彦に叫ぶ。しかし、これには瀬流彦も反論した。
「確かに、ネギ先生はよくやっています。しかし――」
「ネギ先生、授業以外なんもやってないだろ。修学旅行も期末テストも生徒に教えられてたし。朝礼も出てないんじゃないか？　神楽坂に担がれて学校に来ていたこともあったし。新田先生がよくやっていると思わされているだけだろ」
　新田先生の肯定の声を遮って千雨が一言添える。
　今まで疑問にも思わなかったこと。やっていることばかり見ていて、やっていなかったことを気にしなかった事実。
「あなたたちは……そんなことまでしていたのか！」
「そんなことは……」
「確かに。疑問に思いませんでしたが、ネギ先生が朝礼に顔を出していたことなどありませんでしたな。会議にも出ていません。これもすべて認識阻害というものなのだとしたら、あなたたちはどこまで人を馬鹿にしているんだ！」
　新田先生は立ち上がり、瀬流彦の胸ぐらを掴んだ。瀬流彦は苦しげにしながらも新田先生から視線を逸らさない。
「僕たちは支えられるところは支えていこうと言っていたじゃないですか！」
「支えるのと全部やるのは違う。そんなこともわからんのか！」

にらみ合う二人、それを止めたのは綾瀬の発言だ。
新田と瀬流彦の争いを止めようとした訳ではなかったが、自分たちへどのような影響が出ているのかという疑問が先にたち、二人の会話を切るような形になった。
「そのようなことがあるのだとしたら、他にはどのようなことがされているのですか？」
瀬流彦の方を見ながら問う綾瀬。千雨は目で瀬流彦に促した。
「世界樹を不思議に思わなくなる結界、魔法使いの行動を少しなら疑問に思わない結界。少しばかり活発になったり素直になる結界くらいだよ」
「ちなみに世界樹は隠れ蓑である麻帆良に人を寄せ付けないため。魔法使いの行動を疑問に思わないことによって日常的に魔法使いの常識を使えて魔法による行動がとれるようになる。人助けから肉体の強化、ネギ先生は杖で飛んだりな。んで、活発になったりすることで、古たちが毎朝喧嘩してるのを不思議に思わなくなるとかだな」
綾瀬に答える瀬流彦の隣で、実際にどのようなものに使われているのかも答える。
「魔法使いが魔法を使うのは、基本的には侵入者が来る時くらいだけどね」
「そうだな、たまたま夜道で妖怪の類に出会う奴もいるから、そのときの対処がしやすいようにでもある。最初から疑問にあまり思わなければ、心に傷をつけずに記憶操作を行えるからな」
「そうだね、無理やりの記憶操作は人格を変える恐れがあるからね」
千雨の言葉にうなずく瀬流彦。しかし、千雨にとってはこの言葉は伏線でしかなかった。
「そうだな、だから元から人格を変える。疑問に思わないように破天荒なものを麻帆良に入れているんだ」
「それは、どういうことですか？」
「綾瀬、お前も当事者でもあるんだぞ。本を読むのに図書館探検部なんていらない。インディージョーンズじゃないんだからあんな探検必要ないんだ。そもそも、盗掘防止とかで作られたトラップを生徒の

生活区域に置くわけないだろう」
「しかし、私たちのいける場所にも貴重な本はあります」
「生徒が突破できるトラップで本物の犯罪者を捕まえられるわけないだろ。お前は大人より運動神経がいいのか？」
千雨の質問に綾瀬が詰まる。
綾瀬とて、運動神経が悪いわけではないのだが、かといって、大人の男性に勝つような運動神経はしていない。
もっとも、麻帆良の外の人間と比べたら、どうなるかはわからないが。そうであったとしても、それもまた作られたものになるのだからまた違った問題が出てくるだろう。
「そもそも、貴重なら倉庫に入れて、貸し出しのときだけ出せばいいんだ。そういったものがあるのは知っているだろう？　国会図書館なんかはほとんどそうだ」
「はいです。私も利用したりしていますし、実際そのような制度はありますから」
「制度があるならなおさらだ。なんでわざわざ探検するんだ？　図書館でそんなこと必要ないだろう」
「しかし、最深部には魔法の書がありました！　あのようなものがあるからには……魔法の書？」
綾瀬が千雨に反論しそうになるが、自身の発言に気付いて言葉を止めた。
あるはずのないものを追い求めた結果見つけたもの。それの存在の意味にいまやっと気がついたようだった。
「魔法の書？　ああ、期末テストの時だな。ちなみに、頭のよくなる魔法の書が図書館島の最深部にあると噂を流したのは魔法使いだ。ネギ先生の試練のために。なかなか仲良くなったようじゃないか。パートナー候補たちは。その中には近衛もいたからな。ウチから魔法を避けるためにと預けていたのに、態と近づけてたりな」
「しかし、その時のネギ先生の試験は私たちのクラスを学年最下位から脱出させることでしたわ」
雪広は、自分でネギが学校からいなくなるのを阻止するために動い

たので、その内容を覚えていた。
「それは表向きだ。長瀬、お前もその時一緒にいただろう？　運動神経のいいバカレンジャーさんはどんなことをしていたんだ？」
「あの時はトラップのほかにはゴーレムにツイスターゲームさせられたりしたでござるな。『この本が欲しくば、わしの質問に答えるのじゃフォフォフォー』と」
　長瀬の発言で、新田の目がぎらつき、綾瀬の目が見開かれ、瀬流彦が頭を抱えた。
「確実に学園長だな」
「なぜあの時に気が付かなかったのでしょう。それも、魔法というものなのでしょうか。そういえば、ゴーレムが動いているという事実に疑問を感じていなかったように思います。それに、魔法の本を信じるということは、いつもの私ならしないです」
　学園長が魔法協会の会長だということを知った今、そのような行為でネギに対して試練を与えていたということだと、すぐにわかった。
「まぁ、その時に5人は勉強して頭よくなって万々歳ってことになったけど、もしかしたら、集中力の増す魔法とか使っていたんじゃないか？　勉強している間も、テスト中も」
「そういえば、眠そうに解いていたのが妙に調子が良くなった時があったな」
　新田の呟きに千雨は苦笑いをした。たまたまそういった効果のある魔法があるから言ってみたら、本当にそういったことをしていたのだ。
「期末直前に生徒と一緒に行方不明になって、授業を完全放棄したのに結果が良かったから先生になりましたっていうのに皆が疑問に思わなかったのも魔法だな。ネギ先生は試練を受けてからバカレンジャーの家庭教師でしかなかったんだから」
　罪状追加だな。と千雨はメモを取っていく。どんどんと一般人を巻き込んだ魔法協会の、主に近衛近右衛門の罪状が増えていった。それからも、大学部の技術の異常性に対してや、日常の魔法使いによって変えられた常識を列挙していく。

「長谷川さん？」
「なんだ？　委員長」
「あなた方が言いたいことは、大体わかりましたわ。たしかに、ここまで言われればそうなのではないかということは理解できます。しかし、麻帆良にいる私たちになんでそのようなことを言うのですか。結局その事実を知らされてもしょうがないのではないですか」
　そう、知っても結局は変わらないのなら意味がない。戻っても非日常なのだから、結局のところこの会話の意味がなくなるのだ。
「そう思うか？」
「どういうことですの？」
　千雨は雪広と綾瀬、宮崎に対して言う。
「お前等は一般人だ。そして被害者だ。魔法使いの理想に巻き込まれ、ネギ先生が成長するためのエサとして配置された人形だ。しかし、それを知って麻帆良に居続けるのか？　なぜ転校しようと考えない。その時点でお前等はおかしいんだ。逃れるために、あの地から離れようとは思わないのか」
「しかし長谷川さん、あなたの言っていることは麻帆良の外の人の常識です。私たちは麻帆良にいて何の不自由もないのですよ？」
「確かに綾瀬の言うとおりだ。だったら綾瀬は、麻帆良の常識が常識じゃないと知った今でも、麻帆良から出てちゃんと生活できると思っているのか？　麻帆良に一生いるつもりか？」
　綾瀬は千雨の問いには答えられなかった。千雨が逆の立場に置かれても無理だろう。先のことなんて中学生にはわからないのだから。しかし、今そこで甘えを見せてそのまま流したら、もう人生は片方のレールから切り離されてしまう。
「今ここで、二つの選択肢があるんだ。麻帆良に戻ってネギ先生に都合のいいように使われる人形や駒としての生活を送るか、ウチらに保護を求めるか」
「長谷川さんたちに言えば、何とかしてくれますの？」
「委員長は無理だ。お膳立てはするけど、財力がある奴は自分で何とかしてくれ。どうしても何とかできない奴はこっちでする準備もあ

るってだけだ。むしろ雪広財閥が麻帆良の都市ごと少しづつ一般常識を戻していってくれよ。そうすれば経済の独占とかもできんだろ？　というか、そうして貰わないと困るんだ」

「困るというのは？」

「私たち呪術協会は結界の撤廃と、日本国外への退去を犯罪者集団である魔法協会に要求するからな」

15話

「そんなの認められるわけがない！」
　瀬流彦の叫び声に、その場にいる全員が視線を向ける。
「なら、あんたは今のまま麻帆良を残しておけというのか？　そのまま都市の一般人を傀儡にしているのを傍観しろと。今のこの状況を許していたらどうなる？　こんな問題が起きているんだ。これで許したら、それこそ問題だ。麻帆良だけでなく、他の都市、終いには日本丸ごと飲まれるぞ」
「そんなことはしない。僕たちは――」
「なら、今回の親書の内容はどうだ？　関東が関西に口出しし、親書とは名ばかりの娘婿に対しての命令と叱咤。しかも自分たちの非を認めていない状況で、敵意をこちらの、西が原因のように言う。相手の心情を考えない行為をしている人間が勢力を広げようとしているんだ。私達がそちらに何をした？　そちらは私達に何をしたかを理解しているのか？」
　瀬流彦は知らないのかもしれない。大戦時に魔法使いが何をしたのかを。東は知らないのかもしれない。けれど、問題はその後だ。西の長に近衛詠春が座るとき、本来ならば功績を認められるはずがなかった。魔法世界での功績など、日本では何の意味もなさないものなのだから。両面宿儺を封印したという事実も、原因がわからない、なぜあのタイミングで封印が解けたのかなど、疑問を解決しない限り手放しで評価できるものではない。さらに、青山詠春は西になんの関係もなかったのだ。それが近衛詠春になったからと言って長に収まるのはありえない。東の長の後押しがあったりしなければ。
「まぁ、近衛一族のせいと言えもするんだけどな。その主導が関東魔法協会の長で、組織だってこんなことされたのはいただけないな。組織として手を伸ばす危険性がある以上、それをのさばらせておくわけにはいかない。実質的に日本を掌握しようとしたんだからな、そちらの大将は」

麻帆良が麻帆良だけにとどまっている限り、外に出る可能性は低かった。
しかし、今回の京都での行為、そして親書の内容。それがお互いの立ち位置を激変させた。京都での一般人への行為は、認識阻害と思考操作によって好き勝手出来るということを証明し、親書によって、西と東の上下関係を決定づけるような内容を送ってきていた。
これを受け取っていたら、了承していたら、関西呪術協会は麻帆良の、関東魔法協会の下となり、先に起こった行為をされても文句を言えなくなる。実質、日本で魔法協会に文句を言える人間がいなくなるのだ。
そうするとどういうことになるのか。日本のどこで、誰が操られようと阻止できなくなるのだ。政治に魔法使いがどっぷり浸かり、政治を魔法使い主導にされる危険性もあるのだ。
関西呪術協会は、起こった事件と、その内容、その背景、親書の内容と今後の危険性を示唆している。もちろん、議員の中には魔法使いを支持する派閥もあるが、今回のような行為が行われてもなお、魔法使いを支持するものは、明日は我が身ということが判断できるものならば出ないはずだろう。ネギ・スプリングフィールドによる行動と、その周りの対応は、日本にとって何の利益もなく、損にしかならないのだから。
「場合によっては、私たちは魔法を表に出す用意もある。このようなことが行われて、一般人が知らずのうちに支配されるのならば、魔法使いの存在と、あなた方が麻帆良の中で今までしてきた行為を知らしめることになるだろう」
「本気なのか!?」
「本気だ。その場合には麻帆良は特別自治区となり、時間をかけて一般常識を取り戻してもらう。雪広に話したのは、その際の経済面での架け橋となってもらうためだ。そうでなくとも機能するだろうが、親身になって動く企業というものも必要だろう?」
千雨は、あやかが自己犠牲精神をもって何かと損をする性格だということを知っていた。というか、明日菜に振り回されてため息を吐く

あやかをなんども見ていた。なので、このような状況下におかれた場合、クラスメイトのために一肌脱ぐ可能性が高いことを見込んでいた。

「たしかに、そうなった場合の協力は惜しみませんが……だからと言ってそこまでする必要性はあるんですの？　私達はいままでの生活に満足していますわ」

知りもしなければ、幸せに暮らせていた。不幸と思われるかはともかく、不幸と思うかはわからない。知らずにいれば幸せだった。そういうこともあるだろう。

「じゃあ、これからずっと、自分たちが幸せだからこれからも、麻帆良で常識から離れる人を量産してくださいとでも言うつもりか委員長？」

しかし、それは個人の話であり、全体的な被害者の中で何人がそう思うのか。今のあやかの発言のように思うものもいるだろう。しかし、逆に知らせたことによって幸せになる人間もいる。どちらがいいかなんて、やってみないと分からない。それならば、その先に出る被害を防ぐことを優先した方がいい。

「そうは言いませんが……そうですね。しかし、私どもが納得のいく内容なのでしょうね」

「じゃあ、私たちが放っておけば、それは納得のいく内容なのかな？」

あやかに対する千雨の問いは、あやかが答えられるものではなかった。

あやかが望む答えと、実際に答えるべき答えが逆なのは、理性ではわかっているからだ。あやかの問いに対する答えなど、関西の人間が出せるわけがない。関東の内情など、ほとんど知らないのだから。

それを納得のいく内容にできるかと問われて、はいそうですと言えるわけがない。

だから逆にあやかに問うた。私たちが放っておけばいいのかと。あやか自身ははいと答える。しかし、そこではいと答えていいものなのかという葛藤がある。

「それは……」

「違うだろう？　おかしくされているのを直す。それが私たちだ。本来はそこで終了でも構わないんだ。
　だけど私たちはそのうえで、おかしくされちまった人間を何とかするから、それに協力してくれないかと言っている。まずそのことを認識しろ。私たちが麻帆良を何とかしようというものは善意でしかないんだよ」
　千雨はあやかに対して交渉を持ちかけているが、あやかが協力しなくても構わない。麻帆良に対して対処をするのは、自己満足の意味合いが強く、他には世間体くらいのものだ。
　処理しなくても、勝手にしていれば、淘汰されるものは淘汰され、日本は自然に戻る。麻帆良の者は不幸になるが、同情こそされるが、それだけだ。それを事前に何とかしようと持ちかけているのだ。
「もっとも、それが成されるかなんて、分からないんだけどな。これからの交渉次第では、麻帆良の結界がのこったまま戦争になるだけだ」
「なんですの!?　戦争なんて！」
「なるんだよ、当たり前だろ。ケンカ売ってきて何もしないではい終わりなんてなったらそれこそ問題だ。最低でも結界を解かないと、アンタらみたいに被害者が出る。委員長はいいのかもしれないが、それを納得しない奴が一人でもいたらその時点でアウトなんだよ。その前に前提条件で思考操作が加わってんだからアウトだ」
「しかし、私自身は――」
　その後の句は告げれなかった。自身が操られていないと証明する手段はないのだから。それに、自分がいいから他も大丈夫だ。だから放っておけと言えないのだ。
「人を操っている犯罪者集団を追い出すまでは引かないさ」
「僕たちは犯罪組織じゃない！　皆のことを考えて」
「誰も犯罪組織なんて言ってねえよ。犯罪者の集まりだって言ったんだ。ＮＧＯで頑張っている？　立派じゃないか。思想が絡む中東での戦争に介入して正義ごっこしてんだろ？　魔法使って。別にそんなんはいいんだよ。問題はな、麻帆良でのことなんだ。それこそＮＧＯなら日本にいる必要がないだろうが。なんで日本にいるんだ？

なんで麻帆良なんだ？」
「なんでって……」
「イギリスはしっかりと一般人と別れて魔法使いの街を作っているじゃないか。すみわけができている。なのに日本では、麻帆良ではそうしていない。なんでだ？」
　誰が答えられるでもない疑問をぶつける千雨。
　外からバタバタと足音が聞こえてくる。
「どういうことですかっ!?　国外追放とは！」
　勢いよくネカネが障子を開けた。それを追うようにして他の二人もやってくる。焦りながら千雨と千草の方を向いているのを見ると、ネカネを止めようとしたのだろう。
「そういうことだよ。ついでにネギ先生には最低でも２０年間地球に、そちらで言う旧世界にいることを認めない」
「そんなっ!?」
「残念だったな。せっかく麻帆良に逃がしたと思ったんだろ？　隠れ蓑にするためとかじゃないのか？　英雄さんはいろいろと大変だからな」
　ネカネの表情を見てわかっていた。ネカネは特に過保護だ。ネギに近ければ近いほどネギのことを優先する。そんな彼女らがＭＭの元老院のもとではなく、アリアドネーではなく、麻帆良を選んだのは魔法世界では何か不都合があるからだと。
　今現在、犯罪者としてとらえられている彼だが、情状酌量の余地はあるにはある。実際に彼の置かれた状況下で犯罪と認識して行っているものが少なく、周りがそれを容認していたのだから。しかし一般人に被害を出しているという事実は変わらず、それはやってはいけないことだということを知った上での自己中心的な行動であるので実刑にはなるのだ。
　ＭＭはもちろんそれを許さないだろう。しかし、西としてはネギが罪を負わないことになれば、ＭＭに屈したことにもなる。譲歩として一番なのはネギに地球から去ってもらうことだ。日本でなく地球なのはＭＭの近くに追いやることで、その条件を呑みやすくさせるため

だ。
「あんた等ってさ、結局やってること変わらないんだよ。だったらどこでやっても一緒だろ？　ただ単にウェールズで英雄にするのか、麻帆良で英雄にするのか、魔法世界で英雄にするのか。そんな茶番劇に付き合う気はないんだ。魔法世界で自分たちの好きなようにやってくれ。こっちに迷惑かけんな」
　ネカネやメルディアナの学園長は、ＭＭ元老院の危うさを知っていた。英雄にさせて利用しようとしていることを。それを危惧して麻帆良にやったのだ。しかし結局どこに行っても彼は英雄として育てられる。しかも、その場所の人間の好きなように。その最終的な結果は、全部作られた英雄だ。ネギが信じる者がすべてだという風に育てられる都合のいい英雄。それを千雨は許さなかった。
　国外にいても、彼の周りにいる人間たちは、日本に行こうとするネギを止めないだろう。魔法世界に隔離しなければならない。しかも逃れられない首輪をつけて。
「そんで犯罪者集団の関東魔法協会には５０年の国外退去だな。本当なら、ここでウェールズのメルディアナの方からとか、アリアドネーの中から何人か出してもらって魔法世界の方の立場も維持してもらうことで均衡を保とうとしたんだけど、これだもんな。関東魔法協会と立場の変わらないウェールズは駄目だ。アリアドネーの方はネギ先生が関係なかったら変わるのかね？」
　千雨はセラス総長の方を見た。

16話

千雨の視線を受けてセラスが一歩前に出る。
「あなた方の意見を聞く前は、大丈夫と自信を持って答えられたでしょうね。しかし、今はと問われればこう答えます。魔法使いとしての本分を全うすることはできるでしょう。しかし、魔法都市の機能を維持しながら、麻帆良を学園都市にすることは不可能です」
千雨は目を細めた。そして何も言わない。スッと千草の方を見る。
「アリアドネーの方はわかりました。では、ドネットはん。メルディアナの方はどうでっか？」
次はドネットに視線が向かう。
「私たちメルディアナの決定は、戻って指示を仰がねばなりませんが、一般人との交流を持っていなかったわけではありません。なので、別々に暮らしながら麻帆良の地を守るということならば可能かと判断します。しかし、私たちはウェールズの魔法協会です。指示があれば日本に来ることはあるでしょうが、基本的には日本魔法協会が統治するのが筋でしょう」
「だけど、その結果がこれや。それについては？」
「私の意見は変わりません。魔法協会についてはこのまま存続することを支持します。しかしながら、現在魔法協会に所属する人間が適任かどうかについては再考する必要があると考えます」
ドネットはそう答えると、もうすべて答えたという風にセラスの隣に座る。千草と千雨はそれを見てお互いに視線を交差した。
「あなた方の意見はわかりました。セラス総長はともかく、ドネットはんは一番偉いわけでもあらしまへんから、確認が必要でしょう。別室を用意いたします。ネカネはんと瀬流彦はんもそちらへ」
千草が立ち上がり、別室への移動を促す。
「龍宮と春日はどうする？」
今まで横で傍観――片方は余計な被害を被らないように必死にそっぽを向いていた――に尋ねる。明確な裏の人間が移動する今、彼女らはどちらにもいることができる。

「私は移動しないっすよ!?　千雨ならわかるでしょう!?　何考えてるんすか！」
「いや、シスターシャークティー怖さに移動することもあり得るかなと思ってよ」
「うっ……私は今緊張してそんな判断も下せなかったということで」
「しかし、この話は録音されている」
「ギャー！　消すっすよー！　今すぐ消すっす！」
「証拠になるようなもんに音声加工できるわけねえだろ。諦めろ」
　完全に崩れ去る春日。その隣で龍宮は動こうとしなかった。
「龍宮は？」
「興味ないね。それよりむしろ、なんで私がここにいるのかを知りたいのだが」
「しょうがねえだろ。ここにいることで清廉潔白になるんだ。我慢しろよ傭兵さん」
　そう言いながら、懐から札を取り出す。
「ほれ、迷惑料５００万円分。あとは、夕飯の後に老舗の餡蜜取り寄せてやるよ。政府高官との会合とかでも出されたことあるやつ。何杯欲しい？」
「とりあえず5杯は最低。何か協力することがあったら言ってくれ。誠心誠意対応しよう」
　札を受け取りポケットに大事にしまいこむ龍宮。一瞬胸に入れようとしたのを、周りの視線、特に綾瀬が凝視していたのでやめたのだ。
「じゃあ後で頼むかもな。と言っても書類の保存か虚偽の有無を証言するくらいだがな。無理にクラスメイトを落としいれる必要はないぞ。そういうのは私がやるから」
「ちょっと待ってください。千雨さんの言葉に嘘があるようには思いませんが、なぜそのようにことを進めるのですか？　なぜ千雨さんはそこまでするのです。恨まれると分かっていて」
　あやかが千雨に解いた。それに対して千雨は重い腰を上げた。出入口まで歩いて行き、結界符を張る。
「別に、もうアンタらと会うことはなくなるだろうから恨まれても関

係ないだけだ」
「それは嘘です。それならば、一方的に物事を進めてしまえばいいだけです。その、魔法使いの方々との話だけで済んだはずです」
綾瀬が反論する。確かに、すべて無視してことを進めることもできたはずだ。しかし、
「それをやったら魔法使いと同じになる。それだけは嫌だった。他の麻帆良の人間何千人はそうなってしまうが、自分の手の届く範囲は恨まれても関係ない。自己満足でもいいから教えたかった」
そういって符を取り出した。
「夢見の符を改良したものだ。術者が望んだ記憶を見せることができる。これのほかに無理やり記憶を見るものもあるがな」
魔法使いで言う読心の魔法だ、と答えてそれを人数分配った。
「見たい奴だけ見ればいい。ただの不幸自慢だからな。これが私がここにいる理由だ。宮崎は見ないほうがいいかもしれない。ネギ先生のことが好きなんだろ？　ネギ先生は関係ないが、魔法世界と魔法使いに今以上に偏見を持つかもしれないからな。私は特殊な例だから」
それに対して宮崎は静かにゆっくり首を横に振った。千雨は符を持った人間に対し、自分の持つ符で記憶を送った。
そこに映し出されるのは千草に会う前の千雨の記憶。自分だけが非常識になれずに悩む日々。間違っていない自分がはじかれる様子が映し出された。千雨が常識を訴えれば訴えるほど、いかに麻帆良が非常識かが解る。
小学生の記憶だが、小学生だったがゆえに直接的な言葉が放たれる。それに傷つき変わっていく千雨。それが余計麻帆良と一般の違いを際立たせて彼女らに見せた。記憶を見せていた時間は1、2分ほどだが、経験した時間は3時間以上にもなった。
部分的ではあるが、記憶を見終えた彼女らの反応はなかった。反応できなかった。
誰も言葉を漏らすことはできない。千雨にかける言葉が見つからなかったのだ。
何分が経っただろう、何十分が経っただろう。沈黙に耐えかねた千

雨が腰をあげながら声をかける。
「さて、もうそろそろ夕食の時間だ。眠っている他の連中には悪いが、今日くらいはうまいもん食わせてやるよ」
「待ってください」
千雨が退室しようとするのを綾瀬が止めた。
千雨は綾瀬の方を振り向くが、彼女は俯いており、表情は窺い知れない。
龍宮と長瀬は顔をあげていたが、他の面々もまた、千雨から顔は見えなかった。
「どうした？」
「長谷川さんは、このような経験をされていて、なぜ麻帆良にいるのですか？　それこそ、麻帆良から離れればよかったのでは？」
「ん、私が一人ならそうしたさ」
一息ついて千雨がつなげる。
「けどさ、両親がいるんだ、早々転校なんてできないさ。その上うちの両親は麻帆良に染まってたからな。常識がないんだ。一緒に余所に移ったら、それこそ破滅さ」
「しかし、それほどまでに非常識なら、私たちは麻帆良に完全に隔離されているはずです」
「余所ではな、麻帆良ほど他人がくっついてないんだ。常識はずれな人はただの痛い人扱いだ。一日二日はそれでもいい。けどな、職場を持ったり完全に移住したらそんなこと言ってられない」
「実際に麻帆良から出た例もあるのではないですか？」
確かに、常に麻帆良にいる人間もいれば、出ていく人間もいる。完全に麻帆良から誰一人として出ていかないなんてありえない。
「そうだな。けどな認識阻害で非常識になっている人間のほとんどは出ていけない。そんな時は逆に認識阻害をかけるんだ」
いつもの非常識が認識阻害されて常識の判断を下すようになる。そうすれば今度は常識人となる。一般知識だけでなく、スポーツなども運動神経の発達などが一般と変わらない上での優秀なものとなり、機械工学をしていた人間などは、その知識と発想を封印される。そし

て外の科学者と変わりない人間となる。もしくはそのままで外部の非常識機関に行くかだ。
「私にはできなかった。両親を外に連れていくことは。だってさ……そんなことしたら、私の両親は両親じゃなくなっちまうから」
　どんなに辛くても、千雨はそれを選ばなかった。無理やり連れだすこともできずに、連れ出したとしても生活ができない。生活ができるようになったとしても、そのような処置をしたとしたら、それはその人本人と言えるのだろうか。
「麻帆良にいるときは、確かに意識操作されていたのかもしれない。だからと言ってそれを無理やり直したとしたら、それはその人じゃなくて、同姓同名の誰かになるんだ」
「人はいかにして人になるかということですか……」
　綾瀬はそのまま黙り込んでしまった。そして、次には長瀬が質問する。
「千雨殿。千雨殿から見て、私たちはどのような存在であったのでござるか？　千雨殿は常に一歩下がったところから拙者達を見ているように感じられたのでござるが」
「そりゃそうだ。確かにアンタらはクラスメイトだ。それは変わらない。だけどな、絶対にどこかでずれが生じる。いびつな性格があってそれは作られたモノなんだ。仲良くなんてなれるはずがないだろう」
「しかし、共通点があれば仲良くはできるのではないのでござるか？」
「いつどんな突拍子もないことで裏切られるかもわからないのにか？
　しかも相手に悪意はなく、相手のせいでもない。やり場のないものを貯めこむくらいなら近寄らない方がましだ」
「むぅ……」
　相手が悪いわけでもない。自分が悪いだけでもない。友達になりたくないわけでもない。けど、なれなかった。だからこうなった。長瀬には反論することも、同意することもできなかった。
「千雨さん」
「なんだ委員長」
「千雨さんは、辛くありませんでしたの？」

千雨は、あやかの言葉に一瞬固まると、あやかの方を見て話しだした。
「辛くないわけないだろう。麻帆良にいなければ、こんなことにはならなかった。麻帆良さえなければ普通に過ごせた。麻帆良に魔法使いさえいなければ、今ここにいないで、仲のいい友人と旅行を楽しんでいたのかもしれない。そんなことは何度も思ったさ。けど、魔法使いがいた麻帆良にいて、出ることもできずに、両親も治せずに、クラスメイトはどんどん染まって非常識になっていく。魔法使いでもいい人はいたんだ。けど、どんどん変わっていく。認識阻害の結界によって、魔法使いがありたい姿へと極端に姿を変えていく。魔法使いに対しては、治すとした人はいたよ。けどさ、いくらその時にその分治したって、蓄積されたものは変わらないんだ。『君は実は君の常識は違うと修正されて、君の生きた十数年の知識をその場で捨てることはできるかい？』ってさ。もう、手遅れだと笑っていたよ。その人はみんなのことを考えているようだった。本質はそうなのかもしれない。だけど魔法使いの考え方を強要されたんだ。結界によって。わかるか、お前等は私にとっては、下手すりゃ両親も、操り人形にしか見えないんだ。いつ変わるかわからない。いつ突き放されるかわからない。本人がどんな奴でも、いつかは敵になる。そんなやつらの中で幸せに過ごせるはずがないだろう！　これでもお前は麻帆良がこのまま魔法使いに操られてればいいというのか雪広あやか！　人形になって、傀儡になって、無理やり与えられた幸福感と幸せを他の人間に押し付けるのか！」
あやかは二の句を告げない。先ほど自分が言った言葉と、今の千雨の叫びから何も言えない。千雨はそのまま部屋を出ようとする。
「長谷川」
「なんですか、新田先生」
「すまなかった！」
床に何かが叩きつけられた音がする。千雨が驚いて振り返ると、そこには土下座をした新田先生がいた。
「おい、やめてくれよ新田先生！」

「長谷川がそんな思いをしていることを、私は2年間まったく気が付かなかった。教師失格だ」
「気が付かなかったんじゃねぇ、気が付けなかったんだ。しょうがないんだよ」
「しかし、小学校のいじめは、そうでなくても防げたはずだ」
「あんなのいじめじゃねえよ。小さいころは確かにきつかったが、あんなもの友達同士でもからかいで言うだろ小学生は。悪意はなかったんだ。言っていたやつも」
「しかし、注意してみていれば何とかできたはずだ。小学校から、いまのいままで誰一人として長谷川に救いの手を伸べられずに、抱え込ませてしまったことを、今ここで謝罪したい。すまなかった！」
新田は額を床に付けたまま、千雨に向かって叫んだ。千雨はいきなりのことに動揺し、何もすることはできない。
「そんなこと言われても困るよ新田先生。あんたは何も悪くないんだ。いつもだってちゃんとした指導をしていたし、できてないのは魔法使いのせいなんだ。私は先生に謝ってほしくない。先生は今だって生徒のことを考えてるじゃないか」
新田の顔は上がらない。右往左往する千雨を見て、龍宮が助け舟を出すまでそれは続いた。
ひと段落した後、千雨は部屋を出る。
「チッ……新田先生には悪いことしたな」
最後の自らの演技が生み出した結果に嫌悪しながら、千雨は自室に戻って行った。

１７話

千草は４人を連れて別室に向かう。
「先に連絡したい人がおりましたら、時間を作りますが？」
その声に答えたのはネカネと瀬流彦の二人だった。瀬流彦は携帯電話を取り出して連絡を取ろうとする。それをいったん制して空き部屋にドネットと一緒に入れた。
ネカネは電話を取り出すが、掛けようとしない。
「ネカネはんはよろしいんですか？」
「あの、ネギと話せはしませんか？」
その問いに千草は小さく首を振る。
「あの子は主犯ですから、今は寝かせております。無理どすな」
「なんでですか!?　あの子はまだ１０歳なんですよ!?」
「その１０歳を代表にしたり教師にしたのはそちらのはずですが？」
睨みつけてくるネカネの視線を涼しい顔で流しながら、千草は答える。
セラスはそれを見て、ため息を吐いていた。
「ネカネさん、あなたもネギ君が大事なら、そのような言動は避けなさい。たしかに、千草さんに言うような言葉じゃなかったわよ今のは」
「なぜですか？」
「それを言うべきはあなた方のところの学園長であり、関東魔法教会の会長です。正直、私も驚いたのです。ネギ君がこんなところでこんなことに巻き込まれたのに。あなた方は何を目的としてネギ君を日本に出したのか。何から守るためなのか。何を学ぶべきなのか。そして、それは今成せているのか。自信を持って答えられますか？」
本来はセラスが京都に来る予定はなかった。教授の一人を京都に向かわせるはずだった。いきなりの報告で総長自ら来るようになったのだ。
しかも、その時はこのような問題が起きるという事態は考えもつかなかった。

ネギ・スプリングフィールドが代表として、特使として京都に向かうという情報が流れてきたのがまず一つ。闇の福音を倒したという情報が入ってすぐだったために、怒涛の活躍とでもいうのだろうか、それに興味を持って、ネギにも会えると踏んで京都に来たのだ。

しかし、ゲートをくぐって得た情報に、さらに驚いた。ドネットによって得られたネギが関西呪術協会にとらえられたという情報。

自分が友好を結ぼうとしていた相手が、英雄の子を捕まえたという事実に唖然とした。

そして、今日この場で、自分の認識の甘さを痛感した。

大戦の勝利に喜び、そこで終わっていた自分たち。全く関係のないところで、負の連鎖が繋がっていた。それを初めて知った瞬間だった。

ドネットも少なからず、関西への認識を改めているだろう。この二人は、交渉をする立場にいるために、敏感に反応できている。しかしネカネはそうはいかない。正直、かなり盲目になっていて判断能力を失っていた。メガロメセンブリアの代役であったはずのドネットが、ネカネの代わりにウェールズの人間として動いている。

「なぜネギ君が教師をしているのですか？　修行の地でしたら、私達のところでもよかったはずです」

「それは、卒業証書に書かれていたから……私は心配したんです！ネギが外国で教師なんて……」

「卒業証書？　修行の地？　それはあなた方が決めたものでしょう？」

セラスはネカネにつづけて言う。

「それに、教師が修行など、私は聞いたことがありません」

セラスは学園都市アリアドネーの総長として、卒業してすぐの人間を教師になどしない。教師になる人間は、しっかりと専門のカリキュラムを修めていると告げた。教師をするということの難しさを一番理解している身として、ネギに与えるものではないと言う。

「ネギ君のことを考えるなら、『悠久の風』に預けてもよかった。私たちに預けてもよかった。なぜ一般人のいる所へと送ったのか。あな

たに言ってもしょうがないですが、あなたたちの学園長の考えは理解しかねますわ」
　セラスは本当におしいと思っていた。なぜネギがこんなことに巻き込まれねばならなかったのかと。英雄の息子に何を求めているのかと。メガロメセンブリアから逃げるためか。魔法世界から遠ざけるためか。保護したのなら、なんでこのようなことになるのかと。
「千雨はんが言っておりましたな。麻帆良はネギ先生のための箱庭になっていると」
「箱庭ですか？」
　セラスの言葉に、疑問に千草が答える。
「ネギ先生が来てから、さらに麻帆良はおかしくなったといっておりました。不思議なこと、魔法使いの関係することが浸透し始めて、ネギ先生への好意があふれ始めたと。すべてがネギはん中心に回るようになって、試練が与えられ、まるでネギ先生を育てるための箱庭だと。さっきまでネギはん中心に考えていたあんたらの反応を見る限り、あながち間違いとは言えまへんな」
　千草の言葉に対し、セラスはどう反応もできない。答えを知っているのは麻帆良の人間だけ、その中でも学園長だけだろう。
「しかし、疑問なんどすがネカネはん、ネギはんはいつ関東所属になったんどすか？」
「え？」
　千草の疑問に、ネカネは疑問で返す。何を言っているのかわからなかったのだ。
「ネギはんはこの京都に、言わば親善大使として来たわけどすが、親善大使というのは普通、そこに所属しとるもんが来るもんでっしゃろ。誠意を見せるためにも。ここにネカネはんが来たように、セラスはんが来たように。ドネットはんは……問題外。逆に言えばあのような対応をするのが、自分のところの人間を使わない理由になるわけどすが……西と東を仲良くさせたい人間が出してきたのやから、ネギはんは当然関東所属の人間なんでっしゃろ？」
　千草の言葉を聞いて、目を見開いたネカネ。それでそうだという答

えなら、ネギはいつの間にか関東に移籍させられたことになり、そうでないと答えるなら、ネギが利用されたということになる。どちらにせよ、メルディアナの人間が損をする、許せることではなかった。
「そ、それじゃあ」
「まぁ、公式な見解出す前に確認しといてくれまへんか？　それでネギはんへの対応も、罪状も変わるかも知れまへんし。自覚して任務をしていたのか、利用されていたのか。ネギはんがメルディアナ所属なんやとしたら、そっちにも責任が出てしまいますが」
　それでも、ネギはんは被害者的な立場にもなれますな。そう千草は続けた。
　ネカネはそれを聞くと黙り込んだ。
「そもそも、なんで修行中の身の人間にそんなことさせはったんでしょうな。しかも、教師をするのが修行やのに、魔法関連のことを押し付けて。まるでネギ君を利用して自分の思いどうりにしとるかのように」
「たしかに、これは教師の仕事ではありませんね。教師とするならば、生徒のことを考えるべきです」
「ま、そこは追々聞いていきましょう」
　それからはただ、二人を待つ。三人はそのまま話すこともなく、各々の思考に没頭する。長い時間、瀬流彦は戻ってこなかった。
「遅いですね」
「防音結界が張られてますから、中の様子もわかりまへんな」
　話が長引いているのか、既に時間は一時間を超えようとしていた。予想以外に長い状況に、千草が二人を別室に案内しようとするが、二人はこのまま待つと言ってとどまる。繋がり部屋の一室を用意したため、自分たちも部屋で休めはするのだが、何とも手持ち無沙汰だった。
「千草様」
　そこに一人の男が姿を現した。彼は他に人がいることを知ると、退室しようとしたが、それを制して内容を聞くことにした。
「どないしたんや？」

「麻帆良の生徒のことなのですが……」
　言いずらそうにネカネとセラスを見る。
「かまへん。なんや、誰かが起きたりしたんか？」
「いえ、修学旅行を続けているクラスのことで、苦情の件数が３０件を超えましたので代表者と話がしたいと」
　常識から離れた人間である麻帆良の生徒たち。詠春が長から外れたことから、京都の認識阻害も使用禁止にされていた。その中で修学旅行を続けさせた他のクラスが、騒がしいと苦情が相次いだのだ。もちろん、そうなることは織り込み済みであり、そうなることが関西の望んだ展開ではあるのだが。
「代表者？」
「新田教諭という者が、責任者だそうです。他のものでは限界だと」
「そうか、やっぱり麻帆良の人間は騒ぎを起こしたんか」
　二人に言い聞かせるようにつぶやく千草。
「仕方あらへん。まだあちらもかかるみたいやし、一旦やめましょか。夕飯を食べてから改めてということでよろしいでしょうか？」
「私は構いません」
「私もです」
　二人が了承したのを確認すると、伝令をした男に案内を任せて、新田を呼びに向かった。

「千雨」
　その時、千雨は向かい合って話していた。
「聞いたぜ、なんか封印されてたんだって？」
「うん、全部思い出した」
　明日菜と向かい合う千雨。千雨が明日菜に受ける印象はかなり変わっていた。元気が取り柄といった感じの明日菜に、今感じるのは落ち着いた様子だった。
「それで、紅き翼の高畑先生が保護者なんだ。明日菜って名前もそうだし、旧ウェスペルタティア王国のお姫様の影武者あたりだと踏んだ

んだが、どうよ。それとも実はネギ先生のパートナーになるために訓練された兵士か何かか？」
「惜しいね千雨。本人よ。アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアが本当の私」
千雨は明日菜の言葉に口笛を吹いて反応した。
まさか、本人だとは思わなかったのだ。
「お姫様、ご機嫌麗しゅう」
「殴るわよ？　わたしは神楽坂明日菜でもあるんだからね」
恭しく頭を垂れる千雨に対し、握り拳を作る明日菜。
「しかしなんでお姫様がこんなところにいるんだよ。隠れるんだったら普通はネギ先生のところになんかいないだろ。余計狙われるぞ」
「私もわからない。私が記憶を失ったのは、一般人になるためだから」
明日菜はそっぽを向いて答える。
「なんでかわからない。タカミチに聞いてみないと」
「そうか。んで、わざわざ私を呼んだ理由はなんだ？」
明日菜は自分の記憶が戻ってから、千雨を呼んだ。
一つは自分のことを伝えるため。
そしてもう一つは。
「お願い千雨、私を逃がして。私、探しに行かなくちゃいけない人がいるの」

18話

「逃がせ？　いや、無理だろ。普通に考えて」
「うん、そうだよね……」
　顔を伏せる明日菜。
「そんなにやばいのか？　関東か連合は」
「うん。それもあるよ。けど、どちらかというと、人を探したいって気持ちの方が強いかな」
「誰だよ、探したい人って」
「……ナギ・スプリングフィールド」
　出た名前に、千雨は驚きながらも納得した。
　紅き翼の高畑が連れていたのだ。紅き翼のリーダーに知り合っていたとしてもおかしくない。
「おいおい、サウザントマスターか。えらい有名どころが出てきたな。それだったらネギ先生と一緒にいたほうが情報が集まるんじゃないか？」
「ネギは駄目。あいつはナギにはたどり着けない」
　明日菜は小さく首を振った。
「なんでだ？　あいつの周りには情報が入るだろ。今のお前だから言うけど、ネギはメガロメセンブリアへのエサにするから、魔法世界にもすぐにいけるぞ」
「ネギは英雄にされていくだけ。ナギの背中を追ってナギ自身を追った気になっている。逆に遠ざかっていくのも知らずに」
　明日菜はどこを見ているかわからない瞳で続けた。
「ネギもナギと変わらない自分勝手な奴よ。けど、縛られた自由。決められた範囲でしか動けない、家の中で飼われている猫のよう。ナギはサバンナを駈けるライオン。自由に生きて、自由に動き回る、野生の王だった。かわいがられて王様気分のペットのネギはナギにはなれないしたどり着けない」
「いや、あれはいいように調教されたワンコだろう」
「ならワンコとオオカミでもいいわよ。絵に描かれた理想像しか追い

求めていない、本の中の主人公を求めているだけ。父親の本質じゃなくて憧れのサウザントマスターの面影しか追いかけないネギとは一緒にいてもナギには会えない。探しているものが、同じようで全然違うのよ」

明日菜の言葉を聞くに、本当にサウザントマスターと知り合いだったようだ。

千雨はそう思ったが、それと同時に、危ういとも思った。

「お前は、関西でそういうことを言ってはいそうですかって通ると思っているのか？」

「……思わないわ。だって、皆が恨んでるのは詠春とナギでしょう？皆を不幸にした詠春と、詠春を引き連れていたナギ。それに、多分関西の人を使った理由の一つに、私を助けるためっていうのがあるから、余計恨まれるんじゃないかな」

澄ました顔で言う明日菜。それが分かっていてなぜいうのか。そう千雨が質問する前に、アスナは答える。

「連合にいっても、関東に戻っても、どうせ私は操り人形に戻るだけ。記憶が戻った今の私は封印されて、また一から作り変えられる。どうせ死ぬのなら、最後ぐらい自分の足で歩いて、最後まであがいてみたい。そう思ったの」

たしかに、今まで自由を許さなかった人間を、これから急に許すとは考えられない。

「それは、今までお前を生かすために封印していたんじゃないか？」

「千雨、あなた馬鹿？　ならなんでネギなんかと会わせるの？　それに、自由も記憶もない人生なんて、死んでいるのも同じじゃない」

「同じことを言って否定されたんだけどな、私は」

「だって、麻帆良だし」

明日菜の言う『麻帆良だから』には、いつもと違う意味が込められていた。もっともな意味合いでの発言だったが。

麻帆良の、彼らの求めている答えが常識となるような場では個人の考えも一般常識も間違ったものになる。求められるのはーー

「あー、うん、悪かった。まぁ、お前は送り届けるかわからんが、麻帆

良には返すぞ。逃げるんだったら麻帆良の内情全部吐いて関東の人員を魔法世界に叩き込んでから戻ればいい。そしたら、逃げ出す機会なんていくらでもあるだろう」
「うん、ありがとう。千雨」
「別に感謝される謂れはねぇよ。全く、最初っからお前がそんなんだったらいい関係になれたかもな」
「ん……それでも千雨とは無理だと思う。私はオスティアの王族だから」
　お互いが沈黙を続ける。目と目での会話が二人の関係を醸し出していた。
「委員長たちがいる所に行こうぜ。お前の変貌に驚くかもしれないがな」
「千雨はそれを使ってまた麻帆良を責めるんでしょ？　いいよ、行こう」
　二人は皆のもとへと戻っていく。一緒に夕食をとるために。

　その奥の奥の部屋。
　たくさんの札が置かれている部屋。
　何人もの術者が入念な準備をしていた。
　何人もの巫女が禊の準備をしていた。
　そこに、近衛木乃香も眠らされていた。巫女装束にさせられた少女の額に札が張られている。
「これで、すべてが変わる」
「そして始まる」
　視界の先には鬼神の封印されている祠があった。

「さて、やっと話は終わったようどすな」
「すみません……」
　先に食事をとっていた千草たちのもとへ、瀬流彦とドネットがやってくる。
「それで、塩梅はどうだったんや？」

「関東としては要求を呑む気もないと。関西呪術協会の長である近衛詠春を介さない限り話し合いにも応じないと言われました」
「ハッ、アホやないか？　耄碌爺が」
　湯葉を口に含みながら、魔法協会の発言を鼻で笑った。
「自分の言うこと聞く人間じゃないと話し合いに応じないとか、なめとんのか？」
「関東側としては、長が代替わりしたという話は聞いていない。まだ関西の長は近衛詠春だと」
「なんで配下でもないのに知らせなあかんねん。味噌汁で顔洗ってきたらどうや？」
　瀬流彦は、ただ縮こまるだけだった。
「ドネットはんは何か話はったんですか？」
「えぇ。途中でネカネさんから念話がありましたので、ネギ・スプリングフィールドの所属に関することも確認してきました。私達メルディアナは修行先として麻帆良を指定しただけであり、それを利用したのが関東魔法協会です」
「切り捨てるってことでいいんですかな？」
「純然たる事実ですから」
　千草はドネットと瀬流彦を交互に見た。
　明らかに瀬流彦の顔色が悪い。それはそうだろう、瀬流彦は本来、このようなところにいる立場ではないのだから。
「瀬流彦はん、関東からは他に人間は来ないんどすか？　交渉相手するの、正直しんどいんとちゃいますか？」
「しかし、そちらの長の近衛詠春との会合を、学園長は要望として出しておりますので」
「学園長やなくて、会長な。それをごり押ししてどうにかならないことくらいはわかっとるはずやけどな」
　湯豆腐を取り出して、薄口しょうゆに付ける。瀬流彦に食事を出すように仲居に言おうとして、途中で言葉を止めた。今日の用意できる食事は湯豆腐や懐石料理と、すき焼きなどだ。瀬流彦には肉を出そうかと思ったが、明らかに食べれるような体調をしているようには思え

なかった。
「瀬流彦はん、食事なんやけど、すき焼きよういしとったんやけど、うちらみたいに湯豆腐の方がええかな？」
「あ、すいません。お願いします」
　食事の用意されていない卓に座る。
「ウチが言うのもなんやけど、早く代役立てたほうがええよ。うちも我慢の限界があるし、このままだと魔法世界側の人間にも切られるで」
「……何と言ったらいいか、僕もわからないや」
　憔悴しきった様子の瀬流彦。
「千草さん、もうそれくらいにしてくれませんか？」
「ああ、すみまへんな。セラス総長」
　隣で黙々と食事をしていたセラスが横やりを入れてきた。その間に、ドネットと瀬流彦の分の食事が持ってこられる。セラスとドネットは、聞くまでもなく湯豆腐の方を選択していた。
「私としましても、今回の件は関東の人間がやりすぎた結果というものが見て取れます。その結果として起こったものなら、アリアドネーとしても話を聞かなければなりませんから」
　関西の要求である国外追放は、つまりは反逆の芽を摘むということだ。
　自分でさばけないやつを国内に置くわけにはいかない。正直、ウェールズもアリアドネーもそんなことはどうでもよかった。
　聞けば聞くほど、ネギを手中に収めようと画策する関東の思惑が見て取れた。そんな組織をかばうほどの間柄ではなかったアリアドネーは、関西と交渉することで、ネギの処遇を良くしようとしていた。このままでは、魔法ばれの責任などを取らなければいけないのだから。
　しかし、このまま関東が悪いことになれば、すべて関東の仕業であり、ネギ少年ははめられただけの被害者にすることも可能なのだ。
　主犯であるアルベール・カモミールを捕まえなかったせいで起こったことなのではないかと。１０歳の少年に、犯罪者を捉えろというこ

とも、善悪の判断をすることも難しい。なので少年法などもあるのだ。
　それなのに、少年の行動を正しもせずに、犯罪者を助言者としてそばに置いていた関東にこそ問題があるのではないかと。
　ネカネが送ったエアメールにはそれを注意する旨が書かれていたにもかかわらず、カモミールがネギの側にいるということは、メルディアナの忠告を関東が無視したという言い訳もできるのだ。ネカネはもとより、ネギを助けるために来ていたので、ネギを助けられる可能性が上がるのなら、それにかけるようにしていた。
「それは……」
「ふふ、後で話しましょうか。考えておいてくださいね」
「私たちとしましても、預けた先で修行以外のことでこんな問題が起こった理由を聞かねばなりませんね」
　ドネットが瀬流彦に向かって言う。瀬流彦は腹部を抑えて唸るしかなかった。
　それからは、沈黙の続く食事だった。
　５人が食べ終わるまで、静かに咀嚼の音だけが鳴る。
　食後のぜんざいを食べ終えて、お茶で一息ついているときに、千草が４人に向かって話しかけた。
「今宵、関西呪術会は、近衛詠春が使役していた荒御霊、両面宿儺を呼び起こします」
　４人が一斉に千草を見る。
「鬼神を甦らせるというのか！　それをどうするつもりですか！」
「瀬流彦はん、落ち着きなはれ。関東に侵攻なんてせえへんよ」
　千草はお茶をすすりながら言う。
「しかし、今宵の儀式によって、関西の新たな力を皆様に見せることになるでしょう。見たい方は、結界の外側から見てくだはって結構です。再度言いますが、関東に侵攻するつもりなどあらへんし、どこにも敵意のある行動ではありまへんので、どこに連絡取っていただいても結構です。結界を張って人払いと防音は完璧ですが、外から見ることは容易にできるようになっておりますよって、遠見でも見れるかも

しれへんな」
瀬流彦の方を向いて、ニヤリと笑った。

１９話

こちらでは、麻帆良学園の生徒が一緒に食事をとるために集まっていた。
「朝倉さんは、結局来ませんの？」
「あぁ、食欲がないって言ってたぜ。一応同じものを部屋に持っていくようには言ったが」
朝倉はその場には現れなかった。その理由を予測できている人間は、何の反応も示さずに自分の席に着く。
「他の皆の食事はどうなっているんですか？」
綾瀬が気になっているのは、眠っている人たちの食事のことだ。丸一日も眠っているといっても、お腹も減るため、食事は必要だろう。
「点滴とかでもいいんだけどな、健康な限り針も指すのははばかれるから食事抜きだ。明日以降は何かしらの手段をとって食べてもらうことになるだろうが、順番に起きてもらって食べるのが手っ取り早いかな。それより、起こすかどうか決めるのは雪広に任せようと思う」
「私ですか？」
「さっきの話を聞いたうえで決めてほしい。今回のことは、認識阻害や思考操作を使って覚えさせないようにするのが一番だが、麻帆良に染まってしまっている以上、一旦選択肢を与える必要があると考えている。それを行うかどうかを考えてほしい」
「選択肢とはなんですの？」
「麻帆良に戻るが、保護を受けるかだ。今のお前たちは被害者を保護している状態だ。このまま麻帆良から離れて一般人として暮らすこともできる」
千雨の言葉を受け、あやかは固まった。先ほどの会話で、作られた意識でもそのままならよかったと言った。そして、その後でみた千雨の記憶で、その弊害も感じたし、これから生み出すであろう不幸を知った。麻帆良の人間が被害者になるか、麻帆良に来た人間が被害者になるか。それはわからないが、そこまで麻帆良の常識は食い違っていることを認識できていた。

だからといって、その判断を下せるのかとあやかは自問自答する。
そして、千雨があやかに決めろと言う理由の一つをあやかは予測できていた。
先ほど千雨が言った一般人として暮らすという行為。それは、千雨自身が不可能だと明言したことだった。
無理だという生活をクラスメイトに強いるというのか。それは違う。可能なはずだ、雪広財閥の力を使えば。関西の目論見がすべてうまくいく保証なんてどこにもないのだ。関西はそれを成功させる、成功できるだろうと見ているが、予防策も必要だろう。それに、関西の計画が成功したとしたら、麻帆良にいることを拒む人間も出てくるだろう。自分だって、麻帆良の生活を話したいとは最初思わなかった。なので、より閉鎖的な街が必要になる可能性が出てくる。
麻帆良を離れたい者と、麻帆良の生活を手放せない者。その両方が出てきて不思議ではないのだ。
もっとも、そこまで深い洗脳のようになってしまった証拠だとも取れるが。
「私の一存で決めるのですか？」
「寝てるやつに聞くわけにもいかないだろうよ。まず起こすかどうか、そして内情を話すのか、記憶操作をするのかどうか。この二つを決めなけりゃいけないんだ。起こしたら二つ目の選択肢は絶対に出てくる二択だ。だから、その選択をさせるかどうかを決めなくちゃいけない。二つ目は個人で決めりゃいいんだ」
「聞いてから忘れるということもできるのですわよね？」
「できるぜ、クラスメイトの頭の中いじくれば」
しれっと言う千雨。千雨がそのことを言うということは、あやかにクラスメイトの頭をいじくる許可をくれと言うことだ。だが、それは人格をいじくる許可をするということだと、綾瀬と千雨の会話で言っていた。
極端な表現をするならば、その後にクラスメイトは別人になる。さらに言えば、そのままにするという選択は、クラスメイトを見捨てるという選択になる。

クラスメイトが、そしてあやかが納得する結論は、起こして、事情を聴いて、皆が受け入れるという選択肢しかなかった。
性格を変えられる、記憶を変えられる弊害をしっているあやか。千雨の記憶を見て、千雨の恐怖を知ったあやかが選ぶ選択肢は一つしかなかった。
「千雨さんは、意地悪ですわ」
「別にぼけっとしてれば収まってることもあるから、誰かの容体が変わるまでに決めてくれりゃあいいんだ。別にいいだろう？」
「……考えておきますわ」
「そうしておいてくれ」
目の前に料理が運ばれてくる。
「あれ？　一人分多いけど、誰か来るの？」
「あぁ、サプライズゲストでも用意しようかなと思ってな」
千雨は立ち上がって奥から人を引っ張ってくる。
「ほれ」
「委員長……」
「明日菜さん、起きていたのです……の？」
あやかは立ち上がり、明日菜の下へ行こうとして、足を止めた。
「どうしたの？　委員長」
あやかは膝から落ち、愕然とする。
「千雨さん」
「なんだ？　委員長」
ゆっくりと、あやかは千雨に視線を向けた。
「これが、記憶操作と言うものですの？」
委員長は感じ取ったのだ。名前を呼んだだけで、その人物が別人になっているのを。
「そうだとも言えるし、そうでないともいえる」
「大丈夫よ委員長、これが本当の私だから」
明日菜は膝をついているあやかを支えるように起こし、手を握る。
「委員長……あやか」
「明日菜、さん……」

「心配しないで、これが本当の私。アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア。神楽坂明日菜としての記憶もあるけれど、よろしくね」
ゆっくりと微笑む明日菜に目を丸くするあやか。
「神楽坂はな、記憶を消されていた元魔法世界のお姫様だ」
「元お姫様って……オスティアのっすか!?」
春日が驚いた後、嫌な表情をする。また、変なことに巻き込まれたとでも思っているのだろう。
「このお姫様はな、一般人として生きるために魔法で記憶を封印された。そしてネギ先生のパートナーになるように仕組まれた」
「言ってることが逆ですよ、千雨さん」
「合ってるんだよ。保護したふりして記憶消して手ごまにしてたんだから」
皆の視線がアスナに向いた。アスナはゆっくりと首を縦に振る。
「そうね、私はガトウさんって人に助けられて、タカミチと一緒に麻帆良に来た。その時に記憶を封じられた。魔法世界の記憶を封じて幸せに生きてほしいって。けど、タカミチがしたことは私をこのか、関西呪術協会の長の娘であり、関東魔法協会の会長である学園長の孫でもある人と同じ部屋に置いて、そこにネギを入れた。私の周りは魔法関係者で塗り固められていた」
「そんな……高畑先生がそんなことって……」
「ついでに言えば、宮崎を出汁にしてネギ先生の魔法の存在を教えたのも高畑先生じゃないのか?」
「そうだね。直後にタカミチが現場に来たから、そうだと思う」
深く息を吐くアスナ。一旦静寂に包まれ、落ち着きを見せた場に大きな声が響き渡った。
「ちょっと待ってくださいです！　ならば、のどかが最初にネギ先生に助けられたのって――」
「人為的な事故だ。ついでに言うと、宮崎のネギ先生への気持ちも植え付けられたものだ」
千雨の言葉に、宮崎の方が跳ねた。

「どういうことですか!?」
「綾瀬、お前は本当に男性恐怖症の宮崎が一日で年下に一目惚れしましたなんてあると思うのか？」
　千雨は一旦深呼吸をして、ちらりと宮崎を見る。
「簡単なことだ。態と荷物を多く持たせて、危険な道を選ばせて階段から落とす。そこにいるネギ先生。助けられた事実と死ぬかもしれない瀬戸際の興奮、完全なつり橋効果だ。そこに魔法結界の効果が働く。善意な行動に対する好意と相まって恋愛感情だと錯覚させる。これで一人目は完成さ。もしかしたらもっと意識操作とかもしたのかもしれないが、逆に言えば自身でたまたま偶然があったのかもしれない」
　宮崎は震え、肩を抱く。
「違う、私は違う……」
「綾瀬。お前、ネギ先生の歓迎会の時に手伝いしてたよな」
「はいです」
　宮崎はその時、一人で多くの荷物を図書館島に運んでいた。
「宮崎に聞かれていたはずだぜ。手伝ってって、親友のお前に頼んでたはずだ。たくさんの本を図書館島に運ばなくちゃいけなかった。けど、お前は歓迎会の準備をしていた。本当に大事な用事なのか？　２０人以上が手伝ってたのに、一人の親友の用事をけって」
「そんなはずないです！　私がそんなことでのどかの用事を断るなど……」
　綾瀬に構わずに、宮崎の方を向く千雨。
「お前も、今日中とかの用事だったのか？　至急だったのか？　一回に全部持っていかなければいけなかったのか？　お前は元々そんな無茶はしないだろう。よく思い出せ、なんで視界を遮られている状態で、幅の広い階段の端を選んで歩いた」
　千雨は手を宮崎の前に突き出す。
「感じなかったか？　こんな衝撃を」
　空圧を宮崎の胸にぶつける。ブレザーのネクタイが風で舞い上がった。

「高畑先生の技だ。拳圧――空圧で相手を倒す。もちろん、今の私みたいに威力を弱くすることもできる。足をかけて転ばせるくらいにはな」
　言いたいことが分かったのか、皆が苦々しい顔をする。宮崎は、顔を伏せていた。
「たまたまネギ先生が来た初日になぜか、親友に頼みを断られ、なぜか無茶してなぜか危険な道を選んで都合よく落ちた先にいた先生に恋をしたか。そうなるように仕組まれていたのか。どっちだと思う？
　ちょうどよくそこに、麻帆良が利用しようとしていた神楽坂明日菜と、それを確認するための高畑先生がいた。さて、これは偶然なのかねぇ」
　畳に、宮崎の真下に水が落ちた。肩が上下する宮崎に綾瀬がよっていく。
「千雨、やりすぎ」
「いいタイミングだったと思うぜ、少なくとも、私の話で麻帆良の人間の良し悪しのうちの悪しの方に傾倒している状態で、事実を知らされた方が後の吹っ切れが早い」
「でも、食後でもよかった」
　目の前に用意された食事。確かに、食後の方が気持ちよく食事ができたかもしれない。
「まだ火を入れてないんだ。宮崎が食事をとれないようなら、部屋に送ってもいい。綾瀬、どうする？」
「千雨さん、まだ他にのどかに関係することはあるのですか？」
「あといくつか、話題を作ろうと思えばな」
　千雨の言葉に宮崎が反応したのか、綾瀬服を掴む手の力が強くなり、服のしわが深くなる。綾瀬は宮崎に二三言確認を取ると、千雨の方に向いた。
「5分、時間をくださいです」
「いいぜ、廊下にでも出てようか？」
「私たちが行きます。いきますよ？　のどか」
　宮崎と綾瀬が寄り添いながら廊下に出る。そして、すすり泣く声が

聞こえてきた。
「あれが、麻帆良の、ネギ先生の周りの実態だ。クラスの奴らなんて、駒でありネギ先生が成長するためのエサなんだよ」
誰もしゃべらない、静寂の中で千雨の声が響き渡った。

２０話

朝倉は、あてがわれた自室に引きこもっていた。
自身の行ったこと、それによって引き起こされたもの、引き起こされたであろうもの。それの深さを享受しきれない心が、クラスメイトの前へ行くことを拒絶していた。
「……」
カメラを手に取ろうとして、押収されたのを思い出す。
カメラも、ビデオも、レコーダーもすべて没収された。壊れた携帯電話も、今は復元されているところで、直った暁にはネギが行った所業が映像証拠として提出されることだろう。
置かれた荷物は、修学旅行で遊ぶための用意がされている。なんでこんなことになったのか。
「あんなこと、しなければよかったのかな」
昨日のイベントを思い出して呟いた。誰に話しかけるでもなく。昨日、あんなことをしなければ楽しく修学旅行がおくれていたのではないかと。
「ネギ君にあんなことしなければ……」
昨日のことを思い出す。ネギを問いただそうとして、カモというオコジョと出会い、話に乗った。
「あれ、あれさえいなければ」
カモさえいなければこんなことにならなかった。
「あれさえいなければ、皆を巻き込まずに済んだ。今までのままでいれた」
なんであんなところに、あんなのがいたのか。聞いた話では、５万オコジョドルなどと、よくわからない金が手に入るのだという。そして、カードが作られる。それくらいのものだった。
「聞いてない、こんなこと聞いてない！」
関西との仲も聞いてなければ、命に係わるなんてことも聞いていない。それに、拒絶する手段が奪われているということも！
「私が悪いの!?　私じゃない！　悪いのは……」

悪いのは、カモじゃないか。ネギじゃないか。魔法使いじゃないか。

思考に沈み、深みに嵌まる。与えられた情報で朝倉は考える。

必死に、自分の罪を感じれば感じるほど、朝倉は闇に囚われていく。

「悪いのは魔法使いじゃない！　私じゃない！」

罪悪感から逃れるために、責任の所在を転嫁する。

「さて、落ち着いたか？」

宮崎は、ゆっくりと頷いたが、確実に落ち着けてはいないだろう。綾瀬も少し責めるような目で見てくる。

「悪いとは思うがな、ここで話しておかないと、事態が急変したら話せなくなるかもしれないし、そしたらお前は好きでもない奴を追って死地へと向かうことになったかもしれないんだ。勘弁してくれとは言わないが、納得してくれるとうれしい」

「いえ、千雨さんのせいじゃありませんから……」

宮崎は答えはするが、顔を合わせようとはしなかった。

「本屋ちゃん、ごめんね。魔法使いがバカなことして。自分が良ければ、いいと思うことなら何でもするの、あいつ等は」

「アスナさんのこともそうですものね」

「そうね。もしかしたら、あやかの弟も……」

あやかは、目を見開いて、明日菜を見た。

「それは、殺されたということですの!?」

「そうは言っていない」

「けど、そもそもいたかどうかもわからねぇよな。想像妊娠なんて、場合には男ですらなった例があるんだから、少し思考をいじっちまえば簡単だ。それに、麻帆良の生活環境と常識で、母体である人間が胎児にとって安全な生活を送っているかもわからねえしな」

「そんなことしなくても、『妊娠している』といって、実際にしていないのに『駄目だった』ということもできる。そんなことは簡単。それに、あやかの弟が死んだのは、ちょうどネギの年齢と一致する。私が麻帆良に来た年とも近い」

全ては推測である。しかし、無いとも言い切れない。
「財閥の娘が協力してくれる。ショタコンだから無条件で好きになる。都合がいいよな」
「それに、私と仲が良かったのも気になる。偶然だとは考えられない。それでもあやかは私の友達だけど……」
「アスナさん……」
目の前で油が敷かれ、肉が焼かれていく。仲居が手を加えているのを見ながら、あやかは明日菜の言葉に喜び、弟の可能性に嘆いていた。
「それは少々、穿ち過ぎではござらんか？」
「そうだね、たまたまの可能性の方が大きいだろう」
長瀬と龍宮が明日菜と千雨に苦言を入れるが、二人はそれをさらりと流す。
「そうだな、けど、可能性がないとは言えない」
「それに、時期が合いすぎてるもの。転校してくる側なら、そんな人を集めたのかもしれないけど、もといた人で、あやかの立場を考えると、魔法使いの得になるもの」
「それに、対比するように神楽坂はオジコンになったんだよな？」
「比較対象を作って、私がタカミチに興味が出るようにしたのか、あやかがショタコンになるようにしたのか。どっちだろうね？」
これ以上、長瀬も龍宮も会話に入ることができなかった。千雨と明日菜は理由や状況を判断して会話しているのに対し、二人は『さすがにそんなことはない』としか言えないのだ。さらに言えば、思考操作を受けている側の人間であり、麻帆良に好意的になってしまっていると言われている人間なのだ。長瀬や龍宮が真実を言っていたとしても、この場ではそれを証明できなかった。
「あとで詳しく調べてみるといいよ、その時の医療の記憶を」
「ええ、必ずそうしますわ」
あやかは既に携帯を手に取り、電話をかけ始めた。2、3分待って電話を切る。
「お父様も細かく調べるとおっしゃっていましたので、こちらの件は直ぐにわかるでしょう。ありがとうございました」

「ただの虚言かもしれないんだ。礼を言われてもな」
「いいえ、可能性はあります。そうでなかったとしても、私の性格まで変わっているかもしれないと言われれば、確かにそうかもしれません。一般と比較するならば。そして、その時の対照の相手が操られていたと明言しているのですから」
明日菜の方を見てあやかは言った。
「まぁ、委員長のことだから本当に性癖の怪しい人間だったかもしれないけどね」
「なんですって!? アスナさんは変わらないところは本当に明日菜さんのままですわね!」
「何よ、やるの? 委員長」
立ち上がる二人を、千雨が制した。
「ほら、空元気は食後にしてくれ。鍋物なんだ」
焼かれていた肉の後には出汁と野菜が足されている。後は卵に絡めて食べるだけとなっていた。
「肉類はおかわりがあるから、気にしないで食べてくれ。あと龍宮、食後の餡蜜だが、多くても8杯くらいまでだからな」
「仕方がない、それで手をうとう」
冗談交じりで言った千雨に真顔で返す龍宮。他の人間が苦笑いをしていた。
皆で食事を始める。ゆっくり目の宮崎の世話を綾瀬がしながら、それ以外は特に何も変わらずに進んでいった。そこでふと、龍宮が春日に顔を向けた。
「そういえば春日」
「なんすか?」
「ここまでボロボロに言われてるのに、反論しないんだな」
皆の視線が春日に集まる。
「しないっすよー、別に。それを言うなら龍宮さんだってしてないじゃないっすか。言ってることに反論できることもないし、する気もないし、私も被害者っすから」
淡々という春日に、綾瀬が質問する。

「被害者と言うのは？」
「こんなビックリドッキリクラスに入るの自体がありえないっす。千雨に聞くまでわからなかったっすけど、６００万ドルの賞金首までいるんすよ？　それに、そうでなくても色々と色物揃いで凄いクラスじゃん？　シスターシャークティーの弟子じゃなかったら、私なんて絶対このクラスはいんないって。いやー、それにしても助かったっすよ。アスナがいなければたぶん私がネギ先生のパートナーだったから」
「そうなのか？」
「他に魔法生徒がいないっすからね。桜咲さんはこのか命だし、龍宮は金々うるさ――非常に金銭感覚のあるお人だし、他は賞金首だったり、魔法使いの子供だって知らされてなかったり」
　途中、頬に一筋の赤いものを垂らしながら答える春日。
「それに、普通に考えればわかるっしょ。こうやって銃とか刀とか振り回して正義振りかざしているのが偉いって、ありえないっすから」
　龍宮の手には、銃が握られていた。
「まぁ、桜咲は真剣を使っているが、私のはモデルガンだよ」
「今確実に薬莢ありましたよね」
　足元に転がっているものを拾う綾瀬。それを見て、首をかしげる。
「弾が、そのまま？」
「ああ、今使ったのは長谷川が作った魔法具なんだ。符やタロットのように魔力を閉じ込める弾丸だ」
「そうだ。カートリッジシステムを使っていて、何発か溜めて打つこともできる。それの起動には『パンツァーガイスト』と言えばいい。そうしたら、銃弾じゃなくて魔砲になる」
「使いどころがないけれど、試作品だからね。私は銃弾が出されて、回収すれば何回も使えるっていうのが気に入っているよ」
　龍宮と千雨の会話をきいて、綾瀬が訝しむ目で千雨を見た。
「千雨さん、それってまさか……」
「みなまで言うな、たぶんそれで当たってるから。」
「ねえ、千雨。私にも作ってよ」

綾瀬との会話に明日菜が割り込んできた。
「いいぜ。お前にはさらに上位で『パンツめくれー！』って叫ぶと残り全部の魔力を使って魔砲を打ち出せるようにしてやる。いいだろ？
ネギ先生にめくられていた身としては。ついでだから服も戦闘用の作ってやるよ」
「いいわけないでしょー！　なによそれは！」
「明日菜さん、聞いちゃダメです。千雨さんはもう末期ですから」
少しばかり和んだ夕食。
しかし、それもあと少しで終わる。この後は、大事が待っているのだから。

21話

祭壇に寝かせられた木乃香。頭には符がつけられており、身じろぎひとつしていない。
その後ろには千草。木乃香を包み込むように両手を広げ、祝詞を唱え始める。
鬼神を復活させるための儀式だ。事前に敵対行動ではないということを、アリアドネーとメルディアナは認めている。関東は瀬流彦に決定権はなく、交渉すらされていない。今の関西呪術協会の政権を、関東魔法協会は認めていなかった。
「さて、余計なことするんじゃねえぞ」
「本当に、お嬢様に危害を加えないのだろうな」
「それは考え方によるな。言えるのは、最終的にはいい結果になるだろうってことだけだ」
その光景を、千雨と一緒に見ている者がいた。桜咲刹那。関西所属の剣士だ。神鳴流ではなく、関西の。詠春の子飼いだった相手だ。
「もう教えてくれてもいいだろう。何をするんだ?」
「両面宿儺を制御する。ギリギリまで、ずっと近衛の魔力を使って制御し続ける。その間に、巫女の祝詞と神楽、使える者は何でも使って荒御霊を清めて弱める」
「お嬢様の魔力を利用して動きを止めるのか……」
刹那は今、両手を後ろに縛られており、指と指も八の字になるように縄を結んで動かせないようにしている。
「そうだ。その間に鬼神を封印なんかしなくてもいいように弱めるんだ。無理やりの力技では復活させられる。元の力が変わらないからな。けど、ここにいる両面宿儺は分霊であり本物じゃないからな。十分なんだ」
「それは、お嬢様の力を使う意味があるのか?」
制御するには、何百人単位をそろえた大規模儀式ならば可能だろう。しかし、それでは鬼神を弱める側の人間が少なくなってしまう。かといって、不可能なわけではない。

「まぁ、あるもんは使った方がいいからな。それに、近衛が必要な理由はもう一つある。近衛の魔力タンクに負荷を与えて、壊すんだ」
「なっ!?」
「今の近衛には痛みを感じないようにさせている。その間に高負荷な魔力運用をさせることで、魔力を使う機能を奪う」
「貴様等は、お嬢様を壊すというのか!?」
　刹那は叫んだ。千雨に向かって噛みつくかのように。
「近衛は変わんねえよ。魔力運用する場所が壊れるだけだ。それで、完全に一般人にする」
「なんだと?」
「一応、近衛は生まれながらにして関西の跡継ぎなんだ。けど、今までは一般人として暮らしてきて裏を知らない。正直、そんなやつ関西にはいらない。無知な上っていうものが自由に動いたらどうなるかっていうものを、身をもって知っているからな。だからといって、魔力がサウザントマスター以上と言われる人間を野放しにはしておけない。だから、一般人として暮らせるように、誰にも利用できないように、魔法を使えなくさせるんだ」
「……そしたら、お嬢様は解放されるのか?」
「もう近衛詠春はいないからな。近衛家は関西で権力をなくしている。一般人の近衛ならばどこにでもいけばいい。ただ、近衛から高魔力の人間が生まれないような呪いはかけさせてもらうがな。普通に暮らすのなら、何の問題もなくなる。お前が関東に所属したら狙われるかもしれないがな」
「私は、お嬢様が幸せならそれでいい」
　じっと祭壇を見つめる桜咲。あとは桜咲は見守るしかない。抵抗しても意味がないのだ。ただ、関西の目論見が果たされるのを待つしかなかった。
　千雨は桜咲に伝えていないことがある。それは、高負荷で魔力タンクを破壊するという行為の危険性だ。命に別状があるなどと言うものではなく、確実性のなさと言うものだ。
　途中で儀式が中断されるようなことがあれば、まったく意味がなく

なるのだ。魔力を空にして耐久力をつけたり、魔力容量を広げるという修行法もあるのだから。

「お嬢様、しっかりしますえ」

これから始まる儀式は、千草の復讐。自らが行う復讐のなかで、一番大事なものだ。

両親を大戦へ連れて行って殺した近衛詠春への復讐。そして、サウザントマスター達が成しえなかったものを行うという復讐。そして、近衛の未来を絶つという復讐。

「おとん、おかん、見とってな。ウチは、成功させるからな。関西の未来は、ウチが護ってみせたる」

千草が、儀式を開始した。

「高天の原に神留りまして　事始めたまひし神とき・神とみの命もちて　天の高市に八百萬の神等を神集へ集へたまひ　神議りたまひて――」

鬼神が封印される大岩へ向けて祝詞を唱える。祭壇に寝かされたこのかからは、魔力が光り漏れ、一柱となり輝いていた。

辺りにいる術者は、今か今かと鬼神の復活を待ち構えていた。

唱えられていく祝詞を聞きながら、千雨は周囲を見渡した。ここのは雪広や綾瀬は連れて来ていない。明日菜と春日のみ。長瀬は正確には裏ではないし、龍宮との契約関係は無い。

そして、千雨たちの周りには結界が敷かれていた。見ている者達に、万一がないようにしているのだ。見守るのはなにも千雨たちだけではない。悪意のない行為であることの証明に、セラス総長とドネットが、他の術者に守られながら様子を眺めていた。ネカネは万一のためにと本山に残っている。ネギが寝ているときに鬼神の衝撃などから守るためだ。

千草の祝詞は続き、終章へと差し掛かる。近衛から放たれる光が増え、光が触れる面積が広がり、大岩へと差し掛かろうとしていた。

「来るぞ、準備しろ！」

術者の一人が声をあげた。大岩が完全に光に飲み込まれ、下から4

本の腕と、二つの顔が現れた。
『祓いたまへ清めたまへ――』
完全に鬼神が現れる前に、術者が荒御霊を鎮めにかかった。
完全にできる前に、体から魔力が浮き出ているのが見て取れた。
「始まったな」
「ええ、そうですね」
見守る者
「お嬢様、少しだけ耐えておくれやす」
行う者
そして、祓う者
全ての人間が、鬼神が消滅する、その瞬間を固唾を飲んで見守った。
その瞬間、
「なめた真似してくれるじゃないか。え？」
不協和音がそこに混じった。
「マスター、結界弾、セットアップ」
「やれ」
「了解」
いったいどこから現れたのか、神楽舞をしている術者の中心に、一人の少女が現れた。金髪の少女、ここにいるはずのない相手。
「やめろ！　エヴァンジェリン！」
刹那が叫ぶ。このかが一般人の道に進めるはずだった。それが壊されていく。
「お嬢様、危ない！」
千草がこのかを抱えて、結界弾から守った。自分の身を盾にして。
鬼神が結界に包まれる。小さくはなってきたものの、まだ鬼神の両面宿儺と呼ぶにふさわしい荒御霊のまま。
「リクラク　ララック　ライラック――」
エヴァンジェリンの行動を、誰しもが止めようとした。しかし、そもそも術者の中に、飛行能力を瞬間的に行えるものが少なかった。攻撃を加えようにも、隣にいる従者がそれを許さない。障壁が攻撃を通さない。

「終わったな、失敗だ」
　千雨が、刹那に聞こえるようにつぶやいた。
「関東には敵意は無いと伝えたはずなんですがねぇ、どうなんでしょう？　セラス総長」
「信じられるものではなかったということでしょうか」
「親書を出してくるような仲ですよ。こっちはともかく、あっちは信頼関係を持ちたいと思っていたはずです。それなのに信用がないんですね」
　自分たちは悪くないと、セラス総長とドネットに伝える千雨。
　人払いはできていた。安全も確認し、実際に被害はありそうになかった。なのに邪魔が入った。
　事前通告はしたはずなのにだ。
　その相手が関東にくくられているはずの『闇の福音』エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。
　彼女の攻撃によって、鬼神は氷に包まれた。
「とこしえのやみ！　えいえんのひょうが!!　〝おわるせかい〟」
　エヴァンジェリンが指を鳴らす。そして、鬼神が砕けた。また封印をしなければならない。このような儀式、次にいつできるのか。近衛このかが、一般人として暮らせる可能性はなくなった。奇しくも自分の祖父の策謀で。
「フッ……」
　エヴァンジェリンが降りてくる。
　関東の侵攻、しかも、元６００万ドルの賞金首を使った。
「ハッハッハ！　ぼうやは返してもらうぞ、長谷川千雨！」
「返してもらうぞも何も、そっちが話し合いに来ないのに返せるか。それとも関東は侵略行為でも決めたのか？　それより、なんで麻帆良にいなけりゃいけないはずのアンタがここに来れたんだ？」
「修学旅行は学業の一環と認めさせたんだよ。忌々しい呪いだが、今は機能していない。全盛期の力そのものだ！」
　無意味に魔力をほとばしらせるエヴァンジェリン。
「下らない呪いをごまかしたのか？　解く気配もねぇから態と解いて

ないと思ってたよ」
「何が下らないだ！　たしかに、いや、くだらないが……そんなことは関係ない！　私に喧嘩を売ったんだ。報いを受ける覚悟はできているのだろうな」
　両手に魔力を込めるエヴァンジェリン。それに対し千雨はポケットに手を突っ込みながらセラスの方を向いた。
「ケンカ売ってきたのは関東だ。それに、あんたに喧嘩を売ったつもりはねぇ。今回の鬼神復活もそちらを攻めることが目的ではないと言ったはずだぞ。ここに魔法世界側の証人もいる」
　セラスとドネットの方を向く千雨。
「たしかに、私たちが聞かされた場に、瀬流彦さんもいたので確認済みのはずです」
「そもそも、遠見で見えるようにされていたはずでし。あの祝詞と神楽舞をみて、侵攻するための手段だという見解が出るのがおかしい。あなたがここにいるのも、遠見で座標を確認できたからでしょう」
　二人に証言されたのを聞くエヴァンジェリン。しかし、そこには食い違いがあった。
「いや、お前等の姿など見えなかった。ジジイは交渉などしてないと言っていたぞ」
「確かに、そっちが認めてねえからしてないな。もしかして、担がれたのか？　あんた」
　千雨がエヴァンジェリンに聞く。いや、ただ考えたことを口に出しただけなのかもしれない。しかし、その言葉にエヴァンジェリンが反応した。
「担がれた、だと？」
「そうだ。お前がここにきても、元犯罪者の暴走になるからな。たまたま結界を抜け出されたとでもいえばいい。お題目は英雄の息子を殺しにきたとかな？　しっぽ切りは簡単さ。騙されたんだよ、お前。こっちは事前に通達したし、危険性がないのを知っているはずだ。遠見ができるはずのものを見せずに虚言を言って敵地に飛ばす。鉄砲玉さ」

千雨の言葉に、エヴァンジェリンが固まった。

22話

「そんな、まさか……あのジジ――」
「マスター！」
突如エヴァンジェリンが蹲り、胸を押さえた。茶々丸が走り寄り、エヴァンジェリンを支える。
「なんだ？　いきなり」
千雨も、エヴァンジェリンの変動に驚きながら歩み寄る。すると、彼女から何度も何度もつぶやき声が聞こえてきた。
「……帰らないと、帰らないと明日の授業に間に合わない。帰らないと、間に合わない間に合わない間に合わない間に合わない――」
千雨はエヴァンジェリンの姿に唖然とすると、その内容を理解したのか、小さく噴き出した。
「プッ……これが登校地獄かよ。何とも情けねえなおい」
「長谷川さん、これは」
「絡繰、こいつの呪いはどうやって解いてたよ」
茶々丸の質問に、質問で返す千雨。茶々丸は、主のことを心配し、すぐに答えた。
「5秒に一回、学園長が許可証を押すことで呪いを誤魔化しています」
「なら簡単なことだ。学園長がやめただけだ。見てみろ、もうそろそろ次の動きがあるぞ」
千雨は祭壇に続く道を見る。
そこには既に小さく人影が見えていた。
「あぁ、いないと思ったらこう動いていたんだな、瀬流彦先生」
駆けてくる瀬流彦を見て、千雨が呟いた。
瀬流彦は、集団の前まで走ってくると、息を整えながら千雨に伝える。
「学園長が、エヴァ、エヴァンジェリンが暴走して、こっちにゲートを繋げた、と、連絡を、大丈夫だったかい？」
瀬流彦は、身体強化をしたのだろう。かなりの速度で来たが、それでも息を切らせ、必死に走ってきた様子がうかがえた。本当に焦った

か、心配していたのだろう。
「やらかしてくれたよ、エヴァンジェリンがじゃなくて学園長がな。瀬流彦先生、アンタも担がれてるよ。麻帆良の結界で魔力を使えない奴が触媒のみで京都まで転移できるもんか」
膝に手を付き、息を整えていた瀬流彦が、地面から千雨に視線を変えた。
「そんなはずは……、いや、長谷川君。学園長がエヴァンジェリンを止めるためにこちらに皆で向かうから持ちこたえてくれと連絡を！」
その言葉を聞いた千雨は、セラスとドネットに視線を移した。二人は直ぐに頷き返してどこかへと連絡を始める。
「そんなもんでまかせだ、こっちに来るための言い訳だよ。全員！本山を護れ！　今から来る魔法使いを一人たりとも入れるんじゃないぞ！」
千雨はその一言だけをいい、千草のいたであろう場所へと駆け出した。
大きな氷の塊が、あちらこちらに浮かぶ湖を超え、墜落したであろう森を探す。
魔力の大きなこのかが目印となり、大まかな位置は既にわかっている。
「姉さん、千草姉さん！」
千雨は叫びながら走り回った。千草を探して。
「千草姉さん！」
走り続けると、刃物で切られた跡の様なものが、辺りに刻まれている場所に出る。いたるところに血痕も残っていた。
千雨は焦燥感に駆られ、さらに歩みを早くした。
「姉さん！　どこにいるんだ!?」
「ケケケ、コッチダヨ」
返ってきた返事。しかしそれは、千草のものではなかった。しかし、返ってきた。その場所へと向かって、その相手を、見た。そして、先にいる千草を。血まみれになりながらもこのかを抱えて寝転がっている千草を。

「姉さん！」
千雨は、その間にあった人形を飛び越えて、千草の下にたどり着く。直ぐにホルダーから札を取り出し、回復符を傷へと押し付けた。
「オチツケヤ、ツイヤッチマッタガシンジャイネエヨ。ウチノゴシュジンはマルイカラナ」
「少し黙れ人形」
「ケケケ……」
人形――茶々ゼロを一言で一蹴した千雨は、そのまま氣を千草に送り込んで治療をする。それが済めば魔力で、限界まで。
「オイ」
「黙ってろ！　お前は後でぶっ壊してやる！」
「ソコノガキノマリョクヲツカッテタンダロ？　ツカエネエノカ？」
茶々ゼロの言葉にはっとこのかを見る千雨。魔力タンクが、そこにはあった。
サウザントマスターを超える魔力が。ほぼ空となったこのかの魔力、これを使えば、千草の傷が癒える。
「このかの、魔力か。お前、そこまで考えてこんなことしたのか？」
「ンナワケネェダロ。ヨワッチイクセニナマイキナツラガマエシテタカラツイツイヤッチッタダケダ」
「ケッ、そうかよ」
少しでも、学園長を信じた自分を千雨は恥じた。これが学園長の指示なのだとしたら、このかは……一般人でいれただろう。
「ちょっと待っててくれな、姉さん」
このかの胸に手を置いて、魔力を
「待ちなはれ」
「姉さん！」
両手を地面に付き、体の支えにしながら、起き上がる千草。
「ウチは、大丈夫や。それより先に、今の状況を知らせて欲しいんや」
「ッ……今はエヴァンジェリンは無力化されてる。あれは生贄で、それを口実に関東が攻めてくる」
「なめ腐った奴や。他に報告は？」

「今のところは特にない。本山からも煙は上がっていない」
千草は千雨の肩を借りて立ち上がる。
「大丈夫なのか？　姉さん」
「戦闘は、無理や。交渉ならなんとかやな。それで、手筈はどうなんや？」
「私の方でやれることはしたよ。あとは相手側だ」
このかの下へ歩み寄り、一塊になる。千雨は一回茶々ゼロを睨みつけ、転移符を使って元の場所に戻った。
「千草様！」
「誰か、治癒術師を！　応急手当はしたが、傷が深い！」
固まっている術師の中から数人が駆け寄って、千雨から千草を受け取る。
今この場にはエヴァンジェリンと茶々丸が脇に寄せられ、セラス、ドネット、瀬流彦は一塊になっていた。
千雨はエヴァンジェリンの方へ歩み寄った。
「絡繰、こいつは治って……ないよな」
そう言いながら、術者の一人から渡された書類を差し出す。
「これをエヴァンジェリンにサインさせろ。これで一時的にだがマシになるはずだ」
「リスクはあるのですか？」
「ちょっとはあるが、現状のそいつは生贄の鉄砲玉だ。この状況を打破しないと意味ないだろ」
千雨に差し出された書類を、茶々丸は手に取った。
彼女は書類の中身を読んで、固まった。
「これは……」
「まぁ、そういうことだ。いいからさっさとサインしろ。どうせリターンの方が大きいんだ」
「……はい」
茶々丸はエヴァンジェリンの手にペンを持たせ、その手を上から包み込むように掴んで、サインをさせた。
「帰らなくちゃ帰らなくちゃ帰らな……あ、」

エヴァンジェリンのつぶやきが止まり、目の焦点があってくる。その後、二三分呆然としていたが、ふとあたりを見回した。
「わたしは……」
「目が覚めたかよ、ロリババァ」
「む、貴様！」
千雨のかけた声に振り向き、威嚇するエヴァンジェリン。それを千雨は書類を前に出すことで止めた。
「いいのか？　私に危害を加えたら契約違反でさっきの状態に戻っちまうぜ？」
ひらひらと書類を見せつける千雨。エヴァンジェリンはそれをふんだくって読み始めた。
「なんだ！　これは！」
「契約書類だよ。一応大学扱いの学校の非常勤講師だ。あんたはこれから1年に一回講師として本山で魔法に対する講習を行うこと。これで年に一回登校することで呪いは他の行動を阻害しない。毎日登校しなければいけないわけでもなく、生徒でなければいけないわけでもないんだろ？　登校地獄っていうのは」
千雨から出た発言に呆然とするエヴァンジェリン。狸か狐にでも化かされたかのように。
「契約の中に関西呪術協会の人間に危害を加えないとあるからな。給料出すからちゃんとしてくれよ、キティちゃん」
「ぐぬぬぬぬぬ！」
千雨の発言に、地団駄を踏んで悔しがるエヴァンジェリン。
「本当はこんなんで済ませようとは思わなかったんだがな。お前の従者が姉さんをズタズタに引き裂いて殺そうとしたんだからな」
からかいの目から一瞬で本気の目になって睨みつける千雨。
「なッ……!?　そんな筈は――」
「あぁ、本当に殺すつもりはなかったみたいだがな、切り裂かれていたのは本当だ。家族が死にそうな傷を負わされているのを見てこれで済ますんだ。感謝しろよ、童」
「……すまない」

「そう思うんなら何もすんじゃねぇよ。お前のせいで糞爺達が来るんだ。邪魔にならねぇように端によってろ」
　エヴァンジェリンは、おとなしく茶々丸と共に脇に退く。
「長谷川、茶々ゼロは……」
「アンタの家族は殺してねえよ。後で拾いに行くか魔力供給をして戻らせろ」
「……すまない」
　一度振り返り、家族の安否の確認をしたエヴァンジェリンは、そのまま元のように歩き出した。
　その間、千草はセラスと話していた。
「総長はん、準備の方は？」
「大丈夫です。あとは呼ぶだけでこの場に」
「ドネットはんは？」
「確認に時間がかかりましたが、特定議員の個人戦力がこちらに向かってくるそうです。場合によってはあちらにも兵がいる可能性が」
「ウェールズは？」
「メルディアナの校長が向かっておりますが、移動手段がない我々は時間が……」
「意志と誠意が伝わってくればええよ。あの屑どもと比べたら」
　やってくるであろう先を見つめて千草は答えた。
　今、この後で起きることに対するために、国が動いている。ウェールズ、イギリスの姿勢が分かった時点で、魔法使いがみなあちらに付くわけではないということが分かった。
　これは、大事なのだ。魔法都市として学園都市がいいように使われていた。
　国はこれを関西呪術協会から聞き、臨時の、国民に知らせない国会を開いていた。
　そしてこれは、国連へと持ち込まれた。緊急の案件として。当然だ。日本だけで済む問題ではないのだ。
　そうなれば、これを止めなければ将来どうなるのか。それを知っているのは魔法世界の破滅を知っている数人のみだ。それ以外は、何と

でもなると考えるだろう。旧世界の人間の言うことだと。
しかし、知っている人間は、この時期にこのような行動がどういった結果を及ぼすのかを知っている。
６７００万人の将来を、この案件は決定付けるのだ。
魔法世界の、裏の事情で済むと思っている人間の侵攻は、世界を破滅に導いて行っていたのだ。

23話

本山の入口、術者は一か所に固まり、侵入者を拒む。
本山内部は空けていた。生徒たちには防衛陣を敷いた術者が護衛をしている。ネギにはネカネが付いていた。
「さて、どう来るか」
エヴァンジェリンを横に、千雨が呟いた。
「ふん、あの爺のことだ。汚い手で来るにきまっている」
「闇の福音様を罠にはめたようにか？」
「うるさいっ！」
エヴァンジェリンの暴走を止めるのを目的にやってくる関東の人間たちは、彼女が暴走していないのを認めれば、帰るのが道理だ。
「絡繰、またあの映像見せてくれよ」
「最高画質で編集中ですのでしばしおまちを」
あの映像とは、エヴァンジェリンが登校地獄によって蹲っていた時の映像だ。
「そんなもの捨ててしまえ！　このダメ従者！」
「あぁ、駄目ですマスター。そんなに巻いては」
エヴァンジェリンが絡繰の背に肩車をされるように乗り、後頭部のねじを巻いていた。
「しかし、素直には帰らんやろな」
「腐ってるからな。あの爺は自分の思い通りにならんと気がすまん。そういう奴だ」
ネギの事然り、関東の事然り、他の事でも、独断専行を地で行く人間だった。
下の者の言葉に、耳を貸すように見えて、そばに置いているのは自分の意見に従う高畑のみ。
権力に囚われた人間の典型とも言えた。
上の者の権利と義務。それを忘れ、自身の欲と、関東魔法協会の会長としての権力を同じに考えてしまっている。
でなければ、メルディアナ校長との私的な立場での約束で送られて

きたネギという駒を、自身の欲のために使うことなどなかったのだから。
「奴さんたちが連絡してきてからかれこれ4時間。もうそろそろか」
「エヴァンジェリンはんを鉄砲玉にしたのは、夜襲をかけやすくするためでもあるやろうな」
ここにいるのは防衛のための術者。そのほかには明日菜、エヴァンジェリン、セラス総長、ドネット。それに千草と千雨。関西のトップは本山の奥の間に座っており、幹部は国会へと向かっている者や、指揮を執っている者、皆せわしなく動いていた。
「千草様」
偵察の一人が関東の様子を伝えに来た。
既に本山の前の鳥居まで来たようだ。
「で、伝えたんか？」
「聞く耳を持ちませんでした」
エヴァンジェリンの暴走は止まった。既に援軍は必要ない。そう伝える使者を関東の進軍している人間に出した。しかし、相手はこちらの言うことを信用しない。
ならば、エヴァンジェリンを今ここに連れてくる。そういったが、変装などされている可能性があると一蹴。聞く耳を持たなかった。
遠見で確認しろと言っても近くにいるのだから向かうと歩みを止めない。
この報告を聞いているうちに人影が見えていた。さすがに生徒を連れて来てはいないが、魔法先生は全員がそろっている状態だ。
「此度はエヴァンジェリンがすまなかったのう」
近衛近右衛門が口を開いた。
「ざけんな爺、味噌汁で顔洗って出直して来なはれ」
「なんだと！　貴様！」
千草の物言いに後ろの魔法先生が食って掛かった。
「なんや？　魔法使いが大勢で来て、身分も明かさずにのたまい出す輩に、なんでこちらが礼を尽くさなあかんのや？　脳みそくさっとるんやないか？」

「おぉ、それはすまんかったのう。私は関東魔法協会の会長である近衛近右衛門じゃ。して、この件について、正式に呪術協会の長である近衛詠春殿に伺いたいのじゃが」
「うちの長は近衛詠春やあらへんからその願いはかまいまへんな。それは既に伝えとるはずやけど」
　千草の言葉に、近右衛門は首を横に振った。
「儂はその連絡を受けた。しかし、いきなりハイ、そうですかと言うわけにもいくまい。代々近衛家が継いでいた呪術協会の後任もおらん状況で、近衛詠春以外に長の資格も持つ者はおるまい。近衛のことを知らないとでもお思いかのう？」
「その腐った風習によって起きた独裁、関東の越権行為と侵略行為、その対応によって近衛詠春は他すべての呪術協会の者の同意によって、背任を理由に長の立場を解任され、逆賊となっております。そのことから、次代のものを近衛から出すことを止めました。関西の人事に口出すことはできないはずやけどな？」
　にらみ合う千草と近右衛門。千雨は目で合図をすると、隠れていたエヴァンジェリンが一歩前に出る。
「よくもやってくれたなジジイ」
　エヴァンジェリンの姿を見て驚く近右衛門。エヴァンジェリンが登校地獄の対象を変更した後、それをばれないように認識阻害をかけていたのだ。
「なんのことかのう？」
「ハッ……よく聞けよ後ろの魔法使い共。私がここにいるのは、このジジイの術式によって登校地獄を一時的に解除したからだ。そうでなければ学園都市麻帆良から出れないことをお前等も知っているだろう。それに、結界によって私の魔力が失われていることもな」
　魔法先生が近右衛門を見る。近右衛門は眉一つ動かさなかった。
「しかし、ならばお主はなぜ動ける。皆の者、こ奴は既に封印を解いておった。チャンスをうかがっておったのじゃ。魔法使いを殲滅し、英雄の子であるネギ・スプリングフィールドを殺す機会を！」
　近右衛門の声があたりに響く。

「儂が解いたと言うのなら、なぜ今自由が効く！　こ奴は関西と手を組んで、かつての英雄、侍マスターまでも手にかけた！　英雄殺しの組織と悪魔に耳を貸すでないぞ！」
「はん、爺。お前のところに関西の長が変わった連絡がいっていた時、お前と碁を打っていたのは誰かを忘れたのか？　なぁ、刀子とやら」
エヴァンジェリンの言葉により、視線が刀子へと向く。
「あなたに答える必要があるのですか？」
それに対して刀子は質問に答えない。
その反応を見た千雨は、一歩前に出た。
「あんたも仕事熱心だよな、刀子先生。あんたを無理やり別れさせた奴の言うことを聞くなんてよ」
「な、なんですって？」
刀子の額に青筋が浮かぶ。
「あんた、離婚したんだろ？　まぁ、本当に愛想つかされたのかもしれないけどよ、魔法使いと神鳴流の恋愛だ。障害だってあっただろう。なのに、そこまでして結婚した相手と１０年もしないうちに別れた。なんでだ？　そいつは今どこにいる？」
千雨は魔法先生の中から相手を探す。
「あの人は、今は麻帆良にいません。本国にいます」
「そうだよな。人事か何かだったんだろ？　なら、アンタならついていきたかったんじゃないのか？　普通なら」
「ええ。しかし、既にその時には破談していました」
「そうか。それは、アンタを麻帆良に残すために仕組まれたんじゃないのか？」
千雨は反論が起きる前に続きを言う。
「世界樹、あれは恋愛に関しては非常に効果の高い洗脳効果があるのは知っているな。麻帆良祭では警備が出るくらいには。２２年に一度はその余剰魔力で一般人の告白が完全に洗脳の呪詛になるわけだが……魔法使いにはその逆もできることは知っているか？」
「どういうことですか？」
「反転。魔法使いならその力によって縁談を成功させ、その逆に破談

させることも可能ってことさ。タロットカードの逆位置ってしってるか？　意味が全部逆になるんだ。魔法使いが抵抗する能力を持っていることはあるが、氣を常に張っているわけではない剣士に、信頼している自分の組織を警戒して、それを未然に防ぐことができるか？」

千雨の言葉に対し、すぐに刀子は近右衛門の方を見た。

「儂はそんなことはしとらん。惑わされるでないぞ」

「そもそもなんでアンタが、なんで青山鶴子がいまだにいい仲なのに、事情知ってる相手とすぐに破談になったんだよ。それに、関西の人間なら、魔法使いをなんですぐに好きになった。最初っからアンタを捕まえたかったんじゃねえのか？　魔法使いの秘書さん？」

刀子は身を隠しながら、学園長から距離をとった。

「実際に、私は麻帆良の結界の影響を受けないからつまはじきにあった。影響を受けている人間は、結界を作っている人間の好きなように作られている可能性がある証明になる。刀子さん、あんた、自分で記憶消去されたかなんて疑うかい？　自陣でさ」

「……」

「アンタの体、どれくらい遊ばれてんのかね」

「貴様！　言っていいことと悪いことの区別もつかないのか！」

黒人の教師、ガンドルフィーニが声を荒げる。

「あんたも、昔のことは覚えてないんだろうな」

千雨は、彼を見てぽつりとつぶやいた。

そして、正面に向き直る。

「やっていない証拠がどこにある！　暴走していると言ったエヴァンジェリンはここに健在！　今回の発端は、魔法の秘匿意識の薄い見習い魔法使いに、常識から逸脱した行動をとった麻帆良の生徒、そして、こちらへ虚偽の申請をして多くの戦力を投じた麻帆良側にあるだろう！　修学旅行のついでに親書だと？　馬鹿にするなよ！」

「こんなもんで、受け入れるわけあらへんやろ！」

近右衛門の書いた親書が投げ捨てられ、地面に落ちる。それには、襲撃を予測した近右衛門の言葉と、デフォルメされた似顔絵が描いて

あった。
「一般人を盾にして行軍とは、立派な魔法使いはんはやることが違いますな」
「お主等のその発言。国際問題になるぞ」
落ちた親書を部下に見られる前に燃やす近右衛門。しかし、後ろの数人は既に目を通していた。
それよりも、千草の発言に対しての反応の方が強かったようだが。
「ならへんよ。勘違いしているぬらりひょんを馬鹿にしただけやからな。立派な魔法使いの行動としてふさわしくあらへんと言っただけや」
「しかし、お主はその口でネギ・スプリングフィールドの行動を侮辱したわけじゃ。英雄の子を侮辱してタダで済むと思っとるのかの？」
「それについて、ご質問があるのですが」
千草との会話を中断させ、ドネットが前に出る。
「なぜ、ネギ君が修行以外のことをやらされているのでしょう」
「なぜ？　修学旅行の一環じゃ」
「修学旅行に裏に関わることをさせる風習があるなんて知りませんでしたわ。修行内容は『先生』であり、魔法使いの修行をさせていたわけではありません。それに、あなた方は一般人への魔法ばれを容認していた。違いますか？　あなたの行動は、すべて自身への利の追及であり、ネギ・スプリングフィールドを利用しているに過ぎないのではないのですか？」
ドネットが、近右衛門を睨みつけた。
そして、本山に轟音が鳴り響いた。

２４話

爆発音に対し、千雨達はゆっくりと振り返った。
煙が上がっているのは離れ、ネギの眠っているはずの場所だ。
「高畑か」
「何のことかのう？」
とぼけたふりをする近右衛門。千雨は手元にノートパソコンを呼び出すと、映像を見せる。
「ここはな、監視カメラが付いてるんだよ。拘束してるやつの衣類にもな」
映し出されるのは高畑とネカネの姿。
「部屋の中の様子もとってあったからな。確実にこれは侵略行為だ。どう説明する？」
睨みつける千雨に千草。近右衛門は、二人を見ずに奥のセラス総長とドネットを見た。
「セラス殿、ドネット殿、英雄の子であるネギ・スプリングフィールドは救出した。もう我慢することはないですぞ」
二人は……いや、この場にいる全員が何を言っているのかわからなかった。
「もうわかっておるでしょう。このことが明るみに出れば、どのようなことになるか」
わかっている。だからこの場にドネットがいるのだ。
「この場で、関西の横行を止めなければ、魔法世界の存在すら危うくなってしまう」
そうだろう、認識阻害の弊害によって、人格変革まで起こっている生徒が拘留されているのだ。しかも、一般人を巻き込んだ事件によって。
「今、関西をどうにかしなければ、世界で戦争が起きますぞ！　中世の魔女狩りの歴史を知らぬわけではないでしょう！」
確かに、今の状況はまずいだろう。
京都の地にて起きた事件。これが発端となって事態は進行してい

る。
一般人に魔法がばれ、その人物が起こしたイベントによって、同意もしていない一般人がネギ・スプリングフィールドの従者となる。しかもそれを誘導したのが当人の助言役であるオコジョ妖精なのだ。現場での話では、一般人である朝倉は、そのオコジョ妖精と共に『ネギの協力者である』という発言を行っている。その責任はネギに及ぶことになる。一般人を巻き込んだ罪、一般人に魔法ばれしたにもかかわらず、自分の都合によって対処をしなかった罪。
さらにはそのオコジョ妖精は脱獄囚であったのだ。悪意のある行為をするものをかくまっていた罪がさらに乗せられる。しかもそれを京都で、対立組織のおひざ元でやったのだ。
これは関西のみならず、日本全体に対してのメッセージにもなる。お前等の事なんて、いつでも自由にできるのだ。と
さらにはその後、一旦保護した生徒たちの中に、記憶を封印されていたものや、明らかに不自然な好意をネギに抱いているものがいた。さらには、認識阻害を解いた状況での、他の観光をしている生徒達による被害。これにより、麻帆良の異常性が浮き彫りになった。
意図的にかどうかはわからないが、社会に通じない人間が量産されているのだ。閉鎖されている空間の中で。しかも学校は全寮制。自宅通学にしない理由を邪推することもできる。
ひとつひとつの問題を整理し、まとめてしかるべきところに出せどうなるか。
麻帆良の、魔法使いの危険性を、事件と言う最悪の形で明るみに出すことになる。
それにより、魔法使い全体に対する不信が広まり、戦争が起きてもおかしくないのだ。
ならばどうすればいいか。
近右衛門の結論は、全てをなかったことにする、だ。
近衛詠春に向けた出した親書。それによって起きた事件。予期せぬ関西の下の人間によるクーデター。そこからすべてが狂い始めた。
「この者達をどうにかせねば、すべて終わりぞ！　元老院の方々には

既に連絡済みじゃ！　今なら間に合う！」
自身の手に及ぶところでの戯曲だった。親書を渡して終わりになるはずだった。
このかはトラブルによって魔法を知る。知らなくても、その後、仮契約はいつかするはずだった。その為に逃がした欲深いオコジョ妖精。
ネギのために用意した生徒達。才ある者、決して悪意を持たない人間。一から作り上げたわけではない。しかし、都合よく生まれていた麻帆良の培養生徒達。
全てがうまく回っていた。自身の思い通りに動き、関東に繁栄を生んでいた。
それが、たった一つの事件で終わることになった。
ちょっと目を離した隙に。
何とかしなければ、破滅だ。
交渉をしても、長である近右衛門の権威は落ちるだろう。責任を取らざるを得ないだろう。詳しくことを調べられれば、一般人に何をしたかが明るみに出る。
学年末の『魔法の書』のことが表に出た時点で、魔法を利用していることがばれる。そうでなくても、調査が入り、関西との間での話が付かなければ、麻帆良の異常性が表に出される。それでも近右衛門は終わりだ。
近右衛門にとって、少しでも明るみに出ることは、全てを失うことにつながる。
関東魔法協会は何とかなるかもしれない。自治権を奪われても、規模を縮小されても、どうにか交渉によっては生き残れるかもしれない。
魔法世界においても簡単に危機を脱することができる。関東魔法協会でもできる手段だ。それを近右衛門は恐れ、同時にさせるわけにはいかなかった。
近衛近右衛門を切る。
これだけで、他の組織はうまく回るのだ。

責任を近右衛門に押し付ければ、監督者処分となり、ネギは子供として、被保護者の立場になれる。カモをかくまっているのを知りながら放置した責任。麻帆良の生徒、麻帆良の人間に対し、異常を押し付けた責任を近右衛門が取ることによって、他は全てうまく回るのだ。

それを近右衛門は恐れていた。

すべてひょうひょうと躱し、自分の満足へと変え、人の様子を見ていた。

極東の人間でありながら、魔法世界の支部である関東魔法協会の会長の椅子を手に入れた。婿を長にすることで、間接的に関西を牛耳れていた。麻帆良学園の学園長となり、自由に物事を行えていた。

それがすべてなくなるのだ。

ただ、英雄の子を手に入れようとしたがために。

簡単に終わらせるはずだったのに、すべてがうまくいくはずだったのに。

一瞬で気泡と化してしまうのだ。

受け入れられるものではない。

「さぁ、セラス殿!」

近右衛門の声があたりに響き渡った。

反響し、余韻として残る声が山彦のように錯覚を起こす。

「近衛、近右衛門殿」

静かに、セラス総長は口を開いた。

「さすがに今回の件、驚きました。いかに事を収めるか、私も考えていました。確かに、そういったことをするのも手段の一つとしてあるでしょう」

セラス総長は、千雨と千草を見る。

「しかし、」

近右衛門が、固まった。

「あなたの所業、許せるものではありません。あなたの自己保身でしかないその判決を、下すわけにはまいりません」

セラス総長は静かに右手を挙げる。周りにいくつも浮かぶ魔法陣。

関東の人間が驚くその場、支配するのは銀の鎧。

アリアドネー騎士団が集結していた。
「あなたを、許すわけにはいかない。それこそ、魔法世界のためにも」
近右衛門を見下ろすセラス総長。
「なぜじゃ！　なぜあなたとあろうものが――」
「既に遅い。この件は世界に知れ渡っている。そうでなくとも許す気はないが、もはやお前に退路はない。なら、足掻くことで見苦しい姿を晒させるわけにもいかないのでな」
「連合に牙を向けると言うのか！」
「向けませんよ。そちらの言う元老院の方は、どのようなお方か知りませんが、こちらにも元老院議員がおります。既に、この場に」
睨みあう両陣営。その場に、明日菜の姿がないことに千雨は気が付いた。

爆音の先にあったもの、ネギ・スプリングフィールドを起こしている影があった。
「大丈夫かい？　ネギ君」
「タカミチ……おねえちゃん？」
「ネギ！」
ネギを支えるタカミチ。その姿を見て涙を流すネカネ。
タカミチ・T・高畑の襲撃によってネギは救出されていた。
「僕は、どうなっていたの？」
「関西呪術協会につかまっていたんだ。さぁ、逃げようネギ君」
高畑の手を取るネギ。場の様子が理解できていないようだ。
「そうだ、他の皆は!?　クラスの皆は!?」
「他の皆は学園長たちが動いている、さぁ！」
強く手を引っ張り、引きずっていくように廊下を渡る高畑。ネカネは警戒しながらもその後ろについている。
その時、曲がり角から影が出てきた。
「なにをしているのですか？　タカミチ」
そこにいるはずのない人物。メガロメセンブリア、元老院議員の一人。

「なっ……クルト!?」
　クルト＝ゲーテル。彼が刀を構えてそこにいた。
「ネギ君をどこにやろうというのです」
「……ネギ君、逃げるんだ」
「どこに？　私たちから、本国から逃げてどうすると言うのですか？」
　突然の彼の登場に、戸惑いを隠せない３人。
「脱獄なんてしたら、君の罪はさらに重くなりますよ、ネギ君」
「何を馬鹿な！　この子が何をしたというんだ！」
「そうです！　ネギに罪なんてありません！」
　睨み合うクルトとタカミチ、ネカネ。その様相にネギはついていけずにいた。
「一般人を巻き込んでの魔法の使用に仮契約、許せるものではないことを知っていますか？　さらに余罪を調べてみれば出るわ出るわ、犯罪者じゃないと言う方がおかしいのではないですか？」
「彼はナギさんの息子だぞ！　彼を拘束する意味を分かっているのか!?」
　激昂するタカミチ。それに対しクルトは肩をすくめて返した。
「何を言うかと思えば。なるほど、だからネギ君はこのように育ったと。ある意味納得がいきました」
「なんだと？」
「あなた方は、サウザントマスターを作るために自由奔放な彼を作るために犯罪行為を見逃し、助長させていたのですね」
「え……」
「メルディアナでは禁書庫に入り、優遇されているのにも気づかずに、関東魔法協会と調整の末に飛び級での首席卒業。なるほどなるほど、ナギ・スプリングフィールドの人生を追体験させ、さらに優秀であるかのように周りに印象付ける。そして上に立つものとして作り上げる。理想を押し付けて。そしてそれが自分たちの手から離れようとしたら拉致をするのですか？」
　ネギは、クルトの言葉を聞き、呆然とした。掴まれている手に力が入らず。どこを見ているのかもわからない様子で口も半開きになっ

ていた。
「そんなわけないだろう。ナギさんの息子を」
「そう！　ナギさんの息子！　サウザントマスターの息子！　だからネギ君を育てよう！　どのように？　どうやって？　どうすれば？　ナギのように育てよう！　英雄の再来だ！　そうしよう！　結局君たちはそれしか考えない。そうだろう？」
「ならクルト、君はどうすると言うんだ。この場、この現状でネギ君を助け出さないでどうしようと！」
「償わせる。再教育をさせる。やりようはいくらでもある。しかし、タカミチ、君はそれが汚点になるから気に入らない」
「当たり前だろう！」
　クルトは、曲がり角に立っていた。だからわかった。ここにやってくる人間を。
「かつてお前は言ったな、いいじゃんかと。今日のところはハッピーエンドでと」
「な、なにを」
「ならばなぜここにいる！　お前等は結局最後に自分たちの思い通りになればいいんだ。何をしようと、自分が満足ならば！　そうだろう！」
「そんなことはないっ！」
「ならば、聞こう！　なぜ彼女がここにいる！　アリカ様は平和を望んだ。ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグは平穏を望んだ。なのになぜ彼女はここにいる。お前は結局自己満足での行動しかとっていないんですよ！　そうでないと言うのなら、説明してみなさい！」
　走ってきた明日菜が、高畑の目に留まる。
　お互いの視線が交錯した。
「さぁ、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアに、全てを話せ！　タカミチ！」

25話

目の前に現れたアスナ。
「明日菜、君？」
「タカミチ……」
相対する二人。直ぐに言葉は出なかった。
「君も、無事だったんだね。さぁ、早くこちらに」
差し出される高畑の手、もう片方にはネギの手が。彼もアスナを見つけ、嬉しそうにしている。彼女はもう、明日菜ではないと言うのに。
「何をしているの？　タカミチ」
ここでようやく、彼はアスナが、自分のことを「タカミチ」と呼んでいることに気付く。
そして、その意味を知った。
「明日菜君、君……記憶が」
「戻ったよ。全部、思い出した」
小さくつぶやき、高畑のほうへと足を進めるアスナ。手を取ろうとして、途中で高畑の手を強くはじく。
「あなたがこうやって差し出した手。そのせいで私は不幸になった」
高畑は呆然と、はじかれた手を見つめていた。
「なんで……」
「わからないのタカミチ、私が記憶を封印されたのはなんでか忘れたの？　私はガトウさんの願いで一般人として生きていくことを受け入れた。そうだよね、タカミチ。私は忘れたくなんてなかった。けど、ガトウさんの最後のお願いだったから」
「あぁ、だから僕は」
「ならなんで、私は今この場にいるの？　このかと同室になって、ネギを無理やりそこに住まわせて、魔法の力に近づけて。タカミチ、あなたは何をしたかったの？」
高畑は、アスナがなにを言っているのかわからなかった。アリカの妹であるアスナと、ナギとアリカの息子であるネギが一緒にいることに、英雄の娘であるこのかと一緒にいることに何の不都合があるの

か、何が間違いなのかわからないのだ。
「ナギさんの息子なんだよ？　記憶が戻っているのならわかるだろう。それがどれだけ大事なことか」
「タカミチ……」
知らなかった。高畑の目がこんなにも濁っていることを、アスナも明日菜も知らなかった。
英雄に目を奪われた時から、彼の人生は変わっていた。英雄そのものにすべてをかけて、あこがれて、自身がそうであるように努め、尊敬する英雄の息子にそれを強要した。
そして、詠春の娘であるこのかと、ガトウの忘れ形見であるアスナを近づけた。
このかの側にいなければ、気にされることもないアスナも、高畑が保護者であって、関西呪術協会の長の娘で、関東魔法協会の長の孫のこのかと同室にされたら、組織の外から見れば確実に監視対象になっているだろう。事実、ネギが来てからではあるが、千雨はアスナのことも警戒していた。
そこに、ネギがやってきて、住まわせているのだ。
周りから見れば、詠春、高畑、ナギの2代目がそろっているように見える。事情を知っているものが見れば、そこにガトウとアリカも入るのだから、狙われないはずがない。
平和で幸せな人生なんて、過ごせるわけがないのだ。
そして、今の返答もそうだ。否定でも、説明でも、いいわけでもなく、彼はネギの事を口にした。アスナよりネギを選んだのだ。
「本当に、しょうがない奴ですね君は」
アスナの隣に並び立つクルト。
「思えば君はそうでした。君は話を聞く真面目な人間に見えて、本質は自分の気に入ったことしかしない、理解しない我儘な人間」
アスナの肩に手を置きながらタカミチへと言葉を投げかけるクルト。
「君は本質を理解していない。ガトウさんの言ったことは、『アスナちゃんを平和なところへ』だ。幸せに生きるためにね。決して魔法に

関わらせて作り変えることによって幸せに思わせることじゃない」
　そうしてクルトは頭を垂れる。
「姫君、貴女の救出ができずに申し訳ありませんでした。これも貴女の身を案じるがため、どうかご容赦を」
「クルト、本当にそう思っていないのだから、そんな態度はやめて」
　冷ややかに言うアスナに、クルトはケロッとした表情で答える。
「あなたの身を案じてたのは本当ですよ。ただ、私はアリカ姫が戻ってきたときに、あなたが幸せでいないと悲しむから、身を案じていました。あなたが感じる違和感は、あなたへの敬意の部分かと」
　そう言って、高畑の方へと向き直る。
「しかし、本当に心配しているように見えて、実際は人をもののように見る人間と、別の目的ながら実利を求め、あなたを助ける人間、どちらをあなたは信じますか？」
　アスナは高畑とネギを見た。そして、クルトを見た。
「明日菜さん！」
　そこで初めて、ネギが口を開く。
「明日菜さん！　まだ皆さんが捕まっているんです！　協力して下さい！　タカミチも来てくれたから、手分けすればきっと助かります！」
　何ともずれた物言い。しかし、しょうがなかった。ネギは現状を理解していないのだから。誰が敵で、誰が味方かもわからない。今の会話も、アスナとあやかの喧嘩や、ウルスラと3―Aの喧嘩のようにしか感じ取っていなかった。
　彼は朝倉が起こした事件により拘留され、余罪が出てきたが、現状、京都においては自身で何一つトラブルを起こしたと考えていないのだ。
　彼はこれを関西の襲撃だとしか理解せず、関西によって囚われたクラスメイトを助けなければならないと考えていた。
　だから、いつも通りにアスナに頼んだのだ。
　しかし、アスナは答えない。もう彼女は何も知らない明日菜ではないのだ。

「ネギ、あんた、自分のやったことが分かってるの？」
「え？」
ネギは期待していた。文句を言いながらも、仕方がないと言って協力してくれる明日菜を。いつもの持ち前の元気な返事で、味方してくれる明日菜を。しかし返ってきたのは違う言葉。
「ネギ、アンタは、自分がなんでここにいるのかわからない？」
「ぼ、僕は、関西の人たちに捕まって」
「違うよネギ。アンタは、やったらいけないことをしたの。だから捕まっていたの」
ネギは理解できなかった。自分は悪いことをしていない。何一つ間違ってはいないと確信していたからだ。
そして、僅かにあった違和感に気付く。アスナが、いつも目の前にいるような明日菜ではないのだ。少し落ち着きを見せた表情。諦めの入った少し沈んだ眼。
何も知らない、アスナの記憶が封印されていたことすら知らないネギは、修学旅行初日の千草の言葉を思い出す。
「貴女は、誰ですか？」
「ネギ？」
いきなりの言葉に、アスナも真意を掴めなかった。
「明日菜さんを操って、僕たちを倒そうとして、僕は許さないぞ！」
明日菜はネギに対して、明らかな拒絶をしたことはない。少なくとも、切羽詰まった状況においては、必ず助けてくれる姉のような存在だった。
明日菜は、ネギの味方だった。そう仕向けられていた。
だからこそ、元にもどったアスナをネギは拒絶する。自分の頭で考えられるようになったアスナを拒絶する。ネギ自身ではなく、ネギの行動を。
ネギはそれが信じられず、頭の中から都合のいい情報を引き出して、アスナに拒絶された理由をでっちあげる。
隣には高畑。後ろにはネカネ。
前にはいつもと違うアスナ。それに知り合ってもいないクルト。

どちらが正しくて、どちらが間違っているのか。
高畑は立派な魔法使いじゃないか。ネカネは自分の姉でメルディアナの講師じゃないか。
対してあちらはどうだ。知りもしない人間に、自分を否定した様子の違うアスナ。
どちらが味方で正しい人間なのか。敵が正しいなんて言うことは今までなかった。だから、敵は間違っている人間だ。
だったら
「僕は、あなたたちを倒します！」
ナギから受け継いだ杖を振りかざし、前に向ける。
自分の正義を貫くために！
それに乗じて、高畑とネカネも構えた。二人は理性的に、アスナとクルトを倒さなければいけないことをわかっていたから。今助け出したネギを安全な場所に送り届けるために。
アスナは、ポケットからパクティオーカードを取り出して、それを破いた。
「明日菜さん！」
「ネギ、アンタは甘やかされただけ。アンタが悪いわけじゃない。私も騙されていただけ、どちらが悪いわけでもない。けど――」
「無知なガキには教えてやらなけりゃいけないな。年上の人間として」
アスナの言葉を、引き継いだ。
アスナは、その相手を求めて後ろを振り向いた。
「どうせこっちに来てると思ったぜ」
「……千雨」
そこには、千雨の姿があった。
千雨はアスナの横にまで行くと、小さなペーパーナイフのようなものを取り出した。
「これは？」
「私の魔術特性は刻むことだ。符に文字を刻み、さっき話した銃のように、弾丸に魔力を刻む刻印やルーンを刻む。そしてその一つ」

ペーパーナイフのような大きさのものは、巨大化し、一つの剣となった。
「これは概念を刻んだ剣。その試作品だが、何もないよりはましだろう」
かのアーサー王の所持していた剣、エクスカリバー。とある作品から生み出した。魔力を付加された剣。そのような力こそないが、魔法剣としての役割を帯び、魔法使いとの戦闘に足る力強さを備えていた。
「んでもって、お前がやらなけりゃいけない相手はあいつじゃなくてこっち」
指さす相手は高畑だった。
「今までの恨みつらみ、全部ぶつけてこい！」
「……ありがとう千雨。ネギの事、よろしくね」
軽く背を押して高畑の方にアスナを追いやる。アスナはそのまま、千雨から受け取った剣を構え、高畑と相対した。
そして、千雨はネギへと向く。ネギは、憎しみのこもった目で千雨を見ていた。
「んでもって私は先生だ」
「千雨さん！　なんでこんなことをするんです！　早くみんなを返してください！　あなたのやっていることが分かっているんですか？　魔法使いなんでしょう、なんで良いことに魔法を使わないんですか！」
ネギの訴えを千雨は鼻で笑った。
それはそうだろう、千雨にとって、ネギの皆を返せと言う言葉は、クラスメイトを洗脳下に戻せと聞こえているのだ。それを知りもしないで自分が正義だと思っているネギに対し、同情を感じるとともに、嫌悪感をあらわにする。無知とは、罪なのだ。
何が善で、何が悪かを判断できないものに、それを語る資格はない。
善は裏を返せば悪となる。悪は、裏を返せば善となる。その微妙な判断が下せない人間は、自分の正義を善と押し付ける。
「あんたは、何も言ってもわからないことぐらいは知っている。だか

ら、ここは悪役としてやらせてもらおう」
だからこそ千雨は、今悪としてネギの前に立った。ネギに対しては悪である。場合によっては他のクラスメイトに対しても悪であるだろう。今までの人生を壊すのだから。しかし、千雨の善は、誰に対して悪であっても行わなければならなかった。自分の人生を否定しないために、被害を拡大させないために。今のネギが間違っていることを教えるために。ネギの価値観を変えるために。
後ろにいるネカネも、ネギと一緒に構える。
「じゃあ、私はこちらですかね」
千雨の隣にクルトが来た。初対面だが、お互いの立場も立ち位置も把握しているだろう。
頼りになる英雄の欠片。しかし
「いや、あんたは見学だ。私たちがここは受け持つ。お偉いさんにこんなことさせられない」
「ふむ……達ですか。まぁいいでしょう。しかし、加勢、すべきところではさせていただきますよ」
「それは願ってもないな。よろしく頼む」
千雨の言葉を聞いて、一歩下がったクルトは、アスナと高畑の戦闘と、ネギ達と千雨の戦闘、どちらにも割り込めるように位置を取った。
「さて、先生。いや……ガキ、始めようか先に生きた人間が、教育をしてやるよ」
符を手に取り、構え、戦闘態勢を取る。
そして、空いたもう片方の手に持つのは、
「パクティオーカード!? なんで極東の陰陽師が!?」
ネカネの驚きの声を無視し、千雨はそれを宙に投げる。
「悪いね。私は和洋折衷、どちらでも行けるんだ。来い!『長谷川千雨の従者、犬上小太郎』!」

26話

目の前に現れたのは犬耳の少年。
「なんや千雨姉ちゃん、やっと出番か？」
学ランを来た、活発に走り回っていそうな少年。跳ねた髪と不敵な笑みは、彼の特徴を一層際立たせていた。
「あぁ。と、いうことで小太郎、アーティファクトを出せ」
しかしなぜ、千雨が小太郎を従者に従えているのか。本来表に出ない人間が……。
「あ、あれを出すんか？　今日は妖怪相手やないのに」
「いいから出せ。大一番だ、反論はゆるさねぇ」
ものすごく嫌そうな顔をする小太郎だが、千雨は彼の言葉を一切無視して命令した。
「うぅ、アデアット……」
アデアット。パクティオーした従者が手にすることのできる、専用アイテムを出すためのキーワード。しかし、小太郎はそれを拒絶した。なぜか
小太郎の手には何も現れなかった。
小太郎の足には何も付いていなかった
小太郎の頭には何もかぶっていなかった。
小太郎の服にも何も変化はない。
小太郎の首には、首輪がつけられていた。それは鎖でつながれており、その先は千雨の手中に収まっていた。
「目標の撃破が最優先、死亡、骨折及び後遺症の残る怪我はさせんなよ。脱臼は大丈夫だ」
「いいかげん、この首輪やめてくれへん？」
「お前がしっかりと判断できるようになってからだ」
暴走の多い小太郎を強制召喚するために行った仮契約。それが思わぬ副産物を生んだ。
それがこの首輪だ。
「わかったわ。じゃあいくで！　西洋魔術師！」

「え!?　ラステ……ブ！」
　突然の攻撃に対処できずに、頬に拳を食らったネギ。それを見てネカネが叫んだ。
「卑怯な！　いきなり攻撃するなんて」
「よーいどんじゃねえんだよ、戦闘ってのはな」
　千雨は四方に札を投げた。壁や地面に張り付いた札が方陣を組み、結界が出来上がる。
「陰！」
　千雨は結界内に作用する術式を刻む。自分の有利になるように
「よわっちぃな、西洋魔術師は。いつも後ろでセコセコやってるからなよなよしとるんや」
　千雨は小太郎を軽く睨みつける。彼は、その視線に気が付いて慌てて次の動作に入った。
　右足を股関節から回した中断蹴りをネギにみまう。しかし、ネギはとっさにそれを杖でしのいだ。
「まだまだいくでぇ！　ボロボロになりたくなかったらさっさと降参せいや！」
　右手の突き、左手の手刀切り、そして右ひざ蹴りからの左回し蹴り。さらにその回転を利用した裏拳。一撃で相手を潰さぬように、かといって障壁で防ぎきれるものでもない。すべてにおいて調整しつくされた攻撃。ネギはそれを必死に杖で耐えていた。
「くっ！　君はなんでこんなことをするんだ！」
「なんで!?　悪党をやっつけるのに理由なんてないわ！」
　小太郎の発言にネギが反応した。
「悪いことをやっているのは君たちじゃないか！　僕のクラスの皆を返してもらう！」
「ハッ……なにが僕のクラスや。誰もお前の事なんて待ってへんわ！」
　胸ぐらを掴んで投げ飛ばす小太郎。そして、間髪入れずに追い打ちをかける。
「お前等西洋魔術師は後ろっからネチネチとせこいことしとるから弱

いんや！」
体制を立て直し、杖を前方に構えるネギ。それを払いながらも小太郎は懐に入った。
「知っとるか？　千雨姉ちゃんは西洋魔術師に殺されたからこっちに来たんや」
ネギは、その言葉に一瞬固まった。そこを見逃さずに小太郎が顎に一撃を入れる。
首輪の鎖が少し、緩んだ感触がした。
「ガハッ……けど、千雨さんは生きて――」
「難しいことは俺もわからへん。けどな、それくらいひどいことを千雨姉ちゃんはされたんや！」
膝立ちの状態だったネギを蹴り飛ばす。
「初めてあった時の千雨姉ちゃんは俺と一緒や。一人ぼっちで、前も向けとらんかった。その悲しさがお前にわかるんか！」
ネギは「分かる！」そう言おうとしたが、踵が頭にのしかかってきて言えなかった。しかし、ネギの一人ぼっちと、千雨の一人ぼっちは同じなのだろうか。
常識が乖離し、一人取り残された千雨。
一人、自分の追う夢のために無茶をするネギ。
人為的に作られた孤独。
勝つために用意された蠱毒の中で生かされている孤独。
救いの手は伸べられず、
数多の援助があり、
幾年にもわたる葛藤の末、
拒絶し逃げた先には、
本当の理解者がいた。
糸を掲げる操り士がいた。
双方ともに、苦労はあっただろう。辛い思いもしただろう。だが、片方は立ち向かい、崩れる直前で救い出された。もう片方は思考を放棄し、ただ欲望を満たすにいたった。
何が良くて、何が悪いのか、結論が出ることはないだろう。

ただ、今この場で、小太郎にとって、ネギにとって大事なことは、そんなことではない。
「西洋魔術師のせいで、千雨姉ちゃんは苦しかったんや！　いつも言っとった。本気で話せる奴は俺達だけやって。せやかて、その時いつも、聞こえるんや。『本当の友達が欲しいって』」
それは、小太郎が千雨の事情を知っているから聞こえる幻聴。
そして、千雨の長年の思い。
麻帆良にいてはかなわぬ願い。
「人の幸せ奪っといて何が僕のクラスや！　人の人生奪っといて、人をモノみたいに扱うなや！」
小太郎は、渾身の右をネギの脇腹に叩き込んだ。
小太郎は誓っていた。この戦いだけは決して負けないと。
千雨は言っていなかったが、千草がこっそりと教えていた。これは、千雨にとっての決別の戦いであると。今まで積み重ねてきたことの集大成であると。
悲しみをなくすための戦いであると。
だから誓った。この戦い、千雨のためにうまくやると。ミスはしないと。
今まで助けられた恩を返すために。それが、小太郎が男として決めたことだった。
「立てや西洋魔術師。腐った根性叩き直したる！」

「はぁ、こっぱずかしいこと言ってんなよ。小太郎」
鎖のリードを持ちながら、千雨はそこに立っていた。
小太郎の首輪は、リードの先にいる人物に、小太郎の現状況を知らせる。視覚、聴覚を伝えるものだった。あと一つ、能力があるが、それは今回必要なさそうだ。
「さて、こっちもおとなしくしてもらいたいもんだね、ネカネさんよ」
対するネカネは、毅然と立ち、構えてはいる者の、右手に火傷の跡があった。下には、墨となった杖が落ちている。
「あなたに、ネギは渡さない……」

ネカネは体の至る所を隠している。耳、胸、手。おそらくは、魔力発動体があるであろう場所。
「渡さないも何も、受け渡すのに合意してないのがアンタだろうに」
「ネギは何も悪くないわ。罪を与えることなんてしていない」
関西にいるときにネギが自身で起こしたことは、魔力の暴走とこのかの奪取くらいだ。交渉によっては罪を猶予処分にはできるものではある。
しかし、この件で関東が屈することがあれば、関東にいるときの不祥事も浮上するのだ。その数々を知った今、それを関西が知っている今、ネカネはネギを助けるために犯罪に走った。
『…』
「汲々如律令！　我は『言』を拒絶する！」
ネカネが口を開く。そこに千雨はすかさず札を構えた。氣を利用するタイプのものだ。
千雨が最初に敷いた陣、それは魔力を分散し、働きを減らす効果を持つ陣だ。千雨が西洋魔術師相手のために使っている常套手段でもある。
陰陽師は氣を使って符を発動させることもできる。刹那なｋんかがその例として挙げられるだろう。
しかし、西洋魔術師は魔力を運用することで魔法を発動させる。氣を使うことはできない。これは、属性を扱う魔法と、五行を扱う陰陽師の差と言えよう。感化法を使うことが考えられない状態では、それほどアドバンテージにはならない。しかし、こうやって魔力の運用を難しくさせてしまえば、あとは氣の勝負になる。
そして『言』を拒絶し詠唱魔法を使わせない。無詠唱の魔法は高が知れている上に、相手は魔法戦士ではない。
ちなみに、小太郎が障壁を軽々破っているのも、それが原因である。
「くっ……なら！」
体内で魔力を運用し、ネカネが体当たりをしてきた。『戦いの歌』である。
千雨はそれを正面に見据えて、符を一枚放り投げた。

「お札さん、くるりとまわって一回転」
炎が符より飛び出し、ネカネを囲うように渦巻いた。一瞬の先には、服がところどころ焦げたネカネの姿。ネカネは治癒魔法でそれを治す。
「おー、さすがに治癒魔法は得意なんだな」
「ええ、おかげさまで」
千雨の軽口に、ネカネが乗ってきた。距離を取りながら、次の策を考えているのだろう。
「けど、ネギ先生があんまり治癒をしているところを見たことねぇけど、教えてやらなかったのか？」
学年末試験のときの明日菜の怪我を思い出し、聞く千雨。答えは既に分かっているが、あえて問いただす。
「ええ。あの子はあまり、他のことに夢中だったから」
「薄情なんだな、先生も、アンタも」
「何をっ！」
千雨はネカネの動きをけん制しながらも続けた。
「だってそうだろう。6年前のあの日、アンタらは見たはずだ。石になっている友人を、仲間を。なのに治癒魔法が得意な肉親がいながら、それを解こうともしない。飛び級までする天才がいながら、それを行おうとすらしない。場所もある、知識もある、才能もある。なのに何考えてんだお前等は」
ネカネは、それに対して何一つ動揺しなかった。
「ネギはナギさんの息子よ。もっとやるべきことがあるわ」
「それは、先生が望んでいることか？　逃げる先に用意したものじゃないのか？　本当に望んでいるものなのか？」
「ええ。ネギがナギさんのようになるためには、目をつむらなくちゃいけないこともあるのよ。今回のように！　だから、逃がすの！　魔法世界まで行けば！」
そこで、別の声が混じった。
「ネカネさん、残念なから無理ですよ」
クルトが後ろから声をかけてきた。

「ゲートは全て私の私兵が封鎖しております。逃げても本国から先回りしてね。それに6年前の事件は、我々元老院が起こしたものです。ネギ君を殺すために」
「えっ……」
　ネカネの、両膝が折れた。
「えげつねぇことすんな、アンタも」
「いえ、私は関与していませんよ。過激派の数人が起こしたものです。もっとも、その過激派と言うのが、今関東を助けようとしている者達ですが。まぁ、このままアスナちゃんを捉えようともしているのでしょう。そんなことはさせませんが」
「ちげえよ……まぁ、いいけどよ」
　もう少し、詳しいことを聞きたかった千雨だが、ネカネは、もう何もしゃべれるような状況じゃなかった。最後の救いも断たれたのだ。
　ネギはもう、助からない。それが分かったのだ。
「なんで、ネギがなにをしたというの……」
　ネカネの呟きが空へと消えて行った。

27話

大剣の刃を盾にして、高畑と向かい合うアスナ。
彼女は、一番彼の戦闘スタイルを知っていた。
彼の師匠であるガトウに守られ続けていたのだから。
記憶が戻った時に、一番最初にしたのは自己嫌悪だった。高畑を好いていたことの。
助けてくれていたガトウの面影を残した高畑を好きになったこと。本質を理解しようとしないで、技と名前だけを引き継いだ高畑なんかに。
そして、憧れと感謝と友愛を、恋愛へと誤認していたこと。ガトウに対し、失礼だと思った。偽りの気持ちで染めるのも、ガトウとの思い出をそんなものに挿げ替えるのも。
次に出てきたのは、ガトウの最後の言葉。そして、現状。
利用され続けていたアスナだからこそ、すぐに自分の環境を把握した。はめられたのだと。
塗り固められた周りには、魔法しかなかった。消された記憶、誘導された精神で、ネギの隣に立っていた。これではガトウさんとの約束を守れないと。
記憶を失いたくなかった。思い出を失いたくなかった。仲間を忘れたくなかった。
なのに、忘れさせられた。最後は説得され、深い眠りについた。そして、目覚めればそれはなんて戯言か。結局、踊らされていただけだった。
「タカミチは、結局なにも分かっていない」
ずっとガトウの後ろについていたタカミチ。けど、ずっと目を追っていたのはナギ・スプリングフィールドに対してだった。英雄に対してだった。苦悩の末に結果を得る捜査官より、一撃で敵を倒し担ぎあげられる英雄を尊敬していた。
ガトウは、高畑にとって、魔法と言う手段を得るための道具だったのだと、アスナは気付いた。気付かされた。

湧き上がる怒りと悲しみ。結局、立派な魔法使いなんて、英雄なんて我儘な奴が行う独善。それが許されるのは、本質的な英雄のみ。心から味方を助ける者。今ＮＧＯで人々を救っているだろう。敵を倒し、己の道を行くもの。ナギのような人間だ。危険性をはらみながらも、英雄の資質とは、本能的に真の敵を見つける。そして、双方に言えることは、周りを不幸にしない。仲間を見つけ、助け助けられるが、利用はしない。

けど、高畑はそこが違った。英雄になりきれない英雄。

「あやまって、ガトウさんに、ナギに、皆に」

ナギの生きざまを穢した高畑。ガトウの技を利用した高畑。

「善人ぶって、真面目ぶって、他人を利用してまで得た力で、その人たちの周りを壊してんじゃないわよ！」

そのまま前に突進するアスナ。高畑はそれに対し、ポケットに手を入れて構える。

「君こそ、なんでわからないんだ」

アスナの剣にいくつもの衝撃が走る。それを無視してアスナは高畑へと向かった。

「わかんないよ、タカミチの考えなんて。わかりたくない」

「ネギ君に君は必要な存在になっているんだ。なのになぜ拒む」

距離を取りつつ戦う高畑。前へと進み続けるアスナ。

「タカミチが、学園長が仕向けたことでしょ！」

「君が選んだんだ。そういう運命だったんだ」

高畑の居合拳を避け、懐に入り蹴りを放つ。

「運命なわけない、これが運命だと言うのなら……」

腹部にあたる直前に避けた高畑に、アスナは剣を振り下ろした。

「ここで止めるまでが運命なんだよ」

剣が勢いよく、地面に刺さった。廊下の板が割れ、辺りに散らばる。そして、先に逃げた高畑を追って、戦場は庭へと移っていく。

居合拳を連続で打つタカミチ。しかし、それをアスナはくらいながらも倒れなかった。

「私は負けないよ、ガトウさんのためにも。偽物なんかに」

アスナは地面に剣を突き刺した。
ここは千雨の結界の範囲外。それを確認し、両手を合わせて、手にボールを持っているかのように
「右手に魔力、左手に氣」
咸卦法。究極技法、魔力と氣という、本来は反発するものを融合させて、爆発的な威力を生み出す。
「来て、タカミチ。教えてあげる」
「僕も、教えてあげよう。君の進むべき道を」
アスナを真似るかのように、高畑も手を合わせた。
「いくよ、明日菜君」
豪殺、居合拳。
咸卦法を使用することによって、爆発的な威力を作る居合拳。
居合抜きをポケットで行い、拳で発生される空圧を武器にする居合拳。それの強化バージョンだ。
アスナはそれに、真っ向から立ち向かった。
地面に挿した剣を盾に、威力の高まった攻撃をかわす。
そして剣を抜き、高畑を中心に円を取って間合いを測る。そこにすかさず高畑が居合拳の雨を降らせた。小刻みに居合拳を放ち、ある程度的が絞れたら豪殺居合拳を放つ。
徐々にアスナは追いやられていった。
「逃げてばかりじゃないか、明日菜君」
「別に、タカミチなんていつでも倒せるもの。１０年たってもこれくらいなんだから。咸卦法に何年かかったの？　タカミチ」
アスナの挑発。それによって、苦労をしていた記憶が呼びさまされた。ガトウの弟子だったころ、一瞬で、アスナは咸卦法を会得した。彼は、それに驚きながらも、嫉妬をしていた。
「言うじゃないか明日菜君。じゃあ、これでどうだ！」
逃げ道をふさぐ攻撃の嵐。
アスナはそこかしこに切り傷を作りながらも、それをことごとく避けていく。
追うものと追われるものがはっきりとしているこの勝負。終わり

は急に訪れた。
「……もういい」
アスナが、剣をいきなり小さく戻したのだ。
高畑は、その様子を見てほっと息を吐いた。
「やっと降参か。分かってくれたんだね、明日菜君」
警戒しながらも近寄る高畑。それをアスナは、そっと手をあげて制した。
「もういいよタカミチ。もう、ガトウさんの技を穢すのはやめて」
高畑は、進めていた足を止める。
「何を」
「これで、ずっと名を馳せてきたの？　こんな中途半端な居合拳で」
呆然とする高畑。
「中途、半端だって？」
「そう、中途半端。なにも分かってない。タダの技術すらできていない出来そこない」
アスナの指摘に青筋を浮かべる。そして、高畑は叫んだ。
「明日菜君！　君に何が分かるんだ。僕の居合拳は師匠を超えた！十何年も修行をして手に入れた力だ！」
アスナは静かに首を振る。
「違うよ。これはガトウさんの居合拳じゃない」
「なら、なんだと言うのか、見せてみてくれないか！」
攻撃を再開する高畑。今度はさらに速度を増し、アスナを追い詰める。
それをアスナは、涼しい顔で避けた。
「なっ!?」
「機動が丸見え。居合拳だけじゃ直線しかない」
アスナは腰から取り出した。先ほど千雨に渡された銃を。
「それならこっちと変わらない。見えなくても、軌道が分かったら意味がない」
そう言いながら、何発も弾丸を放つアスナ。その弾道は、直線、曲線、誘導弾。さまざまな種類のものが飛び出した。それを踊るように

避ける高畑。
しかし、
「グッ……」
いきなり足をかばうような仕草をする。
「どうしたの？　タカミチ。ただの居合拳だよ」
「君は、ポケットに手を入れてなんか」
「銃を取り出したじゃない。刀の居合を模した拳なのに、銃を抜くときにできないと思ったの？」
隙を狙って銃弾をさらに増やすアスナ。弾丸の残弾を気にせずに、打っては装填し、高畑を追い詰める。
「だけど、この程度なら」
弾丸に込められているのは千雨の魔力だ。やすやすと高畑によって防がれる。
「何の問題もない」
一撃の軽さを確認した高畑は、一瞬で間合いを詰めた。苦し紛れに明日菜が蹴りを放つ。
「そんなもの効かな……」
また一瞬、高畑の動きがぶれた。
「さっきも言った。ポケットだけが手段じゃないって」
居合とは、加速をつけて行う剣捌き、もしくは、初動からの太刀筋という2種類によって最速の一手となっている。
居合拳は、その捌きを利用したものだ。
なら、走らせるものがあれば、場所があればそれは居合となる。
「居合拳ってね。拳法なんだよ、こぶしじゃないの」
今の明日菜は地面を蹴り飛ばしながら、その勢いで空圧を作ったのだ。
中国拳法にも、支えの手をまわしながら、その腕の加速で速度を上げ、威力のある突きを放つ動作がある。それも、また居合と言えるだろう。
なにも、包まれている必要はないのだ。
「居合の初動の速さと、その勢いで空圧を作り出したり、魔力や氣を放

出する。それが居合拳。よく見ればわかったはず。なんどもガトウさんはやっていたから」
しかし高畑は気が付かない。気が付けない。
なんでか。
「技しか見ないから。力しか見ないからわからない」
豪殺居合拳に居合拳。それは代表となる技であった。それ以外は副産物や、おまけである。
基本、そして極意。それは確かに高畑の使う居合拳。
しかし、技を真似ただけでは真に使えているとは言わない。
「それに、別に空圧だったら、居合の必要もない」
神鳴流だって、そのまま刃で氣を飛ばす。
アスナは拳で氣の入った氣弾を放つ。
それを高畑は避ける。
しかし、アスナの狙いはそこではない。居合の中で速度を上げる。それは確かに必要だが、限界の速度が決まっているわけでもない。高畑とて、常に最高速で居合拳をするわけではない。では、別に速度が乗っていれば
「居合の必要もない」
ただのストレートで空圧を飛ばせる。氣弾は誘導が可能。しかし、見えてしまう。だが。空圧は一直線だが不可視のものだ。
「速度、そして距離のある攻撃、不可視の恐怖、捌き辛い攻撃。これが居合拳」
ガトウを注視していればわかるはずだった。
直線起動の拳だけが居合拳のはずがないと。
圧倒的な力、それを目の前にしていたから気が付かなかったのか？
それを追い求めていたから気が付かなかったのか。居合拳を技としてしか見られなかったから気が付かなかったのか。
ナギに憧れ、ガトウの弟子になった高畑。その矛盾が、バランスの崩壊を生んだ。
「……それが、どうしたと言うんだ」
高畑は、アスナの攻撃を受けながらも、威力を乗せた居合拳をアス

ナに向かって放った。
アスナは、一歩後ろへ下がる。
「だからと言って、僕と明日菜君との実力の差が縮まることはない。それが居合拳だと言うのなら、後でそれを学べばいいだけだ」
高畑は前に一歩強く踏み込んだ。
「覚えればいい。そして、また一歩僕は強くなれる」
本質を見抜いていない高畑。アスナはガトウの本質を伝えようとした。しかし高畑が見たのは技術の力。
高畑が見ていなかったガトウの面影は、技術の重要性にかき消された。
見てなかったのなら覚えればいい。力をさらに伸ばせると。
思いは、伝わらない。力だけが、伝わった。

２８話

高畑はゆっくりと歩く。アスナに近づくために。
「いろいろ教えてくれてありがとう明日菜君。今度は僕が教えてあげよう」
高畑は咸卦法を使い、力をあげた。
「いくら知識を得ようとも、」
居合拳が、アスナの目の前に飛んでくる。いくつも乱発されたそれは、アスナの周りに土煙を発生させた。
「いくら知識があろうとも、」
それが目隠しとなり、高畑の姿を見失う。アスナは目を細めながらも、高畑の気配を探した。
瞬動を多用し、アスナに居場所を悟らせない高畑。四方八方から、アスナに向けて空圧が飛んだ。それ一発一発が、骨折に至るような力強い攻撃。
「クッ……逃げ出せない」
３６０度、全てから来る攻撃。どこに逃げても追ってこられ、ガードしようにもそれは難しい。アスナの咸卦法より、高畑の咸卦法の力の方が強かったのだ。
「力にはかなわないんだよ明日菜君」
いきなり目の前に現れた高畑。それに対応しきれなかったアスナが、一瞬遅れて反応する。
「遅いよ」
バックステップで逃げようとしたアスナに対し、高畑が豪殺居合拳を放った。
ガードを超える、最強クラスの一撃。上から撃ち落とすように繰り出される。
アスナは、地面にたたきつけられる。そして、アスナの重みで地面にできるクレーター。１０センチはめり込んだそれは、いったいどれくらいの障壁なのか。
「ガッ――」

「アスナ様！」
クルトの声が遠くから聞こえる。遠く？　意識が遠いのをアスナは感じた。
高畑にやられた。そのことをやっと知覚する。
「来ないで、クルト……」
体を動かそうとするが、自由が効かない。それでも鞭を打って指を動かして地面に触る。砂を揺らす。
少しずつ腕に力を入れた。肘から奥が徐々に動き、起きるための支えとなる。
つま先に、拇指球に力が入る。震えながらも、アスナは膝立ちになる。
「タカミチになんて負けられない」
膝に置かれている手をゆっくりと離し、しっかりと地面に立った。
クレーターの外から見下ろす高畑を睨み返す。
「どうだ、分かったろう明日菜君。結局は力だ。自分の成すべきことを決めるのは力だ。ナギさんは力があったから正義になれた。本質なんて自分が決める。正義が決めるんだ。そうだろう？」
アスナは濁った眼の高畑を睨み続ける。
「世界に追われても彼らは英雄となった。なんでか、正義だからだ！
力を示したからだ！」
フェイトに騙され、指名手配されても、力でアリカ姫を救い出した。指名手配の撤廃はなかったまま、彼らは大戦を終結させた。賞金首にもかかわらず、パレードや式典にまで招待され、いつの間にか賞金は消えていた。
「力で渓谷より救い出せた。問題にならなかったのは僕らに力があったからだ！」
アリカを助け出した後も、彼らは英雄だった。顔を完全に見られても、それは変わらない。力がある者が正義になる。元老院に力があるなら、さらなる力でたたき伏せる。それが紅き翼だった。そう高畑は考える。
「ガトウ師匠がなにを考えていたとしても、力があるものが正しいん

だよ明日菜君！　ガトウ師匠は、負けたんだ。弱いんだ。そんな人は、もういらない」
その言葉を聞き、アスナの目から光が消えた。
「ガトウ師匠は死んだんだ。正しくないんだ。正義ではないんだ。なら、正義の僕が正しい！　僕についてくるんだ明日菜君。僕の方が強い。僕の方が正しいのだから」
手を差し伸べてくる高畑。
アスナは震える。その異常性に。その傲慢さに。
そして、ガトウを馬鹿にされたことに。
「ふざけるな」
咸卦法のフルパワー。
氣を最大限まで上げたうえでの王家の魔力。
この力、高畑を上回るに足る力。
「ふざけるなタカミチぃ!!!!」
アスナは一直線に突進。足をかけてきた高畑をそのまま轢き、壁に叩きつける。
「チッ、待て！　アスナ！」
奥から千雨の叫び声が聞こえる。しかし、それを気にしてる余裕はなかった。
時間をおかずに追撃をする。相手が構える暇を与えずに、打つ、殴る、叩きつける、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る！　殴る！　殴る！
「ガトウさんを馬鹿にするな！　私を、アンタをかばって死んだ人を馬鹿にするな！」
止まらない、ガードをされてもお構いなしに、アスナは攻撃を続けていく。
「あの人の死を侮辱するな！」
少しずつ、高畑のガードが上がっていく。それに気が付いているのか、気が付いていないのか、アスナは攻撃を止めない。
「皆の行動を馬鹿にするな！」
顔に集中させていた拳を、腹部から持ち上げるように大きな一撃を

放つ。高畑の体は浮かび上がり、さらに蹴りこまれて宙へと上がった。それを追うために、アスナも地面をけった。
「アホ！　誘いだ！」
「アスナ様！」
千雨とクルトの声があたりに響いた。高畑の唇は釣りあがり、笑みをうかべていた。
空中は、逃げることが許されない。
「結果がすべてだよ、明日菜君」
クルトが駆けた。アスナを護るために。だが、遠すぎた場所のアスナを追い越すには足りない。
千雨は符を取り出して障壁を張る。しかし、千雨のとっさの氣では、焼け石に水だ。
「あふなふぁん！」
不意に後ろから聞こえた。舌足らずの声。発声しきれていない、不完全な声。しかし、それは確実に明日菜のことを呼んでいた。
振り返れば見えただろう。小太郎と戦いながら、千雨の叫び声に反応したネギが、高畑とアスナの戦いを視界にとらえたのを。そして、高畑が拳を振り下ろさんとしているのを見ていることを。
とっさにポケットから仮契約のカードを取り出したのを。
「『召喚』！」
ネギが叫ぶ。裏切られたと思っていた少女に対して。彼女を傷つけないために。
彼女を護るために。味方のはずの高畑から遠ざけるために。
淡い光が、アスナを包んだ。拳圧がアスナにあたるその直前。まさに一瞬で彼女の姿はその場から消えた。
現れるのはネギの目の前。ボロボロになって、まともに声も出せない少年の目の前に彼女は姿を現す。
残された暴力は、クルトが断ち切り、高畑とそのまま対峙する。
千雨も、ネカネとネギを無力化できたと判断したのか、小太郎を伴って高畑と向かい合った。
「ネギ……」

「大丈夫でふか？　明日菜ふぁん」
ボロボロになって、頬も腫れ、まともに動くこともできないネギが、それでもアスナを気にかけて声をかける。その、彼の姿をアスナはじっと見つめていた。
「この、バカネギ」
アスナが一歩前に出て、彼を抱きしめた。
ネギは、自分は悪いことをしていないと思っている。今だって、自分の生徒を護るために戦っていた。アスナを助けるのも、当然の行動だと、本心から案じて彼女を助けた。
ボロボロになってまで戦う少年。自分がなにをしているのか、理解はしていない。けれど彼は知らないだけ、間違えているだけ。ただ、まっすぐな少年のまま。
その方向を間違えただけ。だから、正していた。間違った考えを。
本当は、ネギが悪いわけではない。
だから、アスナはネギを嫌いきれなかった。
「こんなになって……」
ネギの顔を触りながら、もう片方の手で頭をなでる。
「あの、明日菜さん？」
ネギの言葉を端に聞きながら、高畑との戦闘に目を向ける。３人が連携して、高畑と戦っている。千雨が参入したことにより、高畑も咸卦法を使えなくなっており、威力の高い攻撃はできなくなっていた。
しかし、常に前線で戦っていた高畑に対して、苦戦を強いられているのは当然だった。
「ネギ、ちょっと行ってくるね」
「え？」
「終わったら、説明はするから、今は私達のことを見てなさい。どちらが正しいのか、何が間違っているのか。あとでみっちり教えられるだろうけどね」
あたふたしているネギをそこに置き、アスナは立ち上がる。そして、マガジンの残弾数を調べた。残り少ない。マガジンもあと一つずつ。しかし、アスナにはそれでよかった。

高畑を倒すために、近づきながらも、アスナは照準を合わせていった。
「小太郎！　牽制、分身、犬っころ出して陽動！」
「了解や！」
高畑に対して、千雨は攻撃を止めなかった。小太郎が、クルトが、自分が攻撃を放つ。その感覚を一切空けなかった。
「風よ、止まれ」
空気の遮断による防壁、空気を逃がして相手の攻撃を弱体化させる。ついでに高畑の周りの酸素も少なくし、呼吸を辛くさせていた。
「神鳴流奥義、斬空閃！」
クルトも、近づけば直接、離れるときには氣を放ち、攻撃を加える。
「くらいや！」
小太郎の拳が高畑を捉える。そして、二発目を与えようとして、
「次は君がね」
高畑の反撃に、小太郎は反撃できなかった。しかし、小太郎は拳を振るうのをやめない。ガードをしようとしない。
「甘いよ、先生。『召喚』」
小太郎が、こぶしを振り上げた状態で千雨を護るようにして現れる。千雨はそのまま、手に持った転移符を小太郎に押し当てた。その効果で小太郎はまた転移する。
「グッ……」
一切の迷いなく、力強く振り下ろされたその拳は、高畑の後頭部に吸い込まれた。
そこにすかさずクルトが追い打ちをかける。
「ハッ！」
鳩尾を捉えた斬撃は、高畑の肺と胃から、全てのものを吐き出させた。
千雨は、その隙を逃がさずに、符を使う。
「宙吊りだ！」
両手、両足に氣で作られたリングが生まれた。拘束され、身動きができない、ただ、攻撃を受けるだけの状態に。

千雨はふと、考えた。この状況はあれに似てないか。
本気の一撃を与えようとして、それを避けられた高畑。受け止められたか、避けられたかの違いはあれど、その一撃を放った後に、四肢すべてを拘束される。
そして、主人公の全力全壊。
「千雨、どいて！」
後ろから聞こえた声。もちろんその正体はアスナ。奇しくも、今考えていたアニメのパロディ武器を与えた少女だ。
その二丁拳銃を前方に構え、全ての内蔵された魔力を全部吐きだしている。さらに自分の氣を上乗せしていた。
千雨はとっさに結界を解く。そして、アスナは魔力を足して咸卦法を全力にした。
千雨は、その後の行動を予測し、苦笑いをしながら小太郎を逃がす。クルトも、既にそこから撤退していた。
逃げようともがく高畑。しかし、あと数秒はかかるだろう。
充電の終わっているそれからは逃られない。
そして、アスナが引き金を引いた。
「『ぱんつめくれーー!!!!!』!!!

29話

終章

力を失い、堕ちていく高畑。

ここに、力は潰えた。

地面に落ちた高畑を、すぐにクルトが無力化させる。

「これで、終いってか」

千雨が呟く。正門では、千草が既に関東の人間を無力化しているだろう。

常に鍛錬をしている騎士団に、麻帆良で正義ごっこをしている奴がかなうはずがない。それに、今はそれほどの士気もないだろう。長への疑念がそのまま士気にかかわることを、関西の人間は嫌と言うほど理解している。

「終わった。くだらねぇ戯曲の終焉だ」

どんなに人気のある戯曲でも、どんなにお気に入りの戯曲でも、それには終わりが来る。

連載漫画が途中で飽きるように、先に行けばいくほど読む気が失せるように、絶対にぼろが出る。

「選ばれたモノっていうのは、潰されるんだよ、選ばれていないものに」

全ての歴史が証明している。

王は必ず引き摺り下ろされる。先の王が立てた国家も、代を追えば追うほどに様変わりする。必ず愚王と言わずとも、上に立てない人間が出てくる。そうでなくても、時代は変わるのだ。漢王朝の後の乱世のように、鎌倉時代のあとの戦国時代のように、激動の時代と言うものはあるのだ。

「アンタらは細々と蜜を吸っていればよかった。やりすぎたんだよ」

もし、ネギが来なかったら騒ぎは大きくならなかった。

もし、京都に来させなければ、こんなことにはならなかった。

英雄の子を操ろうとした、分相応にしていれば何もなかったと言うのに。

激動の時代には、必ず愚者が出てくる。自分が力をもっていると錯覚する人間と、成功を運命のように感じる人間。彼らは自分を否定しない。

逆に成功するのは、反省を繰り返し、次への備えをする人間だ。

今回も、親書を最低でも形式通りにしておけば、穏健派は賛同しなかったかもしれない。

もし、このかを政権争いに巻き込まなければ、お見合いなど強要しなければ、味方が周りにできていたかもしれない。

もし、毅然とした態度で公人としての自分を持っていれば、反旗を翻されなかったかもしれない。

分相応の錯覚を起こした人間の末路は同じだ。捨てられる。ただそれだけ。

だから、これで私も捨てられる。そう千雨は考える。

今回は色々なところに手を出し過ぎた。完全に自分の領分を超えていく。

だから、このまま捨てられる。それでいい。それであとは細々と生きていくだけだと。

千草との交流を保ち、小太郎の世話をしながら両親と暮らせればいい。

あとは、転校した先でゆっくりと普通の生活をする。

これで、千雨のやることは終わった。

頬を染めながら千雨を睨むアスナの視線から逃れるように、千雨は千草の下へと帰っていった。

その後、事後処理の場に立ったのは、クルト、セラス、千草だった。

関東魔法協会は解体、５０年の歳月を経ないと再建はできない。

しかし、その間に麻帆良は何もなくなるわけではない。魔法先生としての活動をしないのなら、魔法使いの滞在は許される。ただし、関東魔法協会の人間は許されない。残りたいのなら、亡くなった組織に操を立てることは許されない。残党のクーデターなんて起こしたくはないからだ。組織か家族か。それをしっかりと判断してもらう。疑いのあるものは、そこにいることを許さない。麻帆良は、連合を中

心に、アリアドネーもそこに拠点を置き、帝国もついでとばかりと入ってくることになる。むしろ、魔法使いの数は増えたとも言えよう。

もちろん、結界は排除された。後に、魔法使いの集まる住居付近にのみ、軽い人払いがかけられる。

教職員に関しては、一旦外部の機関からの監査を受け入れ、調査機関を置いた後に、不十分と判断された先生は懲戒免職か自主退職となる。魔法先生は、魔法使いという組織人の立場を捨てる場合にのみ、教職員としてその場にいることを許された。それを希望する名前の欄には瀬流彦の文字があった。これは、特に魔法を使えないようにすると言うものではなく、教職をしっかりとそれのみで見られる人間になると言う意味での区別であるため、以外にもすんなりと、5割ほどの人間が残った。その中の7割が、その後の監査で落ちてしまったが。

他の魔法先生はどうなったかと言うと、本国に行く者もいれば、魔法使いであることを捨てる者、故郷に帰る者もいた。ちょうど、一般人の家族がいる人間には区切りとしていいタイミングだったのかもしれない。

そして残りは、麻帆良に残る魔法生徒たちの先生。まさに魔法先生になった。

それは夕方の校舎で行われる。もちろん麻帆良とは違う場所でだ。麻帆良は、魔法使いのいる街ではあるが、魔法使いの街ではなくなった。

「この世界樹、持って帰ってくれまへんか？　人の心を操るもんを日本に置いとくとかありえませんから」

世界樹・蟠桃は大規模な撤去が行われた。もともと、崑崙にあるはずの名を冠する世界樹が日本にあるのがおかしいのだ。不自然に置かれたそれに、魔法世界のゲートが備わっている。勘ぐるのも仕方なしだろう。

それに、恋愛成就、人心操作の効果があるのなら余計に。

クルトはそれを受け入れて、すぐに撤去を開始した。それは、図書

館島も同じことだ。
完全に魔窟となっていた図書館は、今はしっかりと整理されて、地下深くに沈んでいく最大級の図書館となっている。貴重書類は運ばれ、しかるべきところに保管された。
魔法の息のかかった地下最深部付近は、先に述べた魔法生徒たちの演習場や、校舎の役割を備えていた。
そこにいた紅き翼の一人であるアルだが、すんなりとその場の退去を了承した。世界樹の恩恵を授かれなくなることもあるが、彼は傍観者としてそこにいたのであり、なにをしようとしていたわけではなかったのだ。アスナも、信頼はできないが、信用はできると太鼓判を押していたので、何の騒動もなくことは終わった。
この学園都市麻帆良、雪広財閥の支援によってこのまま残されることになる。あやかの父が麻帆良にあやかを入れたのは、企業の手を魔法世界にも入れるためだった。だから、一般常識などは兼ね備えられるように部屋に結界遮断を敷きながら、麻帆良へ通わせていたのだ。那波と村上も、その恩恵にあずかっていたと言えよう。
そして、今回の件を逆にチャンスにして手を結んだのだ。
そのまま麻帆良は、少しずつ日常を取り戻していくだろう。
また、世界でも動きがあった。今回の騒動で、魔法使いの危険性を感じた人間もいれば国家もいる。しかし、独断の暴走であることが幸いし、魔法世界の排除という声はあまり上がらなかった。核戦争をしないように。危険性だけでは行動に移すまでではない。
逆に、今の麻帆良の状況を利用し、少しずつ魔法世界の人間も、旧世界――地球に順応できるようにして、最終的には移民できるようにとテストケースの街となることになった。もちろん、世界の、日本の法を守ることが最低条件で。
そんなことができたのは、千草からの言葉が、セラスに響いたからだ。
「連合は、亜人の方々放って世界の破滅のときにこっちに来なはるんでしたっけ？　そんな自己保身しかしない輩、うちらは願い下げや」
その後の会議は、罵詈雑言が飛び交う寸前までいった。その証拠を

持っているクルトは、否定をしつつも、完全にはできない。その言葉が出た時点で、事情を知っているのだから。それを言われたらおしまいなのだ。
それを知っている人間が、物陰から様子を見ているとはつゆ知らず、睨みあうことになる二人。そして、ゆっくりと話される亜人達の正体。しかし、本当に消えなければいけないのか？
ならば、魔界はどうなのだ。
鬼たちはどこに還っていく。自分たちだけが作られた存在なのかと。
そして、フェイトから手に入れていた連合の、村を襲撃した様子や、悪行の数々に、ついにセラスはキレた。
世界への魔法の公表と、亜人の人権の獲得を目指し、動くことになる。
一歩進んでしまえば、亜人だから見捨てたなんて言い訳が通用するはずはない。同じ、人なのだから。そこで先に実験としょうした虐殺の映像などを見せれば、どこにだって嫌悪感は伝わる。連合の人間は、そのような人間は、旧世界の人間に受け入れられるはずがない。
クルトは慌てて、そのことに関しての協議を別の場に設けた。うまくいくのかは、動いてみないと分からない。
そして、ネギだが……行った行為にかんしては言い逃れできるものではない。一般人に対する行為が大半を占めるため、処分は、魔法世界の人間、魔法使い以外がいる場所の滞在を禁ずることとなった。その年数は5年。
更に、アリアドネーと連合が協力し、カリキュラムをもう一度受けなおすことになる。次は、飛び級もなしに。特別扱いが消えることが望まれるが、それがかなうかは定かではない。しかし、この件がネギを変える契機になればと、皆が考えていた。
ネカネはオコジョ刑12年。カモの代わりにネギの肩に乗ることになった。カモの処分は連合へと。もうその姿は見られない。
高畑は、今回の件が表ざたとなり、狂った英雄と称される。学園長と共に、深い渓谷へと落とされるだろう。

エヴァンジェリンは、京都を観光しながら、気分が乗った時に講義をしている。教師に飽きたらアリアドネーに再就職することになっていた。

そしてアスナ。彼女の行動が、何人かの運命を狂わせる。彼女は後にネギと会い、誓った。

「アンタは英雄のナギを『追い』なさい。私がナギを『捕まえて』あげるから」

この言葉で、ネギは修行に力を入れる。ただし、ダメなところは真似するなと、周囲で必死に止めるようになっていた。純粋無垢がこれほどのものなのかと、教師陣はため息を吐くことになる。

アスナは、すぐに出て行こうとはしなかった。クルトがこれを機に、学園長に助力した過激派の掃除の乗り出したのだ。

ネギを襲撃したことから、アリカの汚名を雪ぐことまで、元老院システムが危うくなるまで続け、掃除と同時に、自分の地位を確保した。

アスナの安全は、一応は確保されたことになる。そして、彼女の保護の場所だが

「なに？　私がいちゃダメなの？」

「駄目にきまってんだろ。余計なこともってくんじゃねぇ！」

千雨の隣にいた。

元老院が暴走しないで保護出来る先。それでいて世界が今注目している場所。それが関西呪術協会だった。

今回の騒動の中心となった人物が害されることになれば、今失脚し始めている元老院たちに疑いの目がかかるのは必然だからだ。

「もう私は関係ねぇんだ！　大阪あたりに移り住んでゆっくり暮らすんだよ！」

千雨は麻帆良から離れ、あとは両親と暮らす場所を探していた。皆、おひざ元の京都にしろと勧めるが、それは自分が組織に近づいているようで嫌だった。

今回のことは、自分の益になるからどっぷりつかったが、逆に権力闘争が始まりそうな今、自分から身を引くと言うメッセージを込めて、地方に移ることを選びたかったのだ。

「何言ってんの？　千雨が抜けれるはずないでしょ？」
「は？」
　アスナから渡された書類。関西の親善大使としてメガロメセンブリアにこないかというクルトの誘い、教師、もしくは生徒としてこないかというセラスからの誘い。麻帆良の第４の組織として、また魔法使いのお目付け役として派遣されてくれないかという麻帆良と関西からの要請。
「なんだ？　これは」
「今回のことで一番名前が売れたのは千雨でしょ？　次に千草さん」
　千雨としては、自分の目標を達成し、千草を助けるためにだけ尽力していたのだ。そして、その後、権力闘争から逃げることを考えていただけだった。
「千雨は自分の利を見て動く。それは共通見解よ。だから、逆に言えば、もっとも使いやすい人間なの。そして、今回のことで発言力も上がっているから、あなたがいるだけで、公平公正なことをしてますっていう証明にもなるの。特に政府にとっては」
　麻帆良の事態を見破って、看破して見せた人物なのだから。
「それに……」
　アスナはタロットカードのようなものを取り出して千雨の顔を強引に自分に向けた。
「んっ！」
　一瞬、アスナと千雨の距離がゼロになる。
　そして、光が二人を包んで、目の前に千雨の書かれたカードが降りてきた。
　アスナは、ミネラルウォーターとハンカチを渡しながら声をかける。
「お姫様の従者が逃げられるわけないでしょ」
　四方八方、完全に包囲されてしまったことを千雨は悟った。今回の件で、やりすぎたことを。
「なんでだよ……」
　ため息を漏らす千雨。彼女にはまだ、安らぎの時間は訪れない。

これから先も、ずっと……

完

外伝1　詠春

慌ただしく走り回る音が聞こえる。
それを詠春は不思議に思った。
ネギ君が来たのかと思ったが、修学旅行の日程を考えると、それはないだろうと結論付ける。それならばなぜ？
「長、」
返事も待たずに入ってきたのは今は東北にいるはずの人間だった。近衛と同じくらい関西の歴史に携わっている家系の頭領だ。
「どうしました？　それに、あなたは今任務中では」
そう、任務中のはずだ。無理やりにでも戻ってこない限り、今は京都にいるはずがなかった。そういう日程で皆を送り込んだはずだった。
「そんなことはどうでもいいじゃろ、儂を送り込むほどの要件でもないのに遠くに飛ばしおって。そんなんじゃから舐められとるんじゃ」
この人は、今の長に否定的な人間だ。いや、否定的になったと言うべきか。最初は特に何の感情も持たなかったと言う方が正しい。しかし、長になってから詠春が行った政策や行動によって、疑問を抱いたのだ。
つまりは、親関東の方針とその方法。まさしく隷従と言った方が正しい方法で、ただ従おうという長の行動。今回のことも、長は隠そうとしているが、それは完全に関西の人間全員にばれている。
ネギ・スプリングフィールドが親書をもって関東と関西の仲を良くする。いいシナリオじゃないか。関東にとって。そこに関西の人間の思惑は一つもなく、関東を嫌っている理由を知っている人間にとって、あってはならない行動だ。
魔法世界の大戦で死傷者を出して詫びの一言も入れずに、関西の人間のせいで仲が悪いと言われ、仕方がないから仲良くしてやると、死傷者を出した原因と、その息子が会合を果たし、結果関西は関東の下に下る。そんなバカな話はなかった。
それをすべて踏まえての言葉。しかし、詠春は、ただいつものよう

に叱責されているようにしか感じなかった。仕方のないことだとしか思わなかった。そも、詠春は関西の人間に相談をしたことなど一度もなく、話し合いの場も持とうとしなかった結果なのだが。
「それは申し訳ありません。それで、用と言うのは？」
「麻帆良の生徒が宿泊している旅館で、館全体を包み込むように仮契約の魔法陣が発生しおった。その前には魔力による暴風も観測されておる。これを関西は侵略行為とみなすことに決定した。これは決定事項じゃ」
「なんだと!?」
詠春は勢いよく立ち上がった。
「さすがの長殿も、そこまでやられては憤りを隠せなかったようじゃのう」
どちらの意とも取れる言葉、最後の老の助け舟であったこの言葉。ここで肯定し、関東を敵にしておけば詠春の運命は変わっていたかもしれない。
「当たり前でしょう！　長である私を抜きにそのような決定を指せるわけがないでしょう！」
老は、一旦目を見開いて、頭を下げた。顔を見せないようにした。
今、老はどのような表情なのだろうか、悲しみか、怒りか、それとも喜びか。
老はなにも答えない。
その間にも、ことは進んでいる。それを察した長は、老を無視して部屋を出ようとする。
「勝手なことをされては困ります、長」
部屋の外から次々と中に入ってくる関西の術者。
名家の者、地位の高い者、現場で一流と言われている術者。所謂権力者が長を取り囲んだ。
「一体何をされるおつもりで？」
「あなた方のしようとしていることを止めるにきまっているでしょう」
「私達は、主犯であるネギ・スプリングフィールドとその協力者を捕ら

え、生徒たちを保護するだけですよ。ここ、京都で英雄の息子が一般人を対象に大規模魔法陣を使用しての取り入れ行為、許されるはずがないでしょう。これのどれを、どこをやめよと言うのですか？」
「全てです。直ぐにやめなさい！」
　詠春は部屋全体に響き渡るほどの声で怒鳴った。
「なぜでしょう？」
「なぜ？　決まっているだろう。彼は――」
「英雄の息子だから助けますか？　友人の息子だから助けますか？
貴方の立場を忘れましたか関西呪術協会の長であられる近衛詠春殿。あなたは公人としてやるべきことを無視して、ただ感情で私たちを止めに入っている。そこのどこに義がありますか。それとも、なにか行ってはいけない理由があるのですか？」
　殺気のこもった眼をしている詠春に、誰一人として譲らない。ここが、譲ってはいけない場所だと理解しているから。
「それは……彼は使者ですよ？　修学旅行中の人間を拘留するなど許せるはずがないでしょう。こちらには魔法先生が一人いると連絡があったのですから」
「しかし、実際には魔法先生は確認している時点で二人。それに魔法先生のパートナーと、傭兵をはじめとした魔法使い及び、関係者と思われる人間が複数確認されております。それに……」
　一人が、親書を投げ捨てる。中身が表になって地面に落ちた。
「修学旅行の一般人を盾にして親書を出そうとは片腹痛い。それにこの文書、関西をなめているとしか思えませんな」
　デフォルメされた近右衛門が書かれている紙が一番上となり、詠春にも、そのほかの人間にも見えるようになっていた。それを見て、さらに詠春は怒りを強くする。
「貴様！　度が過ぎているぞ！　誰の命あってかのような行いをした！」
「度が過ぎているのはお前だ！　詠春！」
「貴様の所業、思い返してみよ！」
「どれが関西の益となったと言うのだ！」

次々と投げかけられる言葉。しかし、その言葉が真として受け入れられることはなかった。そう、昔も今も。
「私は関東との仲を良くしようと尽力していた。それを否定したのはあなたたちではないか」
この言葉、これはある意味訣別の言葉と言えただろう。
誰が関東との友和を望んだか。
誰にとって益となる行動なのか。
関西呪術協会の長として正しい行動なのか。
誰しもが、これで話すことは終わりと言うように、臨戦態勢を取ろうとした。それを一人の老人が制した。
「長殿、それで、関東との仲を良くして、長殿はなにをしたかったんじゃ？」
「なにを……？　同じ国にある組織が協力しないでなにをすると言うんですか」
「とはいうものの、それで機能しているではないか。退魔をするのは私たちの仕事。関東のものは、魔法使いの生活を守るのみ。しかも、長谷川嬢のことを忘れたとは言わせんぞ。魔法使いは、組織として一般人を害している。その証拠が出ているではないか。それを、今京都で堂々と行われたのだ。なのに、なぜ関東をかばう。お主にも報告が上がっておろう。お主の娘でさえ、食い物にされている今、彼らを許す理由がどこにある」
詠春は、次の句を告げることを戸惑った。彼の心情では、答えは既に出ている。
それを口に出すのを戸惑ったのだ。しかし、それを言わなければならなかった。ここで嘘を吐いたとしても、彼の守りたかったものは失われてしまうのだから。
「私はそれでも、近衛詠春、青山詠春として、友の息子に害をなすことはできません。このかの親としても、あなた方に使われるくらいなら、友の息子に預けることを選ぶ！」
手に持った刀を抜き、構える詠春。完全な訣別の言葉だった。
「……虚しいの。本当に」

既に決着はついていた。周りを包囲され、逃げられない詠春。彼に、逃れるすべはない。室内で囲まれ、そこに打ち込まれる弾丸ならば、よけることができただろう。

しかし、他のものが覚悟している状況ならば、こういったこともできるようになる。

「『石の霧』」

室外からぽつりとつぶやかれた言葉。そのほかにも睡眠の術式や、麻痺効果のある花粉などが室内に充満する。対処法を知っていれば何とかなるものもあだろうが、そのすべてを一気に避けることは敵わない。

詠春の意識は、そこで途絶えた。

「……月詠殿」

「はいな～」

部屋の外からステップを踏むように入ってくる月詠。他の人間は、既に室内の術者を治しにかかっている。

「始めて下され」

その言葉を聞いた月詠は、石化していない詠春の筋肉をズタズタに引き裂きにかかった。その上から乱暴に治癒を行う者がいる。それから、全ての部位を石化を治しながら行い、彼は、自分の力のみでは起き上がることすらできなくなった。

「氣を使って一般人と同じ生活がおくれるくらいには壊しましたでー。それでも重いものは無理だと思いますけど。剣士としてはもう生きられまへん」

「そうか……近衛詠春。この場で関西呪術協会の長を背任する。この決定に不服のものは？」

誰一人として、それを止める者はいなかった。それを、ネギのために用意された巫女二十余名は冷ややかに見ていた。彼女たちもまた、不満を持っていた。誇りを持っている巫女の仕事を、芸者のように使われることに。

このまま詠春は運ばれる。青山の屋敷へと。

そして、近衛詠春の人生はそこで終わった。

「無様どすな」
〝青山〟詠春に声をかける人間がいた。
鶴子だ。青山の人間として、独房の詠春に話しかけた。
「あんさんはやりすぎたんや」
「私は、良かれと思ってやっただけです」
「それは誰にとってや？　自分にとってか？　それとも近右衛門殿にとってか？　行動を起こすときは、相手のことを考えないといかん。嫌われてもええから、その人のためになるように考えて行動せな。それが出来ひんのなら、巻き込むものやあらへんな」
ひなた荘の住人のことを考えながら、鶴子は言った。
「自分で手の届く範囲にしておけばよかったんや。知った人間と知らん人間、それの判断が出来ひんあんたにできることなんてなんもあらへんかった。その結果、一般人すら巻き込んで不幸にする」
「あなたも、自由に振舞っていたではありませんか」
「ウチは人を選んでおったで。それに、悪いことは絶対にさせへんかった。都合のいい行動と、為になる行動は違うんやで」
鶴子の言葉に、詠春は何も答えなかった。答えられなかった。
「魔法に毒されよったな、詠春はん。ここで、あんたの行動反省しいや」
鶴子は、それだけ言って去って行った。そこに残るのは、冷たい床に座る詠春のみだった。

外伝2　超

拙いネ拙いネ拙いネ

起きたらすべてが終わっていた。

「長谷川さんが術師だったのはイレギュラーだたカ」

超は焦っていた。自分の計画が崩れ去ってしまったことにやっと気が付いたからだ。

過去の出来事を知っていると言っても、全てが映像で残っているわけでもなければ、その時の手記が残っているわけでもない。タダ、その場での茶々丸の映像と、歴史上の出来事や人物としての記録が残っているだけだ。学園祭で仲間になった千雨の前後の記録など、超は持っていなかった。

しかし、平然と刹那や龍宮と交流していることと、関西という立場から、この後に仲間になる通過儀礼のようなものだと考えていた。

「このままではすべてが終わてしまうネ」

目の前には田中さんたちが並んでいる。世界樹の撤去が決定された今、彼女の行動は急を要していた。しかも絶対に動かなければ、自分が未来に戻ることすらできなくなってしまうのだ。しかし、このままでは、また破滅の未来が待っている。

「イレギュラーによる世界への魔法バレ。突発的なことから起きたことだから、混乱することは決まってるネ。下手するとさらにひどい被害が出るようになるヨ」

自分の元ある世界の状況を思い返す超。超は、それを許すことなんてできなかった。彼女は、それを止めるためにここに来ているのだから。

「超さん、もうすぐここに監査の人が来ますよ」

全てのことが決まるまで、彼女たちは眠らされていた。隙を見て大学校舎へと向かった彼女たちだが、そこも既に国の管轄になっていた。

「ハカセはどうするカ？」

「何世代も先の技術を使って作品を使っていたと言うことに負い目は

感じますが、既に分かっていたことです。このまま研究を続けますよ。幸い、エヴァンジェリンさんが関西に厄介になっているので、茶々丸のメンテナンス要員として必要人員に数えられていますし。それより今は……」
「そうネ。計画は全部無駄になたヨ。ネギ坊主はもうここにはいない、世界樹も撤去される。魔法バレは実現される。私のしたかた事は全て出来なくなったみたいネ」
　顔を俯ける超。彼女の心情を思い図ることは、ハカセにはできなかった。すべてをかけてやってきた。その覚悟が既に無駄となったのだ。その気持ちは、想像すらできないだろう。
「田中さんたちは、レーザーも撃てるし、戦争の戦力として数えられてしまう。それをどうにかしないといけないネ。監査は誰が来るカ？」
「千雨さんと、天ヶ崎千草と言う人、あとは各国の代表です。二人以外は来てみないと分かりません」
　千雨も千草も、権力に興味はなかった。しかし、その態度が使いやすさを物語っており、このようなことには真っ先に繰り出されるようになった。符の師弟と言うこともあり、現場に出ないでも、符を作ることで貢献もできるため、関西では〝欠かすことのできない存在〟となっていた。
「千雨さんカ。他の人よりかは話が通じるカネ」
「そうは思いますが、このことの発端が千雨さんですから」
「ウウム……」
　超とハカセは頭を抱えた。
　結局彼女たちは、何も行動できないまま千雨が来るのを待つことになった。

「ったく、またここに来なくちゃいけねぇってのは気分が悪いな」
「仕方あらへんやろ、アンタの立場じゃ」
「クソッ……アスナのヤロォ、絶対にゆるさねぇ。自分は来ねぇくせにこんな厄介なもんばっかり連れてきやがる」
　今ここにきている関西の人員は千雨と千草だけだった。

「あっ！　千雨さん！」
「ゲッ!?　宮崎か!?」
　千雨の姿を見つける宮崎。直ぐに千雨の元へと走ってくる。
「こんにちは」
「よ、よぉ」
　千雨は宮崎が苦手だった。いや、苦手になっていた。
　理由は、先日起きた関西での騒動だ。
　綾瀬がいきなり本山へと駆け込んできて、アスナと合計４人でひと騒動起きたのだ。
「ここは大学エリアだろ。なんでお前がここにいるんだよ」
「精霊さんたちが教えてくれたんです」
　宮崎は、あの後から魔力を視界にとらえることができるようになった。空気中の精霊を見ることができるようになった。
「なんや、おかしなようになったな。この嬢ちゃんは」
「ヒッ……！」
　その分、特定の人物以外とは、視線を合わせることも、話すことも出来なくなったが。
　今彼女は、学校に入っていない。いや、希望者以外は３―Ａの生徒は学校へは行けていない。当然だろう。担任、前担任が犯罪者であり、彼女たちは利用されていたのだから。その上、エヴァンジェリン、アスナ、このか、刹那、千雨、茶々丸がクラスから外れたのだ。さらに、あやかにはやることがあり、授業に出るのは難しい。楓は精神修行と言う名目で里に戻り、忍者としての常識を再度学んでいる。古も、今は麻帆良にいるものの、折を見て師父のところに戻ると言っていた。朝倉は部屋に引きこもり、３―Ａの人間がいる所には決して顔を出さない。それに今の宮崎の状況。綾瀬だけが宮崎と接することができる人間で、麻帆良在住の人間なので、ほぼつきっきりになっている。クラスの３分の１がいなくなって、クラスがまとまらないのだ。その上、超とハカセが自分のことを行っており、クラス自体を纏める人間がいないのだ。那波がクラスの人間の部屋を回ってはいるものの、それくらいしかできないと言う現状。

これほどまでにクラスが壊れてしまったのだから、3―Aの人間に何の事情説明もしないわけにはいかなかった。それが朝倉を追い詰める原因ともなるのだが。

更に裕奈も3―Aとは疎遠になった。さらに春日も。彼女らは、魔法使い側の人間であり、操っていた側に関係しているのだから。

自然と龍宮もその場を離れ、アキラも魔法使いの恩恵を受けたうえでの実力と言うことを知り水泳部を離れた。他の部活の人間も、結局はとんでも人間のいる麻帆良は八百長試合しか仕組まれていないという可能性に、部活への情熱を失った。そうならなかったのは、驚異的な身体能力を必要としない部活のみだ。確実に、3―Aの生活は壊れていた。

それでもネギを憎めない彼女たちは、その事実を知らされたときに泣いた。憎しみすら許されない。それでも彼を信じてしまう自分自身が悲しかったのだ。そして、何人かは、自分が自分ではないことに気付いていた。

その中で村上、鳴滝姉妹は記憶の処置を希望。亜子も希望したが、それは千雨が一旦保留にした。

「魔法の力で、その背中の傷を消してからな」

もしかしたら、3―Aの魔法バレで一番の功績はこれなのかもしれなかった。

「綾瀬はどうしたんだよ」

「夕映は今部屋にいます。千雨さんと一緒なら大丈夫だって」

宮崎の言葉と同時に、千雨の携帯にメールが入った。

『のどかは任せたデス。今日一日お願いします』

疲れたような顔文字と一緒に書かれたこの文面は、千雨の腕に引っ付いている宮崎の、日ごろ綾瀬に対して行う行動を容易に想像させた。子犬のような、ラブラブのカップルが甘えるような行動を、ずっと続けているのだろう。依存性の高い相手に。

千雨は、自分の身を守るために手段を講じる。

『任せろ、今日は女性同士でやれる符を持たせてやるよ』

そう送って千雨は電源を切った。

「あー、宮崎。私たちは今から仕事なんだが」
「私が案内します。千雨さんがいなくなって、麻帆良の様子も結構変わりましたから」
確かに、至る所工事ばかりで、面影が微かに残っている程度だ。
それに、必死に服をつかんで離さない宮崎の様子も、捨て子のそれに代わりつつあり、精神状態がよろしくなかった。会うのがどこぞの重鎮だったら話は別だが、今日は元クラスメイトなこともあり、千雨は動向を許可した。
「んじゃ、任せたぞ宮崎」
そう言って頭をなでることで答えた千雨。これがフラグだったと嘆くのはいつの事だろうか。
「やっと来たネ」
キャンパスの前で迎えに来ていた超とハカセ。その姿に懐かしいと感じつつも、千雨は彼女たちの元へと歩いて行った。
「そうとうやばいもん抱えてんだって？　麻帆良の頭脳」
「そうなんダヨ。魔法使い側に隠していたことが災いしたネ」
二人に案内された先にあるのはＴＡＮＫ―α３の軍隊。それに多脚戦車に
「鬼神まであんのかよ」
「計画のために作ってたけど、千雨のせいで全部パァよ」
ため息を吐く超、千雨と千草はそれを無視して機械群の中に入っていく。
「こんなもん用意して、何をしようと企んでたんだ？」
「魔法を全世界にバラそうとしてたネ」
千雨、千草、宮崎が一斉に振り向いて超を見た。
「なんでまたそんなことを」
千雨の呟きに答え、超は自身の目的を話し始めた。自分は実は未来人だと言うところから、ネギの子孫だと言うこと、彼女がこの世界、過去を変えることで未来を変えようと言うこと。その為に用意した軍。
「こうなってしまっては意味ないけどネ」
最後まで言い切った超は、自嘲気味にそうつぶやいた。

「まぁ、魔法は世界に広まるんだ。それも世界会議で話し合われて慎重に。それでいいじゃないか」
「それではダメヨ。それだと、ネギ坊主を試せない」
ネギを試し、未来を託せるか。それを判断することができないと言う超。
千雨も、宮崎も、その言葉を聞いた瞬間に、同情する気も失せた。
「結局お前もあれ主導でモノを進めようとするんだな。それで、お前が暴れた結果、ネギ先生が見事解決。仲間に何人も入ってようこそ死の支配する世界へか？」
「私も、その仲間だったんですか？」
宮崎も、声を震わせながらも超に聞いた。
「本屋は修学旅行からネ。私と敵対する前に、アスナ、本屋、このか、刹那、古、綾瀬、楓、朝倉ネ。私との争いで千雨、ハルナが仲間になったネ。その前に、小太郎が仲間になってたヨ」
千雨は嫌悪感を隠そうともせず、宮崎は震え、必死に千雨にしがみついていた。
「それで、お前はどう思うんだ？　そんな状況になるのを分かっておきながら放置していた天才さんはよ」
「皆には悪かたと思てるネ。けど、しょうがなかたヨ。少しの犠牲で、世界が守られるんならそのほうがいいネ。それに、皆、幸せそうだタヨ。だから、今の私が、ネギ坊主の子孫がいるネ」
躊躇わずにそう答える超、千雨も、自分の考えで動いている人間だ。超のことを否定することはできない。そう自覚していた。
しかし、
「超、ちっと歯を食いしばれ」
身体強化もない、ただ体重を乗せた右ストレート。しかし、それは超の頬に吸い込まれるように刺さった。その勢いで超は後ろに倒れる。
「テメェの都合で物事起こすことは構わねぇよ。私もそういうことをしたから今があるからな。だけどな、他人の頭いじくってんのも、それを知って利用するのも、それだけは私は許さねぇよ」

踵を返して出ていく千雨。
千草はそれを見ながらどこかへと連絡した。
そして超は、世界樹が撤去された日と同じ時に麻帆良から姿を消した。
未来に帰ったのか、魔法世界へと向かったのか、自ら命を絶ったのか、それは誰もわからない。超はそのまま、歴史に名を刻むことはなく、ただ消えて行った。

外伝3（前編）　ＶＳ千雨

大体の事が終わりを迎え、ひと段落が付いた。連合は元老院の弾圧がまだ済んでいないものの、済んでいない問題もいくつかあった。

「で、どうすんだよこいつはよ！」

目の前には仮契約のカード。アスナと千雨の仮契約の結果だ。

最初にされたとき、千雨は大いに驚いたが、自分の立場を把握したときには仕方がないと思っていた。両方とも立場が危うかったのだ。

関西陣営として動きすぎた千雨と、亡くなっていたと思っていた亡国の姫君。それが暗躍した者の情報を持っているのだ。ことが動けば消される可能性がある。

しかし、本当にそうだろうか。

片方を消されても事故で済む。そうだろう。

片方だけならば、何が原因で死んだのかを誤魔化せる。魔法世界側の人間が殺したのか、表の世界の暴走か。どちらかには大事だが、どちらかには害になる存在だから。

千雨が殺されれば正義の魔法使いの暴走になり、アスナが殺されれば、まだ事実を知らされていない魔法国民たちにばれないですむ。事実はうやむやになるわけだ。

だが、この両方が同時に殺されたりなどすれば、修正できないほどの亀裂を双方に産むことになる。それは魔法世界にとっても避けたいものだ。魔法世界が破滅することが決まっているのだ。この先の事を考えるとそんなことはできない。

そこで、少なくともアスナを始末したい元老院だが、そこでクルトがアスナに勧めたのだ。千雨との仮契約を。

千雨と仮契約することで、今の自身の身を守るべきだと。そして、逆に仮契約することで、今後の千雨の身の安全を守るべきだと。この後の事で、魔法世界と戦う千雨の守りとなってやるべきだと。

「と言うことなの」

「なのじゃねえよ！　お前はなのなの言われる側だ！　そうじゃなく

てな、私は普通に暮らしたいだけなんだ。おまえとの繋がりなんて必要ないんだよ！」
「あ、それは無理」
「は？」
　千雨の叫びに、アスナは簡潔に答えた。そして、数枚の書簡を取り出した。
「こっちがアリアドネー、こっちがクルト達の派閥、こっちが腐ってる方の派閥、こっちがメルディアナ、んでもって麻帆良。これ全部千雨を招待しようとか取り入れようとかが策している人たちの手紙。これだけあるんだから、引退しましたとか言っても聞かないよ？　１５歳で引退なんてありえないもの」
「じゃあせめて大学出るまでは携わらないとか」
「そうするとアリアドネーとメルディアナと麻帆良が生徒にってうるさくなるよ。それに、１５歳は既に魔法世界の年齢で社会人の年だから、そんなこと気にしないと思う」
「そっちでそうだってこっちじゃ……そうだよな、あいつらの反応見てる限り、自分たちの事中心にしか物事考えられないからな」
　クルトが言うには、そういう教育だからこそ操りやすいのだという。さらに言わせれば、そういう教育を施していたのが、ろくでもない方の元老院議員たちであり、世界は元老院の名のもとに都合よく作られていったのだった。
「だから戦争が起きたんだよな」
「それもふまえて隠しておきたかったみたいよ。でも、それが暴かれた」
「そこまでする必要はこっちとしてはなかったんだがな」
「クルトにとってはいいタイミングだったみたいよ。堂々と千雨の名前を武器に粛清していったわ」
　作られた人間と、移り住んだ人間。どちらにも変わりはないはずなのだが、元老院はそれを理解しなかった。いや、曲解したと言ってもいいのだろう。
　魔法世界の住人をまるでネットゲームのＮＰＣのように思ってい

たのだ。もちろん帝国の亜人たちも。場合によってはモンスターと同じ、殺せばＰＯＰしてくるものだととらえていたのだ。しかも、元老院議員で且つ、紅き翼のクルトがそれを発表したのだ。その後の魔法世界はひどいものだった。誰も彼も元老院に対して怒りをあらわにし、その後のタイミングでフェイトは自身を表に出して大戦時に行おうとしていたのは世界の救済であることと、世界の崩壊が近いことを発表。隣には村を元老院に滅ぼされた孤児たちの中から、真実を訴えたいと申し出た者達を連れていた。親を、家族を、友人を返せと嘆く彼等の言葉は、世界の人々の胸を打った。

更に目標は元老院の討伐であったとし、帝国が押していた時に紅き翼のとった行動は間違いであったとクルトが謝罪。その時の動機のところでアスナが生きていることを明かし、アリカが国民のために動いたものを、元老院が自分たちの責任を押し付けて殺したことを明らかにした。動機は腕試し。目立ちたいから。世界を救って回ったのは自分の力を誇示するため。人助けをしていたのはアリカを救出する際の世論先導であったことを明かし、行動の結果、行いの素晴らしさを認めたうえで、間違いであったと公表された。

当時の元老院議員の名前も、その主導者も瞬く間に公表され、クルトと数名を除いた元老院は亡きものとなった。そのほとんどは公的に裁かれることもなく。

それでも後任に腐ったミカンがいるのが連合なわけだが。

元老院は、また主導を握るためにも千雨がのどから手が出るほど欲しかった。

「今どこかに逃げても捕まって終わりだから、ゆっくりと本山でのんびりしなよ。このかの指導だってあるんでしょ？」

「そうだけど、私じゃなくてもそんなもんできんだろ」

「サウザントマスターを超える魔力を扱える人間の指導なんてできないわよ。しかも派閥関係してない人間でなんて。基本を千雨が、知識を千草さんが教えてるんだからそれでいいじゃない」

「私は平穏が欲しいんだ」

「なれればこれも平穏よ。少なくとも常識と非常識は区別されている

し、皆自由に動けてるじゃない」
「自由意志ではあるが、政治的にはがんじがらめだけどな」
　千雨は、畳の床に体を投げ出した。はだけている和服を治そうともせずに寝返りを打つ。
「あぁ、魔法のない世界に生まれたかった」
「私も。けど、魔法がなかったら私はもうおばあちゃんだから、千雨と友達になれなかったかも」
「エターナルロリータが二人か。麻帆良は平均年齢が高いな」
「千雨？」
　にっこりと笑いながら銃を構えるアスナ。さらに千雨の陰から手が出て、糸を括って四肢を動けなくさせていた。
「なかなか面白い話をしているじゃないか？　長谷川」
「お前、なんでここにいるんだよ！」
「嫌な予感がしてな。神楽坂、ぬかるなよ」
「私の名前は違うって言ってるじゃない、エヴァちゃん。任せてよ。屈辱的な発動条件で負けるみじめさを味わいなさい」
　両手の銃から排莢がいくつも放り出される。カートリッジを使い続けているのだろう。
「王家の魔力を味わいなさい」
「ゲッ……『召喚』」
　小声で召喚されたのは、千雨の従者だった。
「『パンツめくれー』!!」
「なんや!?　アスナの姉ちゃんが変態――なんやこれはーー!?」
　何もわからずに召喚された少年は、そのまま魔力の本流に飲まれていく。
　身を盾として主人を護ったのだ。
「ふぅ、あぶねえな」
　時間をかけて糸を解いた千雨は体制を立て直していた。
「千雨、結構ひどいわね」
「撃った本人が言うんじゃねえよ『パンツめくれ』の変態さん？」
　アスナの額に青筋が走る。

ここで千雨が逃亡を図ろうとしたが、ここで待ったの声がかかった。
「ふむ、そういえば長谷川。おまえの本気を見たことがなかったな」
「あ？」
ついと出てきたエヴァンジェリンが、ふとそんなことを言い出した。
「お前が行った戦闘は知っている。実際見たわけではないがな。しかし、それはお前の知恵であり力ではない。戦闘の実力は高いと言えるのだろうが、試合として、純粋な魔法使いとしての戦闘力はいかほどなのだ？」
確かに。そうアスナは相槌を打った。
千雨は搦め手を使って戦闘する。相手を追い込む戦い方をする。その為に格上とでも戦える。しかし、純粋に全力で戦っている千雨を見たことがないのだ。
「それはガチンコでやっての話か？　純粋な魔力量での魔法の威力の話か？」
「お前は道具使いだからな。一対一の搦め手なしの戦闘での話だ。神楽坂の持っている銃にしたって、お前の魔力運用量の少なさを補うものだろう？」
「まぁ、そうだが……」
カートリッジシステムは、一時的に魔力総量の高い相手と同格の、それ以上の力を出せるものだ。それを使った戦い方、真正面での戦い方もできるのではないかとエヴァは聞いたのだ。
「では、それをやってみろ。相手はそうだな……神楽坂とそこの犬コロでいいだろう」
「だから名前違うって……まぁ、千雨と戦うのはいいけど」
「ちょっと待て。戦う理由がないだろう！」
「私が直々に授業をしてやろうと言うのだ。講師の授業も受ける者が居なくては意味がないだろう？」
クックと笑いながら、紙を見せつけるエヴァ。なんだかんだ言って、丸め込まれたことに対し、鬱憤がたまっていたらしい。おそらく、

その後には地獄の特訓が待っているのだろう。
「それに……」
エヴァンジェリンの言葉を、いつの間にか来ていた茶々丸が続けた。
「千雨様から離れた小太郎様の成功率は２０％。本日も油断による失敗で、５件連続未達成です。小太郎様を鍛え治す意味でも……」
「そうか……」
その言葉を聞いた千雨は、エヴァンジェリンに戦闘の場所を聞くと、小太郎を背負っていった。その顔は、非常に影がかかっていたが、清々しいまでに笑顔だった。

そして別荘内。
「なんでそんなおびえてんのよ。アンタ結構強いんでしょ？」
千雨から受け取ったままのエクスカリバーを構え、銃を腰に挿したアスナが隣でしっぽを丸めてがたがた震えている小太郎に聞く。
「姉ちゃんは千雨姉ちゃんのお仕置きを知らんからそんなことが言えるんや……」
いつも活発な少年は、こころなし声も小さかった。
「どういうことよ」
「……見てればわかるわ」
そう言っている間にも千雨がやってきた。
「悪いな。時間がかかった」
「別にいいわ――」
振り返ったアスナは、必死で噴き出すのをこらえた。
「なによその恰好！」
「あんまり人前で着たくはないんだけどな」
今の千雨の姿は、一言でいうなら魔王、二言で言うなら白い悪魔。
人が見たらこういうだろう。高町なのはのコスプレと。
「最大戦力はこいつなもんでな」
右手に持った赤いビー玉のようなものを空へと投げる
「セットアップ！」

収納の刻印が刻まれたそれは、機械製の杖を出現させた。アスナがリリカルなのはを知っていればすぐに逃げただろう。
二丁拳銃を持ったオレンジ色のツインテール少女の末路を知っていたなら。そして、コスプレの内容を知っていたなら。
「私の力、紙卸だ」
普通は神卸と呼ばれ、神をその身に宿す行為だが、千雨のそれは特別だった。
麻帆良で育ち、孤独を過ごし、現実とアニメや漫画、非常識との境界線が分からなくなった少女はオタクとなった。そして、常識が間違っていないと知ってもなお、自身の精神の安定のためにオタクの道を走った。そこで、現実逃避の手段として起こしたのが、漫画やアニメに入り込むことだった。主人公になりきり、その気持ちになってアニメを見る。そうすることで楽しんでいた。コスプレもその延長。そして、自分を認めてほしいと言う自己顕示欲でもあった。
その時に生まれたのがこの紙卸である。
自身がキャラクターになりきることによって、その人物の行動をとることができるのだ。
「じゃあ……『はじめようか』小太郎」
小太郎は、体を跳ねておびえた表情で千雨を見る。
「『なんで、教えたとおりにやらないのかな。本番で練習したとおりにやらなかったら、教導の意味、ないよね』」
紙卸の怖いところは、なりきるところである。たとえば、神卸の場合、その神が対象に入るわけだが、千雨の場合、自己催眠に近いものがある。よって
「『少し、ＯＨＡＮＡＳＨＩしようか』」
すこしばかり誇張表現が入ってしまうこともあるのだ。
小太郎はすぐさま逃げようとした。しかし、すぐに結界に阻まれる。
「どうしたの？　小太郎、知ってるでしょ。ほらアスナも構えてよ」
空中で手を大きく広げた千雨（なのは）はこういった。
「『知らないの？　大魔王からは逃げられない』んだよ」

こうして、戦いは始まった。

外伝3（後編）　エンドレス

「なんなのよこの威力はッ!?」
　アスナが必死に魔砲を避ける。体中に擦り傷と切り傷が付いていた。
　小太郎はその横に何とか体制を整えて着地する。
「あれ一発一発が千雨姉ちゃんの二三日の魔力なんや。強いのは当然やろ」
「千雨はケチだからあんまり使わないのねこれ。燃費めちゃくちゃ悪いじゃない」
　愚痴を言いながらも、周りを観察し、次に備えるアスナ。
「けど、障害物貫通は卑怯よね。本当に貫通するの？」
「以前地下深くに潜って式神にやらせながら高笑いしとった千草姉ちゃんをサーチャーとかいうので探して極太い魔砲でぶっ潰しとったわ。地下３０メートルの壁くらいなら余裕で抜くで」
「しかも今は属性変換させて無効化もできないってわけね」
　飛び交う魔法には火や雷などの属性が付与されて、アスナの魔力無効化能力を使えないようにさせていた。
「まだまだ行くよー」
　心なし陽気になった千雨は、何十もの魔法の射手を空中に待機させて杖をアスナたちの方へと構える。
「『アクセルシューター』」
　ピンク色の魔力光を持った魔法の射手が、時間差で降り注ぐ。
　空を自在に駆ける千雨と、地面を必死に走り回るアスナ、小太郎とでは攻撃ひとつとってもかなりの差が開いていた。
「クソッ、攻撃が止まへん」
「ストック全部使う気なんじゃないの？」
「それでも、あの弾丸に使うのだけやあらへんから、五分か十分くらいでなくなるはずなんや。それなのに今日はドカドカ使うとってもなくならへん。異常や」
　物陰に隠れながら走って距離を取る二人。最初は二手に分かれて

たが、一人ずつ集中砲火を食らった二人は直ぐに集まって共に凶弾に対処していた。
犬神を出して当たりそうな砲撃をそらし、直前に迫ってよけきれないものは、アスナが魔力無効化ではじいていた。剣先で触れると消える魔力は付与能力だけとなり、対処を可能とさせる。しかし、防御に手いっぱいになり、攻撃をする暇が取れなかった。
「駄目だよ、よけてばっかりじゃ。任務の事を想定してやらないと」
千雨は生かさず殺さずの状態になるように魔法を撃ち続ける。特に小太郎には必死に頭を悩ませてやっと一撃を入れれるくらいの密度で砲撃を構えた。
小太郎は今現在気が付いていないが、ちゃんと観察していれば隙が見えるようにできている。千雨がそのように思うのだから、エヴァンジェリンからしてみれば、もっと隙は多いだろう。しかし、千雨の指令の下で行動していた小太郎は、それ以上の行動を予測できない。千雨は今回でそれを払拭させようとしていた。
「何とかしなさいよ!」
「アスナ姉ちゃんがなんとかしてや!　わいに千雨姉ちゃんは止められへん!」
その思惑が成就するのはいつの日になるかわからないが。それでも千雨は小太郎を鍛えていた。自分を超えさせるために。
ちなみにこのレイジングハートは、柄の部分に飛行魔術の術式が組み込まれており、弾倉の下にあるバッテリーが魔力を回転させている。その部分に使っているのは世界樹の朝露と樹液を混ぜたもので、魔力が一定に供給されていた。
弾は誰が作ったものでもいいのだが、基本的に製作者が千雨であり、西洋魔術の術式を組み込んでいることから、千草と千雨の魔力が貯められたものが大半だった。
「あ、訓練中なんか?」
つい先日までは。
声の主は戦闘区域を避けてエヴァンジェリンのところまでやってきた。

「また小太郎君が失敗したん？」
「それもあるがな、一応授業の一環だ。それよりお前はなんでここに来た。お前を呼んだ覚えはないぞ」
　エヴァンジェリンはこのかの方を見て、手に持っている段ボールに視界を奪われた。よっこいしょという声と共に下ろされたそれの中身を見て、エヴァンジェリンの顔は渋くなった。
「千雨ちゃんに言われとるんや。魔力制御の練習でこれに魔力つめとけって。んで、できたから持ってきたんや」
　サウザンドマスターをも超える魔力の持ち主近衛このか。彼女の修行を任された千雨は、英雄の息子であるネギのようにラッキースケベのような魔力暴発を恐れ、第一に知識の吸収と魔力制御を学ばせていた。学力は千草とエヴァンジェリンが担当になり、魔力制御は千雨が行っていた。そしてその内容が、
「ああ、弾丸の補充が来たか。ありがとうな近衛、タイミングばっちりだ」
　一瞬我に返った千雨がこのかの持ってきた段ボールの中の弾丸を収容する。
　弾丸の魔力補充だった。これによって魔力制御を覚えさせるとともに、自身の魔力不足を補っていた。
「なんやそれ！」
「卑怯よ千雨！」
　もっとも、相手にとっては悪夢でしかないが。
　このかに魔法を教えるようになって数か月、その間、千雨はこのかの魔力がほとんど尽きるまで魔力を使わせていた。弾丸補充のためと、このかの修行のために。
　そのため、今手元には数か月分のサウザンドマスターを超える魔力があった。魔力量で言えば、単純にサウザンドマスター１００人分だろうか。それに千雨自身も魔力を込めているものがあり、
「そうか、ならば私も空いてるものに詰めようか」
　ついでに６００歳を超えた真祖の吸血鬼の魔力さえあった。
「思い出した！　千雨のあれ、私の魔力とか、咸卦法とかこもってる弾

丸もあるわよ。研究のためとか言ってさんざん込めさせられたもの」
「それ先に言ってやアスナ姉ちゃん……」
アスナの顔は青く染まり、絶望を物語っていた。小太郎は紫から、白く燃え尽きそうになっている。
「じゃあ、続きやろうか」
二人に、地獄へのカウントダウンが砲撃と共に奏でられた。

そして、やけになったアスナによって行われた「パンツめくれ」を圧倒的な火力で押しつぶした千雨の魔砲により、アスナ、小太郎の両名は飲み込まれ、勝敗を決することとなった。その光景をエヴァンジェリンはただあっけにとられてみているしかなかった。
「おわったぞ、エターナルロリータ」
「……」
「おーい、ロリ婆？」
「……ハッ!? 誰がエターナルロリータだ！」
「いや、まあいいんだがな」
千雨の呼びかけによって再起動するエヴァンジェリン。
「一応、多分、あれが私の本気だ」
「なんというか、規格外だな貴様は」
「それでも、あんたには勝てないだろう？」
「まあな。お前自身に限界がある以上、お前は私に勝てないよ。ただ、3人で襲い掛かれば一流に勝てる、準一流の人間を、お前は50人相手取っても勝てるだろうがな」
「何とも微妙な戦力だな。まぁ、私は前線に出ないからいいんだけどな」
なんともさっぱりと答える千雨。しかし、エヴァンジェリンもそれ以上追及したりはしなかった。そして、それでいいと思っていた。
彼女が望む平穏を、エヴァンジェリン自身は壊そうと思っていなかったからだ。彼女自身が周りに壊された日常、それを千雨に味あわせるつもりは全くなかったのだ。

「しかし長谷川、そのマジックアイテムはすごいな。誰が使ってもあれのような動きができるのだろう？」
「どうだろうな、常に浮遊魔術の術式を気にしながら使わないといけないから、二から三の同時思考能力がないと無理だから。私も降ろした時にしかできねえよ。茶々丸ならできるかもしれないがな」
リリカルな魔法世界特有のマルチタスクと言う能力は、魔法使いや、他の人間にも余りあるものではない。ＴＶを見ながら会話をして、新聞を読みながらご飯を食べるくらいの同時行動力では足りない、一つ一つに対しての集中力が必要となるのだ。
それに、長時間行うと、頭の方が先に限界を迎えてしまうと言う難点がある。
しかし、茶々丸のようなロボットはその限りではない。データさえ集まればうまくデバイスを使えるだろう。
「この世界の超が過去に来なくてよかったわ。そんなの私じゃ絶対無理だもの」
地べたに女の子座りをしながら、肩で息をしているアスナがぽつりとつぶやいた。
田中さんが全員レイジングハートを標準装備している。誰が勝てるのだろうか。
「まぁ、もうこいつらは作れないけどな」
「何？　どういうことだ」
「材料に世界呪の枝とか樹液とか使ってんだよ。そうでなくても関西の、それこそ鬼神が収められた小屋のものとか。特別な素材に術式を組み込んで起動させてんだ。それ以外は劣化品にしかならないし、あんな高火力使えない。龍宮に渡したのが市販品用の試作品だな」
威力的には白き雷くらいが最大火力だと、千雨は答える。
それでもパーツ一つ一つに魔力の流れる術式や、効果を派生させるものを刻まなければいけない。その時間と手間を考えると、関西の符を作って使い捨てたほうが役に立つのだと言った。龍宮のような、魔法の知識があり、銃の知識があり、自分でメンテナンス出来るような人間にしか使えないと。そして個人で使うのならば、毎日のように行

動している人間は魔力を貯める余裕はなくなるのでそれも使えない。そもそも弾丸製作技術がないと、排莢をなくしてしまえば使えなくなると言うワンオフ性の厳しさがあった。今は龍宮のもの以外は世に出ていないので、研究されることもなく、千雨のアドバンテージとなりつつある。

そういった説明を終え、千雨は小太郎の方を向いて一枚の収納符を発動させた。

「武器はそんなもんだし、私の神降は私の想像に左右されるからな。この世界で不可能だと思うものはできない。ドラゴンボールに出てくる威力は無理だと私が思えばそんな威力でないし」

サウザンドマスターが山を消滅させた事実などを聞かされていたので、千雨はそれくらいの威力は出せる。そして他にも特徴はと言うと、

「元ネタ自体がある程度の威力がないと、そっちに左右されちまうんだよな。衣装自体は変えれるけど」

年齢詐称薬を口に含み、符を使って衣装と髪の色を変える。

「小太郎、寝っころがってないで2回戦行くぞ。さて、『準備はいいかい？　お姉さま』」

短髪の少年のような姿から、かつらをかぶって少女へと変わる。まるでフランス人形のような、きれいな

「『ええ、大丈夫よ。お兄様』」

一人で二人、二人で一人。そして彼（彼女）はそこにいた。

「『ターゲットには、タップダンスを踏んでもらいましょう』」

腰だめに構えたガトリングガン。そこから爆音の連鎖と共に、魔力弾が打ち出される。しかし、そこにあるのはごく普通のガトリングガンの弾痕だった。もっと大火力で打てる魔力の弾丸を使っても、その威力しか出せなかった。しかし、それでも狂気にとらえられた弾丸は小太郎に迫り来る。必死に起き上がり、小太郎はまさに犬のように這ってその弾丸の雨をよけた。

「だから、限度があるから研鑽もできない。私はここが限界だ」

「まぁ、貴様にとってはそれで十分だろう。素材がなければまともな

武器が使えないのなら、貴様自身の価値もあまり上がりはしないだろう」

しかし、その程度の、魔法使いにとっては不要な武器でさえ、米軍をはじめとした組織の対魔法使い武装として重宝され、千雨の知名度がまた上がるだろうとは、誰も予想できなかった。

外伝４　その後

自室の中で、電気を消して蹲っている影があった。
親指の爪は、何度も噛んだのか形がいびつになり、それでもなお捕食され続けている。
自室と言う表現は少し違うのだろうか、彼女の部屋は最近変わったばかりなのだから。
『大丈夫か？　なんて聞かないけどな、お前がそんなにふさがってもしょうがないんだから割り切れよ。お前も結局、利用されてただけなんだから』
以前、去り際に千雨に言われた言葉だ。自分で仕掛けておいて何を言うと思ったが、彼女とて、計画的に行ったわけではない。あの事故、事件は自業自得のものであり、千雨に責任はない。それは頭で分かっていた。感情が分かっていなくても、理性の部分でそれを理解していた。けど……
「ネギ先せ……ネギ・スプリングフィールド」
彼の名を呟いて、また爪を噛み始める。カリカリと音が鳴るまで強く噛んでいた。
自責の念を持ってしまった朝倉は、麻帆良に戻ってクラスメイトに事実が突き付けられた際に最も傷つけられた人間だった。春日、朝倉、龍宮くらいだろうか、クラスメイトに悪感情を突き付けられたのは。その中で龍宮は立場上、または深い間柄がいなかったせいか、あまり反感を受けることはなく、春日は元から自分の周りで好きにやっていただけの上に、魔法使いをやらされている立場のために特に変わることはなかった。問題は、朝倉だ。
その事実を突き付けられた３―Ａの面々は、修学旅行の二日目、ラブラブキッス大作戦が行われたすぐ後と言う感覚だったのだ。
なぜ自分たちがこのようなところで、このような立場に立たされているのか、察しのいい人間がすぐに理解し、それが伝播していった。朝倉の起こしたイベントが引き金になったのだと。

その後の説明で、もとより麻帆良いう土地にどのような仕掛けがあり、どのような意図があったのかを説明されたのだが、それは彼女たちにとっては日常でしかなく、それを壊された原因に恨みを持つ方が当然だろう。

しかも、麻帆良の地で、その説明をしたのが麻帆良の人間だったのがまずかった。できるだけ自分たちに悪感情がわかないように、自分たちが正当だと言うような説明の仕方をしたのだ。隣に関西の人間がいて、何度も説明を指摘していたが、あくまで魔法協会の管轄下であった麻帆良、その後処理のために過ぎた行動をとることができなかった。

魔法世界の人間がこれからもいなくなるようになっていれば、やりようもあったのだが、連合の元老院や、アリアドネー自体には交渉と同盟のようなものが結ばれているために、そこまでは主導権を取れなかったのだ。

そして、全てを受け止めるしかなくなった朝倉は、怒りを一身に受けることになる。

髪の毛はぼさぼさになり、肌は荒れ、目の下にはクマができていた。

「入りますわよ、朝倉さん」

ノックが聞こえ、それを無視して蹲っていると、それを知ってか知らずか、あやかが部屋の中に入ってきた。

あやかは、一日に何度か朝倉の部屋に入っては、食事の後片付けやら、洗濯物の交換やらをして帰っていく。時には朝倉に対し、何時間も外の事や、最近の出来事を話していったりもした。

あやかは、京都に戻ってから、もう一度自分を見つめなおすと同時に、両親に対し、なぜ麻帆良に送ったのかを詰問していた。彼女の父親は、彼女が魔法世界の常識に順応し、魔法世界へとシェアを広げられればと言う目的で麻帆良に送ったらしい。その後、人質のような扱いになったり、従者候補になったりしていたとは思わなかったらしい。その情報すら入っていなかったのだ。

麻帆良は、魔法使いの街だと言うことと、それを隠す結界のようなものが張られているということはある程度の人間が理解していた

が、それがどのようなものなのかを知っている人間がいなかったらしい。それに、弟の流産によって、あやかがショタコンになっていることも知らなかったらしい。傾倒した性癖だとは思っていたらしいが……

その後、当時のカルテを調べたりしたが、特に異常なものは見られなかった。しかし、それで白になるかと言われたら、それは否であるという結論になった。魔法使いが意識的に母親の状態が悪くなっているのを無視させたり、魔法によって誤魔化せたりしたら、悪化させることが可能だし、流産であったと言って処理してしまえばそこでお終いである。確実な黒ではないと言うことしかわからなかった。

それらを受けて、あやかは自分で道を選んだ。麻帆良を成長させる道を。千雨との口約束もあるし、もとより両親に期待された立場を行えるお膳立てができているのだ。世界でもこのような好条件を持っている人間はあやかだけだろう。

そして、その一環として、まずはクラスメイトや、魔法によって人生を狂わされていた人間を、一人の人間として支えようとしているのだ。

「朝倉さん、外に出てみませんこと？　今は夏休みですから、帰郷してる人が多いんですのよ」

「……いいんちょは帰らなかったの？」

基本的に、朝倉は話しかけを無視することはない。あやかは、それを知りながらいつも自分の事を長時間話して帰っていく。話し合うということが朝倉にどれだけ辛いことか理解し、それでも他との交流を欠かさせなかったのだ。

「私は家族で旅行に行く以外は、皆忙しいですから帰っても仕方ありませんわ」

あやかは、もういいんちょ――委員長ではないのだが、朝倉のその呼びかけに答えた。

本当は後2週間くらいしなければ夏休みにならないのだが、今年は特例で伸びていた。できるだけ先に時間を取り、常識に順応した状態。または、自身で気持ちの整理をつけた状態で授業を受けたほうが

いいと判断されたのだ。そして、その時間内に教職員の選別も行われることになる。
「けど、いいよ。外に出たくない」
朝倉はそれだけ言うと、また壁へと視線を移した。
あやかはその様子を見て、悲しそうに顔を俯けた。
「……では、エステに行きませんこと？　車はこちらで用意させますわ。それに、この部屋に呼ぶこともできますことよ」
「……いいよ。いいんちょが行ってきな」
「私は行きたいときに行けるからいいのですわ！」
彼女は、このようなお嬢さまという立場を利用した行為を最近は一切していなかった。そのような軽挙を、自身で気づけるようになったからだ。しかし、このように、他者に対しての行動は、少しばかりはめをはずすのを止めなかった。彼女も、それでいいと思っていた。
「あぁ、でも」
「美容師も呼ばないと駄目ですわね！　直ぐに用意いたしますわ」
朝倉の反応から、まだ外に出ることは不可能と悟ったあやかは、直ぐに予定を変更させた。
エステティシャンも、美容師も、相手は人間だ。ピザや店屋物のための交流すらできなくなっている朝倉に、少しずつでもひとと触れ合わせるために、返事を聞かずに出て行った。今日の様子を見て、一歩前に踏み出せるかもしれないと思ったのだ。
あやかのいなくなった部屋の中、また朝倉は一人になる。
そして、彼女は布団をかぶった。頭まですっぽりかぶって、拒絶するように。
その手首には幾重もの傷跡があった。魔法の恩恵を授かり、簡単な傷をはじめ、腕が骨近くまで切り離されても治療可能なくらいなのだ。それなのにそのような傷があると言うことは、直ぐ最近に自傷行為をしたことに他ならない。
彼女の部屋にはナイフ類はおろか、鉛筆の一本すらおかれていなかった。電気のコードも切れる、外せるようなものはなく、全て壁に埋め込まれていた。それに、レンジはあるが、コンロもＩＨで火が出

ないようになっている。完全に封鎖されていた。
しかし、それでも彼女の爪は紅く染まり、それを何度もあやかが止めていた。
あやかが呼んできたエスティシャンとあやかが入ってくる。ストレッチャーのような簡易ベッドが用意され、二人でエステを受けながら話をした。
「朝倉さんは夏にどこも行きませんの？　両親のもとへ帰ったりは？」
「しないよ。会っても、何話していいかわかんないし」
あやかが朝倉に積極的に話しかけている。リラックスするようなお香がたかれているせいか、いつもより会話のキャッチボールが多くなっていた。
「では、どこか旅行に行きませんこと？　行きたいところがあるのなら――」
「京都とウェールズ」
「え？」
あやかの言葉の終わりを聞かずに即答する朝倉。そのため、あやかは聞き逃してしまいもう一度聞く。
「どこに行きたいと？」
「京都と、ウェールズだよ」
あやかは、失敗したと思った。自分で南の島など、目的地を決めてしまえばよかったと。
朝倉の闇は、まだ全然解けてはいなかったのだ。
「他に行きたいところはありませんの？　グアムとか、私の別荘があるのですが」
「京都とウェールズ以外なら行く気はない」
まっすぐを見つめながら、どこも見ていない朝倉をあやかは捉えた。
「京都に行って、何をするのですの？　金閣寺や池田屋など、見逃したところがあるのですの？」
「長谷川に会いたい」

その真意を、あやかは感じ取りきれなかった。あやかは、クラスの事で何度か千雨に連絡している。千雨も多少は負い目があるのか、極力クラスのメンバーに関しては協力してくれていた。そういった意味で言うのなら、千雨に会わせることで朝倉の今の状況が改善することはありうる。

しかし、それが復讐目的などであるのなら。ここで止めなければいけなかった。自傷行為をしている人間には2種類の人間がいる。自分を責めている人間と、やり場のない感情を自分に向けている人間だ。朝倉が後者であり、その感情のやり場が千雨なのだとしたら、会わせてはいけないのだと思った。

ウェールズの方は明言を避けた。あやかは朝倉の呟きを何度も聞いていたから。ウェールズに行ったとしても、ネギに会うことは不可能なのだが、それだと逆にフラストレーションを溜めてしまう可能性がある。

「長谷川さんに会って何がしたいのですか？」

とりあえず、朝倉の真意を探ろうと会話を続けるあやか。

「わからない。何を話せばいいのか思いつかないけど、会いたい。長谷川が何を考えてたのか、話も聞いたし記憶も見たけど、それでも私は……」

そこで言葉を切る朝倉。納得いかなかったのか、巻き込んでほしくなかったのか。しかし、それを朝倉が言う資格はないのだ。それよりひどいことを、何の考えを持たずに遊びで人を死地に追いやろうとしたことがあるからだ。

それから、言葉を無くした朝倉を見て、あやかは千雨に連絡を入れようと決意した。

外伝5　中心

アリアドネーでは、新入生のカリキュラムを決定する話し合いがされていた。

関西で起きた事件に伴い表面化された、メルディアナの授業と評価の不平等性と、不完全な教育カリキュラム、それに過ぎた贔屓などによる成長の阻害。それらを踏まえた結果、１０年以内に卒業した中で希望した者は、アリアドネーでの授業の受けなおしをできると言うものが出来上がった。

希望者は意外と多かった。それは、魔法使いの中でメルディアナの評価が地に落ちたからと言っていいだろう。ネギ・スプリングフィールドを犯罪者にした学校として有名となり、そこでの評価など、マイナスにしか働かなくなってしまったのだ。仕事をしようにも、仲間たちからは村八分状態になってしまい、身動きもとれない。アリアドネーでの再教育というのは、彼らにとって救いだったのだ。

しかし、授業の受けなおしに関して、希望した人たちの心中は複雑だった。

その制度自体が施行されるに至った原因である、ネギのために作られたモノであり、自身はネギの隠れ蓑であることを知ってしまっているから。

そもそも、ネギ・スプリングフィールドの親である英雄、ナギ・スプリングフィールドに対する妄信が、今の自分たちを苦しめていること。

当時でさえ、同じ時期に学校に通っていた生徒たちはネギの事が嫌いだった。何をやっても褒められて、特別扱い。禁書庫に入りたい放題。同じ行為を違う生徒がしたら、説教されるか、停学になるか。しかも、彼には才能があるのだ。自分たちはできる範囲で努力をしなければいけないのに対し、彼は必要以上に整った設備とサポートがあったのだ。

それに、彼は、やりたくないことには目もくれずに好きなことばかりをしていた。魔力の制御など、必要ないと言う風に、一般知識など

やってる暇がないと言った感じで自分の判断のみで行い、そのうえやってないところにまで最高評価を与えられて、常に主席の評価になっていたのだ。
生徒たちにとって、ネギは目の上のたんこぶ以外の何物でもなかった。それが今は足かせとなり、自分たちは盾となれと言われているのだ。
カリキュラムを受ける生徒たちの大半が、ネギと同じクラスであることを拒絶したと言うのも、頷けるであろう。
「しかし、これでは授業ができませんね」
「正確にはネギ君の授業がですけどね」
それでもいいとセラスは考えていた。ネギに必要なのは道徳だと。改心したのかと思われたネギだが、彼は改心していなかった。というよりも、改心する心を持たなかった。何がいいのか、何が悪いのかという判断基準が自分の感情以外にないのだ。結局、明日菜さんが殴られるのが嫌だったから止めた。
それ以外の考えも持たないし、争っていた理由も考え直していない。関東と関西の仲も、今手を取り合えば改善するものだと思っているし、高畑や近右衛門が裁かれるのは間違いだと思っている。だからと言って千雨が悪いとも思っていない。それらは全て、彼の知人であったり、生徒であったり、友人であったりすると言うのが判断基準となっていたのだ。
そのことに気が付いているのは、魔法世界ではセラス、ドネット、クルトくらいだろう。
後日公開されたクルトからの情報によって、独善の行為であるナギの行為の裏側と、その被害に対する評価の改善によって、ネギの歪さに気が付くものも出始めるが、それでもネギに優先されるべきは魔法教育であると言う方針に会議が成りつつあるのは、仕方のないことだった。
「やはり、皆さんには我慢していただくしか」
「そして、講師の誰か一人でもメルディアナと同じ行為をすれば、そうでなくとも生徒の一人でもネギ君に味方をして、間違った行為を正し

いと言えば、アリアドネーは存在意義を無くしますよ」
ネギを優先して考える講師に釘をさすように言葉を発したセラス。それに対し発言した講師は口を閉ざして、軽くセラスを睨みつけた。
他にも、ネギを優先するのは当然のことだと考えている講師が多々いることは明白だった。
「あなたたちのその行為が、将来的にネギ君を苦しめるのを理解しなさい。井の中の蛙は英雄にはなりません。ナギ・スプリングフィールドのようになるには、経験と試練があります。実際に彼はメルディアナを必要ないと判断し、中退しています。そして、自己研鑽のために魔法世界へと来たのです」
「では、授業自体必要ないのではありませんか?」
「ネギ君がなぜここに来るようになったのかを考えなさい。英雄の息子であろうと彼は犯罪者であり、犯罪者を庇うこころの持ち主です。贔屓という周りの行為によって、歪んでしまった判断基準を矯正しない限り、間違った方向にしか進まないでしょう。一人になった結果が、このような事態を招いているのですから」
ネギを特別扱いしない理由を、平等にすべきといっても講師たちは理解しないだろう。そのためセラスはネギのためにもネギを中心にするのはやめろと言っていた。それに納得しているものと、していないものは半々くらいではあったが、その誰もがネギの事しか考えていなかった。
セラスはその様子から、授業どころか、受け入れも難しいのではないかと悩むこととなる。それでも悩みの種はあると言うのに。
悩みの種というのはネカネ・スプリングフィールドのことだ。彼女もまた、犯罪者となったわけだが、スプリングフィールドのネームバリューから、完全に罰することが難しかった。その結果、禁固無しのオコジョ刑なわけだが、カモの代わりにネギの側に付くようになったのだ。彼女の判断基準もまたネギを中心としたものであり、彼女が全てのネギの行動を肯定することによって、ネギの更生を非常に困難にさせていた。
周りの人間を肯定する。それはつまり、外部の人間を否定する、拒

絶すると言うことでもある。無意識のうちに、自分に都合がいいものと、都合の悪いものの判断を下しているのだ。そして、自分のに都合がいい人間を取り入れる。自分が賛美されたいがために。

自分という存在を受け入れる人間を周りにおいて、全肯定された社会の中で生きていく。一種の自己防衛本能かもしれないし、昔からそのことになれ、大人になれないのかもしれない。もしくは、それが当然であり、社会とはそういうものだと思っているのか。

今回も、様々な思惑や政局の変化から、たまたまこのような措置になったのに、ネギは自分が正しいから捕まっていないと思っている。ネカネも、ネギが悪くないと言い続けており、反省の色がまったくと言っていいほど窺えない。クルトは、それでこそのスプリングフィールドだと皮肉を述べていたが、受け入れる側のセラスは、それではまずかった。

しかし、人生のすべてを贔屓と甘えで過ごしてきた少年に対し、実際に出た社会が自分の都合のいいようにいじくられていたネギに対し、どのような教育を行うべきなのか。どうすれば更生ができるのか。それらをすべて丸投げされたセラスは非常に頭を悩ませる。

「こんな時に、あの子たちだったら何をするのでしょうね」

「あの子たち、ですか？」

千雨、千草、小太郎、アスナ。この四人はある種神聖化されていた。少なくともこの事件を深く知る者達にとっては。誇張表現は多々あるだろうが、それでも彼女らが行ったことは、長い間続いた腐敗を断ち切ったのだ。

近衛という明らかな黒があったにせよ、それを成し遂げる胆力と、自己達成への執念があった。それは、元老院にも、近衛にも、ネギにもあるものだ。しかし、対外的にも利益となる、当然の権利の行使として行われた復讐だった。そして、間違ったものから受けた仕打ちをバイブルとして、彼らを反面教師として学び、正当性の中から訴える方法に出たのだ。法的にすれすれなものなどもあったが、相手と事情によって、それは仕方のないものとされていた。相手がよりひどい行為を行っていたから。

彼女らは、何よりも理不尽を拒絶した。それだけの事。自分の都合のいいようにことを運んでも、相手を不幸に落としいれても、理不尽なことをしなかった。

最低の価値基準があるだけで、英雄とは斯くも変わるものなのかとセラスは思った。

しかし、思っただけでそれ以上は何もできない。最低の価値基準。それは魔法世界にとって最高の価値基準なのだから。

「では、その者達を呼べばいいのではないですか？」

「今、あの人たちはここには来ないでしょう。来たとしても、ネギ君には会わない。それに、講師の中ではあの子たちを敵視する者も数多くいます。悪いのは誰か、分かりきったことのはずなのに幻想に囚われて」

その中の一人はあなたです。そう目で訴えるセラスだったが、それは伝わることがなかった。

そして後日、クルトによって行われた大粛清と戦争の裏側の告発。

メガロメセンブリアは荒れに荒れた。旧オスティアの人間は怒り狂い、帝国の人間は遊び半分で殺された仲間の事を再認識し、人を人とも思わない元老院へ矛先を向け、英雄の動機に幻滅した。

悪を倒すための正義のヒーローは、自身の腕試しのために戦争に乱入して人を殺し続けていた。その悪とは、世界の人々全員を救うための策を必死に考えて行使しようとしていた別の形の正義だった。戦後の世界を操っていたのはどこから見ても悪でしかない老害だった。戦犯として罰された者こそが真に民のことを考えていた。

そして、立派な魔法使いとは、連合の都合のいいように利用できる魔法使いであり、世論操作によって生まれた偶像であった。

それら全てが実例や文書込みで発表されたのだから、騒ぎは収まるところを知らなかった。

その中でも、立派な魔法使いの行動として、本当に立派な行為を行う者もいるということもふまえて、ご立派な魔法使いと立派な魔法使いの存在を公表。

特に、被災地で弱きを護り、傷を治し、安全を確保していた立派な

魔法使いと、自分の活躍の場を求め、自由を求めたり、宗教上の理由などからのどちらが悪なのか判断のできない抗争や戦争に、自分の価値観のみでつっこみ、裏の力を行使して被害を拡大させるご立派な魔法使いとの違いは、これから旧世界の人間と関わる際にしっかりと考えられなければいけない問題となっていた。

自分たちの知識や常識の非常識性を認識させられたものは、それを拒絶するにせよ、肯定するにせよ、ある程度準備期間が必要となった。そして、それはアリアドネーでも同じであり、講師の中でも真っ二つに割れていた。

それでもネギを英雄にしようと言う、幻想を追い求める人間。

しっかりとした教育環境で学ばせて、導いたうえで考えようと言う人間。この二つの派閥ができていた。特別視していることにかわりはないが、少し見方が変わってきたと言うことだろうか。しかし、それでもまだ足りない。

何が一番に必要なのかをセラスは考え、深くため息を吐いた。

「やっぱりあの子が必要かしら」

セラスは手紙を一通書いて、京都へと送った。

それは、千雨に特別講師をしてほしいと言う嘆願書だった。

外伝6　清水

「あ、ありえませんわ」
あやかは清水寺の前で呆然とした。朝倉は、冷めた目で周りの様子を見ていた。
そこにあったのは、人、人、人。
以前に来たときには考えられないほどに人が敷き詰められていた。
「別に、これが普通なだけなんでしょ」
朝倉は、坂を上るときに買った八つ橋クレープを食べながらあやかの疑問に答えた。
朝倉は事前にブログなどで実際の様子を知っていたために驚きは少なかったようだ。
「けれど、前に来たときは修学旅行シーズンでしたのに、もっと少なくなかったですわ。これでははぐれてしまいそうで」
「だから、それも魔法なんでしょ」
拝観料を払って入る二人。その先には、記念撮影をしている人がいて、目の前を通りづらい雰囲気になっている。それをよけて本殿まで進んでいった。
先にあるおみくじやお守りを売っている所を通りながら、本殿から見える景色を眺めた。そこもまた、人でごった返している。
「みなさんを連れてこなくてよかったですわ」
ぽつりと漏らした言葉。朝倉とあやかは、京都に行くのについでと寺を巡っていたが、朝倉の様子によっては他のクラスメイトも誘おうと考えていた。別行動でも、彼女らにしっかりとした京都旅行をしてほしいと、そう思っていた。
しかし、これでは
「人が多くて、見た気になりませんわ。これでは、地主神社の岩の願掛けも、人にぶつかってしまいますし」
その先にある、音羽の滝の水を飲むための行列は、何分待てばいいのか見当もつかない。修学旅行の快適な清水寺とは雲泥の差だった。
「観光地に人がいないわけがねえだろ、いいんちょ」

「そう言われれば……」
「これも、魔法だったの？」
「人払いの符だな。麻帆良の生徒のために、わざわざ張った符だ。たまたま同じ日にここに来るはずだった人は、ご愁傷様って感じのな」
「そうでしたの。千雨さ――」
あやかは慌てて後ろを振り向いた。そこには、後で会うはずの千雨が、和服姿で立っていた。
「よ、久しぶりだないいんちょ」
「お久しぶりですわ。それにしても、いきなりですのね」
「こっちも色々と詰まっててな。先に済ませてもらおうかと」
千雨と連絡を取った雪広は、朝倉の様子を見ながら慎重に日程の調整をしていた。しかし、予定道理に行かないと言うのが世の常だ。
こちらの都合も考えずに予定を割り込んで頼みごとをしてくる魔法関係者の多いこと。
交渉をする人間はある程度話せる人物が多いのだが、その段取りをする人間が無茶をしたり、京都の人間を下に見ているので高圧的な物言いになっていた。
そして今日も、たかだか子供ひとりと会うための予定だと、無理やり予定をねじ込まれたのだ。門前払いになりそうになった相手は脅しをかけてきた。交渉相手を知っている千雨はそれを警戒したわけではないが、予定を変更することにしたのだ。
「今日はお暇ということでしたけど」
「こっちの予定を無視する奴なんてざらにいるからな。別に緊急事態ってわけじゃねぇから気にすんな。むしろ遅れて行った方がいいかもしれないしな」
相手の立場を教えるために。そう千雨は心の中で付け足した。
こう何度も見下されたような交渉をされ、その後に相手が愚行に気が付く。それを何度も繰り返して、千雨にも疲れが見えていた。千雨が表に出る回数はそう多くはないのだが、それでも報告のようなものは毎日あり、想像以上に仕事があったのだ。
「それより、話すなら移動するし、観光するなら見て回ろうぜ。京都に

何回も来ていても、観光とかはしたことないんだ」
「そうなんですか」
雪広はチラチラと朝倉を見ながら答える。朝倉は、先ほどまで景色に向けていた視線を外し、千雨に釘付けにしていた。
雪広はそれをハラハラしながら見ていたが、千雨は気にせずに二人を誘導して行った。
坂を下りて、直ぐ近くにある喫茶店。その一つに3人は腰を下ろした。
関西呪術協会の隠れ詰所にもなっているこの店は、3人が入ると準備中の札を出して貸切にする。
「ここの方が話しやすいだろ」
千雨はそういうと、とりあえずと抹茶とおはぎのセットを頼む。出されたセットは、苦みのある抹茶と、甘さが控えめながらもしっかりと効いているおはぎと、満足のいくものであった。
舌鼓を打ちながら、千雨は朝倉の様子を見ていた。
雪広から聞いていた朝倉の様子。そして今までの自分の経験から、どのようなことへと思考が移行しているのか、なんとなくだが分かっていた。
しかし、千雨はそれを率先して聞いたりはしない。それは朝倉が自分から伝えることなのだから。
雪広はチラチラと朝倉の方を見ながら、千雨にならいおはぎを口に運ぶ。
朝倉は差し出されたものをじっと見ながら俯いていた。
沈黙は続き、千雨が食後のお茶を飲みきるまで一言も発されることはなかった。
「長谷川」
「なんだ？」
ポツリ、やっと出た言葉。
「教えてほしいことがあるんだ」
声を震わせながら続ける朝倉。震えの原因は何なのか。
それを察することは、雪広にはできなかった。ただ、心配そうに朝

倉を見つめている。
「長谷川、あいつらのことをもっと教えて。あいつらが何をやってたのか。これから何をするのか。私たちはどうなるはずだったのか」
そして、朝倉は一旦言葉を止めた。千雨はせかすことなく朝倉を見る。
「後、これだけは教えてほしいんだ。あいつらの、あいつらへの復讐の方法を」
先ほどまで向けられることがなく、見えなかった朝倉の目が、やっと二人の視界に入った。ギラギラとした目。その奥には復讐の炎がともっているように雪広には思えた。
千雨はそれにため息を吐いて、軽く手を振る。
「前半はいいが、後半は無理だ。私はあいつらに復讐しようなんて思ったことはない。そんな気も起きない以上、教えることもできない。それが聞きたいことなら、帰ったほうがいいな」
犬を追い払うような仕草で朝倉を返そうとする千雨。朝倉は立ち上がり、テーブルに強く叩いた。
「何でよ！　長谷川はあいつらに復讐したじゃない！　できたじゃない」
朝倉の目の奥から、憎しみが千雨に向けられた。千雨はそれをものともせずに雪広に話しかける。
「ちょっと、こいつ外に出すのは早すぎたんじゃねぇの？」
「仕方ありませんわ。以前の明るかったクラスは、今は影も形もないのですから」
バラバラになってしまったクラス。彼女らは何を信じていいのかが分からなくなった。周りの者すべて、完全に信じきることなんてできなくなった。仲のいい友達でさえ、その友達自身を信頼していようが、実はあやつられているんじゃないかという懸念が頭から消え去ることはなかったのだ。
周りの一挙一動に敏感になり、今も昔のように振舞えるのは龍宮、那波、雪広くらいのものであった。綾瀬は普段道理に振舞えると言えば振舞えるのだが、別の事情で普通ではなかった。

周りの異常性の中でもひどかった朝倉だが、彼女の精神状態を考えると連れてこざるを得ない状況下にあり、さらには雪広の判断基準も周りの状況によって下がっていたのだ。
千雨はその事実をクラスメイト本人から聞いてため息を吐いた。そして朝倉をいったん座らせる。
「私は魔法の呪縛から逃れるためにやった行為が結果的に復讐のようになっただけだ。結果は同じだが、本質は全然違うところにある」
「どういうこと？」
「私がやろうとしていたことは、関西呪術協会を関東魔法協会の傀儡状態から解放することで、自分の居場所を確保すると言うことだ」
麻帆良の情報を伝え、修学旅行での行動をもってして関東との立場を考え直さる。それでだめだった場合は長を排除する。千雨のみではそこまではしなかった。復習と呼ぶには稚拙すぎるそれは、ただ関西の、日本の未来を考えて行動を起こすものと、千雨の自身の居場所を確保しようと言う行動と、千草の、魔法使いへの復讐心という悪感情が合わさってできたものだ。即物的な復讐を求める朝倉に出せる答えは、千雨は持ち合わせていなかった。
「けど、長谷川は魔法使いたちを、高畑と学園長を麻帆良から追い出したじゃない」
「あれは結果論だ。近衛詠春が傀儡であることをいいことに、好き勝手やってくれたからな。勝手にドツボにはまっただけだ。仮契約執行の魔法陣を旅館に引くなんて誰も考えつかねぇよ」
千雨は、朝倉に対して言葉を選ぶことはしなかった。淡々と事実だけを述べていく。
朝倉の起こした行動は、魔法使いにとって悪手であったが、だからと言って責任がまったくないと言うものではなかったのだ。
「それに、復讐というなら、お前がやった行為自体が復讐になってんだろ。それがきっかけで麻帆良を潰せたんだから」
千雨たちの行動がすべてうまくいったとしても、麻帆良をどうこうできる予定はなかったのだ。ネギとカモの暴走によって、それに朝倉が加わったことによって事態は好転し、麻帆良の魔法使いを排除でき

ることになった。そういった意味で考えるなら、朝倉は既に復讐を追えていると言えるだろう。
「朝倉、お前は何に対して怒ってるんだ？　自分たちがいいように使われていたことか？　自分が利用されたことか？　自分がクラスメイトに冷たい目で見られることか？　知らないうちに性格を曲げられていたことか？　人生を勝手に決められた挙句に死の蔓延った戦場へと送り出されそうになったことか？　それともそんな場所にクラスメイトを陥れそうになったことか？　それが分からないうちは復讐をしようとしてもどうすればいいかなんてわかってこないだろうよ」
　朝倉は問いに対し答えることはできない。怒り、恨みの感情が先に来て、千雨の言葉を聞くまで、何に対しての感情なのかわからなかったのだ。
　分かっているのは復讐の対象だけ。学園長、カモ、ネギ。そして、その中で今生きていて、復讐の対象にできる人物は……。
「まぁ、何も聞いてきたのはそっちの事だけじゃないしな。前者の方を教えてやるよ。魔法使いのことを知り、お前のカメラでそれを写して真実を社会に出す。その行為が復讐になるかもしれないしな」
　そう言って千雨は立ち上がった。
「まずは、相手がどう考えているのかというのを教えてやる。魔法世界からの使者が来てるから会わせてやるよ」
　懐から取り出した手紙には、アリアドネーからの手紙であった。

外伝7　来訪者

本山で千草は執務を行っていた。連日の魔法世界との交渉と、そのやり取りに疲れ果てている術者の多い中、世界では魔法世界の人間を受け入れる体制を作れずにいた。

「あの人たちは交渉する気がないんやろうなぁ」

全てを上からの命令で動き、その権力を使ってきた連合。その外交官は大戦の後は帝国以外は小国と学術都市のアリアドネーのみ。それも仲がいい相手とのみ交渉をしてきた。世界の中心として機能してきた。

それが、魔法世界の崩壊によって避難民として旧世界に間借りすることになる。そのための魔法の認知であり、世界相手の交渉だったはずだ。

だが、連合はそう思っていなかった。魔法世界が壊れるから旧世界へ移動する。移動してやる。今まで助けてやっていたんだから当然だ。

決定事項を叩きつけるからお前等は準備だけしていればいい。そのような態度と認識だった。クルトが元老院にいると言っても、クルトはたくさんいる中の一人にすぎず、交渉役として立つ人間も、その経歴と就任年数から言って、旧体制の人間の影響を色濃く受けていた。

国連に持っていかれるものも、魔法世界の人間の、麻帆良の人間の言動がさらされた中でなお魔法世界側の人間の肩を持つ者は、その恩恵を疑われた。事実、魔法世界の人間と関係を持っていた。当然だろう、日本の陰陽寮のような立場に魔法世界の人間がいたのだから。しかしそれが立場を持つ理由にはならない。その国の中枢に魔法世界の恩恵があったり、魔法世界での立場を約束されていたりなど、旧世界・地球にとって役に立たない、個人的な、もしくは一国のみが潤い、他を犠牲にするようなものしかなかった。

公平に物事を見ている人間の中で最も好意的な意見は、以下のよう

になっていた。
魔法世界の人間を受けいることに好意的であり、拒否する理由はない。
しかし、その道徳観念と社会的知識を再教育させる必要がある。
残った時間で社会的通念を世界として身に着けることができたなら全力で助力すべき。
やはり大手を振って認めるわけにはいかなかった。
大戦の英雄、人殺しの英雄を祭り上げ、戦争の行為自体になんの決着もついていない。停戦だからという問題ではない。帝国と連合が戦争をしていた事実をうやむやにして、戦犯は一人、王女のみ。そんなことありえない。
しかも、その王女は英雄と共に過ごしてたと言う。
人殺しの賞金首が、いつの間にか英雄となっている矛盾。
それだけではない。そうではない。
それを全員が受け入れている。帝国の人間ですら。これは異常だ。
殺されている側がいつの間にか英雄を受け入れ、世界を助けたと言っている。
いつ、どこで帝国の人間がそれを見た。
遺跡の中で起きたと言われていることを誰が知った。
テオドラ第3王女の言葉を信用したのか。ならばなぜ、共に過ごしていたアリカ王女が罪に問われる。
まるで雲の上から見ているように、神が見ているように。
小説や漫画、映画で見ているように納得しているのだ。連合からの情報だけで。
連合の情報を無条件に信じているこの状況、同じようなことが麻帆良でもあった。まるで一つの事が完全な真実、最も正しいことであるかのようにされ、それが何の考えもなく肯定される。一方通行の情報と思考。これはまるで中世のヨーロッパ、いや、古代ヨーロッパまで遡ってもおかしくない。
技術も知識もあるはずなのに、それを活かすことはない。
地動説を信じる人間のように全てを鵜呑みにし、魔女狩りの時代の

ように、一人が挙げた声を全員の声にする。
魔法世界の移民の歴史を紐解くと、紀元が始まる前に既に地球から離れた彼らは、いろいろな思想に出会う機会がなかった。
大きな思想の対立はなく、旧世界・地球の考えは、それはそれ。軸となる考えは変わらなかった。キリスト教でさえ、カトリックとプロテスタントに別れ争いがあったのだ。思想と思想のぶつかり合いの中で生まれた観念であり、勝ち取った市民権だ。それが魔法使いにはない。
貴族が平民を淘汰していた時代の、その価値観のまま進んだ魔法世界と、いろいろな思想や国の争いの結果生まれた世界とではかみ合うことがなかった。いくら技術が進んでいようとも、精神までは進んでいなかったのだ。
今、国連の外交官と関西呪術協会の人間は銃を構えたこどもの我儘をたしなめるように、中世からタイムスリップをした人間に一から教えるように外交をしなければならない。
「ほんま、疲れるとは思いまへんか？」
「それは……」
向かい合っているセラスに対し、言葉にのせずに同意を求める千草。
セラスは表情を崩さずとも、今回の外交が既に失敗していることを理解していた。
セラスの隣にいる男にはそれは分からないだろう。その男こそ、今回の外交を決めた者なのだから。
「それにしても、長谷川殿は顔も見せないのか。こちらが来ていることぐらい、伝えてあるんだろう？」
厭味ったらしい笑みを浮かべ、見下すように言う男。この男、連合の生まれで、連合で職務に就き、その後アリアドネーに来た者だった。思考は半分以上連合のものだった。だからこそ、魔法世界の外交官として有能だったのだ。地位、コネ、アリアドネーに来れるだけの知識。魔法世界では上から数えたほうが早い人間だったが、それも、魔法世界ではのことだ。

「すみまへんな。千雨はんには用事があるよって」
「私たちが来ているんだぞ。予定は外せと言っただろう。これだから旧世界の人間は……」
「やめなさいっ！」
　男を止めるセラス。男は何が間違っているのかわからなかった。
「何を言うのです。これは信用問題ですよ」
　千草は値踏みするようにセラスを見る。セラスは想像以上の男の行動に唖然としていた。
「そもそも、この者達が英雄の息子を捕らえたと言うこと自体が間違いなのです。そんな権限この者達には無い。連合の支部の指揮下に置かれている島国の属機関でしょう。そんな者達に偉大な英雄の息子の未来を潰すなど」
「やめなさいと言っているのです！」
　頭を抱えるセラス。
「これ以上の発言は許しません。これ以上侮辱をするのでしたら、あなたをアリアドネーから除名します」
　セラスの様子を見て、それを本気ととったのか、男は鼻で笑って言葉を止めた。
　重苦しい空気の中、ふすまを開けて少年が入ってくる。
　そして3人にお茶を配り始めた。
　その少年をみて、セラスは目を細める。
「あなたは……」
「クルトはんが置いてほしいと言うはりましてな。秘書に勉強をさせてほしいと」
　少年は、クルトの側に仕えている少年だった。
　その少年と、男を比べたセラスは自分を恥じた。少なくとも、もっとしっかり探していれば、物事をしっかりと見つめることができる人間をここに連れてこれたはずだ。
　しかし、今までの経歴と実績から選んでしまった。そして、彼のような人間が変わればアリアドネーが変わる。そこのみを考えてしまった。相手のことを考える余裕がなかったと言えば、しょうがない

と言う者もいるかもしれないが、それでもクルトは自分の側近をしっかりと据えている。そこまでの信頼を寄せていた。関西にも、少年にも。他の周囲の人間にも。

クルトはアスナの用心棒も兼ねて送り出したと言う事情もあるのだが、セラスにそんなことは関係なかった。確実に関西との関係性は連合の元老院の方が進んでいると言ってよかった。

静寂が場を支配する。それはセラスが思考を巡らす為であった。千草はそれを静かに見つめる。男の方の品定めは済んでいた。上と下の動きや考えが違うことなど、自分たちでよく知っていた。だから今ここで確かめているのだ。アリアドネーの本質を。

大戦の記録で見る限り、戦争には参加していないものの、その前後は連合と足並みをそろえていると言っていいだろう。そして、内部の人間も連合が浸透していた。

中立的な軍だという事実は認められたとしても、外から受け入れることの多いアリアドネーは、逆に言えばもぐりこみやすいのだ。その意図がなくとも、染まることがある。それをセラスは実感していることだろう。

犯罪者であったはずの英雄たちを無条件で受け入れた学園都市の行動に疑問も持たずにサインまで求めていた。それくらい疑問を持っていないのが普通なのだから、染まりやすいのは仕方がないのだろうか。

「それで、要件を伺いましょうか」

落ち着き、セラスの様子が変わったのを見て千草が問いかけた。

「私たちは新たな教師を求めています。今回の麻帆良の不祥事。これはまだ公表されていませんが、大戦の真実。これによって授業を受ける側も、教える側も考えを改めなければなりません。しっかりとこれからの世界のために判断を下せるものが必要なのです」

「それがうちと何か関係ありますか？」

「魔法世界の人間の、麻帆良の人間の矛盾を捉え、それに囚われていた上に左右されずに事を起こしたあなた方に教えていただきたいと私たちは考えています」

千草はセラスの言葉の裏を考えていた。本当にそうなのか、教えるとして何を教えるのか。それを受け入れるのか。下の者の代表として、目の前の男がいるのだろうが、それは実現するのだろうか。生徒たちとは誰を指すのか。

「あんさんは、これについて賛同なんどすか？」

千草は男に聞く。男は一回首を振ってから答えた。

「私たちはお前たちに教えることはあっても教わることはない。お前たちが頼むのなら常識を教えてやろう。私たちの考えを受け入れられないのなら、私達と交流をする権利すらないと思え」

千草はセラスの方を見た。セラスは驚いて男を見る。

「セラスはん？」

「総長、なぜこのような者たちに助力を乞うのです。連合に頼めばいいでしょう。私が頼めば優秀な魔法使いが連合からやってきます。ネギ・スプリングフィールドの教育は私達で十分です」

この男も含め、今回の話が来たときに教授陣の中で外来のものは気分を害した。実力でアリアドネーにやってきた。それなのに自分たちに頼らずに、ネギを汚した関西に協力してもらおうとするセラスに不信感を抱いていたのだ。もちろん、関西への不信感もあるが、それよりこの男は交渉を決裂させることを目的としていた。

セラスは男を睨むと、千草の方を向く。

「こうやって勘違いしている人間が多いので、千雨さんを講師陣の教師として貸してほしいのです。アリアドネーの人間はネギ君の事しか考えてません。私もそうでしたので強くは言えませんが、魔法世界を上と見て世界を支配していると思い込んでいる元老院、それに支配されている連合。そこから波及している考え方に踊らされている私達。それをこれから生きていく世界の人間に、そして魔法世界の矛盾を知覚している千雨さんに教えてほしいのです」

男は唖然としてセラスを見ている。ネギの指導者として千雨を呼ぶのかと思ったら、自分たちを指導する為だったとは。

そして見る見るうちに顔が赤く染まっていった。

たかだか小娘に教えを乞えと言っているのだ。勉学の頂点に近い

自分たちに。
「セラスはん、そちらの答えがまだ出ていないようどすが」
「関係ありません。間違いを間違いと自覚していれば教える必要などないのです。わからないことを教えるのが勉強であり学問です。その本質すら忘れて知識をばらまくだけの人間でしたら、それはアリアドネーの学者ではありません」
はらわたが煮えくり返っているであろう男の方を向くセラス。男は答えられない。セラスがいったような言い方をされてしまえば、何を言っても無駄なのだ。否定しようがそれは自分が無知である証明にもなってしまう。
セラスの言葉を最後に、会話が途切れ、会合は一旦の中断を見せた。

そしてそれを、別室で見ている者達がいた。

外伝８　賊・来訪者

別室で待機していた千雨は朝倉を見て確信した。
朝倉が憎んでいるのは魔法世界ではないと。
「ちなみに、今の交渉はセラスさんの読み違いだな。大方決裂してもいいからと無理やり連れてきたんだろう。私と千草姉さんが交渉の席に着くことで、あの男に何かしらを学ばせようとしたんだろうが、私はこの通りここにいた。目論見が外れたわけだ」
「さすがに、あの人と交渉できるとは思いませんが」
「いいんだよ。お偉いさんなんてあんなもんだ。舐められたらまずいんだよ、下の奴にはな。部活のたちの悪い上級生と同じだ。役に立たないで偉そうにしながら、自分は被害のないところで遊んで上には媚び売ってんだ。もう一つの地球の勢力の中で上位に位置する、しかも連合という世界の最大勢力の権力の力を借りてる奴が、日本の下にある関西呪術協会と対等だと思うか？」
ＴＯＹＯＴＡが弱小企業のねじ工場の営業にペコペコお辞儀をするか。そんなもんだと言って雪広に説明する千雨。ただ、関西呪術協会はＮＡＳＡでも求めるような最高技術を持っている小企業であり、それを手にするためには誠意をもった交渉をしなければならないと言うことを相手が理解していなかった。それだけだ。ついでに言えば、あちらの不祥事を知っており、相手側を世界のだれもが信用していないのにもかかわらず傲慢な態度を取り続ける相手に、誰も見向きもしていないのを気が付いていないのだ。実際に各界に顔を出さない限り理解することのない、理解できない巨大組織の欠点ともいえる状況。そのため、セラスや彼女に従っている人間以外はいまだに自分たちが一番だと錯覚していた。
これから後に行われるクルトによる告発を待たなければ、彼らの意識が変わることはないのかもしれない。いや、一縷の望みをかけて千雨の下へ男をよこしたのがセラスだった。
「まぁ、あっちの男からしてみれば見方は変わるけどな」
男にしてみればいきなり変わったのはセラスなのだ。

韓国の高官が日本人に会い、自国に帰ったら晴れ渡った笑顔で「竹島は日本のものです。私たちに所有権はありません」と言ってきたようなものなのだ。それは男にしてみればセラスの正気を疑うと言うもの。逆に日本でそういったことの署名を行った外交官がいたという事実があるため、日本人にしてみれば大したことはないのかもしれないが、外国の人間にとってはかなり重要なものなのだ。

「頼りすぎというか、自分の思い通りに事が運ぶような想定しかしていないからそうなるんだ。手駒が少なかったとしても、そこでやれるだけのことをやるのが普通の事なのに」

千草、千雨、小太郎のみで全てを終わらせる準備をしていた千雨はそうつぶやいた。戦力分析をしない、できない人間は上に立つべきではないと言うのが彼女の持論だ。千草を説教しているときに切に感じた持論だった。

「英雄の求め方も自分の傀儡を求めているだけだしな、魔法世界は」

千雨だったら求めるのは織田信長や徳川家康のような、もしくは桂小五郎や坂本竜馬のような組織として上に立つ英雄だ。しかし、相手が求めているのは本多忠勝や宮本武蔵なのだ。個人の能力しか求めずに、それを上に掲げることで英雄を操っている。おそらくは組織的な動きをされて反抗されるのを防ぐためだろうが、そもそもそのようなことにならないように政治をすべきなのだ。

結局は自分たちの都合のいいようにまわしたい人間が上にいた。そのせいで国がおかしくなった。それだけの話だった。

「それで、どうするんですの？」

「どうするっても、このままお帰り願うだけさ。私が出ることでもないだろう？　まず身内のごたごたを何とかしてくれないとな」

面倒そうに立ち上がる千雨。ふすまを開くと、そこには先ほどまで監視していた部屋にいた少年が立っていた。

「これを……」

「ん、ありがとな」

差し出されたものを受け取った千雨は、その中身を確かめる。

「これじゃダメだろ。本当におかえり願ってもらえ」

少年は頷いて立ち去った。
書かれていたのは潜んでいた魔法使いの数と配置。
便乗して仕掛けようとしている連合の数が２０と、アリアドネーの人間が３０、それにどこからかわからない傭兵らしい人間が３０、それぞれが違う場所で狙っていた。
実際に行動には起こさないものの、いつでも相手国に内部に忍び込めるような歴史と関係ではないために、こうやって外から監視をするしかないのだ。
今回のアリアドネーの行動は、セラス自身も隠す気がなかったために筒抜けとなっており、各国も慌ただしくなっていたのだった。
そして、そのなかでアリアドネーの人間は、セラスが千雨に対し自国の教員を指導してくれるように頼んだ時に、その事実を否定し、亡き者としようと動いたものが多数いたのだ。
「あの人も、自分がしてることがまずいことに気が付けばいいのにな」
「どういうこと？長谷川」
隣で見ていた朝倉が聞いてきた。
「セラス総長は自分たちの行動がどのようなものだったのかを、麻帆良の人間が好き勝手していた時に気が付いた。それで今回私達に頼みに来たんだが、それ自体もまずいんだよな」
お茶を一口飲んで千雨は続ける。
「逆に言っちまえば、それくらい薄っぺらいってことなんだ。自分がなんでそのような行動をしていたのかをしっかりと説明できない。だからすぐに自分たちの非を認める。確かに間違いではあったけど、それはその行動に対してだ」
そして画面の先にいるアリアドネーの二人を指す。
「そんで今回、新しく講師をしてくれと言いに来たんだけどな、自分たちの指導が間違っているという自覚を持ってセラス総長はここにいる」
「自分の行動を顧みることはいいことではありませんの？」
「それ自体は間違いじゃない。けど、それを他人に押し付けるのが間違いだ。気が付かせることができるかどうかってのは環境が大きく

関係する。自分が正しいと思っていても、実際正しくてもそれを受け入れる環境が必要なんだ。私にそれを求められても無理だ」
　それは千雨だから無理なわけではない。相手が画面の向こうの男だから無理なわけではない。
「たとえ私の言葉で感銘を受けて今から心を入れ替えると言われても私は信用しない。それが本心からだったとしても、それはいつまで続くんだ？　完全に反対の人間が掌を返したように賛成になっても、そんな奴は絶対に自分というものを持っていない。結局、変わろうが代わるまいが信用できないんだ」
　だからすり合わせと相互理解が必要なのだ。なのに、是か非かでことを決めてしまおうとしているから詰まることになる。
「では、結局セラスさんはどうすればよかったんですの？」
「どう思う？　朝倉」
　千雨はあやかにされた質問をそのまま朝倉に返した。朝倉は無言のまま返答できないでいる。
「――わからない。長谷川はどう思うの？」
「私は、事実を伝えればいいと思う」
　朝倉とあやかの質問に一言で答えた。
「何を押し付けても駄目なんだ。自分の考えをするやつを量産しても駄目なんだ。洗脳じゃなく、自分の考えを持たせること。それが一番いいことだ。自分で考えた結果ならそれはしっかりとした意志になる。いままではあっちが正しいこっちが正しいという主張だけだったからな。たまたま馬鹿なやつが変なことをやってくれただけであっちの膿が出てきただけだ。もしかしたらこっちの政府もこれから同じことやるかもしれないしな」
　朝倉の方を見て千雨は続けた。
「これから必要なのは情報だよ。こちらがどんな立場であり、あちらがどんな立場であるかをしっかりと明かして、お互いに世界の違いを知らなければいけないんだ。文化の違い、身体能力の違い、知識量の違い、常識の違い。違うところだけじゃなくて共通点にもなるが、それを知るにはどうすればいい？」

必要な情報を隠蔽されていたから魔法世界はあそこまで一つの考えにまとまった。考えることもなく、無意識のうちに統一されていく。洗脳のような人民統合をしていた。それは、連合しか情報を表に出さないからだ。一番大きな口が声を上げる。結局戦争をしてきた帝国でさえ、しっかりと声を聴いてもらえなかったのだ。

それを解決するには

「知らせる側が増えればいい。しっかりとした事実を何人もが声をあげればいい。それをしたいんだろう？　朝倉は。正しい情報を伝えればいいんだよ。私が適当に声をあげてもいいが、それは自分の意見でしかない。事実をしっかりと伝えることの方が大事だよ。もちろん知識がないとできないけどな」

千雨は朝倉の頭を何回か叩いて部屋を出て行った。

残された朝倉はただその先を見ていた。

今何ができるかと言われれば答えられないだろう。そして、朝倉が動くころには状況も変わるだろう。

具体的には千雨は何をしろとは言わなかった。

しかし、朝倉にその言葉は届いた。

けれど、朝倉はそれを受け入れて、その後すぐに動いてはいけない。考えなければいけない。

千雨の意見を受け入れるだけなら、カモの言葉を聞いた昔の自分と何ら変わっていないのだから。

しかし、少なくとも前より一歩進めている気がした。